

宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集

浦	田	遺	跡	
URA	DA			
入	料	遺	跡	
NYU	RYO			
堂	地	西	遺	跡
DO	JI	NISHI		
平	畑	遺	跡	
HIRA	BATA			
堂	地	東	遺	跡
DO	JI	HIGASHI		
熊	野	原	遺	跡
KUMA	NO	BARU		

本文編

1985

宮崎県教育委員会

正誤表

本文編

ページ	行	誤	正
7	上から8行目	つくった書えられ	つくったと書えられ
13	上から16行目	第Ⅱ-b層	第Ⅱ-b層
*	上から17行目	遺積	地積
17	上から6行目	26	27
18	下6行-15行	SⅠ	SⅠ
20	上から17行目	土盛	土盛
27	上から8行目	25×18cm	25×18cm
*	上から13行目	Ⅰ部	Ⅱ部
28	下から9行目	炭火	炭化
37	下から18行目	骨層	骨層
*	下から18行目	全盛中10点	全盛中10点
40	上から3行目	炭火	積込
43	上から5行目	炭積	炭積
45	下から14行目	3種類	3種類
*	下から4行目	表Ⅱ	表Ⅱ
48	上から6行目	土盛	土盛
*	上から8行目	炭積	炭積
*	上から13行目	発見されており	発見されており*
*	上から15行目	(表Ⅱ)	(表Ⅱ)
49	下から11行目	分けられる	分けられる
70	上から14行目	全盛	全盛
71	F16?	Vc, Ⅱa, Ⅱb, Ⅲ	Vc, Ⅱa, Ⅱb, Ⅲ
72	下から19行目	炭火	炭火
*	F16.18.19行目	炭火	炭化
*	下から2行目	南西角	南西角
73	上から17行目	砂岩片	砂岩片
*	下から3.9行目	花崗岩	花崗岩
79	*	炭火	炭化
80	*	炭火	炭火
81	上から9行目	彩色	彩色
*	下から18行目	外面には口	外面には口
*	下から15行目	肥土	肥土
*	下から11行目	Ⅱ	Ⅱ
*	下から9行目	Ⅱ	Ⅱ
82	*	炭火	炭火
*	*	炭火	炭化
*	下から2行目	平倉竹管	平倉竹管
85	上から13行目	平倉竹管	平倉竹管
86	上から3行目	炭り	炭り
*	下から1行目	炭火	炭火
87	*	炭火	炭火
*	上から4行目	区	調査区
88	上から13行目	3時期	3時期
*	上から13行目	旧石器時代	旧石器時代
*	下から17行目	4文化層	4文化層
*	下から14行目	前中期	前中期
89	上から11行目	A, T	A, T
91	下から1行目	旧石器時代	旧石器時代

ページ	行	誤	正
94			30-40の調査範囲を拡大せよ
96	図面番号25	1	1
116	上から5行目	炭火物	炭化物
127	上から9行目	炭柱	炭柱
132	上から19.20行目	炭	炭
133	上から5行目	空盛	空盛
151	上から10行目	炭味あることで	炭味あることで
204	下から3行目	(第22-41図)	(第22-41図)
215	上から13行目	(第43図10)	(第43図8・9)
218	上から5行目	I A第1層, I B第2層, II A第2層, II B第1層	I B第2層, II A第1層, II B第1層, III A第1層, III B第1層
*	表33	の居住面積	の居住面及び居住面積
224	上から3行目	232	232
226	I-B層	Ⅰ-6層, Ⅰ-7層	Ⅰ-6層, Ⅰ-7層
231	上から2行目	1121	217
*	* 2-30目	VⅡ-8	216
258	上から14行目	(A T)	(A k)
260	上から9行目	16.43 m	16.43 m
*	上から17行目	小片	小片
263	F16.32	炭火材	炭化材
264	F16.33	炭火材	炭化材
267	下から2行目	調査内	調査内
268	下から1行目	調査内	調査内
*	表37-SA12	炭火材	炭化材
273		焼土	焼土
287	註①	(Ⅱ k)	(Ⅱ k)
288	表①, 5	相模底	相模底
289	表①-66	相模	相模正
295		図面番号	図面番号
302-308			石器およびその他の遺物の詳細計測単位はm
308	上から7行目	ほとんどが	ほとんどが
310	下から18行目	粘土層	* 土層
345	下から1行目	外的産物	外的産物
356	下から2行目	あった	あった

図版編

ページ	図	誤	正
39	第33図	Ⅱ-1彩色	Ⅱ-1層
40	第34図	炭火物	炭化物
77	第10図	一から上の図がSⅠ-8	Ⅰ-8
223	第120図	FⅡのトランシム図に表Ⅱ	Ⅱ
308	第53図	その下層の彩色硬質	その下層の彩色硬質

図版編

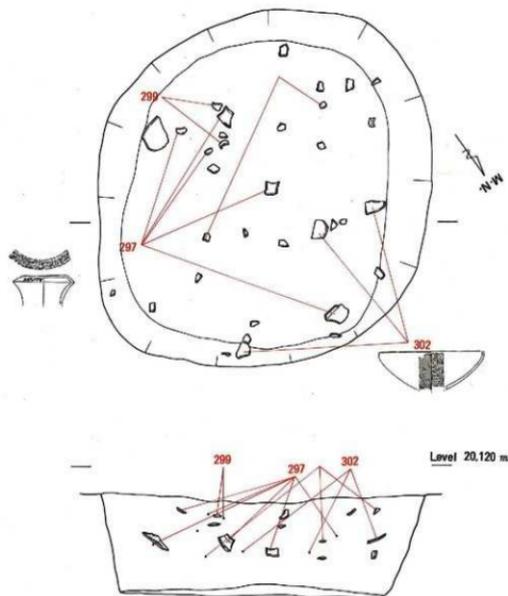
ページ	行	誤	正
図面編	平倉遺跡図版6	S A10・11・12・24	S A10・11・12・13・14・15
*	*	S A10・11・12・14	S A10・11・12・13・14・15

田原4	付図4 XⅡ区遺跡分布図	付図4 半倉遺跡 XⅡ区遺跡分布図
図版4	XⅡ区遺跡分布図	半倉遺跡 XⅡ区遺跡分布図

図面差替

図面編 40ページ

第34図 SC10遺構実測図および接合関係



宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集

浦	田	遺	跡	
URA	DA			
入	料	遺	跡	
NYU	RYO			
堂	地	西	遺	跡
DO	JI	NISHI		
平	畑	遺	跡	
HIRA	BATA			
堂	地	東	遺	跡
DO	JI	HIGASHI		
熊	野	原	遺	跡
KUMA	NO	BARU		

本文編

1985

宮崎県教育委員会

## 序

宮崎県教育委員会では、昭和55年から地域振興整備公団の委託を受け、宮崎学園都市建設地内に於ける埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施しています。

本書は、このうち、昭和58年に一応終了した、宮崎大学建設用地内所在の埋蔵文化財調査報告書です。

調査内容は多岐にわたり、本県の学史に残る貴重な発掘が行われています。特に農学部用地内の縄文遺跡においては、50数軒にのぼる一大集落が確認されていますが、これは、南九州における縄文後晩期の集落形成を知る上から、画期的な調査であったといえます。

この報告書が専門の研究者だけではなく、学校教育や社会教育の面にも広く活用されると共に、埋蔵文化財に対する認識と理解のための一助となることを期待しています。

発掘調査にあたって、深い御理解と御協力を賜った、公団や調査指導の先生方、地元の宮崎市、清武町に対して、衷心から御礼を申し上げます。

昭和60年2月

宮崎県教育委員会

教育長 後藤賢三郎

## 例言

1. 本書は、昭和55・57～58年度に実施した宮崎学園都市建設事業に係るものの内、宮崎大学予定地を中心とする6遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、地域振興整備公団宮崎学園都市開発事務所の委託を受けて、宮崎県教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆は、面高哲郎・永友良典・長津宗重・北郷泰道・菅付和樹・日高孝治・谷口武範が行った。文責については本文に明記している。
4. 三辻利一・市川米太・山本輝雄・中村 純・柴田喜太郎・金子弘二の各特別調査員から玉稿をいただいた。
5. 各遺跡の報告は担当調査員が分担し、北郷が総括編集した。
6. 本報告では、次の通りの略記号を用いている。  
SA……竪穴住居跡、SB……掘立柱建物跡、SC……土城、SD……墓、SE……溝  
SF……井戸、SG……道路、SH……ピット、SI……集石遺構、SJ……カマド  
SK……その他性格不明の掘り込み、SL……周溝状遺構

# 本文目次

## 第 I 章 序 説

### 第 1 節 調査の契機と経過

1. 調査に至る経緯…………… 1
2. 調査の組織…………… 1

### 第 2 節 遺跡の位置と環境…………… 3

## 第 II 章 浦田遺跡の調査

### 第 1 節 遺跡の立地と環境…………… 12

### 第 2 節 調査の概要…………… 12

### 第 3 節 層 序…………… 13

### 第 4 節 遺構と遺物

1. 先土器時代の遺物…………… 14
2. 縄文時代の遺構と遺物…………… 14
3. 弥生時代の遺構と遺物…………… 19
4. 歴史時代の遺構と遺物…………… 49

### 第 5 節 まとめ…………… 54

## 第 III 章 入料遺跡の調査…………… 68

## 第 IV 章 堂地西遺跡の調査

### 第 1 節 調査の概要…………… 70

### 第 2 節 立地と環境…………… 70

### 第 3 節 層 序…………… 71

### 第 4 節 遺構と遺物

1. A 区…………… 72
  - ① 旧石器時代…………… 72
  - ② 縄文時代…………… 74
  - ③ 弥生時代…………… 80
2. B 区…………… 81
  - ① 縄文時代…………… 81
  - ② 中 世…………… 86
3. C 区…………… 86

### 第 5 節 まとめ…………… 87

## 第 V 章 平畑遺跡の調査

### 第 1 節 調査の経過と概要…………… 98

### 第 2 節 遺跡の立地と環境…………… 98

第3節 包含層の状態	100
第4節 縄文時代の遺構と遺物	101
1. 住居跡	101
2. 遺物	103
3. 主な遺構と遺物の状態	105
4. 包含層の遺物	116
第5節 古代～中世の遺構と遺物	121
1. 遺構	121
2. 遺物	127
第6節 縄文時代の総括と考察	132
1. 貝殻文系土器群について—XXIX区出土土器を中心に—	132
2. 縄文晩期土器について—住居跡出土土器を中心に—	138
3. 石鏃について	146
4. 石錘・土器片錘について	146
5. 石斧・取穂具について	150
6. 集落について	151
第7節 古代～中世の総括と考察	152
<b>第VI章 堂地東遺跡の調査</b>	
第1節 調査区の設定と概要	201
第2節 遺跡の立地と環境	201
第3節 包含層の状態	201
第4節 縄文時代の遺構と遺物	202
第5節 弥生時代の遺構と遺物	203
第6節 中近世の遺構と遺物	220
第7節 まとめ	232
<b>第VII章 熊野原遺跡C地区の調査</b>	
第1節 遺跡の立地	258
第2節 調査の経過と概要	258
第3節 調査の記録	259
1. 縄文時代	259
2. 古墳時代	259
3. 中世	281
第4節 まとめ	285
<b>第VIII章 結語</b>	305

付 論	堂地西遺跡の集石の熱ルミネッセンス年代……………奈良教育大学 市川 米太 ……331
	宮崎学園都市遺跡群出土の土器の胎土について……………宮崎大学教育学部 金子 弘二 ……333
	堂地西遺跡の堆積物の検討……………広島大学理学部地鉱教室 柴田喜太郎 ……336
	宮崎学園都市平畑遺跡の花粉分析……………中村 純 ……340
	宮崎学園都市遺跡出土土器の胎土分析……………奈良教育大学 三辻 利一 ……347
	所謂日向型間仕切り住居について 建築史上の問題点 ……………九州大学工学部助手 山本 輝雄 ……357
	「日向型間仕切り住居」研究序説……………344

## 挿 図 目 次

Fig. 1	学園都市遺跡群位置図……………4	Fig. 23	石鏃度数分布図……………145
2	SC1遺物出土状況および接合関係…29~30	24	土器片鏃度数分布図……………147
3	SC3遺物出土状況および接合関係…31~32	25	石鏃A度数分布図……………147
4	SC4遺物出土状況および接合関係…33~34	26	石鏃B度数分布図……………148
5	SC5遺物出土状況および接合関係…35~36	27	石鏃・土器片鏃重量傾向比較図……………149
6	浦田遺跡 住居跡、土城推移……………47	28	石鏃C・D・その他度数分布図……………149
7	基本土層断面図……………71	29	堂地東遺跡集落変遷……………219
8	A区旧石器遺物分布図(1)……………75	30	SA5遺物出土状況……………261
9	A区旧石器遺物分布図(2)……………76	31	SA8遺物出土状況……………262
10	A区旧石器遺物分布図(3)……………77	32	SA10炭火材出土状況……………263
11	A区旧石器遺物分布図(4)……………78	33	SA13炭化材出土状況……………264
12	B区縄文土器分布図……………83~84	34	SA14遺物出土状況……………265
13	SA1出土遺物一覽表……………107~108	35	SA15遺物出土状況……………266
14	SA46出土遺物一覽表……………109~110	36	SB1・2・3・7柱穴、SE14土層図 283
15	SA50出土遺物一覽表……………111~112	37	出土土器胎土分析……………286
16	SA54出土遺物平面分布及び垂直分布図 113	38	「日向型間仕切り住居」分布図……………346
17	SA54出土遺物一覽表……………115	39	「日向型間仕切り住居」実測図(I) ……347
18	掘立柱分布図及び土器出土集中分布図…123	40	熊野原遺跡B地区遺構分布図……………349
19	IV区土師器・布直土器出土分布図……………125	41	堂地東遺跡全体図……………350
20	SA102遺物分布状況……………126	42	「日向型間仕切り住居」実測図(II) ……351
21	松添貝塚出土縄文土器実測図・拓影……………139	43	祝吉第1遺跡実測図……………353
22	縄文晩期土器編年案……………141~142	44	祝吉第2遺跡実測図……………354

## 表 目 次

浦田遺跡	表3	形態分類表1)……………21	
表1	浦田遺跡竪穴住居跡観察表……………20	表4	形態分類表2)……………22
表2	浦田遺跡土址観察表……………20	表5	形態分類表3)……………23

表6	形態分類表(4).....	24
表7	形態分類表(5).....	25
表8	形態分類表(6).....	26
表9	浦田遺跡土器編年表.....	41~42
表10	遺構別土器出土数.....	44
表11	土坑推移.....	46
表12	弥生土器観察表.....	55~62
表13	鉄器・石器・玉類出土地名表.....	63~64
表14	柱穴一覽表.....	64
表15	土器観察表.....	65~67
<b>堂地西遺跡</b>		
表16	A区旧石器遺物計測表.....	94
表17	縄文土器観察表.....	95
表18	土師器観察表.....	97
<b>平畑遺跡</b>		
表19	縄文竪穴住居跡一覽表.....	102
表20	掘立柱建物一覽表.....	124
表21	石鏃形態分類及び出土点数表.....	144
表22	縄文土器観察表.....	154~182
表23	石鏃計測一覽表.....	183
表24	土器片鏃計測・観察表.....	184
表25	石斧計測一覽表.....	185
表26	石鏃計測一覽表.....	186~189
表27	遺物観察表.....	190~199
表28	土鏃計測表.....	200
<b>堂地東遺跡</b>		
表29	竪穴住居観察表.....	203
表30	土坑観察表.....	204
表31	弥生土器分類表.....	205~214
表32	日向型間仕切り住居分類図.....	217
表33	堂地東遺跡の住居面積.....	218
表34	掘立柱建物観察表.....	220

表35	土師器形態分類図.....	222
表36	土師器法量表1).....	225
表37	土師器法量表2).....	226
表38	空風輪形態分類図.....	228
表39	空風輪の法量分布.....	228
表40	火輪形態分類図.....	229
表41	火輪の法量分布.....	229
表42	水輪の法量分布.....	229
表43	水輪の形態分類図.....	230
表44	地輪の形態分類図.....	230
表45	地輪の法量分布.....	230
表46	相輪形態分類図.....	231
表47	近世墓一覽表.....	232
表48	弥生土器観察表.....	234~241
表49	土師器観察表.....	242~247
表50	陶磁器観察表.....	247~248
表51	古銭観察表.....	249~251
表52	空風輪法量表.....	253~254
表53	火輪法量表.....	255
表54	水輪法量表.....	256
表55	地輪法量表.....	257
表56	相輪法量表.....	257
表57	竪穴住居跡一覽表.....	268
表58	土壕一覽表.....	269
表59	出土土器分類表.....	270~280
表60	掘立柱建物計測表.....	284
表61	遺物観察表.....	288~304
表62	「日向型間仕切り住居」分類図.....	355
表63	日向における住居面積分布.....	357
表64	日向の住居面積構成.....	357
表65	日向型間仕切り住居地名表.....	361~362

## 付 図

付図1	堂地西遺跡A区旧石器時代遺構・遺物分布図
付図2	平畑遺跡全体遺構分布図
付図3	平畑遺跡XXI~XXIII, XXVI区全体図
付図4	XXIX区遺構分布図

付図5	宮崎学園都市堂地東遺跡発掘調査遺構実測図1
付図6	宮崎学園都市堂地東遺跡発掘調査遺構実測図2
付図7	堂地東遺跡発掘調査遺構実測図3 (IV区)
付図8	熊野原遺跡, C地区遺構分布図 (1/250)

# 第I章 序 説

## 第1節 調査の契機と経過

### 1. 調査に至る経緯

宮崎学園都市建設計画の具体化に伴い、県文化課では昭和54年10月24日から26日（清武町域）、昭和54年11月12日から15日（宮崎市域）の二回にわたり、宮崎市大字熊野から宮崎郡清武町大字木原にかけての約300haの敷地を対象に分布調査を実施した。その結果、全敷地の約1割に及ぶ遺物散布地を確認することが出来、当初分布範囲から推定された遺跡地22箇所、及び石塔群（『山内石塔群』として昭和58年度本報告書刊行済）1箇所の合計23遺跡の取り扱いについて協議を重ねることになった。協議の焦点は、九州縦貫自動車道の発掘調査以来の大型プロジェクトに伴うものとしての発掘調査体制の充実、及び工事計画変更等による遺跡の現状保存の可能性などが大きなものであった。そして、発掘調査体制については、九州縦貫自動車道の開発に際しても望めなかった調査員の増強が果たされることになり、昭和55年度の2名から、56年度は6名、57年度以降は8名へと、体制の充実が計られた。さらに、一方では、56年度の第2期契約において、全体試掘が実施され、遺物の分布は認められたものの遺構が既に残存していない箇所や、それとは逆に遺物の分布は認められないものの遺構の存在が新たに指摘される箇所が出てくるなど、分布調査段階の遺跡把握から一歩進んで、より詳細な計画が立てられるようになった。又、地域振興整備公団及び学園都市建設局との協議により、公園あるいは運動場など地形の現状保存可能な箇所や、農学部農場など地形の現況利用される箇所などについては、今後の開発計画次第として発掘調査を保留することになった。

さて、本報告書に収録する遺跡は、宮崎学園都市と呼ばれるものを大学ゾーン、住宅ゾーン、学園関連ゾーンと分けたものの内、約半分の割合を占める大学ゾーンに所在するものについてである。これら、各遺跡の発掘年次は、初年度の55年度から58年度にわたる。すなわち、55年度は、昭和55年10月17日から昭和56年3月31日まで発掘調査の受託契約を行い、入料遺跡と堂地東遺跡の一部、56年度は昭和56年10月16日から昭和57年3月31日までの契約の間前述の試掘調査、57年度は昭和57年6月24日から昭和58年3月25日までの第1期契約の間堂地西遺跡の一部と堂地東遺跡の一部、さらに昭和57年9月3日から昭和58年3月25日までの第2期契約において平畑遺跡の一部と継続拡張して堂地東遺跡の一部、そして58年度は昭和58年4月5日から昭和59年3月20日までの契約において、浦田遺跡、堂地西遺跡、平畑遺跡、堂地東遺跡、熊野原遺跡の各々について、平畑遺跡が西半分を大学の農場として現在（昭和59年度）まで発掘調査を保留している以外は、完掘するに至っている。（なお、平畑遺跡については部分的に大学において開発計画が立てられ、県文化課とも協議の上、大学の直接の事業として大学キャンパス内の発掘調査が実施されつつある。）

なお、浦田遺跡は大学実習田の一部、入料遺跡は田上川の河川部分と大学実習林の一部、堂地西遺跡は大学北側の幹線道と大学海部を含むキャンパスの一部、平畑遺跡は農学部校舎とその周辺、堂地東遺跡は幹線道とキャンパスの一部、熊野原遺跡（同遺跡は住宅ゾーンと大学ゾーンにまたがり、本報告書にはその内、大学ゾーンに属するC地区について掲載する。）は駐車場、運動諸施設として姿を変え、あるいは変えようとしている。

### 2. 調査の組織

発掘調査委員会および調査事務局の組織は、次のとおりである。

委員長 石川 恒太郎 県文化財保護審議会委員

委 員	遠 藤 尚	宮崎大学教授 (委員は昭和56年度まで)
	岡 崎 敬	九州大学教授
	田 中 熊 雄	宮崎大学名誉教授
	田 中 琢	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長
	寺 原 俊 文	県文化財保護審議会委員
	口 高 正 晴	県文化財保護審議会委員
	森 貞 次 郎	九州産業大学教授
	柳 宏 吉	県文化財保護審議会委員
	横 山 浩 一	九州大学教授

**特別調査員** 市川米太 奈良教育大学教授, 大塚 誠 宮崎大学講師, 小田富士雄 北九州考古博物館長, 金子弘二 宮崎大学教授, 亀井明德 九州歴史資料館主査, 小林達雄 国学院大学助教授, 柴田喜太郎 広島大学理学部地誌教室, 橋 昌信 別府大学助教授, 中村 純 元高知大学教授, 藤原宏志 宮崎大学教授, 松下孝幸 長崎大学講師, 三辻利一 奈良教育大学教授, 山本輝雄 九州大学講師

**事務局** 宮崎県教育委員会

**教育長** 四本 茂 (昭和55年度), 後藤賢三郎 (昭和56~59年度)

**教育次長** 甲斐俊則 (昭和55・56年度), 内田琢也 (昭和57・58年度), 兼田克己 (昭和59年度)

**教育次長** 坂口鉄夫 (昭和55年度), 船木 哲 (昭和56~59年度)

**文化課長** 山本一憲 (昭和55・56年度), 井上鉄哉 (昭和57・58年度), 平田和彦 (昭和59年度)

**課長補佐** 村田広則 (昭和55・56年度), 佐野芳弘 ( ), 成見 実 ( )

**庶務係長** 田中岩彦 (昭和55年度), 島中 勲 (昭和56・57年度), 安部信宏 (昭和58・59年度)

**主任主事** 穂ノ上昇 (昭和55~58年度), 井野伸一 (昭和59年度)

**文化財係長** 山下正明 (昭和55・56年度まで)

**主幹兼埋蔵文化財係長** 田中 茂 (昭和57~59年度)

(調査員)

岩永哲夫 (昭和55~58年度), 面高哲郎 (昭和56~59年度), 永友良典 (昭和56~59年度) 長津宗重 (昭和57~59年度), 北郷泰道 (昭和55~59年度), 近藤 協 (昭和59年度), 菅付和樹 (昭和56~59年度), 口高孝治 (昭和57~59年度), 谷口武範 (昭和57~59年度)

**調査協力** 宮崎市教育委員会, 清武町教育委員会

**調査補助員** 有田辰美, 永友加奈子, 佐藤讓治, 長友三千夫, 鎌田亮一, 巽方政隆

**埋蔵文化財センター整理専門員** 津隈久美子

**整理補助員** 増田恵子, 酒井晴子 (昭和58年度まで), 日野美智子

**整理員** 藤丸美代子, 渡辺祥子, 菊野悦子, 富田優子, 長友玲子, 手束千恵美, 有田具子, 今横牧子, 勇端 (昭和55~59年) 枝, 鳥越智子, 荒武望恵, 桑畑 礼, 荒木慶子, 荒木真由美, 加藤泰子, 富永優子, 橋本真智子, 松岡邦子, 清水玲子, 永峰まり子, 竹島典江, 川崎法子, 田原辰子, 高山幸子, 野村涼子, 長沼幸子, 東えり子, 斎藤保子, 迫坪千代子, 金井裕子, 溝口フサ子, 丸山直子, 佐々木ゆみ子, 金丸琴路, 西 洋子, 清武和子, 岸沢悦子, 横尾理恵, 石田裕美, 安部美智子, 戸高真智子, 中村江里, 松出京子, 清武幸美, 染矢裕子, 押方マミ, 椎葉順子 (北郷 泰道)

## 第2節 遺跡の位置と環境

宮崎学園都市遺跡群は、宮崎市大字熊野から清武町大字木原にまたがる、北の清武川、南の加江田川に挟まれた標高15mからの洪積台地上に分布している。鰐塚山系の北東に延びる末端部に当たる丘陵地を西に背負い、ほぼ東に向けて台地は広がる。台地の東端から、日向灘の海岸線までは2km程の位置で、海を遠望することが出来る。

学園都市の建設予定地は、そうした台地の約300haを占め、分布調査及び発掘調査で確認された遺跡の面積は、その内の約1割に当たる30ha程である。台地はさらに、北東部から二支に分れてほぼ西方向と南方向に延びる谷底低地とさらに枝分れる開析谷とに区切られ、遺跡はそうした中に分布・立地している。

本報告に取める遺跡は、建設予定地の西半分に相当する大学建設予定地であるが、台地中央の熊野原遺跡から、北西に谷底低地を挟んだ堂地東遺跡、堂地東と北に開析谷を挟み西に丘陵地を背にする堂地西遺跡、熊野原と同じく谷底低地の南にあり、西に丘地をひかえた平畑遺跡と展開する。これに対し、これらの北に台地を異にし丘陵地の端部の平坦面に立地するのが、浦田遺跡、入料遺跡であり、前の遺跡群と立地の条件を異にしている。

(北郷泰道)

### 旧石器時代

宮崎学園都市遺跡群は、宮崎市以北に三角状にひろがる宮崎平野の南端に位置し、清武川と熊野川にはさまれた洪積台地に立地する。地形的には西から鰐塚山系がせまっており、西から中位面Ⅰ-中位面Ⅱ-後背低地へと東へ傾斜しており、台地内には谷底低地や開析谷が何本も入り込む複雑な地形となっている<sup>(1)</sup>。この宮崎平野は、広域火山灰の堆積。保存が良好な地域で、遺跡群内の層序にも第1オレンジ層（鬼界・アカホヤ火山灰、約6,000年前）や第2オレンジ層（始良Tn火山灰-A・T-約21,000～22,000年前）などの識別容易な火山灰の堆積がみられる<sup>(2)</sup>。

学園都市遺跡群内での旧石器時代文化層は第2オレンジ層（A・T）上位のハードローム層およびソフトローム層でみられ、堂地西遺跡をはじめ、堂地東遺跡、前原西遺跡、浦田遺跡などで遺構・遺物の出土があった。

中位面Ⅰに立地する堂地西遺跡では、A・T直上のハードローム層より、集石遺構とナイフ形石器、割片尖頭器を伴う石器群を検出した。また、同じ中位面Ⅰで、開析谷をはさんで南に立地する堂地東遺跡でも同層より尖頭器を出土した。

また、中位面Ⅱ上に立地して熊野川からの開析谷が入り込む前原西遺跡では、A・T上位の褐色（ソフト）ローム層より細石核や細石刃などの細石器類が出土した<sup>(3)</sup>。

このように、学園都市遺跡群での旧石器文化層には、A・T直上のナイフ形石器と尖頭器を伴う文化層（堂地西・堂地東）と、その上層から出土する細石器文化層（前原西・浦田）の2文化層が確認されている。これらの遺跡は、地形的には谷底低地や開析谷が複雑に入り込む、中位面Ⅰ、および、中位面Ⅱに立地する特徴がみられる。また、これらの遺跡からは縄文早期の集石遺構が検出されている。

周辺地域の旧石器時代遺跡については、これだけ良質の火山灰堆積に恵まれた宮崎平野だが、今まで旧石器時代石器群はほとんど検出されなかったが、宮崎市の周辺や、北部の児湯郡一帯にひろがる洪積台地上に立地する40ヶ所を越える地点でナイフ形石器、三稜尖頭器、割片尖頭器、細石刃核などの遺物を採集しており、宮崎平野にひろがる洪積台地上に旧石器時代遺跡の分布がうかがわれる。宮崎平野内での唯一の発掘資料としては、宮崎市北部に隣接する宮崎郡佐土原町の船野遺跡から出土した細石刃核がある<sup>(5)</sup>。これは、ナイフ形石器と相伴しており、初期の船野型の細石刃核として位置づけられている。また、表探資料の中にも、佐土原町の北に隣接する児湯郡新富町畦原で採集された砂岩礫の細石刃核は畦原型として位置づけられている<sup>(6)</sup>。両遺跡とも一ツ瀬川左岸（畦原）と右岸（船野）にひろがる丘陵上に位置する。

1. 山内石塔群 (23号地)
2. 下田畑遺跡 (1号地)
3. 赤坂遺跡 (7号地)
4. 小山尻西石塔群 (8号地)
5. 浦田遺跡 (4号地)
6. 入料遺跡 (5号地)
7. 小山尻東遺跡 (2号地)
8. 田上遺跡 (3号地)
9. 堂地西遺跡 (9号地)
10. 平畑遺跡 (10号地)
11. 堂地東遺跡 (11号地)
12. 熊野原遺跡 (14号地)
13. 犬馬場遺跡 (13号地)
14. 前原西遺跡 (15・16号地)
15. 前原北遺跡 (20号地)
16. 前原南遺跡 (19号地)
17. 陣ノ内遺跡 (18号地)
18. 車坂城跡
19. 木花遺跡 (21号地)
20. 今江城 (仮称) 跡



Fig. 1 学園都市遺跡群位置図

さらに、県北の五ヶ瀬川流域では、無斑品流紋岩を石材とする石器類がみられる。遺跡としては、鉛野型細石刃核<sup>(7)</sup>と縄文草創期の土器を出土した岩土原遺跡(東臼杵郡北方町)ナイフ形石器や尖頭器を伴う新しい文化層と打割器や剥片尖頭器を伴う古い文化層を持つ出羽洞穴(西臼杵郡日之影町)が調査例としてある。

(永友良典)

#### 縄文時代—早・前期—

宮崎学園都市遺跡群は、鰐塚山系の北東端の丘陵地及び台地上に点在しているが、県内の縄文時代早・前期の遺跡の例にもれず、これら丘陵地や台地上にも、早・前期の遺跡が13カ所程確認されている。そして、早期の遺跡は、台地や丘陵地を厚くおおっているアカホヤ火山灰によって良好な状態で埋蔵されていることが多く、地形的にみて、残りの未調査地にもさらに発見される可能性が残されている。

学園都市遺跡群内の早・前期遺跡は、早期、特に「集石遺構」が中心で、前期は早期の層の上層から遺物が出土しているだけで遺構の発見はない。前期の遺物が出土したのは、入料遺跡、赤坂遺跡で、いずれもアカホヤ層(K-Ah火山灰、6000~6500年B.P.)を鍵層として、前者は二次地積と考えられるアカホヤ層中から管筒式土器片が少量、後者はアカホヤ層上の砂質褐色土層から春日式土器片が出土している。地形的には、入料遺跡は北東にひらけた標高15mを中心とする平坦地に位置し、南西背後には山が迫っている。北前面は小河川の田上川によって区切られ、谷底低地がひろがる。この低地との比高差はあまりない。赤坂遺跡はその約450m上流に位置し、標高26m、幅約30mの北岸小河岸段丘上の西端に立地している。

早期の遺跡は、焼けた礫群や焼礫の集中した「集石遺構」を特色とする。集石遺構は焼礫の下部に張り込みを持つもの、持たないものなど存在するが、従来、民俗例でいう石蒸し的なものや屋外炉等広義の「炉」的機能が想定されている。この集石遺構が確認された遺跡は、前述の2遺跡をはじめ、下田畑・浦田・田上・小尻尻東・堂地西・堂地東・平畑・前原西・前原北の各遺跡及び、赤坂遺跡と山内石塔群を結ぶ中間の小丘陵上において工事終了後切り通しで確認された遺跡の12例があげられる。これらの遺跡は、台地の端部やなだらかな小丘陵上に位置し、押型文、貝殻条痕文、縄文、撫糸文、無文等の各土器片が共伴している。また、層位的には全てアカホヤ層の下層に位置づけできる。この外、熊野原遺跡C地区では、貝殻条痕文土器片など遺物が少量、同じ層位から出土している。

学園都市遺跡群周辺では、宮崎市内の柏田、跡江の両貝塚が縄文時代早前期の遺跡として古くから知られており、また最近の調査では、学園都市建設地の北方、清武町の辻・若宮川の両遺跡で早前期遺物が出土し、辻遺跡では、面的広がりを持つ焼礫群と集石遺構が検出されている。西方の鰐塚山系を越えた田野町前平地区では、50数基の集石遺構や焼礫層を検出した芳ヶ辺第1遺跡をはじめ、又五郎・札ノ元等の早期の良好な遺跡が発掘されている。<sup>(9)</sup> 県内には各地に火山灰の厚く堆積した台地やなだらかな丘陵地が形成されており、今後ともこの時期の遺跡の発見が相つぐことがおおいに期待されるところである。

(菅付和樹)

#### 縄文時代—後・晩期—

平畑遺跡は、現在(1984年度)までにその3分の1程度の面積が調査されたに過ぎないが、55棟を数える竪穴住居跡の確認と、傾斜面に廃棄された多量の遺物類などで、今後県下の縄文後・晩期の指標的な遺跡となるものである。遺跡は、南東の方向へ向け標高37~24mと流れるゆるやかな平坦面に展開しているが、標高29~30m付近で台地の面に段差が生じている。<sup>(10)</sup> この段差を境に、西側のより高い面に後期を中心とした遺物が包含されているが、そこまではまだ調査の手は延びていない。従って、東側のより低い面に竪穴住居跡の55棟中42棟までが分布する状況になっている。その竪穴住居跡のほとんどは晩期に属するものである。

さて、学園都市遺跡群において後・晩期の遺構が確認されたのは、平畑遺跡のみである。しかし、堂地東遺跡では

貝殻文系の深鉢形土器と蛇頭を模したと思われる口縁部片が出土し、熊野原遺跡（C地区）でも貝殻文系土器が検出されている。だが、主体的な縄文後・晩期の集落は、平畑遺跡に限られていたのである。

こうした学園都市遺跡群からさらに目を展じていけば、南東約5kmの海岸線に近い砂丘上に松添貝塚が立地している。晩期を中心とした貝塚であるが、期的には熊野原に後続する。さらに松添貝塚の約1.2km南には、納屋向貝塚が所在するが、これについては報告書が刊行されていないので詳細は不明である。ただ、納屋向貝塚出土とされる土器類を實現した限りでは松添とほぼ併行する時期のものとみられ、学園都市の北約6kmの曾井遺跡の事情も同様である。

県南における後・晩期の遺跡で他に指標的なものは、後期の綾尾立遺跡<sup>12</sup>、そして下弓田遺跡<sup>13</sup>がある。平畑においても綾式系の土器が西側の地区において確認されており、上限をこれに設定することが出来る。綾式土器が中期からの沈線文系を踏襲して生成しているのに対し、下弓田式は貝殻文、ことに貝殻腹縁文を多用する中で生起している。しかし、両遺跡の調査以降、後期の資料は豊富化しているとはいえない。

それに対し、晩期に属する遺跡の調査例は少しずつ増えはじめており、県北の高千穂町陣内遺跡<sup>14</sup>の第3次調査、同町セベツ遺跡<sup>15</sup>、県内陸部の山田町中村遺跡<sup>16</sup>と断続的、断片的ながら、土器編年上の土器資料はもとより、セベツ、中村においては1棟と2棟ではあれ竪穴住居跡が検出されており、貴重な成果を上げている。それらによれば、晩期に属する竪穴住居跡は県下においては円形プランを基本とするものであったと思われる。

（北 郷 泰 道）

### 弥生時代

弥生時代の遺跡調査は、かなりの数にのぼり宮崎県内の弥生時代研究に一石を投じるものである。そこで立地、環境とともに宮崎学園都市遺跡群内の弥生時代遺跡について概観しておきたい。

縄文時代後・晩期において平畑遺跡では50数軒の住居跡群が発見されている。しかし、それにつづく弥生時代前期から中期初頭の遺跡は皆無である。県内においてもこの時期の発掘例は、楳遺跡<sup>17</sup>、中尾遺跡<sup>18</sup>、釜遺跡<sup>19</sup>の3例のみで非常に少ない。学園都市遺跡群内の弥生時代遺跡は、中期末～終末期に集中し堂地東遺跡、前原北遺跡、熊野原遺跡A・B地区、浦田遺跡など10遺跡にのぼる。その中で中期とされる前原北遺跡が最も早く、谷底低地を北にのぞむ標高約14mに立地し古墳時代初頭まで営まれている。それよりやや遅れて後期前半の住居跡群を主体とする堂地東遺跡が標高約30mの南斜面に形成される。そして後期後半～終末期にかけて存在する熊野原遺跡A・B地区がある。これと同時期のものには、浦田遺跡、前原南遺跡などあり、後期後半から遺跡が増加する傾向がみられる。弥生時代遺跡のほとんどは標高約35mから約20mの間の中位面Ⅰ・Ⅱに形成され、谷底低地をのぞんでいる。このことは、畑あるいは水田を営み得る条件を満たしている。前原南遺跡に面した低地の調査では、畦畔らしい痕跡や石庵丁、弥生後期後半の土器など出土しているが、水田跡としての確証を得るまでには及ばなかった。畑作、水田耕作を疑わせるものとして、住居跡の数に比べ土器は多量に出土しているが、農具としての石器、鉄器の出土例が少なく、木器にしては県内でもまだ出土例はみえていない。

清武川と加江田川に挟まれた丘陵に堂地東遺跡、熊野原遺跡など多くの遺跡が立地するが、間に田上川を挟んだその北側の低丘陵上には、浦田遺跡と下田畑遺跡が形成されるだけで、弥生時代遺跡は希薄である。下田畑遺跡は、標高約30mの北側斜面に立地し中期後半の住居跡1軒が検出されている。浦田遺跡は、下田畑遺跡と反対側の標高約21mの南側斜面に営まれている。弥生終末期の住居跡6軒に土坑10基が伴う。

発掘された遺跡のほとんどが住居跡群であり、その中で特徴的なものとして間仕切り住居がある。間仕切りの形態も、円形を基調、方形を基調、円形と方形の折衷型、間仕切りを1ヶ所あるいは2ヶ所もつものなどバラエティーに富んでいる。そのほか方形の住居跡も併存している。この形態の住居跡は堂地東遺跡、熊野原遺跡、前原北遺跡にみ

られる。果内でも各地から検出されており、最も古いのは新田原遺跡<sup>22</sup>で後期初頭、新しいものとしては、祝吉遺跡で古墳時代初頭まで下ると考えられる。また、約20軒ほど調査された堂地東遺跡、熊野原遺跡A・B地区では、この時期、東九州でみられるような住居跡間の切り合い関係<sup>23</sup>はない。これは縄文後・晩期の住居跡群である平畑遺跡や古墳時代初頭の熊野原遺跡C地区でも同様な傾向が窺える。

その他に熊野原遺跡A・B地区の住居内出土の炭化材分析によりクスギ、マナラ、カシ属など広葉樹のみ8樹種が確認<sup>24</sup>されている。住居の住は付近の木を利用してつくったと考えられることから、当時の林相として照葉樹材帯が推定される。なお、県内の同時期の弥生時代遺跡である大萩遺跡<sup>25</sup>、薄糸平遺跡<sup>26</sup>、野田町八田遺跡<sup>27</sup>においても同様な結果を得ている。これは現在の林相に近いものであったとされている。

弥生時代の墓地は、弥生前期の櫛遺跡<sup>28</sup>や後期の大萩遺跡<sup>14</sup>の土壇墓<sup>29</sup>だけである。学園都市遺跡群内ではまだ調査されていない。なお、熊野原遺跡A地区の調査で方形周溝墓<sup>30</sup>として考えられていたものも、最近の北部九州の報告<sup>31</sup>や周溝墓と住居跡との位置関係などから方形周溝状遺構<sup>32</sup>としてとらえられる向きが大勢を占めている。この方形周溝状遺構は、古墳時代初頭の住居跡群である熊野原遺跡C地区でも検出されている。

付近の弥生時代の遺跡には、前期の櫛遺跡<sup>31</sup>、後期初頭下那珂遺跡<sup>32</sup>、中溝遺跡<sup>33</sup>、石神遺跡<sup>34</sup>、中無田遺跡<sup>35</sup>などあげられるが、これらは日向灘に面した砂丘上に立地するもので学園都市遺跡群とは林相を異にすと思われる。また、土器焼成坑として考えられている中間遺跡は学園都市遺跡群から約5kmほど離れた内陸部に立地し、弥生後期後半から終末期にかけて宮まれたもので免田式も伴出している<sup>36</sup>。このように弥生後期になると海岸部あるいは内陸部に各地に遺跡が拡散・増加していく傾向が顕著となる。

(谷口武範)

## 古墳時代

古墳時代になると、学園都市遺跡群が存在する丘陵の中央部及び東部の平坦地中位面Ⅱに熊野原C遺跡<sup>37</sup>・前原北遺跡<sup>38</sup>・前原南遺跡<sup>39</sup>が営まれる。これらの遺跡は標高12~18m、谷底低地との比高差4~7mである。熊野原C遺跡では23軒の竪穴式住居が調査された。2本柱ないし4本柱の1辺6~7mの方形プランの住居跡で、壁体溝を持つものもあった。堂地東遺跡・熊野原B遺跡・前原北遺跡で検出された「日向型住居切り住居」<sup>40</sup>は、学園都市遺跡内ではこの時期を以て消滅している。住居跡に挟まれて隅丸方形の周溝状遺構が1基検出され、主体部がなく単独であるため、墓よりも祭祀の場としての性格が考えられる。これは熊野原B遺跡<sup>41</sup>の弥生時代終末期の周溝状遺構から系譜を追える点で注目される。当遺跡の時期は、小型丸底蓋・高坏から布留式併行期に比定される。1辺4~5mの方形プランの住居跡が、前原北遺跡で4軒、前原南遺跡で5軒調査されている。前段階の庄内併行期の墓地として東平下周溝墓(川南町)・川床遺跡(新富町)で周溝墓が、布留式併行期の下屋敷1号墳(新富町)が調査されているが、学園都市遺跡では発見されていない。墓地は当丘陵以外の地に求めるのが妥当であろう。

須恵器を伴う5世紀後半以降になると、学園都市遺跡内には集落も墓地も検出されていない。しかし、学園都市遺跡が存在する北へ約1.3km、清武川右岸に木花古墳群が存在する。主軸長50~60m級の前方後円墳3基、円墳5基で構成されており、木花第1号墳出土の円筒埴輪により川西福年の第V期に相当し、6世紀代を中心とした時期に営まれたと思われる<sup>42</sup>。北へ約5kmの清武川左岸には、前方後円墳1基、円墳3基で構成された清武古墳群が存在する。当古墳群はすべて滅失しており、また出土遺物は知られておらず、時期は不明である。北西へ約9kmの清武川左岸では灰ケ野地下式横穴墓(田野町)が調査されているが、当地域には日向の在地型墓制である地下式横穴墓は導入されていない。集落の調査としては、5世紀後半~6世紀後半の浄土江遺跡(宮崎市)、6世紀後半の藤掛遺跡(新富町)、上別府遺跡(高鍋町)が調査され、方形プランの竪穴式住居が検出されている。昨年、学園都市遺跡群が存在する丘陵の北側の西の原遺跡<sup>50</sup>を宮崎市教育委員会が調査した折に、当時期の竪穴式住居が検出された。

## 古代

日向国が、文献上に現われるのは、大化の改新(645)後の国郡制の制定以降である。その後大宝2年(702)の薩摩国の分立、和銅6(713)年大隅国の分立を経て現在の宮崎県と旧南諸県郡を含む地域が日向国の領域となる。日向国には、臼杵、児湯、那珂、宮崎、諸県の5郡がおかれ、国府は児湯郡内におかれ、各郡には郡衙がおかれた。国府については、西都市三宅付近に比定されているが、郡衙については、現在のも確認されていない。

学園都市遺跡群が存在する宮崎市大字熊野～宮崎郡清武町大字木原にかけては、古代、宮崎郡内に位置している。宮崎郡の郡衙は宮崎市上北方・下北方付近が想定されているが、熊野より清武川をはさんで北岸の地域には「郡司分」の地名も残っており、また付近の松ヶ迫では8世紀代の須恵器が出土している窯跡も確認されており<sup>51</sup>、古代には要衝の地であったと思われる。また「延喜式」には、日向16駅の記載があり(長井、川辺、刈山、美弥、去飛、児湯、当磨、広田、救麻、教武、亜柳、野後、夷守、真所、水保、島津)、その中の救麻駅は、宮崎市大字熊野に比定されており、学園都市遺跡群内にその存在の可能性が求められている。

一方県内において古代の遺跡の発掘調査は、昭和23、36年に調査が行なわれた日向国分寺跡をはじめとして、延岡市古川<sup>52</sup>、宮崎市松ヶ迫<sup>53</sup>では奈良時代、延岡市葦田<sup>54</sup>では平安時代に相当する須恵器の窯跡が発掘調査されている。また、西都市や都城市などでは経筒が出土しており、特に都城市中郷マツラ迫のものは「承安5年(1175)の銘が彫られた胡州鏡を伴っているものである。しかし、これらの調査も、単発で小規模なものが多く、集落等の様相をつかむことが困難であったが、近年九州縦貫道路線内の発掘調査で、高崎町下原遺跡において平安時代の掘立柱建物跡やそれに相当する遺物が確認されたのをはじめとして、宮崎市浄土江遺跡においては奈良時代のカマド付竪穴住居跡が確認され、宮崎市内野々遺跡や清武町辻遺跡等においても平安時代に相当する遺構及び遺物が確認されている。

学園都市遺跡群内においても、赤坂遺跡、前原南遺跡、平畑遺跡、下田畑遺跡、浦田遺跡等においてカマド付竪穴住居跡が9軒と掘立柱建物跡が数十軒確認されている。またその他に、小山尻東遺跡では竪穴住居跡、入料遺跡では土城(雁股鉄鍬出土)が確認されている。また遺物としては、土師器(坏、高台付埴、甕、壺、内黒)、須恵器(大甕、瓶、高台付埴、転用碗)、緑釉、土錘や焼埴壺とされる内面に布目瓦痕のある土器等が出土している。

## 中・近世

古代末期から中世にかけて、日向各地には荘園開発の波が押し寄せてくる。県北より高知尾荘、臼杵荘、国富荘、島津荘などの大荘園が宇佐神宮や太宰府官人であった平氏や日向の在庁官人である日下部氏等によって開発される。鎌倉時代のはじめにつくられた「建久園田帳」の記載によると、日向の総田代8064町から没官領と公領をのぞいた7971町(98.8%)の地が荘園ないし私領となっていた状況であった。

学園都市遺跡群が存在する熊野は河南本郷(宮崎市本郷南方付近)に本拠をもつ国富荘の一門荘となっている。国富荘は11世紀後半より日下部氏によって開発が行なわれたもので、「日下部氏系図」には久安5(1149)年に日下部盛平が日下部氏の正統を継いだ時、国富荘河南本郷郡司その他の職を兼ねるという記載があり、これが国富荘の初見とされている。その後盛平が土持栄妙(土持太郎宣綱)に正統を譲ることにより、この地は土持氏の勢力下へ入っていくことになる。熊野は「建久園田帳」では「熊野八十町、地頭平五」の記載が見られるが、この平五なる人物については各説があり確定しえない。

また中世における一方の流れとして武士の台頭が見られるが、日向国内においては伊東氏の進出があげられる。鎌倉時代には庶子(田島氏、門川氏、木脇氏)のみが下向していたが、建武2(1335)年には国富荘と穰佐院を確保のため足利尊氏の命を受け伊東祐持が下向している。その後伊東氏は恩賞として得た都那郡の地を拠点として徐々に

に勢力を拡大していった。天授5(1379)年には国富荘内の加納は伊東氏の支族清武氏に、熊野は土持氏の支族原野氏によって分割されている。これは荘園制の崩壊を示すとともに土持氏の本拠地である国富荘への伊東氏の勢力拡大のいい事例であろう。その後伊東氏の勢力拡大に伴いこの地は伊東氏と島津氏の攻防の場となる。その拠点として、加江田城、清武城、紫波洲崎城、曾井城などの山城があげられる。宇岡郡市邊路郡内に存在する車坂城やその出城の1つと考えられる今江城(仮称)も、数度に亘る攻防の記録が残されている。中世末期に島津氏の三國支配が確立すると島津氏の支配下になる。その当時宮崎城主であった土井党家の記した日記にもその地名があらわれる。豊臣秀吉の九州征伐後は伊東氏領となり、その後近世を通じて鉄肥藩領として明治時代を迎えるわけである。

県内における中近世の遺跡の調査研究は、石塔や山城等を中心に行なわれ、戦前においては、瀬之口伝九郎氏が「日向金石文」<sup>64</sup>としてまとめられているが、戦後では発掘調査が行なわれた宮崎市城ヶ崎俳人墓地や延岡市小峯竈跡、門川町庵川竈跡(両者とも近世の竈跡)の調査があげられるが、その他は、他時代の遺構、遺物に付随する形で遺物が出七するといった状況であった。そのため集落等の様相をとらえるのは困難であったが、九州縦貫道関係で発掘調査された城内遺跡(清武城の一部)<sup>65</sup>や都城市都城中ノ城や祝古遺跡等<sup>66</sup>で中世の遺構・遺物が確認されている。また、学園都市遺跡内においても、昨年報告書が刊行された山内石塔群においては、中世～近世にかけての石塔や土師器の系統的研究や墓地構造等についての研究が試みられている。その他、空地東遺跡、熊野原遺跡、前原西遺跡、前原北遺跡、平畑遺跡、浦田遺跡等<sup>67</sup>が検出されている。また墓地としては、前述した山内石塔群をはじめとして空地東遺跡でも石塔群が確認されており、小山尻西遺跡においては、河原石葺きの盛土を有する大衆妙典供養の「大永六年(1526)の銘の入った板碑が確認されている。また前原西遺跡においては中世の方形周溝墓が、空地東遺跡においては近世墓が確認されている。これらの遺跡においては、土師器の坏・小皿(糸切り・ヘラ切り)を中心に古瀬戸・常滑・備前・魚住等の陶器や青磁、白磁・染付等の磁器やその他土鍋・石鍋、や「寛永通寶」・「元豊通寶」・「洪武通寶」などの各種銅銭等も出土している。(日高孝治)

- 註(1) 外山秀一「学園都市遺跡群周辺の地形分紙」『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報(Ⅲ)』1982
- (2) 橋昌信、萩原博文「九州における火山灰層序と旧石器時代石器群」『第四紀研究第22巻第3号』1983
- (3) 宮崎県教育委員会「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報(Ⅲ)」1982
- (4) 二宮忠司「九州地方におけるナイフ形石器について」『考古学論叢1』1973  
 戎山謙、大野寅夫「児湯郡下の旧石器」『宮崎考古3号』1977  
 山口謙治「宮崎市内採集の先土器時代石器一割片尖頭器について」『宮崎考古4号』1978  
 田野町教育委員会「芳ヶ迫第1遺跡、県営農地開発事業前平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」『田野町文化財調査報告書第1集』1984
- (5) 橋昌信「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢3』1975
- (6) 茂山謙「睦原型石核」『宮崎考古5号』1980
- (7) 鈴木重治「宮崎県岩土原遺跡の調査」『石器時代第10号』1973
- (8) 鈴木重治「出羽洞の旧石器」『考古学ジャーナル』1967  
 鈴木義雄「宮崎県見立出羽洞」『日本の洞穴遺跡』平凡社 1976
- (9) これらの遺跡については、現在、田野町教育委員会で報告書(概報)を作成中であり、詳細は不明であるが、調査を担当した伊東伯氏、寺師雄二氏によると早期の竪穴住居跡や土壌が検出されているらしい。芳ヶ迫第1遺跡については概報が発行されている。田野町教育委員会「芳ヶ迫第1遺跡、県営農地開発事業前平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」『田野町文化財調査報告書第1集』1984年3月
- (10) (1)と同じ。
- (11) 鈴木重治ほか「松添貝塚」1974
- (12) 田中熊雄「鏡町尾立遺跡の研究Ⅰ、(2)」宮崎大学学芸学部紀要13、14 1962

- 13 石川恒太郎ほか『下弓田遺跡』日向遺跡総合調査報告第1輯 1961
- 14 鈴木重治ほか『陣内遺跡』日向遺跡総合調査報告第2輯 1962
- 15 長津宗重『セベツト遺跡』高千穂町教育委員会 1984
- 16 日高孝治ほか『中村遺跡』山田町教育委員会 1983
- 17 藤井次郎「10. 宮崎県穂積遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会編 1972
- 18 『持田中尾遺跡発掘調査概要報告書』高鍋町教育委員会 1982
- 19 『鍛造跡・藤掛遺跡』『新富町文化財調査報告書 第2集』新富町教育委員会 1983
- 20 (1)と同じ。
- 21 『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報』(Ⅳ)宮崎県教育委員会 1983
- 22 石川悦雄氏の調査による。
- 23 『大野原の遺跡』大野町教育委員会 1980
- 24 22と同じ。
- 25 『大萩遺跡』(1)宮崎県教育委員会 1975
- 26 『薄糸平遺跡』高千穂町教育委員会 1978
- 27 『野田町八田遺跡』延岡市教育委員会 1978
- 28 27と同じ。
- 29 25と同じ。
- 30 『井上北内原遺跡』『小都市文化財調査報告書 第20集』小都市教育委員会 1984
- 31 27と同じ。
- 32 石川恒太郎・栗原文蔵「宮崎市外佐土原下那珂遺跡」  
『九州考古学』・33・34 九州考古学会 1968
- 33 『佐土原中溝遺跡調査報告』宮崎県道路公社 1972
- 34 『石神遺跡』『宮崎市文化財調査報告書 第1集』宮崎市教育委員会 1973
- 35 野間重孝「中撫田遺跡出土遺物」『宮崎考古』5 宮崎考古学会 1979
- 36 『宮崎市遺跡詳細分布調査』Ⅰ 宮崎市教育委員会 1984
- 37 24と同じ
- 38 宮崎県教育委員会「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報(Ⅱ)」 1981
- 39 38と同じ
- 40 (3)と同じ。
- 41 38と同じ。
- 42 川南町教育委員会「東平下厨溝群第1-2号方形周溝墓」, 1982
- 43 1984年8月～1985年1月に新富町教育委員会によって調査が行われ、周溝墓27基、土壌墓167基検出された。
- 44 新富町教育委員会「新富町・下屋敷1号墳発掘調査中間報告」『宮崎考古』第9号 1984
- 45 長津宗重・北郷孝道「首長墓の系譜—大淀川下流域の古墳群を中心として」『宮崎考古』第6号 1980
- 46 田中茂「宮崎郡田野町灰ヶ野地下式横穴」『宮崎県総合博物館研究紀要』第1輯 1973
- 47 宮崎市教育委員会「浄土江遺跡」 1981
- 48 岩永哲夫「藤掛遺跡」『新富町文化財調査報告書 第2集』 1983
- 49 宮崎県教育委員会「上別府遺跡」 1979
- 50 1984年5月～9月に宮崎市教育委員会が調査を行なった。
- 51 石川恒太郎「宮崎県の考古学」昭和43年
- 52 宮崎県教育委員会「日向遺跡総合調査報告 第3輯日向国分寺址」昭和38年
- 53 54・(1)と同じ。
- 54 小田富士雄「葎田塚跡」『宮崎県文化財調査報告書 第26集』宮崎県教育委員会 昭和58年
- 55 (1)と同じ。

- 57 『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書3』宮崎県教育委員会 1979
- 58 野間重孝他「宮崎市文化財調査報告書第6集 浄土江遺跡」宮崎市教育委員会 1981
- 59 野間重孝・菅付和樹他「内野々第1, 第2遺跡」宮崎県住宅供給公社・宮崎市教育委員会 1982
- 60 北郷崇道・長津宗重「清武工業団地造成工事埋蔵文化財発掘調査報告書 辻遺跡」昭和55年清武町土地開発公社・清武町教育委員会
- 61 西岡虎之助「上代土豪の歴史」『柳田國男先生古稀記念文集日本民俗学のために』昭和22年
- 62 「建久区田横」『日向郷土史料集第5巻』日向郷土史料集刊行会 昭和38年
- 63 「上井覚兼日記」『大日本古記録上井覚兼日記上中下』東京大学史料編纂所編 昭和28年
- 64 宮崎県「史蹟名勝天然記念物調査報告第12輯日向ノ金石文」昭和17年
- 65 北郷崇道氏の御教示による。
- 66 郷土文化研究所「郷土文化研究所紀要1 轉延岡小峯塚址」 1964
- 67 大野正年他「謎の庵川森」昭和56年
- 68 (7)に同じ。
- 69 岩永哲夫他「都城市文化財調査報告書第3集 郡城中之城・葦子野地下式横穴」 1983
- 70 北郷崇道・面高哲郎「都城市文化財調査報告書第1集, 第2集 祝吉遺跡」 1981, 1982
- 71 宮崎県教育委員会「宮崎学園都市遺跡埋蔵文化財調査報告書第1集 山内石塔群」 1984

〈参考文献〉

- 日高次吉「宮崎県の歴史」山川出版社 昭和45年
- 平部峻南「日向地誌」(復刻)青潮社 昭和51年
- 喜田貞吉「日向国史」 誌出版社 昭和4年

## 第二章 浦田遺跡の調査

### 第1節 遺跡の立地と環境 (第1図)

宮崎学園都市遺跡群の大部分は、<sup>坂</sup>双石山(509m)から北に延びる丘陵が鏡洲から2つに分かれたうちの清武川と加江田川に挟まれた南側の丘陵上に立地する。この丘陵は、谷底低地が内陸部までのび、それに伴って各所に谷が開かれている。特に、平畑遺跡より東側は全体に標高約40mから20mの比較的平坦な中位面Ⅰ・Ⅱに遺跡のほとんどが形成されそれぞれが低地に面している。丘陵の東端は、山城(今江城)に利用されるほど急峻に高まり急斜面で裾部にいたる。それは、海岸線まで約1kmのところまでのびている。

浦田遺跡は、清武町大字木原字浦田に所在する。浦田遺跡は鏡洲から2つに分かれたうちの北側の丘陵に立地する。この丘陵は、各々に頂部をもち一見独立丘陵の様相を呈し、裾部も急斜面で伏鞍な地形をなしている。その中で唯一の平坦面である4ヶ所に、下田畑遺跡、小山尻東遺跡、田上遺跡、浦田遺跡が形成される。また、浦田遺跡の上方、標高約43mの頂部には大永六年(1427)の銘をもった板碑など検出された小山尻西遺跡もある。浦田遺跡は、他の5つの遺跡とはちがひ南向きの緩斜面に立地する。北側には山がせまり、南は急斜面で低地にいたる。標高は約21mで谷底低地との比高差は約10mである。田上川を挟んだ南側丘陵の北斜面には、貝殻文土器、押型文土器、集石遺構など縄文早期の遺構、遺物を検出した入料遺跡、古墳時代初頭の住居跡や土師器焼成址などの遺構が確認された西の原遺跡がある。さらに、西へ約1kmほど行くと約500基にのぼる五輪塔、板碑などを検出した山内石塔群の発掘調査が昭和56、57年に行なわれている。

### 第2節 調査の概要

現地地形は、畑作に使われ平坦化し旧地形はほとんど留めていなかった。そこで調査に先立って何ヶ所かに試掘坑を入れた。平坦面中央部より弥生後期の完形の甕や弥生土器片が出土し遺跡の存在が確認された。そこで、昭和58年10月12日から昭和59年3月19日までの約5ヶ月間にわたり発掘調査を行った。

調査を行うにあたり地形にあわせて、東西1~20、南北A~Nとして5m方眼をもとにグリッドを設定した。表土を剥ぐうちに南北15列あたりでアカホヤ層より下層の褐色土あるいはふい褐色土が露出した。そこで、最初に西側を中心に表土を剥いで遺跡の有無を確認したが、十数点の遺物を検出しただけで遺構の確認はできなかった。そのため15列より東側を中心に発掘を行った。J-14・15付近では褐色土とともに焼石や集石遺構が露出した。縄文早期の所産と考えられ、押型文土器(楕円・山形)、条痕文土器、壺之神式土器、無文土器など、石器では石鏃、凹石、磨石が出土した。集石遺構9基も検出された。なお、先土器時代の遺物は時間的制約から一部トレンチで確認しただけではあるがⅣ層より頁岩製の彫器1点が出土し、この時期の文化層として把握された。

弥生時代の遺構、遺物は発掘区の東側に集中している。耕作のため住居跡はあまり残存は良好でなかったが6軒、反対に土城は深いものは約1.2mと比較的残りがよく10基検出した。遺物は遺構に伴いかなり出土し、弥生終末期におさまる甕、壺、鉢を中心に構成されている。そのほか備前式土器をもつ複合口縁壺の口縁部が多量に出土し、これはいままで学園都市遺跡群内で発掘された遺跡の中では特徴的なことといえる。また、もっとも規模の大きいSA7から土製勾玉、SC3から石匳丁、SC4から砥石、SA3からは、鉄鏃、石匳丁が出土している。

古墳時代の遺構・遺物は皆無で、カマド付住居跡1軒と掘立柱建物1棟を確認した。遺物は、この時期の遺跡と

ほぼ同時期の須恵器、土師器、ヘラ切り手法の環、皿、内黒土器、布痕土器等を出土した。糸切りの土師器はまったくみられない。土師器環は底部に特徴がみられ付近の小山尻東遺跡のものと同様している。またK-N-13-15列付近に斜面に削り込んだ箇所があり、表土を削いだところ礎石、井戸、カマドなどの痕跡とともに陶磁器、瓦、古銭等の遺物も多量に出土した。なおこの区画をⅡ区とした。この江戸末期の築路が県内でほとんど知られていない現状では未知の分野となっている。

### 第3節 層 序 (第2, 3区)

浦田遺跡は、前節で述べたようにJ列より北、17列より西は表土を削いだ段階でⅣ層が露出した。特に西側19列付近ではさらに下層のⅤ層が露出している。そこで東西をH、I間、南北を14列にそれぞれトレンチを入れ土層観察を行った。基本層序は、0層：表土、Ⅰ層：黒色土、Ⅱ層：黄褐色土（アカホヤ）、Ⅲ層：にぶい褐色土、Ⅳ層：褐色土、Ⅴ層：オリーブ色土、Ⅵ層：灰オリーブ色土、Ⅶ層：オリーブ黒色土、Ⅷ層：灰褐色土、Ⅸ層：水性シラス層となる。遺物包含層はⅠ層、Ⅳ層、Ⅵ層である。Ⅰ層は流土で比較的粘質をもち、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器など幅広い時代の遺物を含んでいる。Ⅳ層上面において縄文早期の土器（押型文、塞之神式、条痕文）がみられ、特に無文土器は流れ込みと思われる斜面上のG列に集中する。石器では姫島産の黒曜石や霧島山系のもと思われる石鏃、チップ等みられる。Ⅵ層からは、頁岩製の彫器を出土した。Ⅷ層出土の遺物はこれ1点であったが、表探資料の中にナイフ形石器、細石刃などより先土器時代の包含層としてとらえられる。また、削片尖頭器を主体とする堂地西遺跡での第Ⅵ-b層と対比されよう。

では、東西の土層堆積状態からみてみたい。O、Ⅰ層はまったく堆積がみられず、H-13付近ではⅨ層まで約50cmと非常に浅い。Ⅱ層は、H-10あたりからあらわれ厚さ約20-30cmでつく。遺跡の中央部であるH-9、10付近ではⅨ層までの厚さが1mを越し層位も複雑化してくる。特にⅤ層、Ⅵ層にみられ、Ⅴ層は、Ⅴ-a（Ⅴ層よりしまる）、Ⅴ-b（Ⅴ-aより粘質をおび、色調も明るくなる）、Ⅴ-c（Ⅴ層より砂質で粘性をもち、暗褐色のブロックを含まない）、の3つに分かれ、Ⅵ層では、Ⅵ-a（Ⅵ層より色調が淡く、ブロックが少くない）、Ⅵ-b（Ⅵ層より色調が濃い）、Ⅵ-c（黒色がつよくなりシルト質である）の3つに分かれる。Ⅶ層、Ⅷ層も暗褐色ブロックの混入度によりそれぞれ2層に分けられる。また、表土を削いだ段階でのH-14からH-6までの高低差について各層ごとに考えてみると、Ⅳ層は約20cm、Ⅴ層は約90cm、途中からあらわれたⅡ層では約60cmの差が認められ、ゆるやかな西から東への傾斜であったことが窺える。

次に南北の土層堆積状態について考えてみたい。I-14付近ではⅣ層下にⅨ層となるが、G-14あたりから急斜面になるにつれⅠ層があらわれ層位も増加しⅥ層までの厚さが約1mとなる。F-14になると厚い表土と厚さ約50cmのⅠ層のみになってしまう。Ⅱ層、Ⅲ層はみられない。しかし、Ⅱ区の掘り切られた北側の壁に厚さ約20cm程Ⅱ層が露出しており削平以前には、Ⅱ層が遺跡全体を覆っていたと考えられる。また弥生時代、歴史時代の遺構のほとんどが黄褐色系の埋土で他の遺跡のような黒色系の埋土とは様相を異にする。

このことから推察すると、当時の地形がある程度の斜面をなしⅠ層は遺跡全面に堆積することなく南あるいは東へと流れていき、現在のG列付近に残存する結果となったと考えられることができる。

## 第4節 遺構と遺物

### 1. 先土器時代の遺物

弥生時代、縄文時代の遺構、遺物の検出におかれ先土器時代のものについては時間的制約をうけることになってしまった。しかし、ナイフ形石器、細石刃など表採されていることからその文化層が存在するものと考えられた。そこで一部にトレンチを入れ、VI層（ふい暗褐色土）上面から彫器1点を出土した。VI層は堂地西遺跡におけるV-b層（暗褐色硬質土層）と対比できよう。V-b層からはナイフ形石器や剥片尖頭器など出土している。

#### (1) 遺物 (第12図1, 2, 3)

1は頁岩製の彫器である。縦長剥片を素材とし左側辺の先端部に彫刀面を作り出している。全長6.1cm、幅0.7cmで断面三角形をなす。H-6グリッド、VI層上面出土である。2は流紋岩製の縦長剥片を素材とするナイフ形石器である。左側辺の先端部にプランティング加工が施される。全長4.9cm、幅1.8cmを測る。表採資料である。3は霧島産出の黒曜石製の細石刃である。先端部は欠失している。現在長0.8cm、幅0.4cm、厚さ0.1cmを測る。重量は0.4g。表採資料である。

### 2. 縄文時代の遺構と遺物 (第4図)

縄文時代の遺構としては集石遺構9基を検出したのみで、住居跡等のその他の遺構は確認できなかった。遺物は、押型文土器、条痕文土器、無文土器、壺之神式土器などが出土した。しかし、層位によるそれぞれの七器の順列やほとんど破片で出土しているためその全容や集石遺構との関係を知ることは困難である。それゆえ他の遺跡の調査結果によるところが大きくそれを追証する形となった。

#### (1) 遺構

##### ① S1-1 (第5図上)

J-13とI-13との境にあり、他の集石間のほぼ中央にあたる。長径0.7m、短径0.55mと本遺跡検出のなかでもっとも小規模な集石である。52個の石からなる。中央部には扁平な石あるいは、約10cmの石を敷きその周囲に20cmほどの石がおかれる。掘り込みはもたない。集石の周囲には年代を示すような遺物は出土していない。

##### ③ S1-2 (第5図下)

3・4・5号集石から南へ約1.8m、7号集石から西へ約10mのG-15グリッドにある。集石は5cm～15cmぐらいの大きさの石約70個で構成される。石は、約1.5m四方に散石しているが赤く変色しており一応集石遺構と考えた。7号集石同様すでに炉としての機能は満たしておらず、使用後廃棄されたものと考えられる。

##### ③ S13.4, 5 (第6図)

6号集石から南東に5m、2号集石から北へ20m、K-15、J-15グリッドの境にある。4.0m×1.5mに石が集まり、その中で特に集石状態にあるものから3号、4号、5号とした。3号は、長径1.2m、短径1mで約110個の石からなる。集石中央部には石がみられず、周囲を15cmほどの厚手の石が囲む形となっている。石は全体に焼けて赤に変色し、炭化物が少量みられる。石のみられない部分の土は焼けていない。集石のすぐ西側に壺之神式土器の底部(36)が出土しているが、集石の年代を決定するものではない。

4号集石は、長径0.6m、短径0.45mで約10～12cmほどの石約50個からなる。集石としては石は重なりあい比較的にまとまりをみせており、1号集石に類似する。また、周囲に敷かれた石の中に廃棄された状況として考えることもできる。掘り込みはもたない。

5号集石は、3号、4号間にありかろうじて集石と考えられる石の集まりがみられる。石は、南側に集まり焼けて変色している。集石の北側には60cm×70cmの炭化物の広がりが見られる。

④ S16 (第7図)

I-16とJ-16グリッドのさかいにある。検出された集石遺構のなかでは西端にあたる。南西部は試掘坑によって切られているが、本来、円形に近いものであったと考えられる。石は、1.5m×1.4mに広がりほとんどが焼けて赤く変色する。全体的に均等の大きさ(6~8cm)の石が使用されているが、西側、南側に約20cmの大きさの石もみられる。石は掘り込み上面から床面までぎっしりつまり厚さ28cmを測る。掘り込みの大きさは、1.58×1.3m、深さ約0.3mである。北側部分では、ゆるやかな傾斜を保ちながら2段掘りされている。西側部分は途中から急角度で床面にいたる。床面は北側から中央にかけては平坦であるが南側では1段低くなる。石はこの部分まではいりこんでいる。集石の埋土は黒褐色で粘質をおび、炭化物を全体に含む。特に、北西部に集中する。石を取り除いた床面にも炭化物を含む黒褐色土が堆積していた。掘り込みをもつものには、ほかに9号集石がある。付近から集石の年代を示すような遺物はまったく出土していない。

⑤ S17 (第8図上)

G-13グリッドの北側中央、8号集石の西約4mのところにある。小ぶりで比較的扁平な石が大部分を占め、総数47個の石からなる。検出された状態では、すでに炉としての機能をとどめていない。これは、斜面上に立地していることにも滞与するものとも考えられる。石は焼けて赤変する。掘り込みはみられない。斜面上に立地するものにはほかに2号集石がある。

⑥ S18 (第8図下)

H-13グリッドの東端、7号集石から北に約4mのところにある。中央の大きな4個の石は、どれも扁平で厚手で、強く熱が加わったため赤く変色しボロボロに風化している。埋土は、粘質をおびた黒褐色土で1~2mmの炭化物を少量含んでいる。石を取り除いたあとにもみられた。掘り込みはない。周辺に押型文土器、平格式土器、隆帯文土器などが出土しているが、集石の年代を正確に示すものとは考えられない。

⑦ S19 (第9図)

I-11グリッドの東端、1号集石から約12mほど東にある。検出された集石の中で最東端にある。長径1.3m、短径0.8mで、石の大きさは、7~8cm、15cm前後の2種類に分けることができる。集石下に径0.9m、深さ0.27mの不整形の掘り込みをもつ。石は上部で立てられているようなものもいくつかみられるが、掘り込み内の石は、どちらかといえば投げ込まれた状態である。掘り込みから約50cm離れたところにある扁平な皿状の石は、この集石が廃棄されたことを示すものであろうか。集石から約5mほどのところから・糸痕文土器Ⅲと沈線文土器が出土している。

(2) 遺物

① 無文土器 (第10図1~12)

全部で37点出土している。G列に多く、特にG-12グリッドに集中する。他の土器に比べ遺跡全体に分布し西はH-21グリッド、東はJ-6で出土している。

土器はすべて破片で、大きくても12cm前後である。そのうち口縁部が5点出土している。器形はすべて直立気味の胴部から強く外反する。薄手(5, 9)、厚手(1, 2, 4, 8)の2種類に分けられる。しかし、頸部以下の破片ではどちらの口縁がつくかは判別は困難である。6のように比較的薄手の口縁部から厚手の胴部につづくものや、10のように厚手の口縁部から薄手の胴部に移行するものもある。本遺跡出土のなかでは、厚手が火勢を占める。底部は不明であるが丸底に近い尖底と思われるが、12のように平底のものもある。15, 10の頸部にはスガが付着する。内・外面とも横ナデで、特に外面はいいである。一部、頸部に指ナデのあとが残る。胎土には、石英・長石を少

量含む。焼成は堅緻。色調は外面がにぶい黄褐色をなし、胴部に黒斑がみられるものもある。内面は黄褐色をなす。

### ③ 条痕文土器Ⅰ (第10図13~19)

南端のG-11, 12グリッド, 北端のL-10グリッドと遺跡の両端から出土している。遺物のほとんどは一括資料で、G列の斜面上からのものである。遺跡の東, 西端からの出土はみられない。

土器は総数11点出土しているがいずれも胴部片である。頸部下より全体に縦方向の条痕を施すもの(13), 頸部下から縦方向に目の細かな条痕を施すもの(14, 18), 不定方向に3条を基本に施される(15, 16, 17), 比較的薄手で横方向の条痕が施される(19)の4つに分類される。それぞれ観察してみたい。13は, 外面に幅1.5cmを1単位として6~7条を有する条痕が縦方向に施される。厚さ7~8mmで他に比べると薄手である。内・外面とも横ナデ, 内面には一部粘土の接合面がみられる。胎土には, 1~3mmの石や長石, 石英も含む。焼成は良好。色調は, 外面が灰褐色, 内面が明褐色をなす。15は, 約0.9cmの幅で3条を基本とする条痕が横方向に施される。部分的に同一原体での右下りの条痕も観察できる。内面は横ナデ。胎土には, 長石, 石英のほか黒雲母を含む。焼成は堅緻, 色調は内外面とも暗黄褐色を呈す。16は同一個体と思われる。18は, 他の条痕文土器に比べ目の細い条痕が施される。頸部外面は横ナデ。内面は, 頸部から胴部へと順に条痕が右下りに施される。幅約2cmで6本を1単位とする。内外面とも施文具は貝殻と思われるが, 条痕の差異は施文法によるものか, 貝の種類によるものかは現段階では明確でない。胎土には長石を少量含む。焼成は堅緻。色調は, 外面が黒色(2次的な焼成のためか?), 内面が黄褐色をなす。全体に無文土器に類似する。19は, 13より薄手の土器である。目ははっきりした横方向の条痕が, 内外面に施される。胎土には, 砂粒を含む。焼成は良好。色調は, 内外面とも暗灰褐色をなす。

### ④ 条痕文土器Ⅱ (第10図20)

H-6グリッドIV層上面から3点出土した。うち2点は接合。

20は, 口縁部には, 縦に約1cmの長さにはへら状工具による沈線が施される。沈線直下から胴部にかけて横方向の細かな条痕が施される。原体の単位は不明。内面は横ナデ。口径17.8cmを測る。胎土には, 長石, 石英を含む。焼成は良好。色調は, 外面が明赤褐色, 内面がにぶい赤褐色をなす。

### ⑤ 条痕文土器Ⅲ (第10図21, 第11図22, 23)

K-12, K-7, J-8グリッドから3点出土している。J-8グリッド出土のものは口縁部である。主に遺跡の北側に分布するが, 3点とも同一個体と考えられる。幅3.5cmで7~9本の条痕を基本とする。条痕は時計とは逆回りの方向に施され, 条痕間が約4mmと広い。内面は風化が激しいが横ナデと思われる。21は, 胴部径26.5cm, 厚さ1.6cm, 22は, 口径10.2cmを測る。口縁端部は平坦面をなす。胎土には長石, 石英のほか黒雲母を含む。焼成は良好。色調は外面が暗黄褐色, 内面が黄褐色をなす。

### ⑥ 条痕文土器Ⅳ (第11図37)

K-14グリッド出土である。IV層上面から検出した。口縁部は直口し, 端部は丸味をおびやや外傾する。外面は, 横ナデのあと口縁直下から胴部にかけて2本を単位とする棒状の施文具で斜方向に条痕が施される。右下りの場合, 一気に口縁直下から胴部に引かれる。左下りの条痕は, 約5.5cmの長さで直線的に引かれるものと弧を描くものの2種類に分けられる。右下り, 左下りの施文順序に規則性はみられない。ただ条痕は上から下へ引かれている。内面は, 指による横ナデで激しく凹凸が残る。外面は全体にススが附着する。胎土には, 1~2mmの白っぽい石のほか黒雲母を含む。焼成は良好。色調は外面が暗赤褐色, 内面が赤褐色をなす。なお, 無文であるが同様な胎土をもつ土器片が数点出土している。

### ⑦ 押型文土器 (第11図24~27)

総数で4点出土している。そのうち2点がH-13グリッドからの出土である。他の2点は表探資料である。

24は、外反する口縁部と思われる。外面には口唇部から約1.8cm幅が無文帯で、それより下に横門文が施される。内面にはヘラ状工具で長さ約2.3cmの沈線が引かれ、その直下には横門文を施される。胎土には、砂粒を含む。焼成は良好。色調は内外面とも淡赤褐色を呈す。25は、小さめの横門文が横方向に施される。小さな破片のため原体の大きさ等については不明。内面は横ナデ。胎土には1mm前後の石、長石、石英とともに黒雲母を含む。焼成は良好。色調は外面赤褐色、内面が淡赤褐色を呈す。26は、円に近い横門文が施される。内面は、ヘラ状工具での横ナデ。胎土には、石英、長石を含む。焼成は良好。色調は外面が明赤褐色、内面が赤褐色をなす。26には、山形文が施される。一部、風化によって消滅している。横門文に比べ3cmと厚平である。山形文が風化したと思われる、無文化してしまった破片も数点出土している。胎土は緻密である。焼成は良好。色調は内外面とも明赤褐色をなす。

#### ⑧ 壺之神式土器 (第11図28, 29, 36)

遺跡の北側(内側)のL-13グリッドとK-15グリッドから2点出土している。1点はSA3埋土中出土である。

28は、頸部から「く」の字に屈曲して、そのまま外反し口縁部はゆるやかな山形をなす。口縁端部は舌状を呈す。外面には只設刺突文が施される。内面はいいいな横ナデ。胎土には、黒雲母を含む。焼成は良好。色調は、外面が赤褐色、内面が淡赤褐色を呈す。L-13グリッド出土である。29は胴部片で、間隔をおいて縦方向に燃糸文が施される。胎土には、黒雲母を含む。焼成は良好。色調は外面が赤褐色、内面が明褐色をなす。36は、上げ底気味の底部からややふくらみもちながら胴部にのびる。胴部には、縦方向の燃糸文が間隔をおいて施される。内面は横ナデ。底部と胴部の接合面が観察できる。胎土には、石英、長石のほかに黒雲母を含む。焼成は良好。色調は外面が明赤褐色、内面は暗赤褐色をなす。2次的焼成を受けた可能性がある。3号集石の西から出土。

#### ⑨ 平棹式土器 (第11図30, 31)

K-14グリッドとH-13グリッドから1点づつ出土している。

30は、口縁部が大きく外反し中ほどからゆるやかに内唇しながらのびる。平坦な口唇部には刻み目が施される。口唇部とその下3.7cmのところにある太い沈線間に刺突と沈線で文様が構成される。刺突文は、口唇部直下、太い沈線直上に施されその間に2列の刺突文が波状に配される。そして、その3つの刺突文の間に2~3条の浅い沈線が2列の刺突文に平行(波状)に施されている。太い沈線下には2条の刻み目を施した突帯がみられる。内面はいいいな横ナデ。胎土には、長石・石英・黒雲母を含む。焼成は良好。色調は、外面が明赤褐色、内面が赤褐色をなす。H-13グリッド出土で、付近に8号集石がある。30と同様な器形をなす。外面の文様構成も同じで、同一個体の可能性がある。K-14グリッド出土。西に約1mのところ3号集石がある。

#### ⑩ 燃糸文土器 (第11図32)

1点だけで表採資料である。

縦方向に燃糸文が間隔をおいて施される。内面はヘラ状工具での横ナデ。外面に一部ススが附着する。胎土には、長石・石英を少量含む。焼成は良好。色調は、外面が暗灰褐色、内面が暗赤褐色をなす。

#### ⑪ 突帯文土器 (第11図33)

H-12グリッドから1点だけ出土している。

上部には $(2+\alpha)$ 条の刻み目突帯、下方に $(1+\alpha)$ 条の隆帯が貼り付けられている。下方の隆帯は右下りの斜方向につけられている。内外面とも横ナデ。胎土には、長石・石英を微量に含む。焼成は堅緻。色調は外面が赤褐色、内面が明赤褐色を呈す。

#### ⑫ 刺突文土器 (第11図34)

SC12の埋土中より出土した。

3列にヘラ状工具によって刺突文が施される。左から右へ施文されている。胎土には、黒雲母を含む。焼成は良好。

色調は、内外面とも明赤褐色をなす。

#### ⑬ 底 部 (第11図35)

35は、表採資料で円筒形土器の底部と思われる。胎土には、黒雲母を含む。焼成は良好。内外面とも赤褐色をなす。

#### ⑬ 石 織 (第12図4, 5)

4は、水色のチャート製の石織で縦長の五角形状を呈する。先端は鋭く尖る。基部は表裏からの剝離によって浅い袈裟が施される。左、右側辺はゆるやかに凹を呈す。長さ2.8cm, 幅1.0cm, 重量0.65gを測る。J-21グリッド出土である。5は銚色をした黒曜石製である。長さ2.1cm, 幅1.3cm, 厚さ0.3cm, 重量0.45gを測る。

#### ⑭ 磨 石 (第12図6, 7)

6は、砂岩製の磨石である。円形をなすが、全面にわたって風化が激しい。一部、中央に凹がみられる。長さ11.2cm, 幅9.1cm, 厚さ5.5cmを測る。K-12グリッド出土である。7は、楕円形をなす砂岩製の磨石である。表・裏とも中央部9cm×6cmの幅で磨痕が観察できる。長さ8.1cm, 厚さ5.8cmを測る。H-18グリッド出土である。

#### ⑮ 凹 石 (第12図8)

砂岩製の凹石で扁平な円形をなす。表・裏とも凹を有するが、表のほうが深い。裏側はまぼく欠けている。径10.4cm, 厚さ3.4cmを測る。G-16グリッド出土である。

## 小 結

浦田遺跡では集石遺構9基、土器約80点、石器約30点を出土した。

集石遺構は掘り込みをもたないもの(I類)、掘り込みをもつもの(II類)、またI類は中央に集石するもの(a類)、散石の状況を示すもの(b類)とに分かれる。I-a類にはS11, 8, I-b類にはS12, 7が、II類にはS16, 9が含まれる。これらの占地状況をみるとI-a類は台地の縁辺部、I-b類はそれよりやや内陸部、II類は最も奥に立地している。またS11~8に囲まれた空間を生活の場として考えることもできるが、そうした場合住居跡や出土遺物はみられない。しかし、1つの空間をかもしだしているS11~8の集石遺構の有機的関係が考えられる。では次に、集石遺構の機能および相互関係について考えてみたい。II類は明らかに石蒸しあるいは炉としての機能をもつものである。特にS16は炉を放棄する際なかに石を廃棄した状況で検出されている。I類を「炉址」として考えた場合、その機能について考える必要があり、a類、b類についても機能差があるようだ。a類は中央に石が集まりS18は大きな石がかなり火を受けた状況を示しており調理、あるいは煮沸用に使われたと思われる。b類は石が小さく散石状況にあるため煮沸用と考えられよう。逆にI類が炉として使用した礫が廃棄された状況を示すものならば、それはS16あるいはS19からの廃棄礫と考えられる。斜面およびその周辺に立地することからI類を炉と考えるよりも、無理はないようだ。しかし、S16, 9から約15mほど離れており、なぜこれほど離れた場所に廃棄しなければならなかったか疑問である。当遺跡では住居跡、墓地など検出されておらず土器片も少ない。これらの有機的関連をもたせて各遺跡間の相互理解が必要となろう。

出土遺物は、耕作によって削平されていたためか少なかった。無文土器は県内においては(時期比定が困難であるためか)報告例がほとんどない。逆に大分県では早水台遺跡<sup>(1)</sup>、田村遺跡<sup>(2)</sup>、稲荷山遺跡<sup>(3)</sup>などから多量に出土しており、宮崎県内でも今後出土例が増加すると考えられる。桑痕文土器Ⅰも、無文土器と同様な調査成果しかあげられておらず、それらの時期および形態については不明である。桑痕文土器Ⅱは従来の「前平式土器」の範疇にはいるものである。貝殻刺突文、あるいは貝殻押し引き文の土器がまったく出土していず、それらは単独で存在すると考えられ、長野氏の分類による「岩本タイプ」と称されるものである<sup>(4)</sup>。これによると、同丘陵に立地する小山尻東遺跡、田上遺跡からは「加葉山タイプ」が出土しており、浦田遺跡に後出するものと考えられる<sup>(5)</sup>。桑痕文土器Ⅳは、現在のところ型式名は与

えられていない。沖縄県嘉手納町の野国遺跡出土のものなのに、器形および外面の施文法が類似する資料がある<sup>(6)</sup>。ただ、胎土に金雲母のかわりに粘板岩砕片を含む点が異なるなど資料の増加をまって検討したい。寒之神式土器は新東氏の分類によるⅢ式の特徴をもつ<sup>(7)</sup>。学園都市遺跡群内では赤坂遺跡<sup>(8)</sup>、前原西遺跡から同類のものがみられる。県内では26ヶ所の遺跡から出土している突帯文土器、刺突文土器は最近序々に資料の増加がみられ今後の検討課題としたい<sup>(9)</sup>。石器は土器よりさらに少なく、すでに削平されてしまったものが多いと思われ詳細については不明である。

以上、縄文時代早期の遺構・遺物は削平された部分が多く全貌を明らかにしえなかった。しかし、小範囲での集石遺構の検出は、立地、機能、および相互関係を考えるうえでの1資料となると考える。

- 註1) 八幡一郎・賀川光夫 「平水台」『大分県文化財調査報告第3輯』大分県教育委員会 1955
- (2) 賀川光夫・羽田野一郎 「大分県大野郡朝地町田村遺跡調査報告」朝地町教育委員会 1960
- (3) 賀川光夫・橋 昌信氏他 「稲荷山遺跡緊急発掘調査」『大分県文化財調査報告第20・21合輯』大分県教育委員会 1970
- (4) 長野真一他 「(上流川遺跡群)上楠原遺跡・水ノ谷遺跡・丸岡遺跡」『鹿屋市埋蔵文化財調査報告書11』鹿屋市教育委員会 1984
- (5) 同上
- (6) 「野国(野国貝塚群B地点発掘調査報告)」『沖縄県文化財調査報告書第57集』沖縄県教育委員会 1984
- (7) 新東晃一 「寒之神式土器」『縄文文化の研究 3』雄山閣 1982
- (8) 「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報」(Ⅱ)宮崎県教育委員会 1981
- (9) 「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報」(Ⅲ)宮崎県教育委員会 1982
- 10) 「寒ノ神式土器一地名表・拓影・備考編一」縄文研究会 1985

### 3. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は発掘区の中央から東にかけて分布する。住居跡6軒、土坑10基である。西側はすでにⅡ層およびⅢ層まで削平されておりそこにも弥生時代の遺構が存在していた可能性もある。検出された遺構も住居跡など削平により深さ約20cm程度しか残存していなかった。遺物は土器片がほとんどで遺構内およびその周辺から多量に出土している。石器、鉄器類はわずかに出土しているだけである。

#### (1) 竪穴住居跡

住居跡は東西が4列～12列、南北がG列～K列の間に分布する。形態は方形である。西端のSA7が7.01m×6.96mと最大で、他の住居跡は3.50～5.0mの規模におさまる。柱穴はSA1、SA6が4本、SA7が5あるいは6本となり、SA3、4、5からは検出されなかった。また住居内中央部付近に落ち込みをもつもの(SA1、3、6、7)と、もたないもの(SA4、5)とがある。落ち込みをもつものの中のSA6、7では焼土が確認されている。落ち込みの形態は、不整形あるいは円形をなし径約50cmを測る。深さは約30cmで舟底状を呈す。詳細は竪穴住居跡観察表を参照されたい。(表1)

遺構名	図編	平面プラン	規模 (m)			柱穴	屋内施設	出土遺物
			長軸	短軸	深さ			
SA 1	14	方形	3.58	3.10	0.38	4	南隅に落ち込み	
SA 3	15	方形	3.98	3.85	0.25	—	中央に土坑	石瓦丁片, 鉄線1点
SA 4	16	方形	3.50	3.45	0.25	—		
SA 5	17	方形	4.60	3.52	0.31	—	西にベット状遺構(?)を有す	器台
SA 6	18,19	不正方形	5.25	4.65	—	3	中央部に炉	土玉, 土製品
SA 7	20	方形	7.01	4.96	0.41	5	中央南よりに土坑	高坏・土製勾玉,

表1 浦田遺跡 竪穴住居跡観察表

## (2) 土 坑

土坑は全部で10基確認された。住居跡とほぼ同様な分布状況を示している。Ⅱ層あるいはⅣ層からの検出で、すべてⅧ層、Ⅸ層まで掘り込まれている。前述したように北側はⅨ層までの層位が薄くなっておりそれに比例し土坑も浅くなっている。規模は1.0mから2.5m内にはいる。床面積は0.81~2.84㎡と幅広い分布を示す。出土遺物は、上位から下位まですべて含まれるがそのほとんどが破片となる。なおSC 2, 8は頭初土坑として考えていたが、無遺物であることや浅かったり、形態が不整形であったことなどから除外した。器種構成は住居跡とほぼ変化はないが、若干ミニチュア土器が多い。詳細は土坑観察表を参照されたい。(表2)

遺構名	図編	平面プラン	規模 ( m )			床面積 (㎡)	規模 ( m )		出土遺物
			長軸	短軸	深さ		長軸	短軸	
SC 1	29	楕円形	2.10	1.65	0.75	1.92	1.77	1.22	土玉
SC 3	29	楕円形	2.53	2.10	0.60	2.84	2.15	1.70	上層から石瓦丁, 床面から焼土を検出SA 3の器台片と接合
SC 4	30	不正円形	1.66	1.45	0.83	1.26	1.28	1.24	礫石
SC 5	30	円形	1.77	1.74	1.19	1.67	1.46	1.40	上部に大型壺
SC 6	31	不正円形	1.65	1.54	0.51	1.60	1.50	1.32	全層から土器出土
SC 7	32	円形	1.40	1.25	0.46	0.94	1.10	1.01	
SC 9	33	不正楕円形	1.54	1.00	0.57	0.81	1.32	0.68	
SC 10	34	不正円形	1.75	1.66	0.51	1.67	1.52	1.27	
SC 11	35	円形	1.69	1.52	1.09	0.96	1.21	1.03	土製品
SC 12	36	不明	—	1.20	0.27	1.25	—	0.90	

表2 浦田遺跡土坑観察表

## (3) 遺 物

弥生時代の遺物は遺構内外からかなりの量出土しており、当遺跡の中心をなしている。そこで器種ごとに形態分類を行なった。(表3~8)なお、各個体ごとの説明は観察表によって行ったので参照されたい。(表11)

## (4) 遺物の出土状況及び接合関係

弥生時代の遺構・遺物は当遺跡の中心となっており住居址6軒、土坑10基を数える。遺物も遺構内外からかなりの

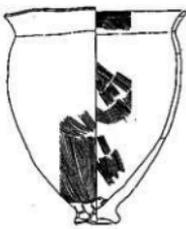
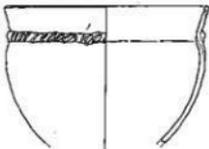
器種	分類	形態	特徴	形態	代表的土器	時期	
甕	I	口縁部が外反し、胴上半部がやや張る。口径に比べ胴部最大径がやや劣る。胴部中央付近から急にすばみ小さな底部がつく。底部はあげ底のものが多い。内・外面ともハケ調整。	a		口径が25cm前後のもの。 ススの付着がみられる。	58 171 234 241 231	II
			b		口径が20cm以下のもの。 ススの付着はみられない。	77 78	
	II	口縁部は外反する。胴部はあまり張らない。口縁端部は平坦面をなす。		スス付着	3 79 97 233		
	III	口縁部は外反する。胴部上半がやや張る。底部は平底。胴部上半にススの付着がみられる。			291	IV	
	IV	体部から發をもたず口縁部が外方へ開く。口径が最大径となる。			134 235		
突帯甕	I	口縁部は外反する。胴部上半部がやや張り、口径とほぼ同じである。頸部に突帯をもつ。			102 269	IV	
	II	口縁部は外反し厚手である。端部は幅広い平坦面をなす。			173 240		
	III	口縁部は外反するが薄手で短い。胴部はあまり張らない。			40 270		

表3 形態分類表 (1)

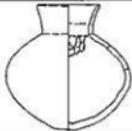
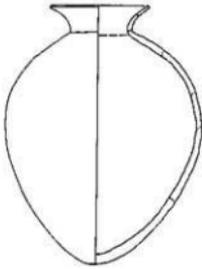
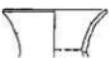
器種	分類	形態	特徴	形態	代表的土器	時期	
壺	I	胴部から外反する口縁部をもつ。端部は丸味をもつ。体部は扁球状をなす。底部は丸底に近い平底状を呈す。				108	II
	II	口縁部が「く」の字状に外反する。	a		口縁部がしだいに細くなるもの。	16 17 109	
			b		口縁端部が平坦面あるいは凹みを有するもの。	18	
	III	II類より口縁部が短く「く」の字状に外反するもの。厚手である。	a		端部が平坦をなすもの。凹むものもある。	257	
			b		端部が上方に引きのぼされるもの。	111 128	
	IV	口縁部が外反し、胴部中央に胴部最大径がくる。底部はレンズ状をなす。				131	III
	V	口縁部が大きくラップ状に外反するもの。	a		口縁端部が平坦面をなすもの。	19 20 110	
			b		口縁端部が上方に引きのぼされるもの。	21 218	
			c		口縁端部が下方に引きのぼされるもの。	162	
	VI	口縁部はやや外反する。長胴で最大径は胴部中央にあると思われる。				132	
	VII	口径が10cm前後と小型のもの。				96	
						158	

表4 形態分類表 (2)

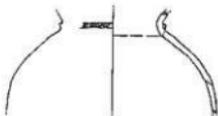
器種	分類	形態	特徴	形態	代表的土器	時期
壺	Ⅵ	口縁部がほぼ垂直に立ちあがる。胴部中央よりやや上方で最大径となる。底部は丸底に近い平底をなす。			59	
突帯壺	I	かなりしばまれた頸部から外反する口縁がつくと思われる。厚手である。			101	
	II	外反する口縁部がつくと思われる。胴部は球状をなす。頸部に細い突帯がつく。			230	
長頸類壺	I	口縁部は外反気味にひらく。胴部は扁球状をなす。底部は平底を呈す。			113	II
	II	口縁部は外反気味にひらく。口縁直下に帯描文が施される。			76	III
複合口縁壺	I	拡張部がほぼ直線的に内側にのびる。しまった頸部から長く外弯しながら口縁部にのびる。			92 119 187 297	I
	II	拡張部は、直線的に内側にのびるが2cm前後となる。頸部もI類に比べれば大きく外弯せず短い。			126 165	
	III	拡張部が内弯しながら内側にのびるもの。			106	

表5 形態分類表 (3)

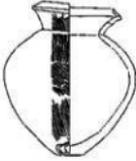
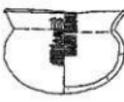
器種	分類	形態	特徴	形態	代表的土器	時期		
複合口縁壺	IV	口縁部は直線的にのびるが端部が細くなる。頸部から口縁部までが短い。胴部上半に最大径がある。底部は平底である。ススの付着がみられる。				118	II	
	V	拡張部が断面三角形をなす。				124		
	VI	口縁端部が短く拡張され平担面をなすもの。	a		拡張部が明確で垂直にのびるもの。	38 71 265		
			b		拡張部が不明確であるがほぼ垂直にのびるもの	220		
			c		拡張部が外方にのびるもの。	219		
	VII	口縁端部を短く拡張し、先端が丸味をなすもの。	a		拡張部が明確なもの。	127		
			b		拡張部が不明確なもの。	37		
	鉢	I	口縁部は、ほぼ垂直に立ち上がる。底部は丸底をなす。口径は30cm前後となる。				51 277 302	II
		II	体部が外方にのび、口縁部付近でやや内彎する。				47 63	III
		III	口縁部が短く外反する。底部は平底状をなす。				174 175	I
IV		口縁端部が上方にひきのばされるもの。				103		
V		2段に屈曲し、口縁部が直線的に長く外上方に開くもの。				52		
VI		胴部が扁球状をなす。底部は丸底をなす。	a		口縁部が外反するもの。	67		
	b			口縁部がほぼ垂直に立ち上がるもの。	95			

表6 形態分類表 (4)

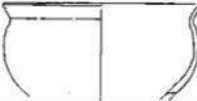
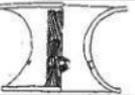
器種	分類	形 態	特 徴	形 態	代表的 土 器	時期	
鉢	Ⅶ	胴部が球形をなすもの。	a		口縁部がほぼ垂直に立ち上がるもの。	83 114	Ⅱ
			b		塊状をなすもの。	84	
	Ⅷ	口径に比べ小さな底部でレンズ状をなす。				6	
	Ⅸ	脚台状をなすもの。	a		ゆるやかに内彎しながらのびるもの。スス付着	105 143	Ⅳ
			b		内彎しながらのび、体部が塊状をなすもの。	292	
			c		口縁部が外反するもの。ススの付着がみられるものもある。	68 280	
	Ⅹ	厚手の底部をもつもの。	a		体部は厚手で外方にのびるもの。	140 141 142 281	Ⅱ
			b		体部下半よりほぼ垂直に立ち上がるもの。	145 282	
			c		口縁端部が短く外方にのびるもの。	147	
	Ⅺ	口縁部は外反し、胴部上半でやや張る。腰に近い形状をなす。				180	
器 台	Ⅰ	上下に開き、くびれ部が中央よりやや上方に位置する。正面観が正方形をなす。内、外面ともハケ調整。				89	Ⅱ
	Ⅱ	上下に開き、くびれ部が、ほぼ中央に位置する。くびれ部よりやや下方に穿孔を有す。外面はヘラ磨き調整。				205	

表7 形態分類表 (5)

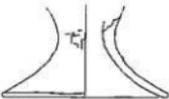
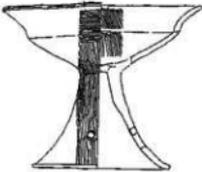
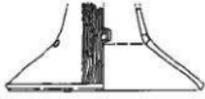
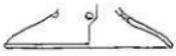
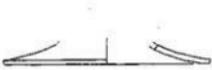
器種	分類	形態	特徴	形態	代表的土器	時期
器台	Ⅲ	I・Ⅱ類よりくびれ部が細いもの。			206	
	Ⅰ	<p>坏部は稜を有し屈曲し口縁部にいたる。口縁部は外彎しながら外方にのびる。</p> <p>脚部は屈曲せず広がる。中央よりやや下方に穿孔を有す。</p>			155	Ⅱ
高坏部	坏部	a		屈曲部から、外方にのびる。	54	Ⅰ
		b		あまり屈曲せず口縁部が外方にのびる。比較的薄手である。	156	
	脚部	a		屈曲部をもち、外方へ直線的に大きくひろく。屈曲部に穿孔あり。	277	Ⅲ
		b		裾部が内彎する。屈曲部に穿孔あり。	278	Ⅳ?
		c		裾部がラッパ状に大きくひろくもの。	55	
	ミニチュア土器	Ⅰ	口縁部が内彎し瓏状をなすもの。			65 53
Ⅱ		皿状をなすもの。			181 257	
Ⅲ		器台状をなすもの。			283 284	
Ⅳ		鉢・Ⅹ類に似るもの。			200	
Ⅴ		壺型をなすもの。			202 258	

表8 形態分類表 (6)

量出土している。そこで遺構内土器を中心に接合関係、流れ込み土器の判別や器種構成について考えてみたい。ここで個体数としてあげている数値は、遺構内から出土した土器を対象にしたもので必ずしも遺構の時期もしくは当時の器種構成を表わすものではない。ただ、当時のものに近い状態であろうことは考えられる。個体数は底部を中心に敷え口縁部で補った。高坏、器台は坏部と脚部をそれぞれ比較して1個体とした。また、図中の接合関係の線は遺物の中心を、垂直レベルは遺物の最低レベルを使用した。

#### SA1 (第14図)

柱穴は4本で南壁に沿って約50cmの落ち込みがみられる。遺物は中央付近に集まるが全体に破片である。落ち込みのすぐ北には25×18cmの台石状のものもある。中央部と西北隅には比較的大きな炭化材が検出された。西北隅の炭化材は長さ約50cm、厚さ約12cmを測る。西側が高く、残りの良い東側が低くなる。住居の主柱の1本と考えられる。落ち込み内からは焼土および土器片は確認されなかった。完形で出土した土器は6の鉢だけでほかにはみられなかった。接合資料は5点である。もっとも遠距離での接合は4で約1.5mを測る。他は10-20cm程の間で接合関係を示している。これらの遺物は遺構内の比較的下位からの出土である。出土個体数は22で鉢が11個体(50%)で半数を占めている。鉢はI類が多く甕類(6)も1点みられる。ほとんどが破片で住居跡に伴うものかどうかは断定しがたい。

#### SA3 (第15図)

I部西壁が削平される。柱穴はみられない。中央部に落ち込みがあり、I層は暗褐色土で炭化物を含んでいる。II層は粘質をおびた褐色土、III層は灰褐色土になる。焼土は検出されなかった。南側は径約20cmで1段深くなる。遺物は落ち込み内あるいはその周辺にほとんどが分布し四壁の付近にはあまりみられない。変形土器が23個で全体の34%を占める。複合口縁壺もSA5について多く28のように拡張部が5cm以上になるものもある。鉢はI・II類のほかはV類のように口縁部が長く外反するような特徴的なものもみられ、これは他の遺構からは出土していない。平面的な遺物の分布および接合関係から17、45の如く西からの流れ込みのもの、51、54のように北からの流れ込みの2種類があり、垂直レベルから前者のほうが早く後者がそれからあとのものとして考えることができる。単に住居跡内の層位の順列にたつならば(17、23、26、51、52)→(20、47、54)の相対的な順序が組み立てられる。しかし、これらは流れ込みのものと判断されこの順序は成立しない。ほぼ完形に近い土器は51、52で住居跡に伴うものとしての可能性をもっている。56の器台脚部片はSC3出土の206の器台と接合した。SC3の場合ほぼ床面直上から出土しているが、56は床面より上位にみられ住居廃絶後に流れ込んだものと考えられる。その他に、穿孔をもった方形の石包丁片や無蓋の三角式の鉄鍬が中位から検出されている。遺物のほとんどは遺構の中位から下位にかけて分布している。

#### SA4 (第16図)

柱穴や住居内の落ち込みは検出されていない。出土個体数は15個体である。甕・壺類が多く、鉢類はやや少ない。複合口縁壺、高坏・器台は出土していない。耕作によって削平されているものも多いが、ほとんど完形に復元され住居内に廃棄されていたものと考えられる。その他に10-20cm程の川原石も多くみられる。接合関係は58を除いてほとんど近辺で接合している。58は東西1.4m、南北0.7mの広がりて接合関係を示している。58、59、67はやや下位で、66は上位で出土している。土器のほとんどは住居の四壁周辺にみられ、中央部ではあまり検出されず59が中央やや東寄りにあるだけである。

#### SA5 (第17図)

4.65m×3.5mと長方形をなす。柱穴・落ち込み等は検出されなかった。西側が一段高くなっており不整形のベッド状をなすが、いわゆるベッド状遺構とは異なる。77、78、83、84、89、90は完形で床面直上から出土していることから住居跡に伴うものと考えられよう。それらは主にベッド状遺構の周辺と東壁周辺に分布する。78、83はベッド状遺構と西壁の間の一段低い場所から、89の器台はベッド状遺構上から出土している。76の長頸壺もベッド状遺構

上から出土しているが脚部片が出土していない。中央部からは84, 87の2点で少ない。小片が約2.3m離れて接合しているがこれは流れ込みと考えられる。器種としては鉢はI類が少なくⅤ類が主体をなす。複合口縁蓋が多量に出土し全体の28%を占めている。それに対し突帯甕は小片で非常に少ない。89は住居内から出土した唯一の完形の甕台である。SA3からも出土しているが脚部片で住居跡に伴うものではない。

#### SA6・SC11 (第18, 19図)

柱穴と思われるピットが3つ検出されている。一部SC11に切られ実際には4本であったと考えられる。柱穴の位置は従来の四隅に対応した場所ではなく、四壁に沿った位置(90°回転移動する)にある。中央部のやや西よりに落ち込みがある。I層は砂質の明褐色土、II層はI層よりしまりのある黒褐色でこの層内に焼土が含まれる。III層が軟質の黒色土となる。SA1, 3では落ち込み内から焼土は検出されていない。住居跡は上面が削平され床面のみの残存で遺物もほとんど破片であった。接合関係から住居跡床面の土器とSC11の中位出土のものが接合していることからSC11のほうが新しいと考えられるが、同時期の可能性もありうる。また、土玉や角状の土製品に穿孔が施された装飾品も出土している。土製品はSA7から勾玉、SC1から土玉が出土しているだけである。

#### SA7 (第20図)

7.01m×6.96mと当遺跡で検出された住居跡の中では最大規模のものである。柱穴は5本あるいは6本と考えられる。落ち込みが中央部や南寄りの部分にみられる。落ち込み内はI層が暗褐色土、II層が黒褐色土、III層は粘質をおびた黒色土で土器のほか炭化物を少量含む。VI層が黒褐色土となる。IV層中にブロック状に焼土を含んでおりSA6同様炉穴と考えられる。遺物は落ち込み内外に一部みられるが、ほとんどは四壁の周辺から出土している。特に155の高坪は倒置の状態出土した。完形土器は床面直上、その他の土器も下位に分布する。接合関係においてもSA3のように明確に流れ込みとわかるものは少ない。わずかに132, 147, 158にみられる程度である。しかも132のように南へ、158のように東あるいは西への流れがあるが前後関係は不明であり、I時期のものとも考えられる。器種構成をみると甕が非常に少ない。突帯をもつ甕も同様である。これに対し蓋、鉢が多い。蓋はI～Ⅴ類までの各器種が出土している。複合口縁蓋も蓋と同数程度出土している。また118は胴部にススの付着がみられ用途について注目すべき資料である。鉢はI類を代表とするいわゆる塊状のものは少なく、Ⅷ類、Ⅸ類のようないわゆる鉢状のものが多い。当遺跡出土のほとんどを占める。また、土製の勾玉も1点出土している。このようにSA7は他の住居跡と規模、器種構成とも異なった様相をなしており、住居跡の用途のちがいが(例えばすまいとしてではなく集会所としての役割をもった住居)として考えることができよう。

#### SC1 (第29図, Fig 2)

J-10グリッド, SA5の南約1.2m, SC6の西3.5mのところ位置する。2.1m×1.65mの楕円形をなす。西側部分が東側に比べ10cmほど高くなる。I層: 明褐色硬質土, II層: 明褐色土, III層: 明褐色硬質土, IV層: 暗褐色土, V層: 褐色硬質土である。遺物はI～V層の全層にみられる。炭火物のほかに木の種子が炭化したものがあり、これらはIおよびI'層を除いて全層に亘ってまんべんなく混入している。特にIV層およびIV'層には、樹種不明であるが目がつまり年輪についても硬軟の差異が少なく、硬木(広葉樹類?)とおもわれる炭化物が他層に比し多く認められる。また、2～3cm大の軽石もI～V層にかけて出土する。遺物は平面的には東側に集中しているが小片で全体にも分布する。垂直分布では中位よりやや下方から上位にかけてみられ、層位でみるとそれはV層上面から上にあたる。次に接合関係をほぼ完形で出土した171を中心に考えてみたい。接合関係の種類としては、171より下位で接合するもの、171を境に上のもとの下のもものが接合するもの、171より上位で土器が接合するものとに分かれる。その中で最も離れて接合するものは166で約1.3m、高低差では未実測のもので0.6mを測る。層位および西側部が1段高くなっていることから、土城どうしの切り合いとも考えられるが確証はない。もしそうだとするなら

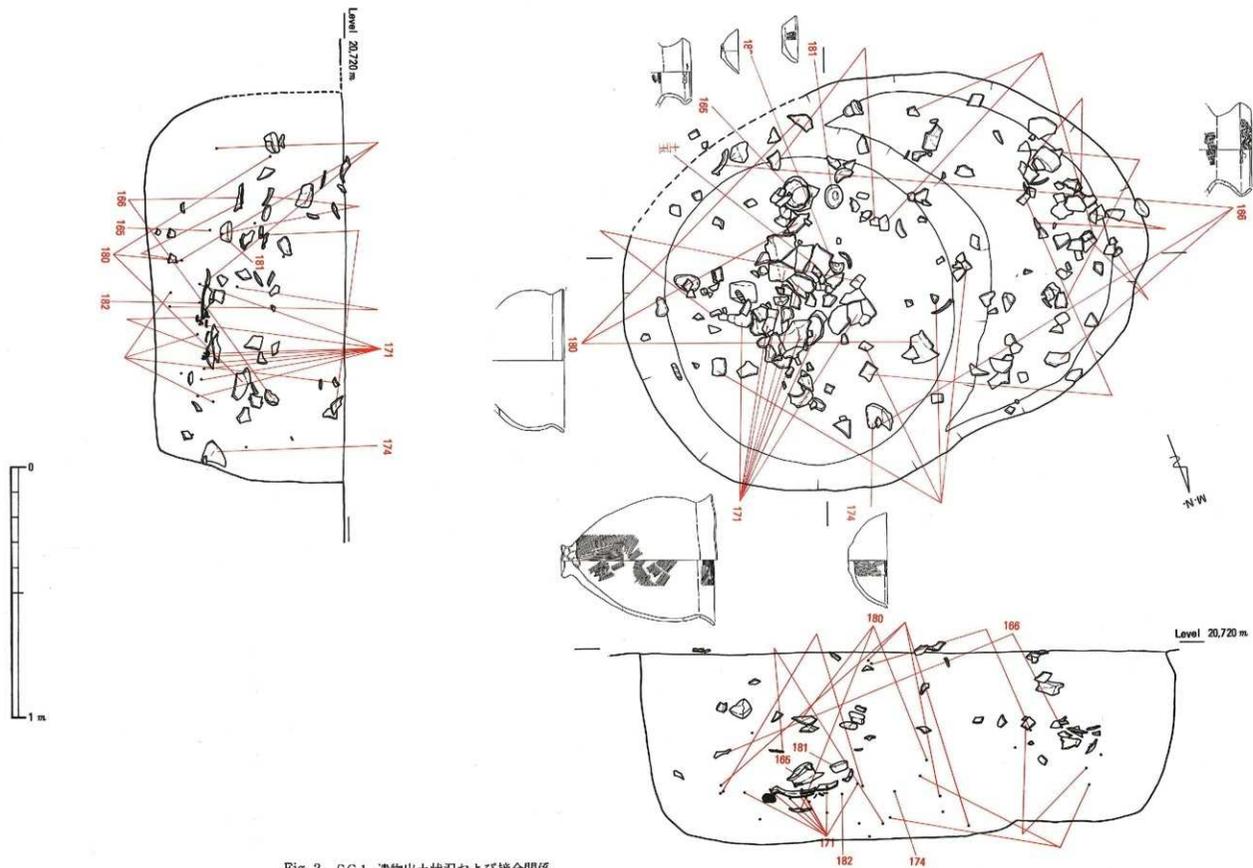


Fig 2 SC1 遺物出土状況および接合関係

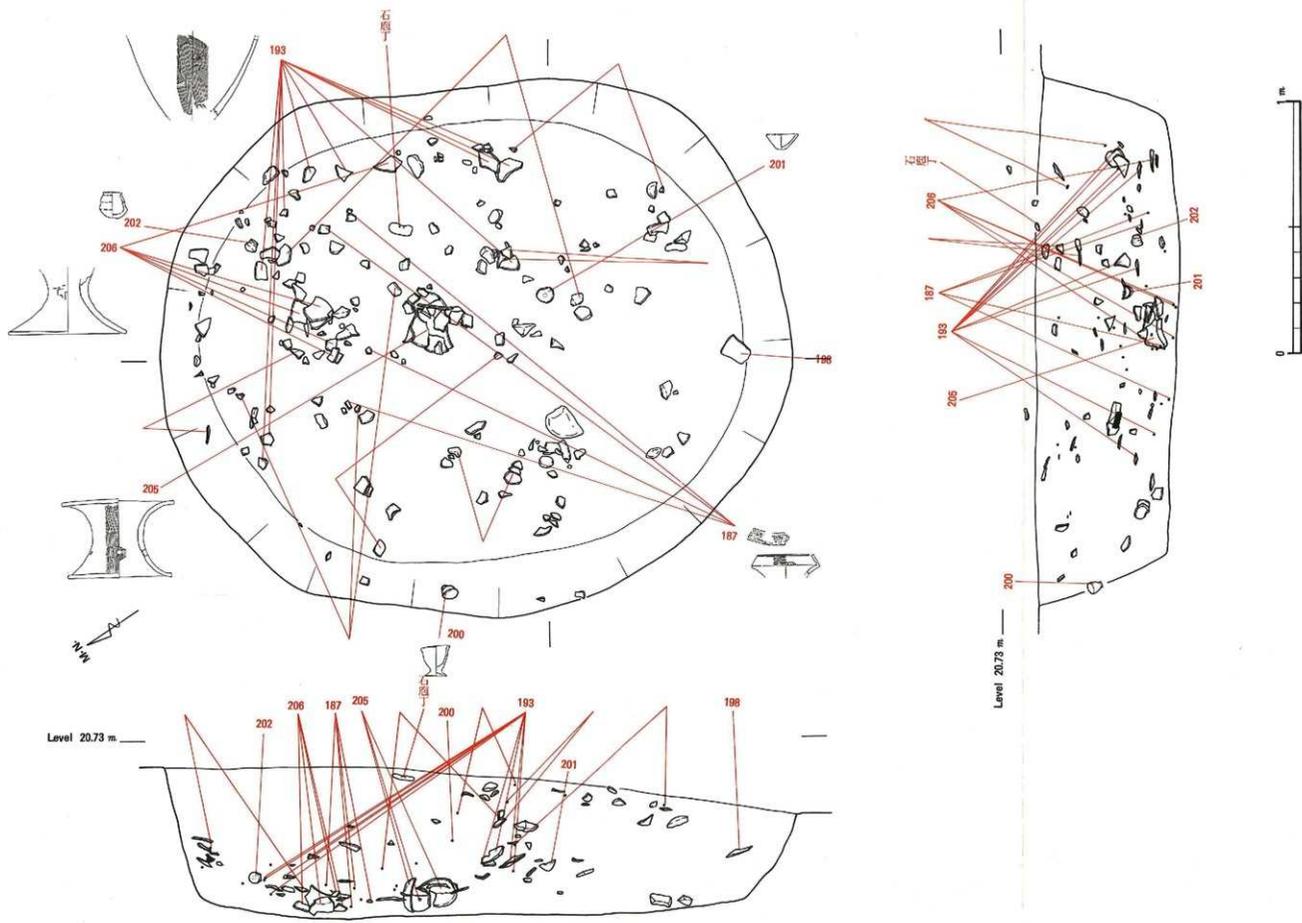


Fig 3 SC3 遺物出土状況および接合関係

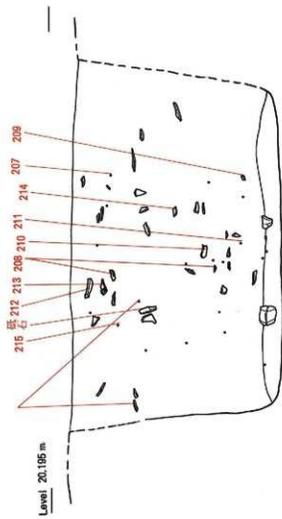
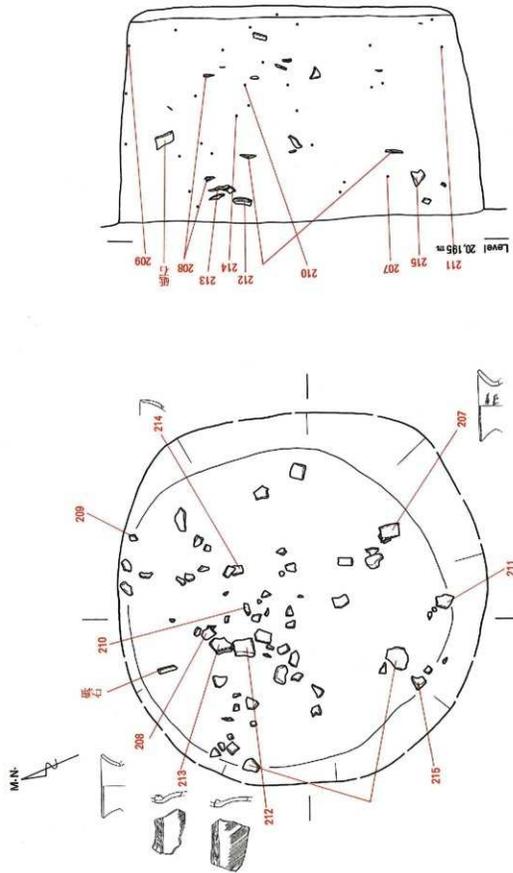


Fig 4 SC4 遺物出土状況および接合関係

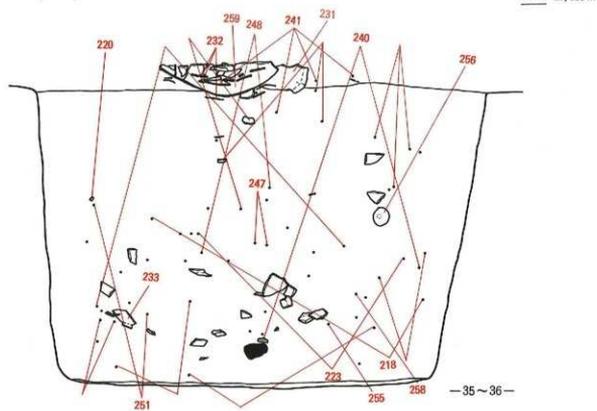
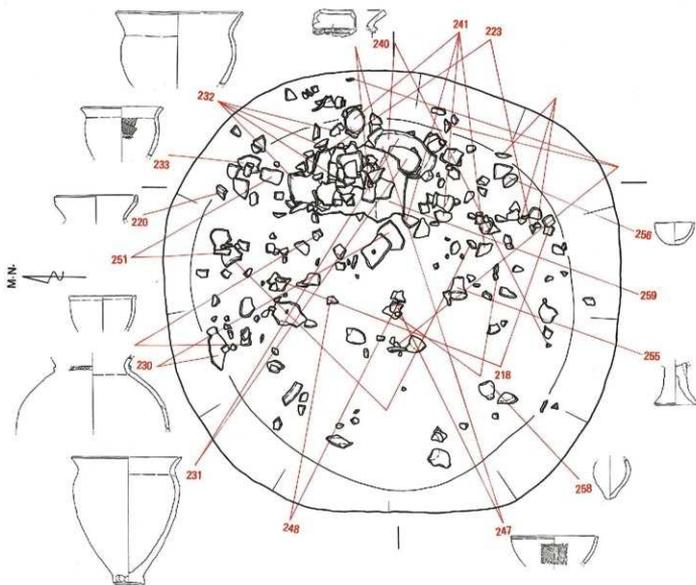
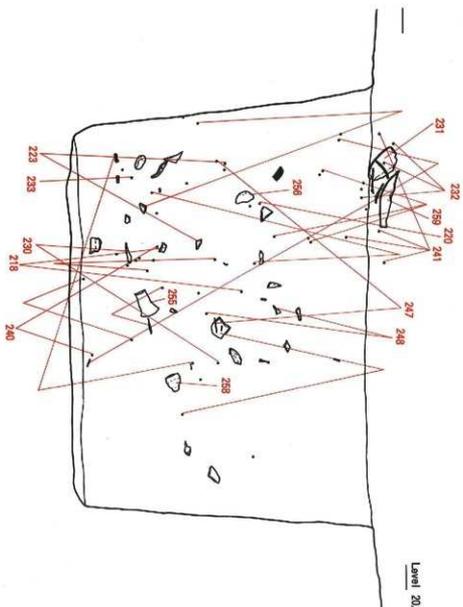


Fig. 5 SC5 遺物出土状況および接合関係

ば前述したような特異な接合関係も生まれ得るかもしれない。

遺物は総数で43点出土している。これはSC5に次ぐもので甕、壺、鉢が多い。なかでも鉢は土壇出土のなかでも多い。高杯、器台はみられない。ほかにⅢ層から土玉が1点出土している。土製品は、SA6・SC11から2点、SA7からは勾玉が1点出土しているだけである。

### SC3 (第29図, Fig 3)

H-10グリッド, SA7の東約3mのところと位置し、西へ約2mのところにはSC4がある。I層:暗黄褐色土、II層:黄褐色土、III層:褐色土、IV層:暗褐色土、V層:明褐色土、VI層:明灰白色土となる。II~V層まで炭化物を含む。そのほかに1~3cm前後の楕円形の軽石もみられ、特にIV層に多く含まれる。人為的なものかあるいは流れ込みかは不明であり、同様なものはSC1、SC5にもみられる。

また、西壁付近の床面には35cm×10cmの広がりて焼土が検出された。土器は主に北半分に集中し、垂直分布ではIV層以上に多くみられる。IV層中では遺構のほぼ中央から器台の完形土器が、また別個体である器台の脚部片も出土しておりこれはSA3の破片と接合した。ほかにミニチュア土器もみられる。II層以上になるとほとんど破片で明らかに流れ込みのものと思われる。上面からは砂岩製の石匱「が1点出土している。このことは接合関係でも、IV層あるいはIII層にかけて接合するものと、II層以上のものとに分かれることから理解できる。このことから想像をたくましくして考えるならば、器台が廃されたIV層の時期まで当土壇は使用され、それ以後は土壇としての機能(何であるかは不明)を果たしていなかったのではなからうか。

遺物は、器台、ミニチュア土器や小さな軽石など特徴的なものが多く、甕などの日常容器が少ない。また土壇の規模も2.53m×2.1mと最大であり、貯蔵用あるいは廃棄坑など日常的なものとしての用途ではないようである。

### SC4 (第30図, Fig 4)

O-11グリッドにある。I層:暗褐色土、II層:暗黄褐色土、III層:黄褐色土、IV層:明黄褐色土、V層:褐色土、IV層:黄褐色土となる。II~VI層まで炭化物を含んでいる。遺物は全部10点出土している。すべて破片で全層にかけてみられる。接合関係もそれほどみられず遺物のほとんどが流れ込みのものと考えられる。中位よりやや上方から砥石(第44図4)が出土している。ただ、208のようにほぼ垂直に約40cm離れた土器が接合しており、単に流れ込みと考えるには疑問視される点もみられる。

### SC5 (第30図, Fig 5)

I-8グリッド, SA4から北へ約3m、SC6から南へ約8mのところと位置する。I層:暗赤褐色土、II層:赤褐色土、III層:灰黄褐色土、IV層:灰褐色土、V層:淡灰褐色土となる。I~IV層まで炭化物を含む。遺物も同様な傾向を示し、特にI層とIV層に土器の集中がみられる。そのほか1~3cm大の扁平な楕円あるいは円形の軽石も出土している。遺物は平面的にはほとんど東側に分布し、垂直的には襲撃の高位のものと同中央付近の低位のものとの接合がみられ、自然埋土(レンズ状)に沿った接合関係が示されている。その接合関係も大きくはIII層を境に上下に分かれる。検出面で231、259の弥生土器が出土し、しかもそれらは完形であったと思われる。ということは、完形土器が廃棄されたときにはすでに当土壇はこのレベルまで埋没していたことになる。そして遺構内の遺物の出土状況、接合関係および層位では、それぞれ流れ込みのものであり、かつ自然埋土と考えられる。出土した遺物はすべて弥生の範囲に含まれ、遺構の遺物と231、259などの上層の土器とは時期差を設けることができる。つまり(遺構内土器)→(231、259の上層土器)の順序が成り立つ。

出土遺物は総数44点で土壇中最も出土量が多い。中でも甕、壺などの日常容器や複合口罎蓋が多い。出土した甕にはほとんどススの付着がみられる。規模は1.77m×1.74mで円形を呈し、深さは1.19mと土壇中最も深い。

### SC6 (第31図)

J-6グリッド, SA5から東へ5.2mのところを位置する。I層:暗褐色土, II層:明褐色土, III層:黒褐色土, IV層:淡褐色土, V層:褐色土となる。I~IV層まで土器および炭化物を含む。特にIII層には土器が多量に包含されている。遺物は総数で29点出土しており、遺構の中央からやや北寄りの部分に集中する。垂直分布および接合関係から、ほぼII層より上部の土器群(A群)とIII層以下の土器群(B群)に分かれる。A群に含まれるものは、265, 272, 280, 281, 283などで、B群には260, 273, 277, 278, 284, 282, が含まれる。また、A, B群には280~284のような人為的に廃棄された完形土器や277, 279などのように流れ込みと考えられるようなものがある。このように2つの土器群に分かれしかもそれが弥生にはいることから、当土域はかなりの短期間で埋没していったと考えられる。

土層の堆積状況からII層, V層は、IV層, III層以前に堆積しており、壁が崩落したとも考えられ袋状竪穴の堆積状況に類似している。もしそうだとするならば遺構自体かなり深いものであったろうし、遺物の出土状況および接合関係から崩落したともある期間使用されていたと考えられる。

遺物は他の土域に比べ小形の完形土器が多くみられ、高坏の脚部も3個体分出土している。(坏部はまったく確認できなかった。)また逆に複合口縁壺が出土量と比較して1点と非常に少ない。遺物の出土量は中程度である。

#### SC7 (第32図)

J-12グリッド, SA5の西25m, SA7北へ4.5mのところにある。I層:褐色土, II層:淡褐色土, III層:灰褐色土, IV層:褐色土となる。I~III層まで炭化物を含む。IV層は軟質で後世の掘り込みと考えられる。遺物は総数4点出土している。(完形土器はないがそれに近いものとして289のミニチュア土器がある。)遺物は北側に比較的大きな破片がみられ他は小片で全体に分布している。垂直分布でみると、遺物は上位に集中し一部床面近くにもある。接合関係は1組あり、上層と床面近くの土器片が接合関係を示している。しかし垂直気味の位置関係であり、流れ込みを考えるには無理がある。この接合関係はSC4にもみられる。

#### SC9 (第33図)

H-14グリッド, SA7の北西約2.7mのところをあり、最西端に位置する。長径約1.5m, 短径1.0mで不正楕円形を呈している。I層:暗褐色土, II層:明褐色土, III層:淡褐色土, IV層:褐色土, V層:黒褐色土, VI層:褐色土となる。炭化物, 焼土はまったく含まれない。遺物は上層でのみ出土し291, 292はほぼ完形に復元することができた。特に291は約1mの範囲で接合している。付近に住居跡がみられないことや遺物出土量が少なく上層のみから完形土器が2点出土していることなど他の土域と様相を異にしている。

#### SC10 (第34図)

G-7グリッド, SA3のすぐ南にあり、最も南端に位置する。基本的にはI層:暗褐色土, II層:褐色土, III層:明褐色土, IV層:淡灰褐色土となる。I~III層まで炭化物を含む。またIII層にはブロック状に焼土が確認された。遺物は総数7点出土している。完形土器はなかったが297の複合口縁壺は、口縁部から頸部にかけてほぼ完形で出土した。遺物の分布は絶対量は少ないが平面的には全体に分布し、垂直的には中位から上位にかけてみられ、流れ込みのものと考えられる。接合関係でもそれは同様で、ほぼ同じレベルあるいはレンズ状での接合関係が示されている。その中でレベルの高低差から(26)→(7)→(2)の順での流れ込みが考えられる。あるいは同時期の可能性もある。流れ込みの方向は、26は不明、7は北東あるいは南西、2は北あるいは南が考えられる。

#### SC11 (第35図)

H-5グリッド, SA1の北約4m, SA3の東約8mのところを位置しSA6を切っている。I層:明褐色土, II層:褐色土, III層:褐色土(II層より粘質をおび黒褐色硬質土を含む)IV層:暗褐色土, V層:暗褐色土(IV層よりしまる), VI層:褐色土, VII層:褐色土(硬質で粘性をもつ), VIII層:褐色土(VIII層より明るい)となる。遺物は少なくとも52点出土している。105を除いたすべてが破片で中央付近に若干集まるが全体にみられる。垂直的にも床面近く

数点あるだけでほかは上位から中位にかけて分布する。105 がほぼ中位から完形で出土している。そのほか角状の土製品に穿孔が施されたもの(第44図7)もある。SA6の遺物との接合関係はいくつかあるが土坑内の接合関係は1組だけであった。炭化物などはみられない。SA6の床面出土の土器と土坑内の土器が接合したことによりSC11のほうが新しいと考えられる。詳細はSA6・SC11の項で述べたとおりである。

## SC12

I-12グリッド、SA7の北約2mのところにある。すでに耕作によって遺構のほとんどが削平されており、遺構の形態、遺物については不明である。埋土中より土器が4片出土したのみであった。

## 小 結

### (1) 土器の編年

浦田遺跡出土の土器は、一括遺物として捉えられるものが少ないため形態を中心に編年を考えてみた。出土遺物のなかでも古い様相をもつものをI期、中心をなすものをII期、新しい様相と思われるものをIII期とした。それ以後と思われるものをIV期とした。

#### I期

複合口縁壺I類、高環の坏部のa類、鉢III類をあげられる。

複合口縁壺は胴部から底部にかけて不明だが、頸部が長く外反してひろくもので、王永氏分類のIII期にはいると思われ<sup>(1)</sup>。複合口縁壺は拡張部に横揺波状文など施された安国寺式系の土器が隈北から中央部にかけて数多く出土している<sup>(2)</sup>。しかし、宮崎学園都市遺跡群では非常に少なく次のII・III期にはいるものが数点みられる程度である。

高環の坏部は口縁部がやや外彎し外反する。端部が平坦面をなす。鉢は平底が崩れて不安定な平底を呈す。これは熊野原遺跡B地区SA4出土の鉢に後出するものと考えられる。甕・壺などセットとして捉えられないが熊野原遺跡B地区出土の資料のなかにこの時期を埋めるものがあるようだ。

#### II期

甕I類、壺I類、長頸壺I類、複合口縁壺IV類、鉢I類、高環I類、SA5一括出土のものをあげられる。

甕は胴部がハケメ、底部が指による調整で高台状を呈し外方へ引きだされる。中型(a類)と小型(b類)がある。底部の指による調整は一部、古墳時代初頭まで残る。壺、長頸壺は不明瞭な平底をなす。壺は熊野原遺跡B地区のSA5出土のものに類似する。長頸壺は横口氏分類による2類から3類にかけてのものと思われる<sup>(4)</sup>。長頸壺は遺跡群内からの出土は少なく前原南遺跡から1点のみ出土している<sup>(5)</sup>。同じような形態のものが中間遺跡の12・13区下層土器のなかにみられ、小田富雄氏は中間I式とし、後期中頃よりさかのぼらないとされている<sup>(6)</sup>。これによると当遺跡出土の長頸壺I類はそれより後出するものである。長頸壺は、甕、高環の如く近畿・瀬戸内系の影響下にあるものや、西方の「免田式」長頸壺の影響など混乱しており今後、その初源、系譜について多くの問題を残している。複合口縁壺は拡張部が短くなり、頸部も短くなり胴部から明確な稜を残して扇曲し、胴部中央よりやや上方が最大径となる。底部は平底となり、あるいはI期にはいる可能性もある。前原北遺跡B地区SA2出土のものは頸部から胴部にかけての扇曲が不明瞭となり平底も丸底に近づいていることから当期のものに比べ、やや下るもので報文では古墳時代初頭と考えられている<sup>(7)</sup>。鉢I類は口径が30cm前後と大きくなり、内外面ともヘラ磨きが施される。鉢IV類はSA5出土で、丸底を呈し胴部は球形をなす。口縁部は内彎するものと短く垂直に立ち上がるものがある。内外面ともハケ調整である。ほかに長頸壺I類と共存した鉢X類もある。鉢X類は中間遺跡出土のなかに、鉢Y類は大萩遺跡の住居跡出土のもの<sup>(8)</sup>のなかに類似資料を求めることができる。高環は坏部下半が丸味をおび口縁部がI期のものより外彎し外方に開

く、坏部はⅠ期のもより深くなる。脚部は屈曲せずに広がり、中央よりやや下方に穿孔が施される。器台はⅠ類をあげられる。すでに裝飾性が失われており外面はハケ調整がなされる。小型化、無文化という他地域の現象をそのまま導入するならば、当遺跡出土の器台は熊野原遺跡B地区SA5出土の裝飾高坏より後出するものであろう。また器台Ⅱ類としたものはⅠ類より上るものかもしれない。

### Ⅲ期

壺Ⅳ類、鉢Ⅱ類、高坏の坏部b類があげられる。

壺は外反する口縁部に長胴がつき、最大径が胴部中央にある。底部はほとんど丸底に近いが若干平底を残している。鉢はⅡ期に比べ小型となり調整もハケメのものがみられる。高坏は坏部の屈曲が不明瞭となり口縁部がⅡ期のものに比べ長くなり外方へひらく。壺はⅠ類のものが続くと思われる。

### Ⅳ期

長頸壺Ⅱ類、高坏脚部a、b類、鉢Ⅳ類、231の壺、259の大型壺はこのⅣ期に属するからそれよりやや後出するものと考えられる。長頸壺Ⅱ類は内陸部にはいった祝吉遺跡(第2次調査)のSA7出土のものに類似し、そこでは小型丸底壺と共伴し古墳時代初頭まで下るものである。しかし住居跡が間仕切りを呈することや高坏の形態など弥生時代の様相を残すものがあり「地域色」として考えられ、当遺跡出土のものはこれより上ると思われる。高坏脚部a、b類にみられる脚部の内彎化は大萩遺跡住居跡出土のなかにあり、北部九州でも一部弥生終末期から古式土器にかけてみられる。鉢Ⅳ類は脚台状をなし一部ススが付着するものとみられる。231の壺は口縁端部が丸味をおび、最大径が頸部直下にくる。底部は指頭圧を残すが平底に近くなる。

このほかに突帯壺と分類したものがあつた。これは壺および壺の頸部に幅0.5～1.2cmの半円径の突帯を貼り付け、その後細い棒状のものに布をまき、それで刻目目標に圧痕が施される。当然の如く圧痕には布目痕を観察できる。この手法は堂地東遺跡出土の後期前半の刻目突帯の壺にもみられる。鹿児島県ではこれを「刻目突帯」とし「絡縄状突帯(つまみあげながら貼付ける突帯)」と区別されている<sup>11)</sup>。熊野原遺跡C地区出土の突帯壺は口縁部がゆるやかに外反することや小型丸底壺を共伴することからほぼ多々良氏の分類のⅤ期(庄内式新段階から布留式古段階に併行する<sup>12)</sup>時期)に匹敵するものである。しかし、「刻目突帯」の初現については前原南遺跡出土のもの口縁部が「く」の字状を呈することや小型丸底壺が出土していないことから熊野原遺跡C地区より上ることは明らかである。また、後期前半の堂地東遺跡、後期後半の熊野原遺跡B地区からまったく出土しておらず、弥生終末期以降に出現したと考えられ、現段階では弥生終末期までさかのぼる良好な資料は確認されていない。

以上、浦田遺跡出土の土器について形態を中心に編年を行ない、2、3の土器についての問題点を述べてきた。これによると、Ⅰ期は弥生後期後半をさかのぼらず終末期までにおさまると考えられる。しかし、突帯壺の初現など終末期をこえ庄内式併行期まで下る可能性もありⅢ期とⅣ期の間にⅠ時期はいるかもしれない。

### (2) 器種構成について

浦田遺跡出土の土器群を中心に、弥生後期前半を堂地東遺跡、弥生後期後半を熊野原遺跡B地区で補い、古墳時代初頭を熊野原遺跡C地区としてそれぞれ参考に器種構成の変化と当遺跡の特徴について考えてみたい。なお、浦田遺跡の場合住居跡出土の土器について考え、土坑出土のものは除外した。

壺は後期前半では約70%を占め大型(約43.7ℓ)、中型(約11.2ℓ)、小型(約3.5ℓ)、最小型(約1.0ℓ)の4種類ある。ススの付着は中型のものが多く小型、大型にはみられない。大型は水などを貯えるもの、小型は食料等の貯蔵が考えられる。後期後半になると全体の約40%に減り中型(約7.2ℓ)、小型(約3ℓ)になる。中型のみススが付着し小型にはみられない。大型は消滅しそのかわりに、この時期大型の壺が出現しそれによって代わったと考えられる。ま

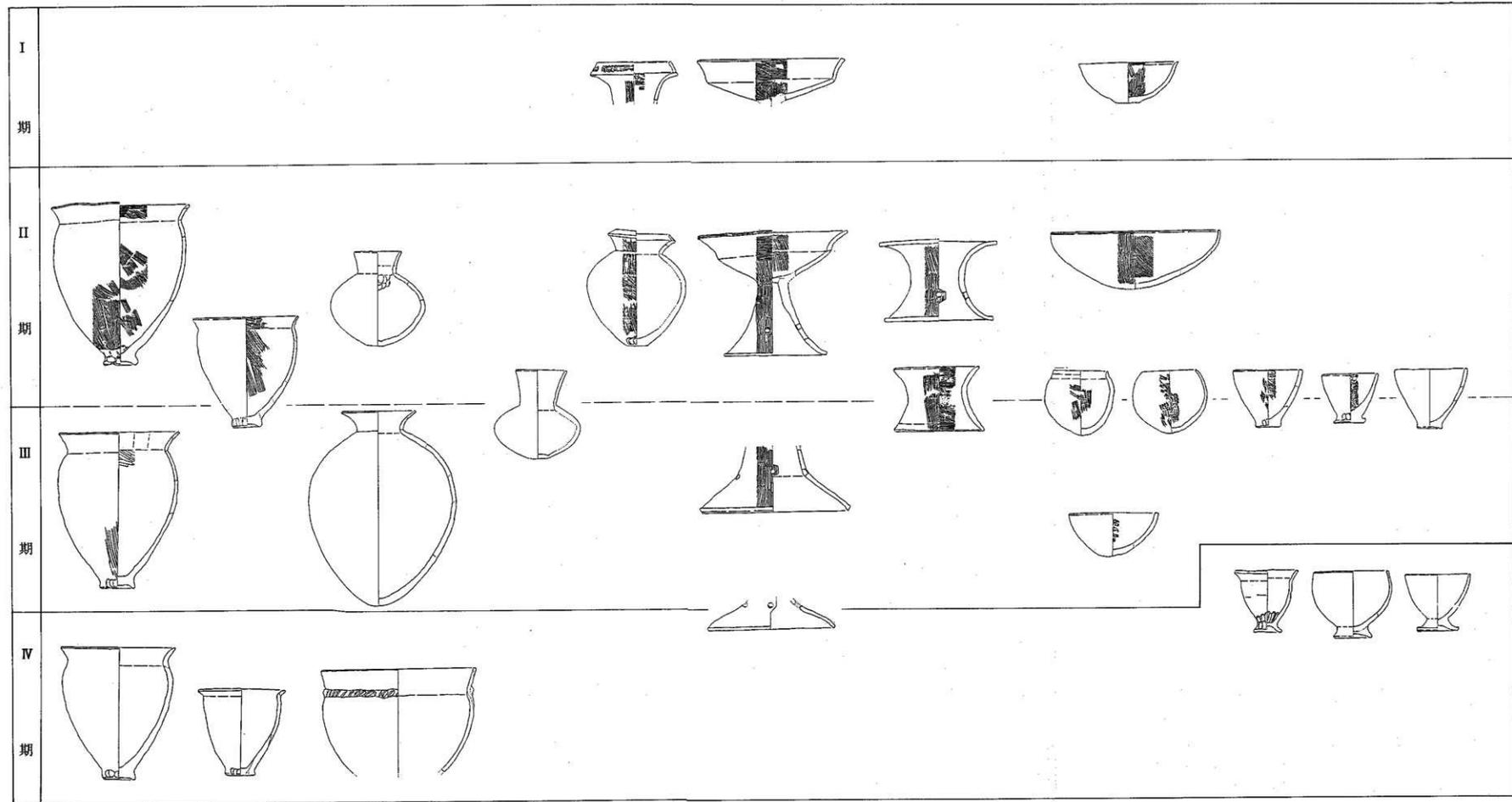


表9 浦田遺跡土器編年案

た、一部に突帯をもつ甕が出現し全体の4%程度となる。ススの付着もみられ一般の甕に類似するが煮炊きでの用途のちがいの可能性がある。古墳時代初頭になると約37%となり中型(約17.2ℓ)、小型(約1.4ℓ)であるが中型が主体をなす。ススの付着は両者とも観察できる。このことは土器用途が壺と分離(壺は貯蔵用となる)し、甕が煮炊き用のものとして確立したと考えられる。突帯甕は後期後半より増え6%程度となる。ススの付着は以前としてみられるが平底状の甕に対し突帯甕の場合、平底と丸底の2者が存在する。容量も約15ℓと中型の甕に類似する。

壺は後期前半で全体の約24%を占める。大型(破片のため不明)、中型(約3.5ℓ)、小型(1.0~2.0ℓ)とある。器形は多様化し、用途も単に水の貯蔵だけでなく食物加工の機能や水の運搬などに使用されていたと思われる。後期後半になると30%程度となり球形あるいは長胴の大型のもの(約10.4ℓ)と小型(約1.5ℓ)のものとなる。この時期、大型の甕が消滅することから大型の壺が代用されてきたと考えられる。また複合口縁壺が出現し、浦田遺跡では約15%を占めている。しかし熊野原遺跡の住居跡群からはあまり出土していず、これは時間的差とも思われる。用途としては複合口縁であり頸部がしまることから水の運搬あるいは液体の貯蔵用で、一部ススの付着するもの(約2.2ℓ)もある。古墳時代初頭では約14%となり中型(約6.1ℓ)、小型(約1.7ℓ)となる。一部にはススが付着する。複合口縁壺は2%程度と少なくなる。この時期の特徴として小型丸底壺の出現があり全体の10%を占めるようになる。器形も多種にわたり、都出比呂志氏が指摘しているように一部小型丸底壺の底部付近にススの付着がみられ、単に祭器、供献用土器とするのではなく器形に対応しての詳細な検討が必要となろう。容量も0.2~0.8ℓで幅がある。

高環は後期前半ではほとんどみられず全体の1%にも満たない。後期後半になると熊野原遺跡B地区では各住居跡1~3個体(約2.1ℓ)出土し、日常容器に近づいていると考えられるが、一部まだ大型(約3.1ℓ)のものもあり祭器としても使われていたものもある。これに対し浦田遺跡では完形品は1個体で全体の0.5%と非常に少ない。古墳時代初頭になると約20%を占め中型(約1.6ℓ)、小型(約0.6ℓ)となる。住居跡から3~8個体ほど出土し、これまでの祭器、供献用土器から日常用途としての土器へと変化したと考えられる。

器台は後期前半ではみられない。後期後半の熊野原遺跡B地区では裝飾高環や中型の器台など出土しており祭器、供献用としての要素が強い。これに対し浦田遺跡では小型(器高約18cm前後)でハケ目調整のものもみられ、丸底の鉢を置く台に使用されたと考えられる。これは時間差と思われるが一応保留しておきたい。古墳時代初頭になるとすべて小型(15cm前後)となり全体の約6%を占めるようになる。器形も多様化し、複合口縁を呈するものに櫛帯が施されたり、透かしに三角形のものもある。それは後期後半にみられるような呪術的なものではなくいわゆる裝飾の様相をもち、若干の祭器的要素を残しながらも、高環同様日常容器へと変化したと考えられる。

鉢は後期前半では約4%と少なく小型(約0.3ℓ)である。後期後半の熊野原遺跡B地区では鉢Ⅲ類に属するものがみられるが比較的少ない。浦田遺跡では約30%を占める。器形もⅠ類(約4.0ℓ)、Ⅱ類(約0.9ℓ)に代表されるようなタイプとⅣ類(約0.5ℓ)、Ⅴ類(約0.5ℓ)に代表されるタイプがある。前者は食料を盛りつけるものと思われ、当遺跡では高環の代用として使われていた可能性もある。後者は個人用の飲食器として考えられるが、畿内第Ⅴ様式にもみられるように一部にススが付着するものもあり、単に個人用器としては考え難い点もあり、今後検討の余地がある。古墳時代初頭では全体の約6%となる。器形としては浦田遺跡の鉢Ⅱ類からの承襲のものがみられ容量も約1.0ℓ程度となる。他にもⅤ類-cに類似するものもあり、容量は約1.1ℓほどで浦田遺跡のものよりやや大きくなる。

ミニチュア土器は後期前半ではみられない。後期後半から出現し古墳時代初頭まで残る。後期後半では約7%となり器形も壺形、鉢型、器台など多種にわたる。古墳時代初頭では約3%となり器形も鉢形(環状)をなすものが多くなる。後期後半にミニチュア土器は盛行したと思われ、浦田遺跡でみられるように住居跡より土坑からの出土量が多く供献用土器として使用されていたと考えられる。

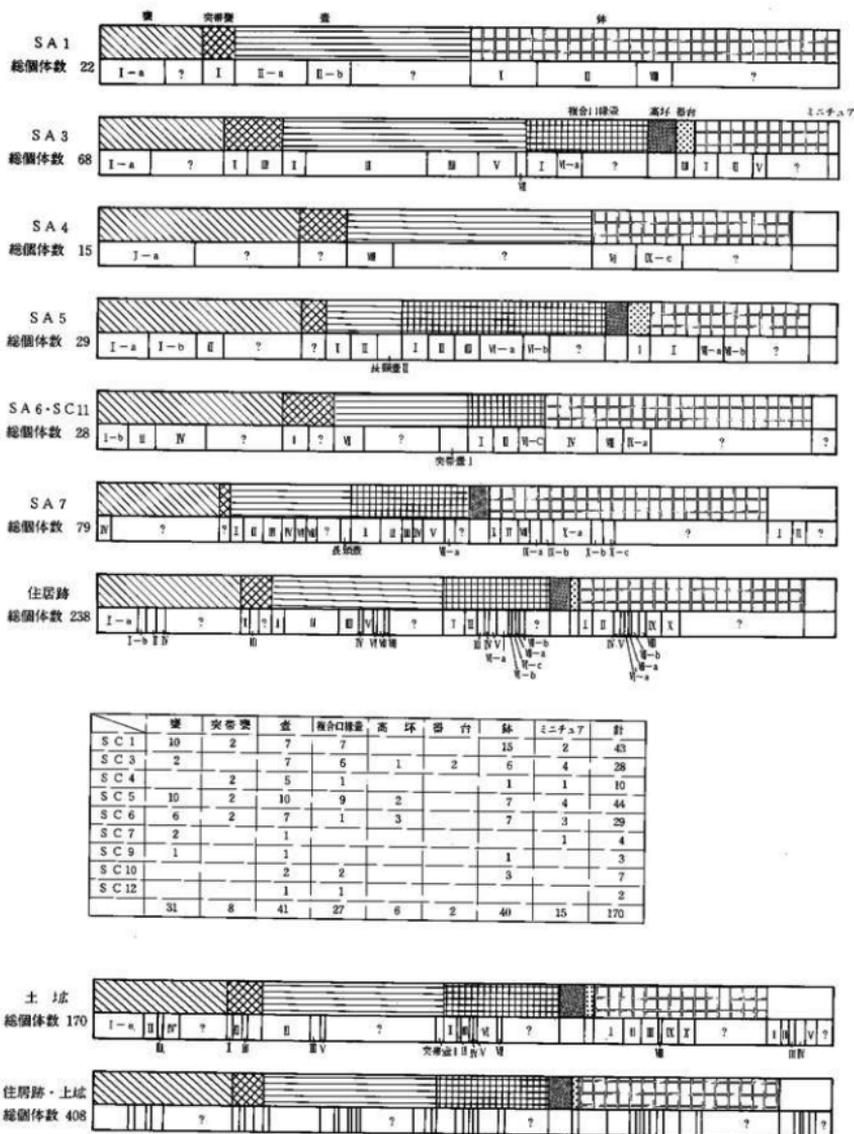


表10 遺構別土器出土数

以上みてきたように各器種における変遷はある程度おえたと思われる。特に煮炊き用土器、貯蔵用土器については壺、甕において考えることができた。しかし、食料に関する容器（食料を盛りつけるもの、食器）についてはまだ不明な点が多く土器以外（例えば木製の椀）の容器の可能性もある。また、器種構成の変化に伴っての土器製作技法の<sup>118</sup>解明や純粋に住居跡に共伴する土器の注出、搬入土器についてなど数多く問題が残されている。

### (3) 遺構について

竪穴住居跡は柱穴をもつもの（Ⅰ類）、もたないもの（Ⅱ類）、また中央に落ち込みをもつもの（a類）、もたないもの（b類）に分類できる。Ⅰ-a類はSA1, 6, 7, Ⅱ-a類はSA3, Ⅱ-b類はSA4, 5となる。また土器型式から考えると、Ⅱ～Ⅲ期の土器を中心に出土しているのはSA3, 4, 5, 7である。SA1, 6はそれ以後となる。

出土状況をみてもⅠ-b類は四壁の周辺から土器が廃棄された状況で検出され、土器の種類も壺Ⅰ-b類、鉢、壺など貯蔵形態をなすものが多い。逆にSA3は中央に炉らしき落ち込みをもち煮炊きを行っていた可能性がある。両者をあわせると前者を「貯蔵を目的とした住居」、後者を「煮炊きを目的とした住居」とする住居形態が考えられる。またSA7は大型住居で、個人用器と考えられる鉢Ⅴ、Ⅵ類が多量みられるほか大型、中型の壺も出土している。逆に他の住居跡にはみられない高坏、土製勾玉など祭祀的要素をもった遺物も出土している。SA7には中央に炉らしき落ち込みもあり人間は住んでいたと思われるが、出土遺物から階級の差あるいは貧富の差というものは感じられず、祭祀（呪術？）的要素をもった集会所といった「公的な住居」の可能性が高い。

土城は「長年にわたって作られ使用され廃棄されたもののすべてが現われるのであって、ある一時期における使用状態を表わしているわけでない<sup>119</sup>」のであり、出土状況からもわかるようにⅠ～Ⅳ期のもまで土器を包含している。しかし、これは逆にⅣ期以後の遺物が遺構内から出土していないということから住居あるいは土城が終焉するまでに埋没していたか、あるいはそれ以後生活が営まれなかったことを示すものである。つまり出土土器の年代幅がこの集落の継続期間とすることができる。そこで突帯壺を指標として土城の出土状況について考えてみたい。

SC3, 7, 10からは、突帯壺が出土しておらずその出現前に埋没した可能性があり、Ⅱ～Ⅲ期に属するものと考えられる。またSC1, 4, 5, 6からは破片で出土しており、Ⅳ期以後まで開口していたことを示す。次に出土遺物の器種構成および埋土の状態から2種類に分けられる。Ⅰ類は自然埋土をなし遺構内に土器が1～2個体廃棄された状態で出土しミニチュアもみられるもので個体数も多い。Ⅱ類は接合関係から自然埋土とは言え難く人為的に埋められた可能性があるもの。個体数は少ない。Ⅲ類はⅠ・Ⅱ類の折衷型でミニチュアを含みながらⅡ類のような接合関係を示すものである。個体数は多い。Ⅰ類はSC1, 3, 6, Ⅱ類はSC4, 7, 9, 10, 12, Ⅲ類はSC5となる。Ⅰ類は出土遺物から祭祀的様相をもつ土城と考えられる。SC1, 3は土器を廃棄した時点で放棄されたと思われるが、SC6は遺物の出土状況および接合関係から2時期にわたって使用されたようである。Ⅱ類は出土遺物も少なく1時期に埋められた可能性もある。逆に、埋めるまでは遺構はきれいにしておかれたとも考えられ貯蔵穴として利用されていたかもしれない。埋没した（埋められた？）時期も突帯壺の出土状況からそれ以前とそれ以後にわけられる。Ⅲ類は特殊で、埋土中に突帯壺の破片やミニチュアを含み、Ⅱ類のような埋土、接合関係を示す。また、上位に壺、甕が置かれた状態で検出され、それは意識的に埋めた可能性を強めるものである。

以上のことから使用期を示すと表10のようになる。土城のほとんどはⅡ～Ⅲ期に営まれたもので確実にⅣ期にはいるものは1～2基と減少する。

遺跡全体からみた遺構の推移はFig 6の如くなる。

Ⅱ～Ⅲ期は遺跡の中央よりやや東よりに住居跡4軒、土城7+α基となる。これらは東と西にわかれ、間には空間

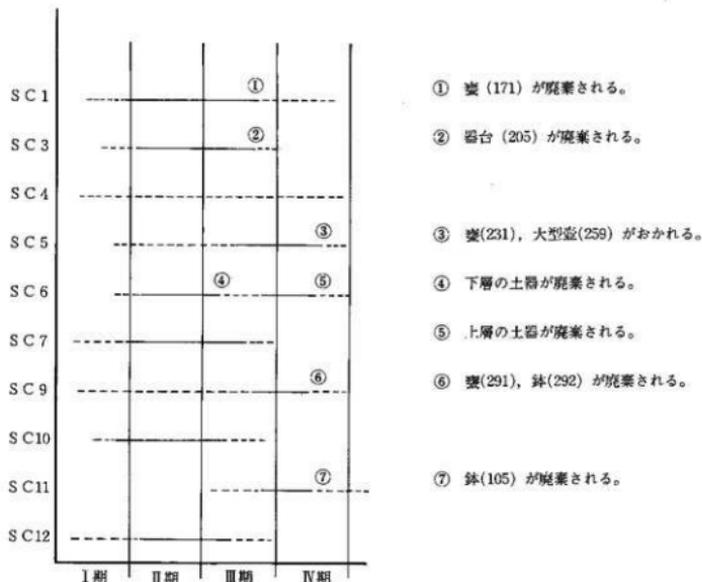
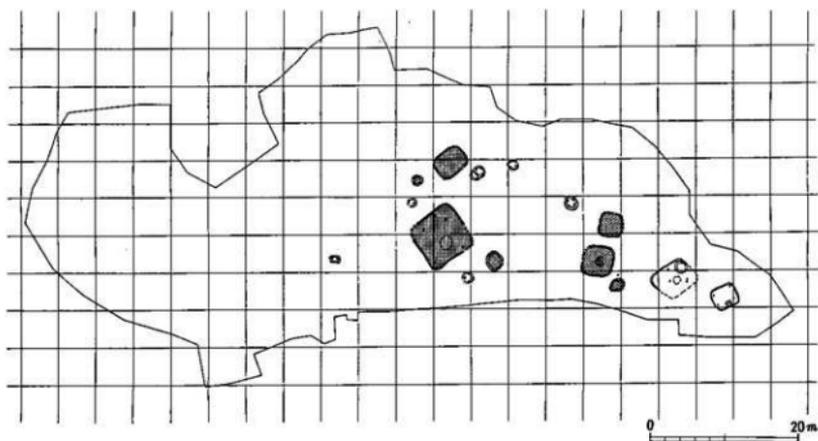


表11 土壌推移

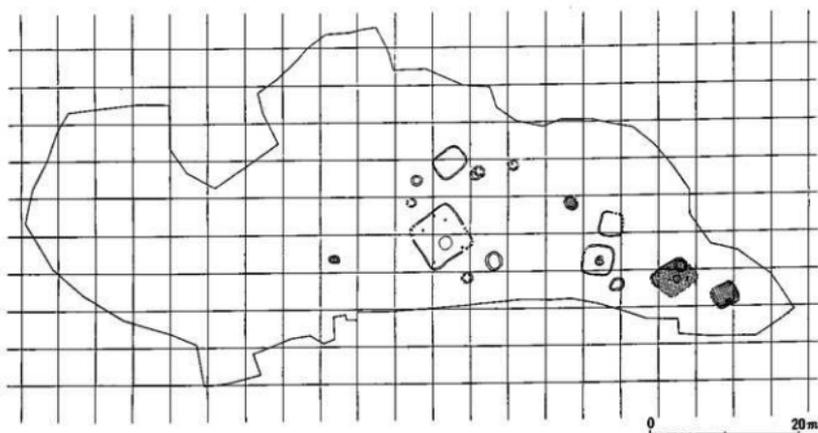
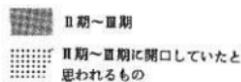
が設けられている。東は住居跡2軒，土坑1基，西には住居跡2軒，土坑5+α基が分布する。それぞれ住居周辺に存在するが，Ⅰ類はSA3出土の器台片とSC3の脚部とが接合しており住居単位で管理されていたとは考え難い。Ⅱ類は住居付近に位置し住居単位で管理されていた可能性もある。ただ前述した「貯蔵を目的とした住居」と機能的にダブる点もありそれぞれの役割についての疑問を残している。

Ⅳ期にはいるものはSA6，SC5，11である。住居跡はⅡ～Ⅲ期に比べ東に移るが，土坑はⅡ～Ⅲ期の遺構分布する場所に位置する。SC5の場合Ⅱ～Ⅲ期から使用されていたものでⅣ期に埋められ上位に甕や壺が置かれた可能性もある。SC11は前述ではSA6より新しいとしたが住居跡に伴うものかもしれない。SA6は全貌は明らかでないが土製の玉や装飾品が出土していることからSA7の住人の系譜を引くものと考えられる。SA1は4本柱であることや住居跡が東へ移行する傾向から考えるとⅣ期あるいはそれ以後のものかもしれないが遺物量が少なく不明である。

出土遺物からみるとほぼ同時期と思われる熊野原遺跡B地区の器種構成と若干のちがいがみられる。第1に鉢類が浦田遺跡の場合多量に出土し種類も豊富である。これは、「食」のちがいであろうか，つまり土坑のⅡ類としたものは貯蔵穴とも考えられ，その「食」の豊富さゆえの器種の出現であらうか。第2に高坏が非常に少ない。破片で数点みられる程度で熊野原遺跡B地区とは一目瞭然にちがいがわかる。第3に楷書波状文が多いことである。熊野原遺跡A地区の方形周溝状遺構から出土した複合口縁蓋の拡張部に施され，胴部には線刻文がある。また大型の壺や装飾器台にもみられる。浦田遺跡の場合，SA7出土の遺物をみても土製勾玉，土製玉や比較的ミニチュア土器が多いこと。また土坑Ⅰ類からミニチュア土器や土製品が出土している点から，熊野原遺跡B地区よりかなり祭祀(呪術?)



II～III期



IV期

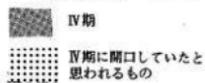


Fig6 浦田遺跡 住居跡、土壇推移

の様相をもった集落ではなかったかと考えられる。南側丘陵に立地する遺跡群には非常に少ない。逆に昭和58年に調査された中間遺跡出土の資料に類似するものが多く、さらに内陸部の祝古遺跡、大萩遺跡などの資料にも類似しており、浦田遺跡出土の土器群は堂地東遺跡や熊野原遺跡に対し内陸的性格（影響）をもったものだと考えられる。

#### (4) まとめ

浦田遺跡の弥生期の住居跡は後期後半の中頃に出現し終末期からやや下る時期まで営まれたと考えられる。Ⅱ～Ⅲ期は住居跡4軒、土埴7+α基、Ⅳ期は住居跡1～2軒、土埴1～2基となり、住居と土埴は混在した状態で分布している。当遺跡の立地する丘陵とその周辺には中期末の遺跡は小規模ながら2ヶ所ほどあるが、当該期の遺跡は検出されておらず唯一のものでこれは、宝台遺跡や竹並遺跡のように同時期の遺構が屋根にそれぞれ立地する形態はとっていない。想像をたくましく考えれば中期末からの遺跡を営んでいた人たちが集約した結果と考えられないであろうか。約1000㎡の限られた範囲に立地するこの集落は、いわゆる小集落で大型住居を1軒保有している。これらの単位集団を組織する人々ほどのような生活を送っていたのであろうか。学園都市遺跡群内の遺跡を中心にその生活基盤について若干の考察を加えそれをまとめたい。

県内では前期末～中期初にかけて大陸系の石廬丁や3種類の石斧が発見されており、少なくともこの時期には稲作の技術がもたらされたと考えられる。しかし遺跡群内の後期から古墳時代初頭にかけて石器、鉄器の出土量は土器に比べ非常に少ない。(表12) 最古の鉄器は中期末の石神遺跡のもので銚を出土している。後期になると鉄器が主で、農具が住居跡から出土するのは古墳時代初頭で前原北遺跡の鋤がある。ほぼ同時期である熊野原遺跡C地区ではまだ鉄器が主体である。石器は鉄器より多く出土しているがほとんど磨石と砥石からなる。砥石の使用状態は、鉄器あるいは刃部をもった石器の存在を示すもので稲作あるいは畑作を想像させるものである。逆に磨石は自然採集経済を思わせるものである。これは熊野原遺跡B地区SA5出土の壺形土器の中に貝の食べかすが多量にはいていたことから、以前として畑作や稲作による収穫より自然採集に依存する部分が大きかったと考えられる。また、貯蔵穴が遺跡群からほとんど検出されず、それに変わる大型の壺が住居内から出土しており、貯蔵穴を必要としないほどの生産力の低さを窺えるものである。逆にそれは短期間に移動する集落形態を示すものかもしれない。それは古墳時代になって、大淀川、一ツ瀬川、小丸川の流域に分布する大古墳群に対し、木花古墳群あるいは清武古墳群などの小古墳群しか造り出せなかったことによって証明されている。

註1) 羽田野野洋 「二本木・松木遺跡を中心とした出土土器の編年(案)」『大野原の遺跡』大野町教育委員会 1980

(2) 「川南町の縄文文化財」『遺跡詳細分布調査報告書』宮崎県児湯郡川南町教育委員会 1983

(3) 「宮崎学園都市埋蔵文化財調査概報(Ⅲ)」宮崎県教育委員会 1982

(4) 横口達也 「豊穡の編年の研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXXI 中巻』福岡県教育委員会 1979

(5) 「宮崎学園都市埋蔵文化財調査概報(Ⅳ)」宮崎県教育委員会 1984

(6) 「宮崎市遺跡詳細分布調査」Ⅰ宮崎市教育委員会 1984

(7) 「宮崎学園都市埋蔵文化財調査概報(Ⅱ)」宮崎県教育委員会 1981

(8) (6)と同じ。

(9) (3)と同じ。

(10) 「大萩遺跡」(2)宮崎県教育委員会 1975

(11) 「萩原遺跡(Ⅱ)」給良町教育委員会 1980

県内の報告で是一部、刻み目尖帯を錯雑尖帯と誤認しているものがある。

(12) 多々良友博 「成川式土器の検討」『鹿児島考古』第15号 鹿児島考古学会 1981

(13) 間壁麻子 「食生活」『日本考古学を学ぶ(2)』有斐閣選書 1979

(14) 都出比呂志 「畿内第五様式における土器の変革」『考古学論考—小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社 1982

(15) 都出比呂志 「畿内の社会・生活—蓮豆子食の俗—」『季刊 考古学』第6号 雄山閣 1984

- 06 佐原 真 「食器における共用器・鉢々器・属人器」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会 1983
- 07 04と同じ。
- 08 04と同じ。
- 09 岩崎二郎 「弥生遺跡の調査」『竹並遺跡』竹並遺跡調査会編 東洋社 1978
- 20 高倉洋彰編 『宅台遺跡』 1970
- 21 09と同じ。
- 22 近藤義郎 「弥生文化論」『岩波講座日本歴史1 原始および古代1』岩波書店 1962
- 23 高倉洋彰 「弥生時代の集落組成」『九州考古学の諸問題』福岡考古学研究会編 東出版 1975
- 24 『持田中尾遺跡発掘調査概要報告書』高鍋町教育委員会 1982
- 25 日高正晴 「川南町東平下の円形周溝墓について」『宮崎考古 6』宮崎考古学会 1980
- 26 「中之迫A遺跡」『宮崎県文化財調査報告書 第28集』宮崎県教育委員会 1985
- 27 石川恒太郎 「宮崎県の考古学」 1968
- 28 「高鍋町持田の遺跡調査報告」『第二次日向遺跡総合調査』第二・三輯 宮崎県教育委員会
- 29 「新富町・下尾敷1号墳発掘調査中間報告」『宮崎考古 9』宮崎考古学会 1984
- 30 石川恒太郎、原尾文蔵 「宮崎市外佐土原町下那珂弥生遺跡」『九州考古学』 33・34 九州考古学会 1968
- 31 「石神遺跡」『宮崎市文化財調査報告書 第1集』宮崎市教育委員会 1973
- 32 本書掲載。
- 33 「祝吉遺跡」『都市文化財調査報告書 第1集』都城市教育委員会 1981
- 34 「祝吉遺跡」『都市文化財調査報告書 第2集』都城市教育委員会 1982
- 35 「丸谷第1遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 (3)』宮崎県教育委員会 1979
- 36 「上示野原遺跡」『宮崎県文化財調査報告書 第22集』宮崎県教育委員会 1980
- 37 「火炊遺跡 (1)』宮崎県教育委員会 1974
- 38 「藤永平遺跡」『国鉄高千穂線建設埋蔵文化財発掘調査報告書』日本鉄道建設公団下関文社 高千穂町教育委員会 1978
- 39 「鐘 遺跡・藤掛遺跡」『新富町文化財調査報告書 第2集』新富町教育委員会 1983
- 40 「高鍋町牛牧弥生期住居跡調査報告」『宮崎県文化財調査報告書 第16集』宮崎県教育委員会 1973

#### 4. 歴史時代の遺構と遺物 (第46図)

浦田遺跡の歴史時代遺構・遺物はヘラ切り底をもつ環・皿などを伴う竪穴住居跡、掘立柱建物と井戸、カマドや近世陶磁を伴った館跡の2時期に分けられる。前者の時期の遺構はJ-9、10グリッド、遺跡のほぼ中央に位置する。しかし、遺物は、G列の斜面上に集中する。一部、西端の21列やK-10, 11, L-10グリッドにも分布する。後者の近世陶磁器類は、一部G列にもみられるがほとんどカマド、礎石のあるⅡ区に集中する。しかし、これらに伴った遺構は検出されていない。

##### (1) SA2 (第47図)

J, K-9・10グリッドにある。3.35m × 3.6mの規模の方形住居跡である。西側辺のやや北寄りに煙出し部を住居外にもつカマドが附設されている。柱穴は、4本と考えられるが耕作で削平され2本しか現存していない。住居跡の検出面からの深さは約25cm、柱穴は床面から約23cmを測る。柱穴間の距離は1.75mである。住居跡埋土は、I層(暗褐色土)、Ⅱ層(粘質のある褐色土でアカホヤをブロックで含む)となる。カマドは、西壁より約30cm離れたところに煙出し部をもつ。煙出し部径42cmで一部P-43に切られる。内部には南北それぞれ16層内に約10~20cm大の石がおかれている。煙道部の長さは約20cmで、礎口との高低差はそれほどない。笑口部あたりはすでに

粘質土がつぶれた状態で検出された。中からは石や土師器片等が出土し軸部の支柱として使用されていたと思われる。左側の袖部には支脚として用いられた石の上に土師器環が被さった状態で検出された。これらの残存状況からカマドは、意識的ではなく住居跡廃棄後、自然崩壊したと考えられる。焚口部には焼土面はなく長期間にわたって使用されたとは考え難い。一部、4層、8層にブロック状に焼土の混入がみられる程度である。なお、煙出し部や袖部から検出された石はすべて砂岩であった。

遺物は、土師器、須恵器、布痕土器など総数約50点ほど出土したが一部、弥生土器などの流れ込みもあった。その中で、カマド周辺に良好な遺物の出土がみられる。土師器片約20点、須恵器片3点（すべて格子目印きを有す）、布痕土器片13点を出土した。（第48図）

## (2) SB1 (第49図)

J-11-J-8グリッドにSA2を囲む形で存在する。2間×3間の建物で総庇となり、桁行長8.96m、梁行長6.34mを測る。主軸は、N-8-Wを示す。柱穴径は平均46cm（最大径76cm、深さ45cm、最深57cm）である。柱穴間の距離は、母屋の桁方向が約2.2m、梁方向が2.1m、庇の場合、桁方向が2.24m、梁方向が約2.0mとほぼ母屋の柱穴間の距離に類似する。また、庇の柱穴は、母屋の四隅の柱穴に対応して3本建てられている。その柱穴間の距離は1.4mである。四隅に柱穴が固まるのは、屋根を支えるために必要なことで当然といえば当然のことである。柱穴の埋土は、暗褐色土、褐色土、黒褐色土に分けられ、その中でも軟質のもの、しまりのあるもの、アカホヤを混入するものなどである。柱穴の出土遺物には、弥生土器が多くそのほかに須恵器、布痕土器、土師器、縄文土器などあげられるがほとんど小片であった。

## (3) 遺物

遺構に伴う遺物は、SA2出土のもの（1～7）、P-47出土の土師器（23）だけである。ほとんどがG列の斜面から出土しており、土師器、須恵器、布痕土器、黒色土器などである。一部、西端のH-J-21グリッド、K-10、11グリッドにも分布する。

### ① 土師器（第50図、第51図31～33）

甕は、「く」の字に外反し、口縁端部が丸くおさまられるものを基本とし、3形態に分けられる。Ⅰ類は、口径と胴部最大径がほぼ同一で口縁部が外彎するもの。（31）。Ⅱ類は、口径が胴部径より上回り口縁部が直線的にのびるもの（32）。浅鉢状を呈する胴部に直線的にのびる口縁部がつくもの（33）の3形態である。Ⅰ、Ⅱ類は、内外面とも横ナデ調整。Ⅲ類は、外面が横ナデ、内面が下から上へのヘラケズリが施され、頸部と胴部の境に明確な稜を有す。胎土、色調は類似する。

環は、すべてヘラ切り底で大きく3形態に分けられる。Ⅰ類は、底部からそのまま外方に立ちあがり直線的にのびるもの（1～4、8～11、14）、Ⅱ類は、底部から一度、鋭く内傾し、そして「く」の字状に外方へ直線的に立ちあがるもの（12、13、15～20）、Ⅲ類は、小型で従来皿に分類されているもの（21～25）である。また、法量からみると、Ⅰ類は口径16cm前後のもの（1、3、10）、13cm前後のもの（2、4、8、11）とに分かれる。Ⅲ類は、口径8.2cm～9.9cmの間に含まれる。Ⅱ類は、底部片のみの出土であったため法量等については不明であるが、底部の厚さが1cm前後のもの、5mm前後のものに分かれる。特に1は、カマド左袖部にたてた石に被せられた状態で出土した。焚口部に面していた部分には、内外面にススが付着する。底部は、静止ヘラ切りで2度にわたってヘラによる底部切り離しが行なわれている。この手法での底部切り離しをもった環は他にはみられない。8は、口径に比べ底径が小さい。体部は、やや内彎気味に立ち上がる。外面に横ナデ調整の明確な稜を残す。10は、SA7のカクラン部分から出土した。胎土には黒炭母が含まれる。広い底部から外方に直線的にのびる1、3に類似する。12は、厚手の底部のわりに内彎気味にのびる薄手の体部がつく。21は、丸味をおびた底部から体部がのびる。口縁端部は丸い。Ⅲ類の

なかで最もいい調整が施されている。

高台付椀は、底部のみであるが高台が1cm以上のもの、1cm以下のもの(23)とにわかれる。また、1cm以上のものは高台が直線的にのびるもの(24)と外彎するもの(25)とにわかれる。約10点出土しているが1cm以上のものがほとんどである。

#### ② 黒色土器(第50図29, 30)

高台付(29)、椀(30)の2種類が出土している。26は、F-15グリッド出土である。胎土には白っぽい石を少量含む。焼成は良好。色調は、外面が浅黄橙色をなす。27は、ヘラ切り底をもつ。胎土はきめ細かい。焼成は良好。色調は外面がにぶい橙色をなす。総数で7点出土した。

#### ③ 布直土器(第51図34~44)

31~36は、斜めに面取りされた口縁部をもつ。厚さが2cm前後のものと1cm前後の2種類ある。37は胴部から内彎気味にのびる口縁部にいたる。口縁部は面取りされていない。38, 39は底部でいずれも尖底を呈す。製作方法はどれも同様であるが、あて具として使われる布の目にはちがいがみられる。外面は指ナデによるもので凹凸が顕著に残る。

#### ④ 須恵器(第51図, 第54図45~61)

42~61は変形土器片である。42~48は外面が格子目叩き、内面にナデ調整がなされるものである。42は厚手の胴部から明確な稜を有し外反する口縁部にいたる。口縁部は外彎しながらのびる。端部は丸くおさまられる。口縁部は横ナデ。頸部以下には格子目の叩きが施される。44では外面の頸部付近に一部ナデが施されている。内面は同心円文がナデ消される。49は外面は格子目叩き、内面が平行条線の叩きを有する。50, 51は外面が格子目叩き、内面が外面の格子目より大きい1cm×2cmの格子目叩きがナデ消されずに残る。他の變片に比べると薄手である。52, 53は外面が約1.2cmの幅で4本の条線を基本とする叩きが施される。方向は一定していない。内面には同心円文が施される。52, 53は同一個体と思われる。54は底部片で外面の胴部下半は格子目叩きが施され自然釉を被る。底部にも格子目叩きがみられる。内面は幅約4.2cmで比較的幅広い条線9~10本を1単位とする叩きが施されている。内面にも薄く自然釉が被る。55は外面が比較的細かな格子目叩き。内面は板状のものでのナデ調整であるが、各所に幅約1.2cmの粘土のたまりがみられる。變片は部位によって調整のちがいががあるので図示したなかに同一個体のものも含まれている可能性がある。56は小型の長頸壺である。頸部が非常にくびれている。内外面ともいいな横ナデ調整。57は長胴の壺形土器片で胴部から肩部にかけてのものである。内外面とも横ナデ調整、内面には横ナデによる釉を残す。58はヘラ切り底をもった杯の底部である。底部から鋭い稜を有し、垂直に立ちあがり「く」の字状に外方にのびる。土器器坪のⅡ類に類似する。

#### (4) Ⅱ区(第52図)

K~N-13~16グリッド、遺跡の北端の斜面をほぼ垂直に掘り削って約150m<sup>2</sup>の区画を作り出している。北壁に沿って礎石(西から①~⑤)が5つ、それに沿って(西から⑦~⑨)3つの礎石が並ぶ。礎石の大きさは、50cm×35cm程度である。東西礎石間の距離は3.3m(②-④)、2.1m(④-⑤)、2.2m(⑤-⑥)、3.0m(⑦-⑧)、6.2m(⑧-⑨)を測る。②-④の北側列と⑦-⑨までの南側列の間の距離は6.8mで、⑥-⑨間は約5mである。桁行は約10.5m、梁行は約6.8mであったと思われる。礎石の配置から⑧-⑨間が、家の出入口として予想される。家の東端には2連の地炉が附設される。その北側(壁も含める)に一面焼土がひろがり、それとあまって陶磁器類が出土した。地炉の南には、長径約3.0m、短径1.7m、深さ約2.5mの竪穴状遺構がある。発掘前から落ち込みが確認されており、比較的新しいものと考えられる。竪穴状遺構の南6m、L-13グリッドに井戸が掘られている。長径約3.0m、短径約2.5mで、時間的な都合により完掘はできなかったが約3m掘ったところで水が湧いてきた。遺物はⅡ区全体に分布するが、礎石⑦の石が集中している部分とカマドの北側の焼土面上の2ヶ所に多量に出土した。礎石⑦の

北側部は、焼石といっしょに瓦、陶磁器、鉄器片など破片で検出された。地床炉の北側部は、遺物が前者に比べ良好な状態で出土した。

#### (5) カマド (第53図)

2連式のもので長径1.5m、短径0.7mを測る。北側のカマドが特に入念に作られている。30cm大の川原石を「コ」の字状に組み粘質土によって固められる。焚口部は館側(西側)に設けられる。「コ」の字状に組まれたカマドの中に石が多量にみられ、廃棄の際に投げ込まれたと考えられる。南側のももの6個の石を使って「コ」の字状に組まれ館側に開いている。下には深さ30cmの掘り込みがあり、北側カマド部分には他より一段深く掘られそこに焼土を検出した。南側では明確な焼土はなかった。北カマドの東に径12cmと径40cmの掘り込みがありそれぞれ中に焼けた粘土を多量に出土した。さらにカマドの北側に焼土面がみられそれに伴って陶磁器など多量に出土し何らかの遺構が考えられる。

#### (6) 遺物

館跡に伴う遺物は陶磁器類、瓦、古銭など器種、器形とも変化に富む。そのほとんどがⅡ区内から出土している。

##### ① 瓦 (第54図62~64)

62、63は均正唐草文軒平瓦である。62は現存長9.7cm、現存幅14.1cm、平瓦部の厚さ1.4cm、顎部の厚さ1.7cm~0.8cm、顎部長4.3cm、顎部現存幅12.7cmを測る。顎部と平瓦の接合部が顎部表面や右側面で明瞭に観察できる。胎土は密で、焼成は良好。色調は内外面とも黒色を呈す。63は現存長8.5cm、現存幅10.3cm、平瓦部の厚さ1.7cm、顎部の長さ5.0cm、顎部現存幅4.8cmを測る。胎土は密である。焼成は良好。色調は、内外面とも黒色をなす。64は、平瓦の破片で左右側面とも欠落している。分割方法は不明。4本の条線が1.4cmの幅で右下りあるいは横方向に施される。順序は右下りから横方向の順である。厚さ1.3cmを測る。焼成は良好。色調は、外面が灰色、内面が黒色を呈す。そのほかに同様の文様が施され、淡黄褐色をなす。茶焼きの平瓦版もみられる。

##### ② 襷鉢 (第54図65)

口縁部は厚手の玉縁をなし2本の沈線が施されている。内面の口縁下2.4cmのところから底部との境までの全面に、3.3cmの幅で9本の条線を1単位として時計と逆回り方向に施される。底部外面には板目が残り、内面には中央部に7本の条線が2.5cmの幅で施される。口径36.3cm、器高14.2cm、底径16.3cmを測る。内外面とも横ナデ調整。胎土には1~2mmの白っぽい石を少量含む。焼成は良好。色調は、内外面とも赤褐色をなす。襷鉢片もかなり出土しており、口径25cmの薄手のものから約40cmの厚手のものまで多様にある。また、外面に釉が被っているものもみられる。

##### ③ 磁器 (第55図)

磁器は多量に出土し図示したのはほんの一部にすぎない。その中で茶碗類がほとんどを占める。

#### 小 結

歴史時代の遺構はカマド付竪穴住居跡1軒、2間×3間の総底をもつ掘立柱建物1棟、そのほかに江戸末期と思われる館跡とそれに関連した遺構を検出した。遺物はその生活遺構に伴う土師器、須恵器、布直土器、陶磁器、瓦等出土した。

カマド付住居跡は<sup>(1)</sup>浄土江遺跡、<sup>(2)</sup>赤坂遺跡、<sup>(3)</sup>前頭南遺跡、<sup>(4)</sup>平畑遺跡、<sup>(5)</sup>下田畑遺跡で発見されている。特に浄土江遺跡では遺構中央部に炉をもつもの(6世紀代)、壁にカマドが附設されるもの(7世紀代)、煙道を住居外にもつもの(8世紀代)という具合に「炉」の変遷をおうことができる。上別府遺跡、藤掛遺跡などの6世紀代の住居跡でも中央に炉をもつ形態をとっている。この時期、北部九州ではすでに壁にカマドを附設する住居跡が出現している。学園都市遺跡群内ではカマドが2ヶ所あるいは3ヶ所に附設されるものがある。これは、襷部が残るものやすでに排除さ

れているものがあり1時期に2～3ヶ所にカマドをもつのではなく何らかの理由によって造りかえられたと考えられる。また、平畑遺跡、下田畑遺跡などでは煙出し部が石で補強されたものや底部を穿孔（焼成後）した変形土器を煙出しに利用したものなどある。これらのことから当時、かなりカマドに依存していたことが窺え、掘立柱建物が出現するまでこの種の「カマド」は使用されていた可能性がある。

掘立柱建物は、時期は不明だが発掘調査が行なわれれば必ず検出される。学園都市遺跡群内でもそれは同様である。糸切り底をもつ土師器が出土していないことを指標とすると平畑遺跡、前原南遺跡、下田畑遺跡をあげることができる。それらは2間×3間が主体をなしそれ以外に大型のものが1棟ないし2棟みられる。遺跡内での主軸はある程度一定し規格性が窺える。また、柱穴がカマド付住居跡を切るものがみられ、これは明らかに掘立柱建物が後出することを示しているが、カマド付住居跡と掘立柱建物は併存する時期があると思われる。また、建物の柱穴間の内部に平カマドが設けられているものや焼土を確認できるものがあり、後者の場合「覆カマド」を想定できる。焼土などを検出できない掘立柱建物もあり住居以外の用途をもった建物も存在していたと考えられる。

土師器は住居跡出土のもの（Ⅰ類）とそれ以外のもの（Ⅱ、Ⅲ類）ではちがいがみられる。掘立柱建物が後出するものであるからそれに併存するものはⅡ、Ⅲ類と考えられる。Ⅱ類は底部が外に張り出すという特徴をもっており付近の下田畑遺跡、赤坂遺跡、小山尻東遺跡から出土している<sup>13</sup>。特に小山東尻遺跡では緑釉土、越州窯系の青磁と併存していることから10世紀前半に位置付けされている。そうすると先出するⅠ類は9世紀後半～末に比定されることになる。Ⅰ類にはかなり大型のものもみられ、大宰府で示めされるような坏の小型化の傾向はなく大型のまま糸切りに変遷していくように思われる。また小皿は大型化の途中で分化するようである<sup>14</sup>。ヘラ切りは大宰府では12世紀までには消滅しているが県内では14～15世紀まで残る可能性がある<sup>15</sup>。現段階では遺構（カマドなど）の変遷による編年にたよらなければならない部分が多く土器独自の編年作業に困難をきたしている。今後、輸入陶磁器および国産陶器などの併存資料の増加を待って検討したい。

館跡は礎石の大きさや礎石間の距離からさほど大きなものではなかったと思われる。井戸、カマドなど生活のための施設があり、裏には山がせまり正面には平地および低地が広がることから畑作および稲作を行なっていたの自給自足の生活が窺える。また付近に人家らしいものではなく世間を離れての隠遁生活を送っていたのではなからうか。陶磁器類が多量に出土していることから複数の居住者が考えられる。江戸末期の窯は県内では延岡小宰窯<sup>17</sup>、鹿川窯<sup>18</sup>が知られている。また、鹿兒島（鶴丸）城本丸跡出土のものにも類似資料があり、薩摩系あるいはこの時期に爆発的に流通する肥前系の焼きものとの関係が窺えるものである。

註1) 「浄土江遺跡」宮崎市文化財調査報告書 第6集、宮崎県教育委員会 1981

(2) 「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集、宮崎県教育委員会 1985

(3) 「宮崎学園都市埋蔵文化財調査概報」（Ⅲ）宮崎県教育委員会 1982

(4) 本書掲載

(5) 本書掲載

(6) (1)と同じ

(7) 「上別府遺跡」宮崎県教育委員会 1979

(8) 「鏡遺跡・藤掛遺跡」新富町文化財調査報告書 第2集、新富町教育委員会 1983

(9) (2)前掲書の下田畑遺跡で検出されている。

(10) 「下原遺跡」九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(3)、宮崎県教育委員会 1979

(11) (2)前掲書 赤坂遺跡で確認されている。

02 (2)と同じ。

03 2前掲書 小山尻東遺跡に報告されている。

04 「大宰府糸紡跡Ⅱ」『大宰府市の文化財 第7集』大宰府市教育委員会 1983

05 同上

06 「山内石塔群」『高崎学園都市埋蔵文化財調査報告書 第1集』宮崎県教育委員会 1984

07 「延岡小塚竪穴」『舞土文化研究所紀要 1輯』郷土文化研究所 1964

08 大野正年他 「謎の鹿川窟(窯発掘に基づく考察)」1981

09 「鹿児島(鶴丸)城本丸跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(26)』鹿児島県教育委員会 1983

## 第5節 まとめ

浦田遺跡は先土器時代から近世までの幅広い時代の遺構・遺物を検出し、先土器時代を除いたそれぞれが約1000㎡という小範囲に立地するいわば完結する遺跡であった。

先土器時代は遺跡群内では不明瞭な部分が多かったが、1つの文化層を確認できそれに伴う遺物をも検出したことは堂地西遺跡や県内の先土器時代遺跡との対比する際に有効な資料となる。

縄文時代早期は他遺跡同様、集石遺構が中心でⅠ、Ⅱ類に分類しさらにⅡ類を石の出土状況によってa、b類に細分した。それによって集石遺構のもつ機能や相互の有機的關係について考えたが、今までの問題を解決するには至らなかった。遺物は土器が主で石器は少なかった。土器は無文土器、条痕文土器、貝殻文系土器、刺突文土器、竈之神式土器など種類は豊富であった。しかし、ほとんど破片で形態や相対的編年を考えることはできなかった。ただ条痕文土器Ⅳが県内でも初見であり今後資料の増加をまって検討していかなければならない。

弥生時代の遺構・遺物は当遺跡の中心をなすもので住居跡6軒、土壇10基を検出した。住居跡は内部施設(柱穴や落ち込み)や遺物の出土状況から住居跡の機能や、土壇内での接合関係、埋土の状況からⅠ～Ⅲ類に分類しそれぞれの機能について考察を試みた。しかし、それは短絡的などころがあり遺構の詳細な検討が必要となるであろう。また、器種構成では鏡内での変化をほとんど追証する形となったが、さらに細かい土器観察による編年そして技法の変化について考えなければならない。ここでは遺跡全体出土のものについて取り扱ったが、住居跡の場合流れ込みや、住居放棄後の土器廃棄など完全に住居跡に共存する土器の注出など数多くの問題を残している。ここでは触れなかったが間仕切り住居と方形住居との関係、当遺跡の立地する丘陵とその南にある遺跡群の大部分が立地する丘陵との関係、周辺遺跡(例えば中間遺跡)などとの関係なども考えていかなければならない。それは、三辻利一氏によって後述されている胎土分析なども一つの手懸りとなりえるであろう。特に、浦田遺跡出土の土器と中間遺跡出土のものは比較的分析値が接近していることから、1つの土器流通圏にはいる遺跡どうしかもしれない。

歴史時代にはいると各期一遺構となり密度としては薄くなる。しかし、カマド付住居跡から擬立柱建物に変化するという2時期があり、それに伴う土器器類の形態にも変化がみられ土器器類編年に示唆するものと考えられる。近世の館跡も検出されたがまだ未開拓の分野で県内でもほとんど類似資料がみられない。今後、この時期の遺構・遺物に注目することによって解決していきたい。

なお、浦田遺跡は発掘時から報告書作成まで文化課、埋蔵文化財センターの諸先輩方に御迷惑をおかけしたことを記してお詫び申し上げます。

(谷口武範)



珪土土器観察表

図面番号	産地名	遺物番号	器種	器 身		焼成	色 調		胎 土	備考	型式		
				外 面	内 面		外 面	内 面					
第22回	S A 3	43	頸(口縁)	右下がりのハケ目	横ナゲ	良好	浅黄褐色 (7.5YR 5/3)	浅黄褐色 (7.5YR 5/3)	1mm程度の茶・黒・白の微砂を多量含む				
			+	44	胴(腹部)	指による押さえ	ナゲ	良好	赤い黄褐色 (10YR 5/3)	赤い黄褐色 (10YR 5/3)	0.1~2mmの茶・黒・白の微砂を多量含む		赤底
			+	45	腹(底部)	指による押さえ	ナゲ	良好	赤い黄褐色 (10YR 5/3)	赤い黄褐色 (10YR 5/3)	0.1~2mmの茶・黒・白の微砂を多量含む		
			+	46	(底部)	上半部が縦ハケ、下半部がナゲ	ナゲ	良好	黄 黄 褐色 (10YR 5/3)	赤い黄褐色 (10YR 5/3)	0.1~2mmの茶・黒・白の微砂を多量含む		
			+	47	鉢	横ナゲ	横ナゲ	良好	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	0.1~2mmの茶・黒・白の微砂を多量含む		
			+	48	鉢(口縁)	横ナゲ	横ナゲ	良好	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	0.1~2mmの茶・黒・白の微砂を多量含む		
			+	49	鉢(口縁)	横ナゲ	縦方向のヘラ磨き	良好	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	浅黄褐色 (10YR 5/3)	赤・黒・白の微砂を多量含む		
			+	50	鉢(口縁)	横ナゲ	横ナゲ	やや軟弱	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤・黒・白の微砂を多量含む		
			+	51	鉢	横ナゲ	縦面中央横ナゲ、側部下半ヘラ磨き	やや軟弱	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤・黒・白の微砂を多量含む		
			+	52	鉢	口縁部横ナゲ、側部ヘラ磨き	(口縁部横ナゲ、側部ヘラ磨き)	やや軟弱	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	浅黄褐色 (10YR 5/3)	0.1~2mmの茶・黒・白の微砂を多量含む		
+	53	ニニチュフ	口縁部横ナゲ、胴部押さえ	横ナゲ	良好	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤・黒・白の微砂を多量含む		ニニチュフ・I類			
第23回	S A 4	54	口縁部横ナゲ、胴部ヘラ磨き	口縁部横ナゲ、胴部ヘラ磨き	横ナゲ	良好	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤・黒・白の微砂を多量含む				
			+	55	高杯(胴部)	横ナゲ	横ナゲ	良好	浅黄褐色 (10YR 5/3)	浅黄褐色 (10YR 5/3)	0.1~2mmの茶・黒・白の微砂を多量含む		
			+	56	高杯(胴部)	ナゲ	ナゲ	良好	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤・黒・白の微砂を多量含む		SC(20)型と適合
			+	57	高杯(胴部)	ヘラ磨き?	ナゲ	良好	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	浅黄褐色 (10YR 5/3)	赤・黒・白の微砂を多量含む		
S A 4	58	腹	風化が著しい、胴部下下ヘナゲ	ナゲ	良好	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	0.1~2mmの茶・黒・白の微砂を多量含む		赤・I類			
		+	59	口縁部ハケ目、胴部下下ヘナゲ、口縁部ハケ目、胴部下下ヘナゲ	1mm程度の茶・黒・白の微砂を多量含む	良好	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	0.1~2mmの茶・黒・白の微砂を多量含む		赤・I類		
		+	60	腹(底部)	ナゲ	ナゲ	やや軟弱	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤・黒・白の微砂を多量含む		赤・I類	
		+	61	腹(底部)	ナゲ	ナゲ	やや軟弱	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤・黒・白の微砂を多量含む			
		+	62	腹(底部)	ナゲ	ナゲ	良好	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	0.1~2mmの茶・黒・白の微砂を多量含む			
		+	63	指による押さえのみとハケ目?	口縁部ハケ目 (10cm/1cm) 底部指による押さえ	良好	浅黄褐色 (10YR 5/3)	浅黄褐色 (10YR 5/3)	0.1~2mmの茶・黒・白の微砂を多量含む				

図面番号	産地名	遺物番号	器種	器 身		焼成	色 調		胎 土	備考	型式	
				外 面	内 面		外 面	内 面				
第23回	S A 4	64	鉢(口縁)	ヘラ磨き	横ナゲ	良好	浅黄褐色 (10YR 5/3)	浅黄褐色 (10YR 5/3)	0.1~2mmの茶・黒・白の微砂を多量含む			
			+	65	ニニチュフ	指による押さえ	指による押さえ	良好	浅黄褐色 (10YR 5/3)	浅黄褐色 (10YR 5/3)	0.1~2mmの茶・黒・白の微砂を多量含む	
第24回	66	腹(底部)	胴部ハケ目? 底部指による押さえ	指による押さえ?	良好	浅黄褐色 (10YR 5/3)	赤い黄褐色 (10YR 5/3)	1mm程度の茶・黒・白の微砂を多量含む				
		+	67	鉢	1mm程度の茶・黒・白の微砂を多量含む	良好	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	0.1~2mmの茶・黒・白の微砂を多量含む		赤・I類	
		+	68	鉢	口縁部横ナゲ、胴部一部指による押さえ	(口縁部横ナゲ、胴部一部指による押さえ)	良好	赤い黄褐色 (10YR 5/3)	赤い黄褐色 (10YR 5/3)	0.1~2mmの茶・黒・白の微砂を多量含む		赤・I類
		+	69	高杯(口縁)	横溝流状文	横ナゲ	良好	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤・黒・白の微砂を多量含む		
+	70	高杯(口縁)	ナゲのみと2.5cmの周縁で押さえ	横ナゲ	やや軟弱	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	1mm程度の茶・黒・白の微砂を多量含む		適合し得る		
+	71	高杯(口縁)	横ナゲ	横ナゲ	良好	浅黄褐色 (10YR 5/3)	浅黄褐色 (10YR 5/3)	赤・黒・白の微砂を多量含む		適合し得る		
+	72	高杯(口縁)	横ナゲ	横ナゲ	良好	赤い黄褐色 (10YR 5/3)	赤い黄褐色 (10YR 5/3)	1mm程度の茶・黒・白の微砂を多量含む		適合し得る		
+	73	高杯(口縁)	横ナゲ	ナゲ	良好	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	1mm程度の茶・黒・白の微砂を多量含む				
+	74	高杯(口縁)	横ナゲ	横ナゲ	良好	浅黄褐色 (7.5YR 5/3)	浅黄褐色 (7.5YR 5/3)	0.1~2mmの茶・黒・白の微砂を多量含む		適合し得る		
+	75	高杯(口縁)	横溝流状文	横ナゲ	良好	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤・黒・白の微砂を多量含む				
+	76	高杯(口縁)	口縁部横ナゲ、右下がりのハケ目	口縁部横ナゲ、右下がりのハケ目	良好	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤・黒・白の微砂を多量含む		赤底		
+	77	高杯(口縁)	口縁部横ナゲ、胴部一部指による押さえ	横ハケ、胴部斜方向のハケ目 (7~10cm/1.5cm)	良好	浅黄褐色 (10YR 5/3)	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	0.1~2mmの茶・黒・白の微砂を多量含む		赤・I類		
+	78	高杯(口縁)	風化が著しい、底部指による押さえ	口縁部横ナゲ、胴部右下がりのハケ目 (5cm/1.5cm) 底部指による押さえ	良好	浅黄褐色 (10YR 5/3)	浅黄褐色 (10YR 5/3)	0.1~2mmの茶・黒・白の微砂を多量含む		赤・I類		
+	79	頸(口縁)	ナゲ	ナゲ	やや軟弱	赤い黄褐色 (10YR 5/3)	赤い黄褐色 (10YR 5/3)	赤・黒・白の微砂を多量含む		赤・I類		
+	80	腹(底部)	横ナゲ	横ナゲ	やや軟弱	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	1mm程度の茶・黒・白の微砂を多量含む				
+	81	腹(底部)	ナゲ	ナゲ	良好	浅黄褐色 (10YR 5/3)	浅黄褐色 (10YR 5/3)	赤・黒・白の微砂を多量含む				
+	82	腹(底部)	ナゲ	ナゲ	良好	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	0.1~2mmの茶・黒・白の微砂を多量含む				
第25回	83	84	口縁部横ナゲ、胴部ハケ目、底部指による押さえ	口縁部横ナゲ、胴部中央縦ハケ、底部指による押さえ	横ナゲ	良好	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤い黄褐色 (7.5YR 5/3)	0.1~2mmの茶・黒・白の微砂を多量含む		赤・I類	
			+	84	鉢	口縁部横ナゲ、胴部右下がりのハケ目 (外周より内側)	やや軟弱	浅黄褐色 (10YR 5/3)	浅黄褐色 (10YR 5/3)	0.1~2mmの茶・黒・白の微砂を多量含む		赤・I類



弥生土器観形表

国番号	遺 跡 名	遺物番号	器 種	調 整		焼 成	色 調		胎 土	備 考	型 式
				外 面	内 面		外 面	内 面			
第27区	SA 7	127	横口鉢 (口縁)	横ナデ	横ナデ	良好	にじい褐色 (7.5Y R 5)	にじい褐色 (7.5Y R 5)	0.1-2mmの茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		横口鉢蓋付 器一 目録一ト
		128	底(口縁)	横ナデ	横ナデ	良好	焼黄褐色 (10Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	0.1-2mmの茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		
		129	長頸付(胴)	横部縦状文、胴部下半へり器	ハケ目(6-8本/0.5m)	良好	にじい褐色 (7.5Y R 5)	にじい褐色 (7.5Y R 5)	1mm程度の茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		
		130	(胴)	ナデ	ナデ	良好	焼黄褐色 (10Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	1mm程度の茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		
		131	蓋	口縁部横ナデ、胴部風化が著しい	口縁部横ナデ、胴部ナデ	良好	にじい褐色 (7.5Y R 5)	にじい褐色 (7.5Y R 5)	0.1-2mmの茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		器一 目録一ト
		132	蓋	横ナデ、胴部一部ハケ目	横ナデ、胴部一部ハケ目	良好	焼黄褐色 (10Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	0.1-2mmの茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		器一 目録一ト
		133	蓋(口縁)	横ナデ	横ナデ	良好	焼黄褐色 (10Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	0.1-2mmの茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		器一 目録一ト
		134	蓋(口縁)	横ナデ	横ナデ	良好	にじい褐色 (7.5Y R 5)	にじい褐色 (7.5Y R 5)	0.1-2mmの茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		器一 目録一ト
		135	蓋(口縁)	横ナデ	横ナデ	良好	焼黄褐色 (10Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	1mm程度の茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		器一 目録一ト
		136	蓋(口縁)	ナデ	ナデ	やや不良	焼黄褐色 (10Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	1mm程度の茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		
		137	蓋(口縁)	ナデ	ナデ	良好	にじい褐色 (7.5Y R 5)	にじい褐色 (7.5Y R 5)	1mm程度の茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		器一 目録一ト
		138	蓋(胴)	指による押さえ	指による押さえ	良好	にじい褐色 (7.5Y R 5)	にじい褐色 (7.5Y R 5)	1-2mm程度の茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		器一 目録一ト
		139	蓋(胴)	横ナデ	ナデ	良好	にじい褐色 (7.5Y R 5)	にじい褐色 (7.5Y R 5)	1mm程度の茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		器一 目録一ト
		第28区	"	140	鉢	細かなハケ	ハケ目	良好	焼黄褐色 (10Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	1mm程度の茶-黒っぽい砂粒-小石を含む
141	鉢			ナデ	ハケ目(9本/1.5m)一部指による押さえ	良好	焼黄褐色 (10Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	1mm程度の茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		器一 目録一ト
142	鉢			横ナデ? (風化が著しい)	横ナデ	良好	焼黄褐色 (10Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	1mm程度の茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		器一 目録一ト
143	鉢			ナデ	口縁部横ナデ、胴部斜方向のハケ目	良好	焼黄褐色 (10Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	0.1-2mmの茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		器一 目録一ト
144	鉢			ナデ	ナデ	良好	焼黄褐色 (10Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	1mm程度の茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		器一 目録一ト
145	鉢			口縁部横ナデ、底部指による押さえ	口縁部横ナデ、胴部一部ナデ部分のハケ目	良好	焼黄褐色 (10Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	1mm程度の茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		器一 目録一ト
146	鉢(胴)			へり器ナデ	ナデ	良好	焼黄褐色 (10Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	1mm程度の茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		器一 目録一ト
147	鉢			口縁部横ナデ、胴部細かなハケ	口縁部横ナデ、胴部ナデ	良好	にじい褐色 (7.5Y R 5)	にじい褐色 (7.5Y R 5)	0.1-2mmの茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		器一 目録一ト

国番号	遺 跡 名	遺物番号	器 種	調 整		焼 成	色 調		胎 土	備 考	型 式
				外 面	内 面		外 面	内 面			
第28区	SA 7	148	昇(口縁)	ナデ	ナデ、底部指による押さえ	良好	にじい褐色 (7.5Y R 5)	にじい褐色 (7.5Y R 5)	0.1-2mmの茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		
		149	鉢	横ナデ	横ナデ	良好	焼黄褐色 (10Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		
		150	鉢	横ナデ	横ナデ	良好	にじい褐色 (7.5Y R 5)	にじい褐色 (7.5Y R 5)	1-2mm程度の茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		
		151	鉢(口縁)	ナデ	横ナデ	良好	にじい褐色 (7.5Y R 5)	にじい褐色 (7.5Y R 5)	茶-黒、白っぽい砂粒を含む(4-6mm)		
		152	鉢(口縁)	横ナデ	横ナデ	良好	にじい褐色 (7.5Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	1mm程度の茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		
		153	鉢(口縁)	横ナデ	横ナデ	良好	焼黄褐色 (10Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	茶-黒、白っぽい砂粒を含む		
		154	鉢(口縁)	へり器ナデ	横ナデ	良好	にじい褐色 (7.5Y R 5)	にじい褐色 (7.5Y R 5)	茶-黒、白っぽい砂粒を含む		
		155	高足(鉢)	口縁部横ナデ、胴部上平肩のハケ目、胴部下半のへり器ナデ、胴部ハケ目	口縁部横ナデ、胴部ハケ目	良好	にじい褐色 (7.5Y R 5)	にじい褐色 (7.5Y R 5)	0.1-2mmの茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		器一 目録一ト
		156	高足(鉢)	ナデ?	へり器ナデ	良好	にじい褐色 (7.5Y R 5)	にじい褐色 (7.5Y R 5)	1-2mm程度の茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		器一 目録一ト
		157	底(口縁)	ナデ	ナデ	良好	焼黄褐色 (10Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	茶-黒、白っぽい砂粒を含む		器一 目録一ト
		158	底	胴部上平肩方向の細かなハケ目(9-12本/1m)胴部下半ナデ	口縁部横ナデ、胴部上半指による押さえ、胴部下半ナデ	良好	にじい褐色 (7.5Y R 5)	にじい褐色 (7.5Y R 5)	1mm程度の茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		器一 目録一ト
		159	ミナチア	口縁部横ナデ、胴部一部指による押さえ	横ナデ	良好	にじい褐色 (7.5Y R 5)	にじい褐色 (7.5Y R 5)	1mm程度の茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		器一 目録一ト
		160	ミナチア	指による押さえ	指による押さえ	良好	にじい褐色 (7.5Y R 5)	にじい褐色 (7.5Y R 5)	1mm程度の茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		器一 目録一ト
		161	ミナチア	指による押さえ	指による押さえ	良好	にじい褐色 (7.5Y R 5)	にじい褐色 (7.5Y R 5)	多量の鉄質、茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		器一 目録一ト
第30区	SC 1	162	底(口縁)	横ナデ	横ナデ	良好	焼黄褐色 (10Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	0.1-2mmの茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		器一 目録一ト
		163	底(口縁)	横ナデ	横ナデ	良好	にじい褐色 (7.5Y R 5)	にじい褐色 (7.5Y R 5)	0.5-2mmの小石を含む		
		164	底(口縁)	横ナデ	横ナデ	やや不良	焼黄褐色 (10Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	0.1-2mmの茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		
		165	横口鉢蓋(口縁)	笠形部縦波状文、胴部部分のハケ目	横ナデ、胴部ハケ目(4本/0.3m)	やや不良	焼黄褐色 (10Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	1-2mmの小石-砂粒を含む		横口鉢蓋付
		166	横口鉢蓋(口縁)	笠形部縦波状文、胴部ハケ目(6本/1cm)	横ナデ	不良	焼黄褐色 (10Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	2-3mmの小石を含む		
		167	横口鉢蓋(口縁)	横ナデ	横ナデ	良好	焼黄褐色 (10Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	0.1-2mmの茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		横口鉢蓋付
		168	横口鉢蓋(口縁)	笠形部縦波状文、胴部横ナデ	横ナデ	良好	焼黄褐色 (10Y R 5)	焼黄褐色 (10Y R 5)	1mm程度の茶-黒っぽい砂粒-小石を含む		横口鉢蓋付

弥生土器観察表

調査年度	遺跡名	遺物番号	器種	調 査		焼成	外 面		内 面		胎 土	備 考	型式
				外 面	内 面		外 面	内 面	外 面	内 面			
第33区	SC 1	169	蓋(口縁)	横ナゲ	横ナゲ	良好	浅黄褐色 (7.5YR 5/2)	浅黄褐色 (7.5YR 5/2)	0.1-2mmの小石を含む (黒曜石?)				
		170	灰皿	縦ヘラ磨き	横ナゲ	良好	上赤褐色 (10YR 5/3)	上赤褐色 (10YR 5/3)	0.1-2mmの茶葉・黒→白の砂粒を含む				
		171	甕	上半分ナゲ、下半分ハケ目、底部による押え	口縁部ハケ目、胴部ナゲ、一部ハケ目	中々軟質	上赤褐色 (10YR 5/3)	上赤褐色 (10YR 5/3)	2-3mmの小石を含む	口縁部は5mm厚、中下部は2.5mm厚			横・肩置
		172	甕(口縁)	口縁部横ナゲ、胴部横ナゲ	口縁部横ナゲ、胴部ハケ目	中々軟質	黄褐色 (10YR 5/2)	黄褐色 (10YR 5/2)	2-3mmの小石を含む				
		173	甕(胴)	横ナゲ	横ナゲ	良好	浅黄褐色 (10YR 5/2)	浅黄褐色 (10YR 5/2)	0.1-3mmの茶葉・黒→白の小石・砂粒を含む				
		174	鉢	ヘラ磨き	ヘラ磨き	良好	黄褐色 (10YR 5/2)	黄褐色 (10YR 5/2)	1-3mmの小石を多く含むが、黒の多い				横・肩置
		175	鉢	口縁部横ナゲ、胴部ヘラ磨き	ナゲ	中々軟質	浅黄褐色 (10YR 5/2)	黄褐色 (10YR 5/2)	0.1-1.5mmの茶・黒・黄褐色の小石を含む				横・肩置
		176	鉢(口縁)	口縁部横ナゲ、胴部ヘラ磨き	横ナゲ	良好	浅黄褐色 (10YR 5/2)	黄褐色 (10YR 5/2)	1mm程度の茶葉、黒の多い				
		177	鉢(口縁)	口縁部横ナゲ	ヘラ磨き	中々軟質	黄褐色 (10YR 5/2)	黄褐色 (10YR 5/2)	0.1-3mmの茶・黒→白の小石を含む				
		178	鉢(口縁)	横ナゲ	ナゲ	中々軟質	黄褐色 (10YR 5/2)	黄褐色 (10YR 5/2)	約2-3mm程度の茶葉を含む				
		179	甕(胴)	指による押え	指による押え	良好	上赤褐色 (10YR 5/3)	黒色	0.1-3mmの白・黒・茶→白の小石・砂粒を含む				
		180	鉢	横ナゲ	横ナゲ	中々軟質	浅黄褐色 (10YR 5/2)	黄褐色 (10YR 5/2)	0.1-2mmの茶葉・黒→白の小石を含む				横・肩置
		181	ミニチュア	横ナゲ	横ナゲ	良好	黒色	黒色	0.5-3mmの小石を含む				ミニチュア型
		182	ミニチュア	指による押え	指による押え	良好	浅黄褐色 (10YR 5/2)	浅黄褐色 (10YR 5/2)	茶の多いが、黒→白の砂粒を含む				ミニチュア型
		183	蓋(口縁)	ナゲ	ナゲ	良好	浅黄褐色 (10YR 5/2)	浅黄褐色 (10YR 5/2)	砂粒を含む				横・肩置
184	ミニチュア	指による押え	指による押え	良好	黄褐色 (10YR 5/2)	黄褐色 (10YR 5/2)	砂粒を含む				ミニチュア型		
第37区	SC 3	185	甕(口縁)	横ナゲの後縁ナゲ	横ナゲ	良好	上赤褐色 (10YR 5/3)	浅黄褐色 (10YR 5/2)	0.1-2mmの砂粒・小石を含む				
		186	蓋(口縁)	横ナゲ	横ナゲ	中々軟質	浅黄褐色 (10YR 5/2)	黄褐色 (10YR 5/2)	0.1-1.5mmの茶・黒→白の砂粒・黒曜石を含む				
		187	甕(口縁)	口縁部横ナゲ	横ナゲ	良好	浅黄褐色 (10YR 5/2)	浅黄褐色 (10YR 5/2)	砂粒を含む				横合口縁型
		188	甕(口縁)	口縁部横ナゲ	横ナゲ	良好	浅黄褐色 (10YR 5/2)	浅黄褐色 (10YR 5/2)	茶の多いが、砂粒を含む				
		189	甕(口縁)	口縁部横ナゲ	ナゲ	良好	浅黄褐色 (10YR 5/2)	浅黄褐色 (10YR 5/2)	茶の多いが、砂粒を含む				

調査年度	遺跡名	遺物番号	器種	調 査		焼成	外 面		内 面		胎 土	備 考	型式
				外 面	内 面		外 面	内 面	外 面	内 面			
第38区	SC 3	190	高麗釜?	上半部横線流状文、下半部ヘラ磨き	ハケ目	良好	上赤褐色 (10YR 5/3)	黒色	茶の多い				
		191	高麗釜?	上半部横線流状文、下半部ヘラ磨き	ハケ目	良好	浅黄褐色 (10YR 5/2)	浅黄褐色 (10YR 5/2)	茶の多い				
		192	甕(胴)	ナゲ	ナゲ	中々軟質	黄褐色 (10YR 5/2)	黄褐色 (10YR 5/2)	茶の多い				
		193	甕(口縁)	ハケ目 (13cm/1.6cm)	斜方ハケ目 (13cm/1.6cmと15cm/1.6cm)	良好	黄褐色 (10YR 5/2)	浅黄褐色 (10YR 5/2)	砂粒と1-2mmの茶葉・黒→白の小石を含む				
		194	甕(口縁)	ナゲ	ナゲ	中々軟質	浅黄褐色 (10YR 5/2)	浅黄褐色 (10YR 5/2)	0.1-3mmの茶葉・黒→白の小石を含む				スズ付者
		195	甕(口縁)	ナゲ	ナゲ	中々軟質	上赤褐色 (10YR 5/3)	黒色	0.1-1mmの茶葉・黒→白の小石を含む				スズ付者
		196	甕(胴)	指による押え	ナゲ	良好	黄褐色 (10YR 5/2)	黄褐色 (10YR 5/2)	茶・黒→白の小石・砂粒を含む				器内内部にヘラ目
		197	甕(胴)	指による押え	ナゲ	良好	浅黄褐色 (10YR 5/2)	浅黄褐色 (10YR 5/2)	0.1-3mmの茶葉・黒→白の小石・砂粒を含む				
		198	鉢	口縁部横ナゲ、胴部ヘラ磨き	横ナゲ	中々軟質	黄褐色 (10YR 5/2)	黄褐色 (10YR 5/2)	茶の多いが、1-2mm程度の茶葉・黒→白の小石を含む				横・肩置
		199	鉢(口縁)	横ナゲ	横ナゲ	中々軟質	黄褐色 (10YR 5/2)	黄褐色 (10YR 5/2)	茶の多いが、1-1mm程度の砂粒を含む				
		200	ミニチュア	指による押え	指による押え	良好	上赤褐色 (10YR 5/3)	黄褐色 (10YR 5/2)	0.1-3mmの砂粒・小石を含む				ミニチュア型
		201	ミニチュア	指による押え	指による押え	良好	上赤褐色 (10YR 5/3)	黄褐色 (10YR 5/2)	0.1-3mmの砂粒・小石を含む				ミニチュア型
		202	ミニチュア	指による押え	指による押え	良好	上赤褐色 (10YR 5/3)	黄褐色 (10YR 5/2)	1mm程度の砂粒を含む				ミニチュア型
		203	ミニチュア	ていねいな横ナゲ	ていねいな横ナゲ	良好	上赤褐色 (10YR 5/3)	黄褐色 (10YR 5/2)	砂粒を含む				ミニチュア型
		204	高環(樽)	ナゲ	ナゲ	良好	上赤褐色 (10YR 5/3)	黄褐色 (10YR 5/2)	0.1-1mmの茶・黒・白→黒い砂粒を含む				胴部下に等尺
205	甕(口縁)	口縁部横ナゲ、胴部ヘラ磨き	ナゲ	良好	黄褐色 (10YR 5/2)	黄褐色 (10YR 5/2)	1mm程度の茶葉・黒→白の小石を含む				胴部下に等尺		
第39区	SC 4	206	甕(口縁)	ナゲ (縦0.6-1cmの厚みを使用)	ナゲ	中々軟質	黄褐色 (10YR 5/2)	黄褐色 (10YR 5/2)	茶の多いが、1mm程度の茶葉・黒→白の小石を含む				甕合・肩置
		207	甕(口縁)	横ナゲ	横ナゲのあとハケ目	良好	上赤褐色 (10YR 5/3)	上赤褐色 (10YR 5/3)	黒・白→黒い砂粒を含む				
		208	蓋(口縁)	横ナゲ	横ナゲ	良好	上赤褐色 (10YR 5/3)	上赤褐色 (10YR 5/3)	黒・白→黒い砂粒を含む				
		209	甕(口縁)	横線流状文	横ナゲ	良好	浅黄褐色 (10YR 5/2)	黒色	茶・黒→白の砂粒を含む				
		210	甕合(口縁)	横ナゲ	横ナゲ	良好	浅黄褐色 (10YR 5/2)	浅黄褐色 (10YR 5/2)	0.1-2mmの茶葉・黒→白の小石を含む				横合口縁型





弥生土器観察表

図番番号	遺構名	遺物番号	器種	観 察		焼 成 色 調		胎 土	備 考	型 式	
				外 面	内 面	外 面	内 面				
第43図	S C10	295	甕(口縁)	横ナデ	横ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	1mm粒の茶・黒・白の砂粒を含有			
		296	甕(口縁)	横ナデ	横ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	1mm粒の茶・黒・白の砂粒を含有			
		297	甕(口縁)	拡張部縮径状況、胴部ナデ	横ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	1mm粒の茶・黒・白の砂粒を含有			
		298	甕(口縁)	拡張部行周文、胴部横ナデ	ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	茶・黒・白の砂粒を含有		甕(口縁)型	
		299	甕(胴部)	指による押さえ	胴部下平ナデH、底部指による押さえ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	1mm粒の茶・黒・白の砂粒を含有			
		300	鉢(底部)	指による押さえ	指による押さえ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	茶・黒・白の砂粒を含有			
		301	鉢	ナデ	ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	1mm粒の茶・黒・白の砂粒を含有(中心)			
		302	鉢	口縁部横ナデ、胴部へウ磨き	口縁部横ナデ、胴部へウ磨き	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	1mm粒の茶・黒・白の砂粒を含有		鉢・1型	
		S C12	303	甕(口縁)	ていねいな横ナデ	ていねいな横ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	1mm粒の茶・黒・白の砂粒を含有		
		304	甕(口縁)	胴部横ナデ	胴部横ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	0.1-2mmの茶・黒・白の砂粒を含有			
305	甕(口縁)	横ナデ	横ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	0.1-2mmの茶・黒・白の砂粒を含有					
306	甕(口縁)	ナデ	ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	0.1-2mmの茶・黒・白の砂粒を含有					
第45図	G-9	307	甕(口縁)	拡張部一側部横ナデ	横ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	1mm粒の茶・黒・白の砂粒を含有			
		H-19	308	甕(胴部)	ていねいなナデ	ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	1mm粒の茶・黒・白の砂粒を含有		
		H-8	309	甕(底部)	ていねいなナデ	ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	1mm粒の茶・黒・白の砂粒を含有		
		G-3	310	甕(底部)	ナデ	ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	0.1-2mmの茶・黒・白の砂粒を含有		
		H-7	311	甕(口縁)	横ナデ	横ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	1mm粒の茶・黒・白の砂粒を含有		
		312	甕	口縁~胴部ナデ、底部指による押さえ	ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	1mm粒の茶・黒・白の砂粒を含有			
		G-12	313	甕(口縁)	ナデ	ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	1mm粒の茶・黒・白の砂粒を含有		
		H-3	314	甕(底部)	胴部下平ナデ、底部指による押さえ	ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	1mm粒の茶・黒・白の砂粒を含有		甕(口縁)型
		G-3	315	甕(底部)	胴部下平ナデ、底部指による押さえ	ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	1mm粒の茶・黒・白の砂粒を含有		

図番番号	遺構名	遺物番号	器種	観 察		焼 成 色 調		胎 土	備 考	型 式	
				外 面	内 面	外 面	内 面				
第46図		316	鉢	横ナデ	横ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	1mm粒の茶・黒・白の砂粒を含有		鉢・1型	
		H-22	317	鉢	横ナデ	指による押さえ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	0.1-2mmの茶・黒・白の砂粒を含有		
		G-9	318	高趾(胴部)	胴部横ナデ、胴部へウ磨き	ていねいな横ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	0.5-2mmの茶・黒・白の砂粒を含有		
		319	鉢(底部)	横ナデ	横ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	0.5-2mmの茶・黒・白の砂粒を含有		鉢・1型	
		S K36	320	鉢	縦線刻文、胴部と底部へウ磨き	横ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	1mm粒の茶・黒・白の砂粒を含有		甕(口縁)型
		G-9	321	(胴部)	へウ磨き	ナデ	黄緑	淡黄色 (5.5Y R 5)	0.1-2mmの茶・黒・白の砂粒を含有		

表13 鉄器・石器・玉類出土地名表

※文献は弥生時代の遺構と遺物の証書号である

遺跡名	遺構	刀	剣	鏃	刀子	鏃	鏃先	鉄片	石器	玉類	その他の遺物	立地	標高 (m)	比高差 (%)	時期 (注1)	備考	文献
東平下1号	環溝墓	1							石甕丁	土製勾玉	庄内系帛衾	台地	約97		庄内併行		25
中之道A遺跡	住居跡			1					石甕丁			台地			*	バッド改遺構	26
肥田遺跡	*			1					石甕丁(片)	石甕丁(片)		台地縁辺			*		28
特出-2号	*			1					石甕丁(片)	石甕丁(片)		台地縁辺			*		28
下郷倉庫跡	古墳	1	1								コンクリート製勾玉, 土製勾玉, 土製玉	河原段丘	約95	12-15	4世紀前半		29
下郷河原跡				1					団石			台地東端			後期		30
石神遺跡					1				磨製石, 土製勾玉	磨製石製品, 磨製玉	砂丘	約10		中 期			31
堂地東	SA1									磨製石製品		台地	30	10	中期前半		32
*	SA2								磨製石器						*	付録5の1(5)	*
*	SA5			1				○			円形浮文				後期前半	磨製石(1)	*
*	SA6			1				○			円形・磨製文				*		*
*	SA10								磨製石器							磨製石(1)	*
*	SA12							○							後期前半	磨製石(1)	*
*	SA14							○							*		*
*	SA16							○								磨製石(1)	*
*	SA17			2												磨製石(1)	*
*	SC10								磨製石							後期前半	*
熊野原B	SA7								磨製石製品			台地縁辺	約14	約1.5	後期後半	尖形玉-2	7
*	SA10								磨製石製品	ガラス小玉					*	尖形玉-1	5
*	土紀1								磨製石製品	磨製小玉						古墳期	7
涌出	SA3			1					石甕丁			台地	21	約10	後期後半		32

遺跡名	遺構	刀	剣	鏃	刀子	鏃	鏃先	鉄片	石器	玉類	その他の遺物	立地	標高 (m)	比高差 (%)	時期	備考	文献
涌田	3M43CH									土製玉					後期後半		32
*	SA7									土製勾玉					*	涌田遺跡内で最大規模	*
*	SC1									土製玉					*		*
*	SC3								石甕丁		器内				*		*
*	SC4								燧石						*		*
熊野原C	SA1								石甕丁		小型丸底帛	台地	19	5	古墳初期		32
*	SA5			1					燧石, 磨製石製品		*				*		*
*	SA7			1											*		*
*	SA10			1					磨製石製品	管玉	*				*		*
*	SA11								磨製石製品						*		*
*	SA12								団石, 磨石						*		*
*	SA14								燧石, 団石		磨製石(1)				*		*
*	SA19				1				磨製石製品		小型丸底帛				*		*
*	SC4								燧石						*		*
熊野原北	2号住						1								*	磨製石(1)	7
坂吉第1	Y-1								磨製石製品	石甕丁	磨製石(1), 磨製玉, 磨製石(1)	河原段丘	150	10	*	磨製石(1)	33
*	Y-2								磨製石製品	石甕丁(片)	磨製石(1), 磨製玉, 磨製石(1)				*	磨製石(1)	*
*	Y-3								磨製石製品						*		*
坂吉第2	1号住								磨製石製品			河原段丘	150	10	*		34
*	7号住				1		1		石甕丁(片)	磨製石製品	土製玉				*	磨製石(1)	*
*	10号住								石甕丁, 燧石						*	磨製石	*

鉄器・石器・玉類出土地名表 (3)

※本文は弥生時代の遺跡と遺物の総量に対するものである

遺跡名	連絡	刀	剣	鏃	刀子	鏃	鍬	鉄片	石器	玉類	その他の遺物	立地	標高 (m)	北偏差 (°)	時期	備考	文献	
祝吉遺 2	13号住							○	石盾丁41 砥石41	碧玉 ガラス製小玉		台地縁辺	147	16	前期-後期	実金量-1	34	
丸谷遺 1	1号住			1					石盾丁 石盾丁			台地縁辺			後期後半	前期(1)期	35	
*	2号住										(遺玉類あり)					*	*	
上野野原	1号住			1								台地縁辺	130-130	20	古墳期?		36	
*	2号住															*		
早見川-2号	接防跡			1		1			鞘心製品 心盾丁 石盾丁 石盾丁2 磨製石櫛片			台地縁辺			後期?		27	
大 萩	1号住								石盾丁2 磨製石櫛片			台地縁辺	172	30	後期後半	突出群-2	10	
*	2号住								石盾丁						*		*	
*	4号住														*		* 張り出し	
*	5号住								石盾丁 砥石	石盾丁片					*		*	
*	2号遺跡								砥石 / 石片			台地縁辺	約 170	30	*		37	
*	4号土壌								小玉	「袋田式」 磨製品		台地	200	40	*		*	
*	6号土壌								小玉						*		*	
藤 井 平									磨製小玉 砥石, 磨石	碧玉	磨製石櫛片 遺品あり	台地	400	約 10	中 期		38	
渡 部	野間遺跡								磨石片 石盾丁 石盾丁 石盾丁	磨製品		内地	約 38	約 50	中期前半	付随物群 V遺	39	
中 尾	住居跡								磨製品 磨石 磨石 磨石	石制, 石戈		内地縁辺	約 40	約 30	前期後半	*	24	
牛 牧	住居跡								石盾丁 石盾丁 石盾丁			内地	80		後 期		40	
熊 野 北	土坑 5								石盾丁			内地	20	4	中期後半		7	
新 田 郎	4号住								磨製小玉 磨製石櫛			台地	約 90		後期初葉			
*	5号住								磨製石櫛						*			

表14 柱穴一覽表

No.	高さ (cm)	直径 (cm)	深さ (cm)	埋 土	出土 遺 物
1	64	44	41.8	暗褐色土 (軟質)	
2	50	48	41.7	暗褐色土 (軟質)	弥生土器
3	76	30	34.1	暗褐色土 (軟質)	弥生土器, 縄文土器 土師器小玉
4	46	32	44.5	暗褐色土 (丸まき)	弥生土器, 縄文土器
5	46	40	26.2	暗褐色土 (軟質)	縄文土器
6	41	38	69.0	明褐色土	
7	34	29	17.7	暗褐色土 (軟質)	
8	38	34	17.4	明褐色土 (軟質)	
9	50	25	27.8	暗褐色土 (軟質)	
10	38	34	31.1	暗褐色土	弥生土器, 縄文土器
11	43	36	42.6	明褐色土	弥生土器, 縄文土器
12	40	38	16.4	暗褐色土 (軟質)	
13	42	36	15.8	暗褐色土	弥生土器
14	35	31	30.5	暗褐色土 (軟質)	
15	30	25	57.0	暗褐色土 (軟質)	
16	50	44	45.1	暗褐色土 (軟質)	
17	60	50	43.2	暗褐色土	
18	48	40	53.6	暗褐色土 (軟質)	
19	45	41	45.3	暗褐色土 (赤平土混入)	
20	52	47	25.6	暗褐色土	
21	45	40	21.2	暗褐色土 (赤平土混入)	
22	50	35	28.8	暗褐色土 (赤平土混入)	
23	47	43	25.5	暗褐色土	弥生土器
24	35	40	54.7	暗褐色土	弥生土器

No.	高さ (cm)	直径 (cm)	深さ (cm)	埋 土	出 上 遺 物
25	49	44	37.8	明褐色土	弥生土器
26	40	37	27.0	暗褐色土 (軟質)	
27	29	37	23.1	明褐色土 (赤平土混入)	
28	38	33	24.7	暗褐色土	
29	44	40	23.8	暗褐色土 (軟質)	
30	54	37	50.0	暗褐色土	弥生土器
31	40	37	26.7	暗褐色土	
32	39	36	33.4	暗褐色土	弥生土器
33	34	32	13.1	暗褐色土	
34	48	44	29.0	暗褐色土 (赤平土混入)	弥生土器
35	30	26	24.5	暗褐色土 (赤平土混入)	
36	61	40	25.0	暗褐色土 (赤平土混入)	弥生土器
37	44	36	12.1	暗褐色土 (赤平土混入)	弥生土器
38	58	41	21.3	暗褐色土 (軟質)	土師器小玉
39	40	32	17.5	暗褐色土	弥生土器
40	29	14	12.0	暗褐色土	
41	30	33	49.3	暗褐色土	
42	46	38	31.3	暗褐色土	弥生土器, 須恵器
43	68	50	52.8		弥生土器, 布版土器 縄文土器
44	78	60	30.5		
45	18	13	17.7		弥生土器
46	42	41	28.9		弥生土器, 灰化物
47	28	20	21.0		土師器小玉, 弥生土器
48	23	21	39.6		弥生土器

表15 土器観察表

番号	出土位置	器種	器形	法 量 (cm)			色 調			胎 質	装 飾			分類	備 考	
				口径	底部	器高	内面	外面	内面		外面	内面	外面			底部
1	SA2	土師器	埴	15.7	7.0	6.0	にじい黄褐色 (10YR 5/6)	にじい黄褐色 (10YR 5/6)	1~2mmの小石を若干含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類	断面にスス付着	
2	SA2	*	*	13.4	6.4	4.0	黄栗褐色 (7.5YR 5/6)	黄栗褐色 (7.5YR 5/6)	赤みが強い	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類		
3	SA2	*	*	16.2	8.0	5.3	黄 色 (5YR 5/6)	黄 色 (5YR 5/6)	赤みを含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類	やや歪みあり	
4	SA2	*	*	12.0	7.1	3.7	黄栗褐色 (10YR 5/6)	黄栗褐色 (10YR 5/6)	赤みが強い	やや不良	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類	1mm程度の黒いスス付着	
8	K-11	*	*	12.4	5.9	5.5	黄 色 (5YR 5/6)	黄 色 (5YR 5/6)	赤みが強い 1mm程度の黒い砂粒を若干含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類	断面に黒いスス付着	
9	—	*	*	—	7.2	—	黄栗褐色 (10YR 5/6)	黄栗褐色 (10YR 5/6)	赤みが強い	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類		
10	SA7	*	*	16.3	9.4	5.5	黄栗褐色 (7.5YR 5/6)	黄栗褐色 (7.5YR 5/6)	赤みが強い 黒いスス付着	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類	SA7ホケラン出土	
11	J-8	*	*	—	13.4	6.8	5.1	黄栗褐色 (10YR 5/6)	黄栗褐色 (10YR 5/6)	赤みが強い 黒いスス付着	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類	断面に黒いスス付着
12	F-16	*	*	—	7.4	—	黄 色 (5YR 5/6)	黄 色 (5YR 5/6)	赤みが強い 白っぽい砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類	底が平しい	
13	H-16	*	*	—	6.5	—	黄 色 (5YR 5/6)	黄 色 (5YR 5/6)	赤みが強い	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類		
14	J-21	*	*	—	5.6	—	黄栗褐色 (7.5YR 5/6)	黄栗褐色 (7.5YR 5/6)	赤みが強い	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類		
15	F-16	*	*	—	7.4	—	黄栗褐色 (7.5YR 5/6)	黄栗褐色 (7.5YR 5/6)	赤みが強い 黒いスス付着	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類		
16	H-21	*	*	—	7.7	—	黄栗褐色 (7.5YR 5/6)	黄栗褐色 (7.5YR 5/6)	赤みが強い	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類		
17	I-21	*	*	—	6.5	—	にじい黄褐色 (10YR 5/6)	にじい黄褐色 (10YR 5/6)	赤みが強い	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類		
18	O-11	*	*	—	6.2	—	黄 色 (5YR 5/6)	黄 色 (5YR 5/6)	赤みが強い 1mm程度の黒い砂粒を若干含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類	断面が見える	
19	O-17	*	*	—	6.7	—	黄栗褐色 (5YR 5/6)	黄栗褐色 (5YR 5/6)	赤みが強い	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類		
20	SA1	*	*	—	6.4	—	黄栗褐色 (10YR 5/6)	黄栗褐色 (10YR 5/6)	赤みが強い	やや不良	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類		
21	J-21	*	*	—	9.2	6.8	1.9	黄栗褐色 (10YR 5/6)	黄栗褐色 (10YR 5/6)	赤みが強い	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類	
22	L-12	*	*	—	8.2	6.0	1.4	黄栗褐色 (10YR 5/6)	黄栗褐色 (10YR 5/6)	赤みが強い 黒いスス付着	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類	
23	SH47	*	*	—	9.6	6.0	1.9	黄栗褐色 (10YR 5/6)	黄栗褐色 (10YR 5/6)	赤みが強い 黒いスス付着	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類	底が平しい
24	G-12	*	*	—	8.5	6.4	1.4	黄 色 (7.5YR 5/6)	黄 色 (7.5YR 5/6)	赤みが強い 1mm程度の黒い砂粒を若干含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類	

番号	出土位置	器種	器形	法 量 (cm)			色 調			胎 質	装 飾			分類	備 考	
				口径	底部	器高	内面	外面	内面		外面	内面	外面			底部
25	H-11	土師器	埴	8.6	5.8	1.9	黄栗褐色 (7.5YR 5/6)	黄栗褐色 (7.5YR 5/6)	赤みが強い 黒いスス付着	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類		
26	G-12	*	高付付埴	—	6.6	—	にじい黄褐色 (5YR 5/6)	にじい黄褐色 (5YR 5/6)	赤みが強い	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類		
27	G-12	*	*	—	8.4	—	黄栗褐色 (10YR 5/6)	黄栗褐色 (10YR 5/6)	赤みが強い	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類		
28	G-12	*	*	—	7.9	—	にじい黄褐色 (7.5YR 5/6)	にじい黄褐色 (7.5YR 5/6)	赤みが強い	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類		
29	F-15	*	黒色土埴	—	9.4	—	黄 色 (10YR 5/6)	黄栗褐色 (10YR 5/6)	赤みが強い 白っぽい砂粒を若干含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類		
30	G-13	*	*	—	9.9	6.2	2.6	黄栗褐色 (10YR 5/6)	にじい黄褐色 (7.5YR 5/6)	赤みが強い	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	埴・I類	
31	H-15	*	埴	22.6	—	—	にじい黄褐色 (7.5YR 5/6)	にじい黄褐色 (7.5YR 5/6)	0.5~3mmの黒い砂粒を若干含む	良好	横ナデ	横ナデ	—	埴・I類		
32	F-14	*	*	24.5	—	—	黄 色 (5YR 5/6)	黄 色 (5YR 5/6)	0.5~3mmの黒い砂粒を若干含む	良好	横ナデ	横ナデ	—	埴・I類		
33	G-15	*	*	25.0	—	—	にじい黄褐色 (10YR 5/6)	にじい黄褐色 (10YR 5/6)	1mm程度の黒い砂粒を若干含む	良好	横ナデ	横ナデ	—	埴・I類	スス付着	

土器観察表

No.	遺構	器種	器形	法量 (cm)			色 調		胎 土	焼 成	観 察		備 考
				口径	底部	器高	内面	外面			内面	外面	
6	SA 2	須 置 器	須 置 器	—	—	—	赤褐色	赤褐色	0.5-2mmの赤・黒っぽい砂粒を若干含む	硬質	布張	指ナデ	縦 9cm/横 9cm/1cm
7	SA 2			—	—	—	赤褐色	赤褐色	1mm程度の赤っぽい砂粒と透明な粒を含む	硬質	布張	ナデ	縦 10cm/横 8cm/1cm
34	F-15			—	—	—	灰赤褐色	赤褐色	0.5-3mmの赤・黒っぽい砂粒・小石を含む	良好	布張	指ナデ	縦 7cm/横 9cm/1cm
35	O-17			—	—	—	赤褐色	赤褐色	0.1-1mmの赤・黒っぽい砂粒・小石を含む	良好	布張	ナデ	縦 8cm/横 7cm/1cm
36	F-16			—	—	—	赤褐色	淡赤褐色	1mm程度の赤・黒っぽい砂粒を含む	硬質	布張	ナデ	縦 10cm/横 9cm/1cm 1部に2次の変色あり
37	O-16			—	—	—	赤褐色	赤褐色	1-3mmの赤・黒っぽい砂粒・小石と1mm程度の赤を含む	良好	布張	ナデ	縦 14cm/横 14cm/1cm
38	K-19			—	—	—	明赤褐色	暗赤褐色	1mm程度の赤っぽい砂粒を若干含む	良好	布張	指ナデ	磨耗が激しい
39	F-17			—	—	—	赤褐色	赤褐色	灰・黒っぽい砂粒を若干含む	良好	布張	指ナデ	縦 7cm/横 7cm/1cm
40	H-16			—	—	—	暗褐色	暗褐色	1mm程度の褐色の砂粒を含む	硬質	布張	ナデ	縦 9cm/横 7cm/1cm
41	—			—	—	—	赤褐色	赤褐色	0.5-2mmの赤・黒っぽい砂粒・小石を含む	良好	布張	ナデ	縦 11cm/横 9cm/1cm
42	—			—	—	—	暗褐色	淡赤褐色	1-3mmの赤・黒っぽい砂粒と透明な粒を含む	硬質	布張	ナデ	縦 7cm/横 11cm/1cm
43	F-17			—	—	—	赤褐色	淡赤褐色	1mm程度の赤・黒っぽい砂粒を含む	良好	布張	指ナデ	縦 10cm/横 6cm/1cm
44	K-19			—	—	—	淡赤褐色	暗赤褐色	0.5-1mmの赤っぽい砂粒・小石を含む	良好	布張	指ナデ	磨耗が激しい
5	SA 2			—	—	—	淡青灰色	淡青灰色	1mm以下の赤っぽい砂粒を含む	良好	ナゲ消し	指ナデ	
45	F-17			—	—	—	青灰色	青灰色	1mm程度の白っぽい砂粒を若干含む	良好	横ナデ	横ナデ 格子目印き	口縁内面に自然釉
46	—			—	—	—	青灰色	灰色	1mm程度の白っぽい砂粒を若干含む	良好	横ナデ 内によるナゲ	横ナデ 格子目印き	外面に自然釉
47	L-13	須 置 器	須 置 器	—	—	—	青灰色	淡青灰色	1mm程度の赤・白っぽい砂粒を含む	良好	ナゲ消し	格子目印き	
48	O-16	—	—	—	淡青灰色	淡青灰色	1mm程度の白っぽい砂粒を若干含む	良好	ナゲ消し	格子目印き			
49	G-16	—	—	—	—	—	青灰色	青灰色	1mm程度の赤っぽい砂粒を含む	良好	瓶よけ消し	格子目印き	
50	O-11	—	—	—	—	—	淡赤灰色	淡赤灰色	1mm程度の白っぽい砂粒を含む	良好	ナゲ消し	格子目印き	
51	O-16	—	—	—	—	—	灰色	淡青灰色	1mm程度の赤っぽい砂粒を若干含む	良好	ナゲ消し	格子目印き 外面に一部自然釉	

No.	遺構	器種	器形	法量 (cm)			色 調		胎 土	焼 成	観 察		備 考		
				口径	底部	器高	内面	外面			内面	外面			
52	—	須 置 器	須 置 器	—	—	—	青灰色	灰色	1mm程度の赤っぽい砂粒を含む	良好	平行条線の印き	格子目印き			
53	L-10			—	—	—	青灰色	灰色	1mm以下の白っぽい砂粒を若干含む	良好	ナゲ 格子目印き		格子目印き	外面に自然釉	
54	G-16			—	—	—	暗青灰色	暗青灰色	1mm程度の白っぽい砂粒を若干含む	良好	同心円文 格子目印き		格子目印き		
55	F-17			—	—	—	淡赤灰色	赤灰色	1mm程度の赤っぽい砂粒を若干含む	良好	同心円文	平行条線			
56	—			—	—	—	青灰色 一部灰色	淡青灰色 一部灰色	1mm程度の赤っぽい砂粒を若干含む	良好	同心円文	平行条線			
57	G-14			—	—	—	青灰色 一部灰色	灰色 一部青灰色	1mm程度の赤っぽい砂粒を若干含む	良好	平行条線の印き	格子目印き 同心円文		内外面に自然釉。焼中が一部あり	
58	F-16			—	—	—	青灰色	赤灰色	1mm程度の白っぽい砂粒を若干含む	良好	格子目印き 同心円文		格子目印き		
59	I-21			須 置 器	須 置 器	—	—	—	淡青灰色	淡青灰色	1mm程度の赤っぽい砂粒を若干含む	良好	横ナデ	横ナデ	
60	I-21			須 置 器	須 置 器	—	—	—	淡赤灰色	青灰色	1mm程度の赤っぽい砂粒を若干含む	良好	横ナデ	横ナデ	
61	—			環	—	5.7	—	—	青灰色	青灰色	1mm程度の赤っぽい砂粒を若干含む	良好	横ナデ	横ナデ	底部はへう切り
65	E区			陶器	筒鉢	35.6	16.2	14.2	暗赤褐色	赤褐色	0.1-1mmの赤・白っぽい砂粒・小石を多く含む	良好	横ナデ	横ナデ	口縁部に一部黒釉。底部に縦状圧痕

土器観察表

№	遺構	器種	器形	口径 (cm)	高有径 (cm)	器高 (cm)	高台高 (cm)	備 考		
66	Ⅱ区	壺	瓶	10.8	4.4	5.7	0.7	胎土は白色、遺付きに砂付着、内面下半にも砂付着、見込みは1.4cm程で薄く輪が内側に張り取られる。片向は二ホを単位とする縦線の線文。		
67	*			11.0	4.2	5.2	0.9	胎土は白色、遺付きに砂付着、見込みは、約1cm程で内面に輪が張り取られる。外側は二ホを単位とする縦線の線文。		
68	*			10.8	3.8	6.3	0.8	胎土は白色、遺付きに砂付着、外面は、淡青色の文様(線文?)内側の口縁部及び見込みに線文。		
69	*			11.2	5.4	5.8	0.8	胎土は白色、外面は鳥と草を兼ねた文様?、見込みに鳥文?、全体に淡黄褐色をなし二次的焼成を受けた可能性がある。		
70	*			11.2	4.2	5.7	0.7	胎土は白色、外面に草花文、内面に線文(骨)。		
71	*			10.6	4.0	5.5	0.8	胎土は白色、見込みに約2cm程で腹筋をなし、砂付着、外面に鳥文。		
72	*			8.6	3.4	5.2	0.7	胎土は白色、外面上半に線文(骨)、胴部下半に縦列字文。		
73	*			9.2	3.8	5.3	0.7	胎土は白色、胴部下半に一部砂付着、外面に鳥・松葉文、見込みに文様。		
74	*			8.6	3.8	5.6	0.5	胎土は白色、外面に鳥と草を兼ねた文様。		
75	*			8.4	3.7	5.7	0.5	胎土は灰白色、淡黄褐色釉、内面は黒色で滑い、外面は竹葉文?胴部下半に砂付着。		
76	*	壺	瓶	9.0	3.4	1.8	0.4	胎土は白色、見込みに縦1.3cmの腹筋、内面に線文(骨)。		
77	*			9.1	3.8	2.9	0.8	胎土は灰色、遺付き一部腹筋、内外側口縁部に上下の重線文、胴部は花文、高台内に「」の文字、見込みに鳥文。		
78	*			13.7	6.5	3.2	0.3	胎土は灰白色、見込みに縦1.4cmの腹筋の部分がある、遺付きに砂付着、内面に草花文。		
79	*			13.8	8.0	3.5	—	胎土は灰色、底部は唇状をなし、一部スス付着、外面は草文、内面は風景画?、遺付きは青褐色をなし。		
80	*			8.8	3.7	2.4	0.6	胎土は白色、口縁縁部及び遺付きに砂付着、見込みは縦1cmで内側の腹筋をなし、青白色釉、胴部は輪付。		
81	*			9.5	4.4	2.5	0.6	胎土は白色、口縁縁部及び遺付きに砂付着、見込みに重ねねの目、口縁部一部亀裂、青白色釉。		
82	*			7.2	3.0	3.0	0.5	胎土は白色、遺付きは一部腹筋、胴部下半に輪付、見込みに一部砂が露出。		
83	*			茶 壺	瓶	7.9	5.7	3.2	1.3	胎土は褐色、外面は明褐色をなし、釉を被る、内面は黒色、内外面とも横ナズ。
84	*					14.6	11.0	5.1	1.5	胎土は暗褐色、砂粒を含む、外面は暗褐色をなし、薄く釉を被る、内面も暗褐色、内外面とも横ナズ。

### 第三章 入料遺跡の調査

入料遺跡の位置付けは、発掘調査当初、学園都市遺跡群の第一番に着手されたものであるだけに全体像の中で見え難い所があった。現在、ことに入料遺跡周辺の遺跡の発掘調査が完了し、各遺跡間との有機的な関係も指摘、考察されるようになった。

(1)

遺跡の内容については、既に報告済みであるため、その後の調査の成果により知り得た知見を加え、入料遺跡をまとめておきたい。

縄文時代早期の集石遺構にからむ問題については、入料遺跡の南の山越えの地点に位置する堂地西遺跡で良好な時期決定の資料などが得られているので詳細な説明はそちらにゆずるとして、ここでは結論的なものを採用して記述を進めたい。

堂地西遺跡の集石遺構の焼石を試料とした熟ルミネッセンス法による年代測定の結果は、B. P. 7,000～8,000年、B. P. 8,000～9,000年、B. P. 9,000～10,000年、B. P. 12,000～14,000年のおおよそ四つの年代差が存在することを立証した。このことは、考古資料の方からいえば、塞ノ神式土器、爪形文系土器、剥片尖頭器・ナイフ形石器の三種の年代差をもつ遺物群とも対応するものであり、矛盾するものではない。従って、塞ノ神式土器を中心とする遺跡群の年代観は、B. P. 8,000年前後とすることが出来る。入料遺跡で検出されたのは塞ノ神B式土器のほか、貝殻条痕文土器、縄紋施文土器、押型文土器の各々細片があるが、その一つ一つの時期差を決定付ける層間的な差異は確認し難いものであった。このことは、県内において縄文早期土器文化の多様性をはじめて発掘調査の結果として展開させた清武町辻遺跡においても同様のことが言えよう。解決の方途としては、熟ルミネッセンス法によるならば、各型式の土器最低10片程を試料として年代差のばらつきを比較してみることも考えられるが、いまだ果せないでいる。そういった段階では、いやたとえ果せたとした段階でも、旧石器時代から縄文時代早期までの年代観の差を1,000年、あるいは500年さらには100年単位とどこまで縮め、同時性を保証し得るかは、ついに最後の課題として残されるように思う。それに対して、細かな土器製作上のテクニックの共通性、文様施文法のクセなり共通性から、微視的に同期性あるいは同一性を確定する方法も示され得ようと思う。

しかし、これらの課題を検討するに、入料遺跡も含め学園都市遺跡群の中においてほとんどいってよい遺跡から早期所産の集石遺構が検出されているものの、決定付ける遺物——ことに土器——の出土に乏しいことは、第1に指摘しておかねばならない。このことは、県内の資料を考慮する時、学園都市遺跡群に限られる問題ではなく、集石遺構の周辺において土器量が少ないことはほとんどにおいて指摘し得ることであり、早期それ自体の土器生産の絶対量が極めて低いということも想定されることとあわせて、この問題の難関があるのと同時に、逆にそのことが早期文化の性格付けなり位置付けともなうと思われる。ただ、詳細には、集石遺構を含む早期遺跡の中で、辻遺跡、田野町芳ヶ迫遺跡とその周辺遺跡がいわば例外的に土器の出土量が多いことは注目されるであろう。そして、ことに芳ヶ迫遺跡と一連の遺跡は、現在のところ芳ヶ迫第1・第2、札ノ元、又五郎の4遺跡に分けられるが、おおよそ3枝に分れた丘陵上に占地するもので、土器残留の豊富さ、又五郎、札ノ元での竪穴住居跡、土壌の検出などアカホヤ層下における生活を復元する上で格好の好資料が得られている。それらの成果は現在整理中で、本報告が未刊の段階であるため、ここでは今後の若干の見通しの中で入料遺跡の早期文化の在り方を総括しておきたい。

入料遺跡は立地的にも北東に向けひらけた平坦地にあり、わずかに3基の集石遺構を所産することからも長期的かつ拠点的な早期遺跡としては成長し得ず、短期的に営まれたものとみられる。それは、学園都市遺跡群の中で最も北西に位置する下田畑から赤坂、そして入料へは早期の縄文時代人にとっては同一テリトリーの中に機能し得ていた

と思われるし、上越えをして堂地西と結ぶことも、分布調査の段階でわたしたち現代人もちょうど入料遺跡の脇から山越えして堂地西を確認したことからすれば、その山越えは狩猟、採集の日常行動の範囲に含まれる筈である。従って、丘陵地を南～西に背にしたこれら一連の遺跡は、有機的に機能し合うものであったと想定するところに入料遺跡の位置付けをみたい。

また集石遺構については、堂地西の熱ルミネッセンス法による分析の結果、肉眼的にみて焼けていないと思われたものが、加熱されていた例はあったが、肉眼観察で焼けていると思われたものはすべて観察通りであったことからしても、焼石と呼べるものであることは間違いはなく、石蒸し（Earth oven）の機能を当てたい。しかし、3基の内1・3号は下部に明瞭な掘り込みのないことから、使用後の廃棄物の集石とも考えられる。

一方、出土土器については、波状貝殻痕文土器は先述の辻、それに野尻町様遺跡と類例は増加している。鹿児島県下剝峯遺跡のⅡa類土器とするものが、入料出土例より整然と一定の文様意匠をもって「クシ目状の施文具」で鋸歯状ないしは波状に施文するものがあり、文様施文の傾向としてはそれに近い関係にあるものと思われる。しかし、入料出土例は貝殻腹縁を施文具とするとみられ、また波状の文様も統一性なり企画性はみられない。

さて、縄文時代に属する土器としては、アカホヤ層上——アカホヤの土壌化した土層中に包含——から出土した曾畑系土器片がある。わずかな点数であるが、学園都市遺跡群の中では、他に下田畑遺跡からの出土があるだけで、地理的にも両遺跡は近いが、貴重な資料といえる。そして、学園都市遺跡群の中において、この曾畑式以降、中期、そして後期中葉頃までの遺物が確認されていないことは、十分に注意しておく必要があろう。ことに中期を中心として宮崎県を含む地域において、生活圏が破壊されるか、極端に生活圏が限定され狭められるかの状況があったと思われ、それにはアカホヤ火山灰などの火山活動・火山灰が影響していたのであろう。

入料遺跡ではその後平安時代まで無任の状態が続いた。平安時代に入り、下田畑、赤坂の両遺跡に、カマドと掘り抜き煙道をもつ竪穴住居と掘立柱建物造られるようになる。カマド屋というべき掘立柱建物跡と有機的に機能し合う他の建物跡群、両遺跡ともき程広い面積の中に立地する訳ではないが、山合いを抜けた地点に在り、後に出鉄肥街道が西に延びることも合わせて考慮する時、交通の要所であったと想定することが出来る。赤坂遺跡において緑釉陶器が出土していることも頷ける。

そして、入料遺跡において検出された二基の土壌墓は、下田畑、赤坂の両遺跡に直接関わるものではなからうか。

（北 郷 泰 道）

註1) 若水哲夫「5号地遺跡」『宮崎学園都市現蔵文化財発掘調査概報1』宮崎県教育委員会1980年。

## 第Ⅳ章 堂地西遺跡の調査

### 第1節 調査の概要

堂地西遺跡は宮崎市大字熊野字堂地に位置する。遺跡群の中では、平畑遺跡などの立地する洪積台地の北西端の高台にあり、清武町と接している。調査対象面積は約3万㎡で、旧石器時代の集石器群、縄文時代早期の集石遺構、弥生時代後期の住居跡、歴史時代の柱穴群を検出した。

昭和54年の分布調査では、大学用地内にある山王1号池北側の丘陵上畑地一面に土師器片が散乱していた。そのため、土取り部分を除いた約3万㎡の範囲を調査対象地とし、昭和56年に試験調査を行ない、昭和58年4月18日から本調査に着手した。

調査に先立ち、調査区を地形の上から東側の舌状部をA区、農道をはさんだ西側の北をB区、南をC区の3区に分けた。調査は耕作物の関係でA、B区から開始した。両区とも地形にあわせて2m×10mのトレンチを数本ずつ入れて耕作土を削りてみたが、ほとんどの場所で削平が著しく、西側の高所で第2オレンジ層、東側の低所で流れ込みか、あるいは、風化した赤ホヤ層が耕作土の下にみられた。おそらく、土師器片を伴う遺構は削平されたと思われる。しかし、トレンチ内に焼礫(A・B区)や弥生土器片(A区)、さらに土師器(B区)の集中がみられたため、A・B区全域にわたり耕作土を重機で排除し、精査を行った。その結果A区で縄文早期等集石遺構15基と、弥生後期の住居跡2軒を検出した。また、B区でも縄文早期の集石遺構8基と歴史時代の柱穴群を検出した。ところが、A区で検出した集石遺構のうち2基は第2オレンジ層直上層からの検出であったことから、旧石器文化層の存在の可能性が考えられたため10mグリットを入れて第2オレンジ層まで精査したところ、ナイフ形石器や数点の剥片を検出した。そこで、さらに調査範囲をひろげた。その結果、約1,000㎡の範囲から集石遺構4基(計6基)と約200点の旧石器群を検出した。B区でも同様の精査を行ったが旧石器群の検出はできなかった。しかし縄文早期文化層よりさらに下位と思われる層から縄文土器を検出した。C区については、翌年の1月から調査を開始した。C区も地形にあわせて、トレンチを入れてみたが、すでに旧石器～縄文早期におよぶ文化層も大半が削平されており、集石遺構のものと思われるわずかな礫群が3ヶ所で確認できた。さらに北側の平坦部で旧石器時代の集石遺構2基と約100点の石器群が検出された。発掘調査は昭和59年3月9日で終了したが、約11ヶ月にも及ぶ長期調査となった。(永友良典)

### 第2節 立地と環境

堂地西遺跡は、学園都市建設予定地内に東西にひろがる洪積台地の西北端に位置し、地形分類では平坦面の中位面Ⅱにあたる。標高は30m～50mと遺跡群内でも最も標高が高く、西から東へとゆるやかな傾斜を示す。西には野塚山系からのびる丘陵地がせまる。北には20m～30m下に清武川の支流である田上川とその谷底低地にひろがる水田地帯がある。南には、やはり清武川の支流である熊野川とその谷底低地が西奥まで入り込み山王1号池を経て、北から入り込む田上川の谷地形と合流し丘陵地との間に小谷を形成する。谷地形との標高差は南側で10m～15m、西側で25m～30mある。東には熊野川から西にのびる開析谷が二又に入り込み舌状の小丘陵を形成している。舌状尖端下の谷には山王2号池があり、標高差は約5mである。

他の遺跡との関連では、開析谷と熊野川の谷底低地との間にのびる同丘陵上には東側に堂地東遺跡、その谷底低地

をはさんだ両側の丘陵には平坦遺跡、その東側には熊野原遺跡、さらに、田上川をはさんで北側の独立丘陵上には浦田遺跡などが立地する。  
(永友良典)

### 第3節 層序

空地西遺跡における基本層位はA区の旧石器文化層調査区(5bグリッド)の層位を基準とした。(Fig 7)

I層…褐色砂質土層(耕作土)。土師器片を多量に含む。(20~30cm)

II層…削平。

III層…純粋な赤ホヤ層は確認できなかったが、流れ込み、あるいは風化した赤ホヤ層が部分的に残る。茶褐色砂質土。(III'層)

IV層…褐色硬質土層(シルト層)。縄文早期文化層(約30cm)

IV'…1~2mmの黒色粒を含み、IV層より若干黒色を帯びる。(約10cm)

V層…暗褐色硬質土層(シルト層)。小白斑粒混入の硬質暗褐色ブロックの含有量によって3層(Va, Vb, Vc)に分かれる。(約60cm)

Va…ブロックの量が50%以下で淡い暗褐色土層。(約30cm)

Vb…ブロックの量が50%以上で濃い暗褐色土層。旧石器文化層。(約20cm)

Vc…ブロックと下層の黄褐色軽石粒が混入した暗黄褐色土層。VI層の漸移層(約10cm)

VI層…第2オレンジ層(軽石層)

VIa…始良Tn火山灰層。軽石の粒が大きい黄褐色土層。21,000~22,000年前。(約20cm)

VIb…大隅降下軽石層。軽石の粒が細かい明黄褐色土層。22,000年前。(約20cm)

VII層…黒褐色硬質土層。(有機黒色シルト層)。小白斑粒を含む。(約40cm)

VIII層…黒褐色硬質土層。(シルト層)(約30cm)

VIII'…VIII層より若干赤味を持つ。(約10cm)

IX層…褐色粘質土層。

IXa…灰褐色粘質土(約10cm)

IXb…褐色粘質土(約10cm)

X層…黄褐色粘質土層

XI層…褐色粘質土質土層

XIa…ふい黄橙色粘質土(約10cm)

XIb…褐色粘質土(約20cm)

XIc…黄褐色粘質土(約10cm)

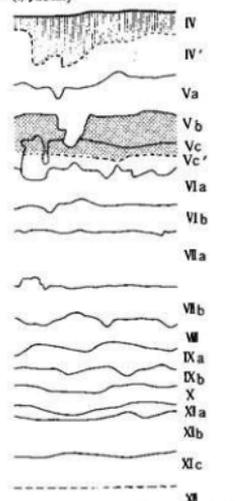


Fig 7 基本土層断面図

次に各区の層位をみると、A区(第3図)では、西側の標高40m~39m付近がほぼ平坦地であるが、東へ行く程、傾斜している。北西端ではVIa層まで削平されている。また、南東端の低い所ではIII'層の堆積が部分的にある。さらに、V層の堆積をみると、50m~48m付近ではほぼ平坦に堆積しており、特にVb層の堆積が良好であるが、周辺の傾斜地に行く程、Vb層の堆積が薄くなる特徴がみられる。

B区(第21図)は、A区に比べ傾斜が急である。標高50m以北ではVIa層まで削平されている。傾斜のため、特に、

IV層～V層にかけての乱れが目立つ。また、Vb層の堆積も薄い。

C区は北西側がほぼ平坦面で、東側は中央部が東西にのびる屋根状の地形を示しており、北と南へ傾斜するカマボコ形の地形を呈する。全域にわたりIV層～Va層まで削平されている。Vb層は西側の平坦面でしっかりとした堆積がみられるが、東側へ行く程薄くなる。

(永友良典)

(註) 基本層序については整理段階で層区分を次のとおり修正した。

新層序…IV, IV', Va, Vb, Vc, Va, Vb, W, W', K<sub>a</sub>, K<sub>b</sub>, X, X<sub>a</sub>, X<sub>b</sub>, X<sub>c</sub>, Y

旧層序…IV, 一, Va, Vb, Vc, Va, Vb, Wa, Wb, Mc, W, K<sub>a</sub>, K<sub>b</sub>, X<sub>a</sub>, X<sub>b</sub>, X<sub>c</sub>, Y

なお、付録、堂地西遺跡の堆積物の検討では旧層序を使用した。

## 第4節 遺構と遺物

### I. A 区 (第2図)

A区の検出遺構は、19基の集石遺構と2軒の住居跡である。集石遺構のうち6基はVb層から検出されたもので、同層からは旧石器群を出土しており、旧石器時代の遺構である。残りの13基の集石遺構はIV層からの検出遺構で、同層から縄文早期の壺ノ形土器が出土しており、縄文早期の遺構である。さらに2軒の住居跡からは弥生後期の遺物が出土しており弥生後期の住居跡である。

#### 1. 旧石器時代

##### (1) 遺 構

旧石器時代の遺構は39m～40mの地点に集中する。この地域はA区では西側の舌状基部にあたり比較的平坦な地形をしている。タイプとしては6基とも直径50cm前後の範囲にかなり火熱を受けたと思われる赤褐色を呈した掌大～掌大の角礫・破砕礫が集積するものである。壘り込みは持たず、床面に炭化物のみられる集石もある。

S11 (第4図) は4aグリッド東端の標高40.2m地点に所在する。約40cm×60cmの範囲に20個程の焼礫が集積する。自然面を残す川原石も4～5個みられる。周辺は、すでに第2オレンジ層近くまで削平されていたため、集石遺構が広がる可能性も考えられる。炭火物はみられない。

S12 (第4図) はS11の南西約7m地点にあり、4bグリッド北端の標高40.0mに所在する。直径約50cmの範囲に約60個の焼礫が平面的に集中する。東側の4mの4bグリッド北西角に数十個の焼礫の群がみられる。

S13 (第4図) は6bグリッド北端の標高30.0m地点に所在する。検出面はVb層の堆積は薄くなる。南西へ約2mの所では50cm程うへのIV層よりS110を検出している。約60cm四方に50個程の焼礫が集積する。扁平な破砕礫が目立つ。

S14 (第5図) は5cグリッド南端の標高約38.8m地点に所在する。直径約40cmの範囲に50個程の焼礫が集積する。東側は集石の壊れがみられ、北側には破砕した川原石(焼礫)が1個みられる。集石中央の床面には炭火物が5～6cmの範囲で検出された。北東へ8mの所にはS15, S16の礫群が点散する。

S15・S16 (第5図) は5cグリッドと6cグリッドの間の標高38.8～38.7mの地点に所在する。S15はS16の北約1mにあり、約40cm四方に40個程の焼礫が集積する。礫には扁平な破砕礫が多く接合可能な礫が目立つ。周辺に10数個の散石がみられる。S16は約40×50cmの範囲に40個程の礫が平面的に密集する。床面には若干の窪みがあり、10cm～15cmの範囲で炭火物が検出された。東側には10数個の散石がみられる。

また、集石遺構に伴うと思われる焼礫の分布状況は、5b枕周辺、6bグリッドの北東角～7bグリッドの南西角。5c・6c・6dグリッド全域・5dグリッド東半分にみられ、発掘区全域に分布する。特に比較的散石の多くみら

れる地区は、集石遺構の南東側にあたり、廃棄された礫とも考えられる。また、石器群の分布ともほぼ一致する。

(永友良典)

## (2) 遺物 (Fig 8~11) (第6図~9図)

A区で出土した旧石器時代の遺物としては、南東部側での流れ込みの遺物も含め約200点の石器群が検出された。分布の状況は、5b杭を中心とした4b~5bグリッドにかけての一番、7bグリッドの南東角、6c、5dグリッドに密集がみられる他、6bグリッド、5cグリッド、3bグリッド東側に数点の散布がみられる。層的にはほとんどがVb層に包括されている。また、石器群を構成する器種は、縦長剥片を素材とした剥片尖頭器5点、ナイフ形石器6点、形器1点、搔器1点、石核5点、剥片約180点(うち、使用痕のある剥片17点、二次加工のある剥片9点)からなる。石材は、砂岩系と頁岩系のもが主体をなす。砂岩系の石材には、花崗質中粒砂岩、凝灰質細粒砂岩、凝灰質砂岩、細粒砂岩がみられる。頁岩系の石材には、黒色頁岩、石灰質頁岩、凝灰質頁岩、風化凝灰質頁岩がみられる。それぞれの石材の特徴は次のとおりである。

**花崗質中粒砂岩**……日南層群にみられ、硬質で目の荒いザラザラした石材である。全グリッドにわたって分布するが、特に4b~5bグリッドと、7cグリッドで多くみられる。剥片尖頭器に多くみられる他、ナイフ形石器にも用いられている。剥片数も多く、横長剥片1点もみられる。灰色、(砂岩I)

**凝灰質砂岩**……表面がサラサラとしたシルト質。青緑灰色で黒色の細かいすじが何本か入る。剥片等はみられず、石器類が5点しか検出されていない。3b、4b、6cグリッドでみられる。(砂岩II)

**凝灰質細粒砂岩**……やや熱変成をうけており、赤味を帯びる。分布は4b、5b、6cグリッドと少ない。横長剥片を素材としたナイフ形石器にも1点用いられている。(砂岩IV)

**細粒砂岩**……日南層群にみられるきめの細かい砂岩。明灰色と暗灰色の石材がみられ、両色が互層になる石材もみられる。石核は何点かみられるが石器はみられない。(砂岩IV)

**黒色頁岩**……やや熱変成をうけている。黒色~暗青色。分布は4b~5bグリッド、6cグリッドに集中する。ナイフ形石器の石材として多く用いられている。(頁岩I)

**凝灰質頁岩**……やや熱変成をうけている。色調は暗褐色~褐色で、内部の方が軟質である。分布は4b、5b、6cグリッドを中心にほぼ全グリッドに分布する。(頁岩II)

**風化凝灰質頁岩**……やや熱変成をうけた凝灰質頁岩が風化したもの。黄白色~黄褐色をしており軟質の石材である。分布は4b~5bグリッドに限られる。石器類はない。(頁岩III)

**石灰質頁岩**……褐色の軟質の石材で剥片がわずかにみられるだけである。(頁岩IV)

## 剥片尖頭器 (第6図1、2、第7図6~8)

1は厚手で断面台形の縦長剥片を素材に右側辺と基部よりの両側辺に調整が施されている。花崗質中粒砂岩で、長さ12.1cmと当遺跡出土の中では最大である。2は厚手で断面台形の縦長剥片を素材に、右側辺の基部から先端部へかけてと、左側辺は基部よりの3分の2まで調整がみられる。長さ9.2cmで大型である。石材は凝灰質砂岩、形状は半月形を呈する。6は厚手で断面台形の縦長剥片を素材に一側辺と基部よりの両側辺に調整が施されている。側辺部の調整は急斜度調整でナイフ形石器と区別し難い。長さ6.8cmで小型である。石材は凝灰質砂岩。7はやや厚手で断面三角形の縦長剥片を素材に、1側辺と基部よりの両側辺に調整が施されている。左側辺の調整は基部の若干上まで施されている。半月状を呈しており、ナイフ形石器と区別し難い。石材は花崗質中粒砂岩。8はやや薄手で断面三角形の縦長剥片を素材にする。石材は風化のしやすい凝灰質砂岩で調整面の風化が著しく、調整が明確に残っていないが、基部に調整が認められる。形状は半月形に反っている。長さ6.4cmと小型である。

## ナイフ形石器 (第6図3~5、第7図9~11)

3は凝灰質砂岩の断面三角形の縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。当遺跡では縦長剥片を素材とする石器、剥片が主流であり、横長剥片を素材にしたものはこれを含めてわずか3点のみであるが、いずれも、明確な横剃技法ではない点の特徴と言えよう。全体の大きさ、形態については欠損品であるため明確ではないが、両側辺調整のもの、の欠損品と思われる。6Cグリッド出土である。4は黒色頁岩製の断面三角形の縦長剥片を素材としており、1側辺のすべてもう1側辺の基部側に粗い調整が施されている。打面は基部にみられる。長さ3.2cmと小形である。表面には自然面がわずかだが残る。素材は厚手である。5は、旧石器調査区外の13g グリッドで検出したものである。黒色頁岩の断面台形の縦長剥片を素材とする。1側辺とその反対側の基部に粗い調整が施されている。裏面には打留裂痕が残る。調整は裏面からほぼ垂直に施されている。全長は2.8cm。9は凝灰質細粒砂岩の断面台形の縦長剥片を素材とする。風化しやすい石材のため調整は明確ではないが、両側辺に荒い調整がみられる。欠損品であるため形態も明確ではない。10は薄手で断面三角形の縦長剥片を素材に1側辺と基部よりの両側辺に調整が施されている。調整は側辺部が細かく、基部は舌状の加工が施されている。基部と先端部は別々に出土している。出土地点は同じ6bグリッド中の約1mの距離であった。石材は若干褐色気味の黒色頁岩である。基部調整のナイフ形石器と思われる。全長は6.8cm。11は花崗質中粒砂岩の断面三角形の縦長剥片を素材とする。調整は右側辺の中頃から基部に荒い調整が、右側辺の尖頭部と基部に細かい調整がみられる。裏面には打留裂痕がみられる。木葉形の剥片頭部の様相もみられるが、今回はナイフ形石器の範ちゅうに入れておく。5dグリッド出土。全長7.2cm。

#### 撞 器 (第8図12)

黒色頁岩の縦長剥片を素材とする。右側辺と基部平坦面に自然面を残し、裏面に打留裂痕がみられる。打点は表面基部にもみられる。調整は左側辺に細かく施されている。出土地は9Cグリッドで調査区からは20m程南東で、流れ込みとも考えられる。

#### 形 器 (第8図13)

凝灰質砂岩の縦長剥片を素材とする。細部の調整はみられず、形器と判断し難いが、断口面を利用した形器と思われる。5cグリッド出土。

#### その他の遺物 (第8図14～19、第9図20～24)

14、19は横長剥片、他は縦長剥片である。14、19とも不整剥片。14は両側辺下部に調整痕がみられる。19は突出部に一部調整痕がみられ雑状の形状を呈する。

15、16、17は縦長剥片で石刃と思われる。17は頭部と側辺部に調整痕がみられる。15、16は側辺部にわずかに調整がみられる。

23、24は二次加工のある剥片で、23は下部に、24は側辺部に細かい加工がみられる。また、18、20～22は使用痕のある剥片である。

石核は5点みられるが、いずれも縦長の不整剥片を取った石核である。

(永友良典)

(註) 石材については北九州市立自然史博物館館長太田正道氏、同土倉藤井厚志氏の御教示による。

## 2. 縄文時代

### (1) 遺 構

縄文時代の遺構としては、集石遺構12基と、散石が7ヶ所のみみられる。遺構の分布は、標高39mの等高線沿い(S I 8～12)と、標高37m地点(S I 13～16)、35m地点(S I 17～25)、33.5m地点(S I 26、27)の南斜面にそれぞれ分布する。

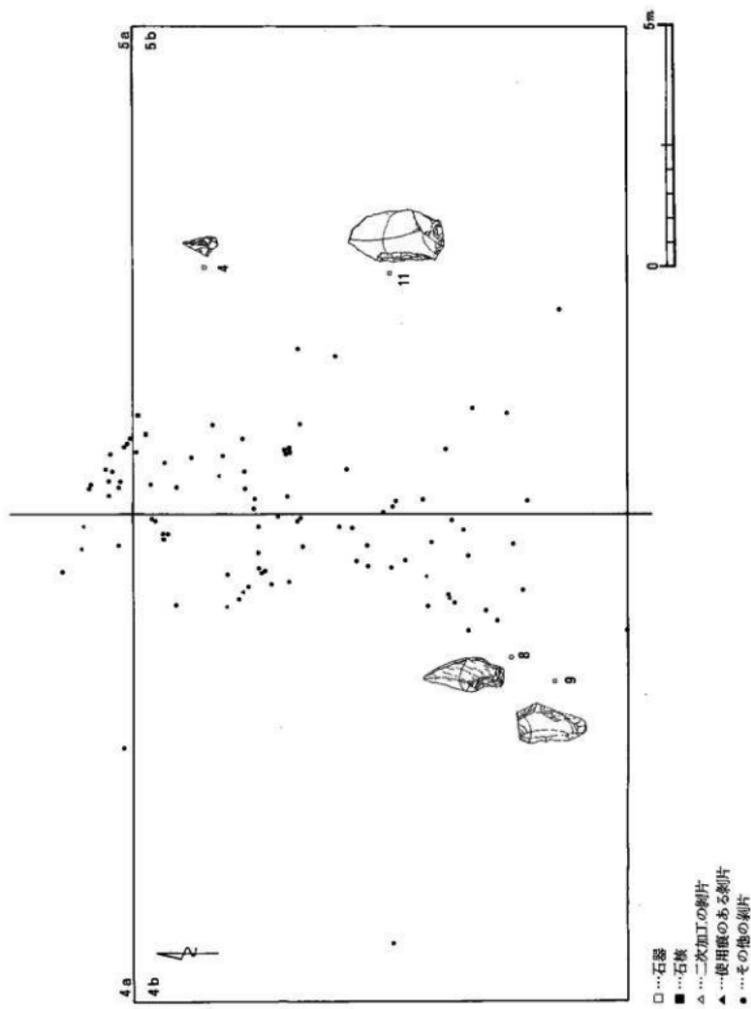


Fig 8 A区 旧石器遺物分布図(1)

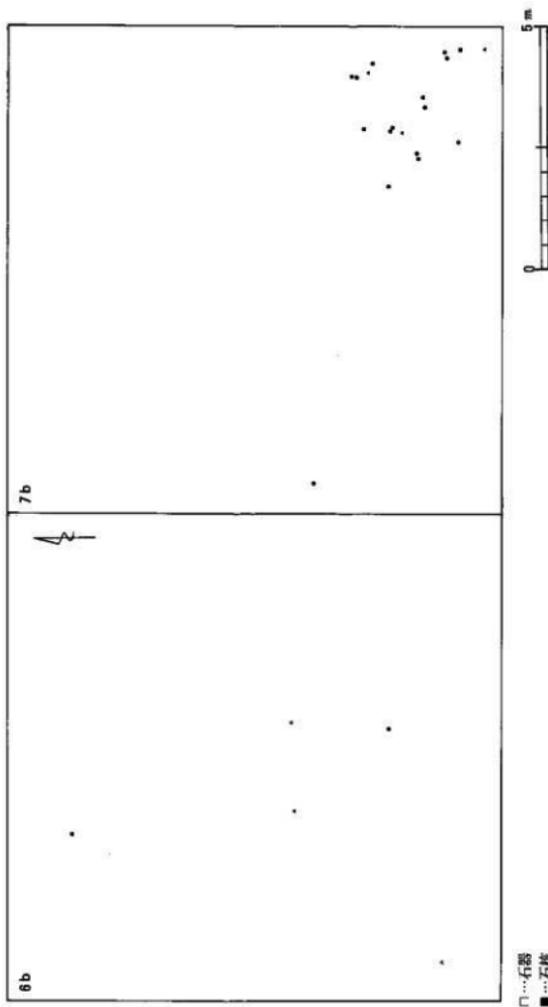
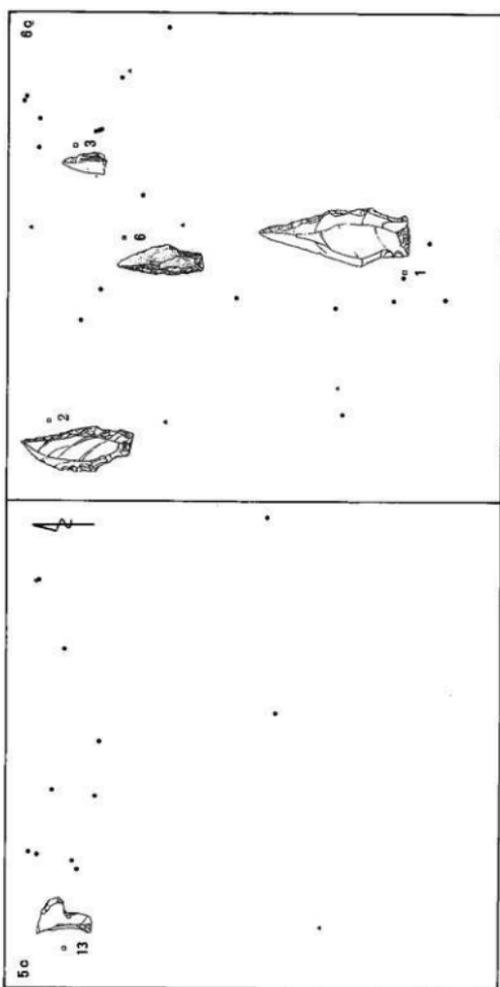


Fig. 9 A区 旧石器遺物分布図(2)



- …石器
- …石核
- △ …二次加工の剥片
- ▲ …使用跡のある剥片
- …その根の剥片

Fig 10 A区 旧石器遺物分布図(3)

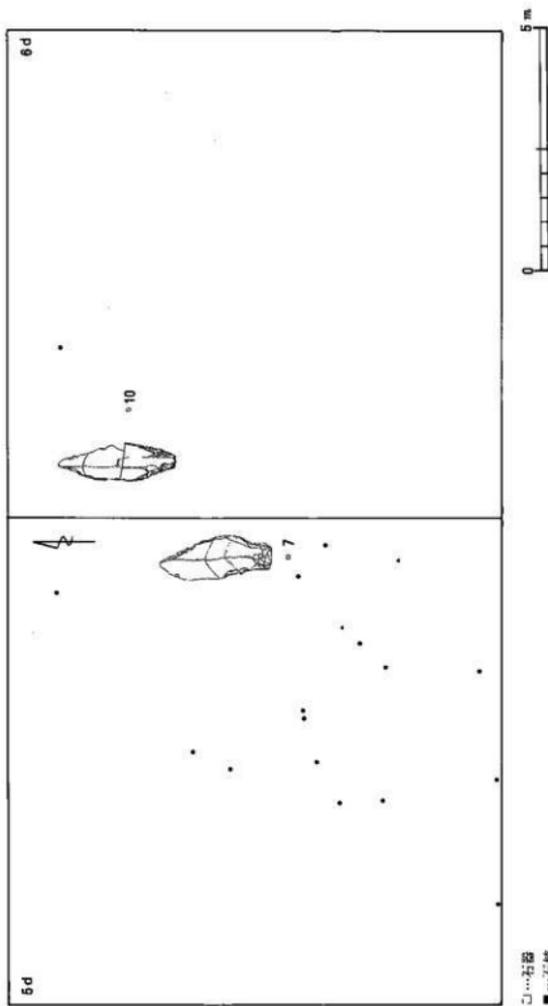


Fig 11 A区\_旧石器遺物分布図(4)

S 1 8 (第10区)は4 Cグリッドの南西角の標高39.3m 地点に所在する。直径約70cm、深さ約20cmの円形の皿状掘り込みを持つ。両側は傾斜のため明瞭な掘り込み面は確認できなかった。集石は淡い赤褐色の掌大～掌大より小さい角礫や扁平な破砕礫が70cm×50cmの範囲に、掘り込み面よりは北に偏って集積する。北にはみ出している部分は扁平な破砕礫が積み重なった状態を呈している。

S 1 9 (第10区)は5 Cグリッド南端の39.3m の地点に所在する。約70cm×80cm、深さ約15cmの皿状のだ円形プランの掘り込みを持つ。掘り込み内には炭火物を含む暗褐色の埋土がみられる。淡い赤褐色の掌大より小さい角礫や破砕礫が掘り込みの東側に偏る状態で下位まで集積する。さらに東側2m×4mの範囲に100～150個程の散石がみられる。

S 1 10 (第10区)は6 bグリッドの北西端の39.1m の地点に所在する。淡い赤褐色の掌大の角礫と破砕礫を主体に、掌大より小さい礫を含めて約80個の礫が約90cm×70cmのだ円形状に密集する。床面に若干の窪みはあったが掘り込みは確認できなかった。集石中心部の浮いた礫を取り除いて行くと南側が開く馬蹄形の集石伊の形をとるが、炭火物や焼土が検出されなかった点など馬蹄形状の集石伊の可能性は薄い。

S 1 11 (第11区)は7 bグリッドの39m 地点に所在する。約2m 四方に淡い赤褐色の掌大や掌大より小さい角礫、破砕礫が分布する。全体的に散石の様相が強いがその中に2ヶ所程、50cm前後の焼礫の集積がみられる。さらに南の7 Cグリッドにも散石がみられるが若干、黒褐色土の落ち込みが直径70～80cmの規模でみられた。(S 1 12)。

S 1 14 (第11区)は9 cグリッド北端の37.0m 地点に所在する。約100cm×80cm、深さ20cmのだ円形の皿状の掘り込みを持つ。淡い赤褐色の掌大より小さい角礫、破砕礫約100個が掘り込み上位に集積する。また、北10mの9 dグリッド北端には散石(S 1 13)がみられる。この散石の礫は熱ルミネッセンス法による年代測定では不焼の分析結果が出ている。

S 1 15 (第11区)は8 eグリッド南東角の37m 地点に所在する。約45cm×20cmの範囲に約20個の掌大の扁平な破砕礫や、掌大より小さい角礫が集積する。焼礫は淡い赤褐色を呈しており、扁平な破砕礫にはわずかなひび割れがみられる。南西方向には散石(S 1 16)が隣接する。

S 1 17 (第12区)は11gグリッド北端の35.2m 地点に所在する。直径100cm、深さ15cmの円形の皿状の掘り込みを持ち、北東側にも長さ70cm程の若干の窪みがみられる。礫は淡い赤褐色の掌大より小さい角礫、破砕礫で、掘り込み面の中位から上位にかけて集積する。周辺には若干の散石もみられる。

S 1 18 (第12区)はS 1 17の南東に隣接する標高35.0m の地点に所在する。直径約110cm、深さ20cmの円形の皿状の掘り込みを持つ。掘り込み内には、炭火物混りの黒褐色粘質土が上層に、黒褐色粘質土混りの茶褐色砂質土が下層に堆積する。淡い赤褐色の掌大より小さい角礫と破砕礫が掘り込み上位の上層部分に集積する。周辺には50～60個の焼礫の散布がみられる。S 1 18の4～5m 南西側にS 1 20, 21, 約4mの南側にS 1 19, さらに約8m 南東にS 1 22の散石がみられる。

S 1 23 (第13区)は12gグリッド南東角の35.0m 地点に所在する。南側のS 1 24とは隣接する。淡い赤褐色の掌大～掌大より小さい角礫と破砕礫が約90cm×60cmの範囲に集積する。焼礫密集地の床面に直径70cmぐらゐの窪みがあったが掘り込みとは判断し難い。東側に40～50個の散石がみられる。

S 1 24 (第13区)は12gグリッドの北東角の35.1m の地点に所在する。淡い赤褐色の掌大～掌大の角大の角礫や破砕礫100個が2m四方に散乱しており、礫の密集はみられない。さらに南に散石(S 1 25)がみられる。

S 1 26 (第14区)は15gグリッドの北西角の33.5m の地点に所在する。A区では最も東側の舌状部の先端にある。約2m 四方に淡い赤褐色の焼礫の分布がみられる。そのうち、南隅に約70cm×50cmのだ円状の範囲に掌大～掌大より小さい角礫や破砕礫が集積する。集石下に若干の窪みがあるが、掘り込みとは判断し難い。さらに、北～東にかけて

掌大一人頭大の扁平な河原石が4～5個散布しており、かなりの赤褐色を呈し、ひび割れが著しい。おそらく配石と思われる。

S127 (第14図) は14g グリッド東端の40.2m の地点に所在する。北東方向約5m のところにはS126がある。約40cm四方に掌大～掌大より小さい角礫が20個程分布しており中心に赤褐色の一人頭大の川原石を配している。さらに北側には20～30個の小角礫、破砕礫の散布もみられる。

以上のA区出土の集石遺構の特徴を見ると、集石の規模は1m 前後、構成礫は砂岩質の掌大からそれより小さい角礫や破砕礫、礫の赤味は、それほど火熱を受けたと思われない淡い赤褐色を呈している点などに集石の特徴がみられる。さらに集石の構造面からみると、掘り込みを持つ集石 (S18, 9, 15, 17, 18)、配石を持つ集石 (S126, 27)、平面的な密集を示す集石 (S110, 14, 17)、散石的な集石 (S111, 18) に分類できる。(永友良典)

## (2) 遺物

### 縄文土器 (第15図)

A地区からは褐色硬質土層 (第IV層) より縄文土器が出土している。アカホヤ層がほとんど消滅していたため、表土直下より出土したものがほとんどであった。そのため全て小片であり全体の器形は推定できないが1～13の土器の文様は沈線とそれに沿った割突文で構成され、その下に地文として燃系文を施すもので、塞ノ神式土器に相当するものである。燃系文が沈線に区画されていないタイプなので、いわゆる河門氏の分類のa式に相当すると考えられる。<sup>22</sup>色調は浅黄褐色 (10YR $\frac{5}{6}$ )～橙色 (5YR $\frac{5}{6}$ ) を呈し、胎土には白色・黒色の砂粒や雲母を含む。

14は1点のみの出土であるが、口縁部から一定の幅で只殻炭灰を施した円筒土器である。11線部がかすかに外反を示す。色調は外面が黄褐色 (7.5YR $\frac{5}{6}$ )、内面が灰色 (7.5Y $\frac{5}{6}$ ) を呈し胎土には黒雲母・石英等を含む。これらの土器は主に6～8-c-e区に集中しており、その付近の褐色硬質土層より検出された集石遺構に伴う可能性が考えられる。(日高学治)

## 3. 弥生時代

### (1) 遺構

弥生時代の遺構としては、6cグリッドの北東角に1軒 (SA1)、9dグリッドの南西角に1軒 (SA2) の計2軒の住居址を検出した。

SA1 (第16図) は、主軸方向をN-58°-Eにもち、長軸3.8m、短軸3.2mと基本的には長方形のプランを呈している。西角の輪郭は不明瞭だが、1.4m×1.0mのテラス状に1段高くなっている。また、南西壁の南角に50cm程の突出部をもつ。住居跡は若干硬質の褐色土層に掘り込んであるが、削平がはげしいため検出面から床面の深さは5cm～15cmとかなり浅くなっている。埋土はサラサラとした砂質の褐色土で若干アカホヤブロックの混入がみられる。柱穴と思われるピットは20本近く検出したが、住居跡に伴う柱穴としてはP1～P4が適当と考えられる。柱間は1.8m～2.0m 間隔の4本柱であるが、4本とも壁際に寄り住居跡の主軸方向よりは20°ほど東に柱間の主軸に傾いている。柱の構成から南側の突出部は出入口の機能が考えられる。遺物は住居跡中央部に集中して出土しており、弥生土器片や扁平な川原石、軽石等が出土している。

SA2 (第18図) は、SA1の南東約2.6mに位置する。(9dグリッドの南西角)。1辺が約3mの方形プランを呈しているが、東壁のプランが不明瞭である。主軸方向はほぼ南北を示す。SA1同様かなり削平されており検出面から床面までの深さは5cm～10cmと残存部はわずかである。北東角にテラス状の高まりも少しみられる。7～8本のピットを検出したが住居跡に伴う柱穴は明確にはできなかった。遺物はSA1よりは少量であるが、南壁際の床面に弥生土器の集中がみられ、東と南の壁際に一人頭大の扁平な川原石がみられた。また、南壁際の弥生土器出土の東側にはかたくしまった部分がみられ出入口の可能性も考えられる。(永友良典)

## (2) 遺物

### SA1出土遺物(第17図)

1～3は変形土器の口縁部片。いずれも「く」字口縁で肩部に張りのない甕である。1は内外面ともハケ調整が施されており外面に部分的にスス付着がみられる。胎土には2～3mmの砂粒を含む。焼成は良好。色調は褐色。2は1と同類の口縁部である。口唇部には指ナデの調整痕がみられる。3は、頸部のくびれがあまりない。色調は赤褐色で磨滅がはげしく焼成もあまりよくない。4は、刻目突帯を持つ口縁部片である。刻目は、凹気味に下部部につまみあげのみられる口唇部と2条の突帯部に施してある。下段の突帯部の刻目は深く太く施してある。上段の突帯部と口唇部の刻目は浅く細かい。色調は浅黄褐色、胎土には1mm前後の砂粒を多量に含み、焼成も良好。5は、頸部に断面三角形のはりつけ突帯1条を持つ。頸部はしまり、胴部は大きく張る壺形土器である。色調は外面が橙色、内面は灰黄褐色を呈している。調整は外面がハケ、内面が頸部に指ナデ、肩部にヘラとハケによる調整がみられる。胎土は2～3mmの砂粒を含む、焼成はあまり良くなく、外面の風化が著しい。6は胴部片で、胎土、調整、焼成は5と類似しており、5の胴部と思われる。内面に不規則な爪痕がみられる。7は、ミニチュア土器で口縁部を欠く。内外面とも指による調整がみられる。色調は外面が明黄褐色、内面が灰黄褐色を呈している。焼成は良好で、しっかりとした作りである。8～10は、平底の底部で、いずれも厚みを持つ。色調は外面が浅黄褐色、内面が黒褐色～灰黄褐色を呈する。内外面ともハケ調整が主体で、底部内面にヘラ痕もみられる。9、10の底部にはススが付着する。10は大形の底部で最大径40cmを越えると思われる。若干の丸味を持つ。

### SA2出土遺物(第19図)

11は、底部を欠く変形土器である。口縁部はSA1の変形土器の口縁部に比べると、厚味を持ち、外反度も鋭い。最大径を胴部上部に持つ。肩部の張るタイプの土器である。内面には頸～肩部に横方向のハケ、外面には口縁部～頸部に横方向→たて方向のハケ、胴部上位には横方向のハケ、中位～下位に横方向の荒いハケ、下位にヘラによる調整がみられる。内面下部にススが付着する。色調は浅黄褐色。焼成も良好である。12は、口縁部から肩部にかけての変形土器である。口縁部は、ふくら味のある「く」字口縁で口唇部に行く程肥広となる。口唇部は面どりされている。頸部はしまり、肩の張った胴部が続く。調整は、口縁部内外面にハケ、頸部内面に指ナデ、肩部内外面にハケ→ヘラによる調整がみられる。色調は外面がぶい橙色、内面が灰黄褐色を呈し、焼成も良好。13は、変形土器の口縁部。口縁部の外反度もわずかで、頸部のくびれもほとんどなく、肩部も張らない。表面風化が著しく、ハケ調整痕がわずかにみられる。色調は橙色、焼成はあまりよくない。14は、長頸壺の口縁部と思われる。頸部からほぼ垂直に立ち上がり、口唇部で内湾気味にひらく。口唇部に2条の横線文がみられ、内面には輪積痕としばり痕がみられる。色調は橙色、焼成は良好だが表面の図化がみられる。15は、「く」字に内湾する二重口縁壺の口唇部片と思われる。外面にハケ調整後の鋸歯文がみられる。16は、平底の底部。外面が明黄褐色。内面が黒褐色を呈し、外面にスス付着がみられる。

(永友良典)

## II. B区(第20図)

A区の西側に位置するB区は、A、C両区よりは傾斜が急で西から東へと低くなる。標高は50m～44mと最も高い。B区からは縄文早期の前平系土器が出土し、その文化層から集石遺構8基を検出する。さらに、その下層から古手の縄文土器を出土する。また、細石刃や局部磨製の石斧も1点づつではあるが出土している。

## 1. 縄文時代

### (1) 遺構

B区では縄文時代の遺構としては8基の集石遺構と5ヶ所の礫群を検出した。その分布状況を見ると標高52m付近、50m～49m付近、46m付近の3ヶ所に分布がみられ、層的にはIV層中での出土である。

S11・S12 (第22図) はB区では最も南側の7bグリッド北端標高46.2mの地点に隣接する。

S11は約80cm×40cmの範囲に淡い赤褐色の挙大～挙大より小さい角礫、破砕礫が集積する。床面に若干の窪みがみられる。S12は、その西に隣接している。約90cm×50cmの範囲に淡い赤褐色の挙大の角礫、破砕礫、掌大の川原石が集積する。床面には礫集中箇所のやや南寄りに若干の窪みがみられる。南側には20～30個の散石がみられる。また、5m程東には人頭大～挙大の焼礫の礫の群礫(S113)も分布する。

S14 (第22図)・S15 (第23図) は4dグリッドの標高49.9m地点に所在する。

S14は直径70cm程の円形の黒褐色の落ち込みがみられ、その中に灰黄色の小礫(角礫)が密に集積する。中央部には20cm程の礫の空白がみられる。北約5mのところには、同様の礫の散布がみられる(S13)。S15は、S14の南約3mのところであり、約110cm×80cmのだ円状の黒褐色土の落ち込みがみられる。その落ち込みを中心に約120cm×100cmの範囲に灰黄色の挙大～挙大より小さい角礫約300個が密に集積する。集石の西側に礫の乱れがみられ散石の状態となっている。西端に縄文土器片(第28図51)もみられる。

S18 (第23図) は、4eグリッドの標高49.2mの地点に所在する。北側には隣接して礫群(S16, S17)がみられる。S18は約115cm×110cm、深さ20cmの掘り込みを持つ(検出時には140cm×130cm程の黒褐色土の落ち込みがみられた)。掘り込み内には、炭火物を多量に含む黒褐色砂質土が上層に、炭火物をあまり含まない暗(茶)褐色粘質土が下層に地積する。礫は灰黄色の小礫(角礫)が上層中に集積する。また、人頭大の川原石が掘り込み西端の落ち込み際にみられ、ヒビ割れの状態が著しい。S16, S17も同様の灰黄色の小角礫の散布である。

S19 (第24図) は2dグリッド中央の標高51.7mの地点に所在する。約100cm×60cmの範囲に人頭大～挙大の川原石、破砕礫が70個程集積する。床面に少量の炭火物を含む若干の窪みを持つ。やや赤褐色を帯びる大型で扁平な川原石が南東端にあり配石と思われる。他の礫はほとんど淡い赤褐色を呈している。

S110 (第24図) はS19の南西約3mの標高51.5mの地点に所在する。直径約70cmの黒褐色土の落ち込みがみられ、約60cm×50cmの範囲に淡い赤褐色の小角礫や破砕礫約60個が疎に集積する。少々の炭火物を床面にもつ窪みがみられる。

S112 (第24図) は2eグリッド西端の標高51.5mの地点に所在する。約200cm×150cmの範囲で礫の散布がみられるが、特に南側に直径約50cmの集中がみられる。直径約60cmの若干の窪みを中心に淡い赤褐色の挙大～挙大より小さい角礫や破砕礫、それに扁平な川原石が集積する。また散石内の北側には100cm四方に炭火物の点在がみられる。東約8mには散石(S111)がみられる。(永友良典)

## (2) 遺物

### 縄文土器 (第25～28図)

B区においては、集石遺構に伴いIV～V層上部にかけて縄文土器が出土した。分布状況はFig12で見られるように1～3-d・e区に集中的に出土している。完形品はなく破片のみであるが、その口縁部の形態や文様等により分類ができる。大きくは、I類～爪形文土器、II類～隆起線文土器、III類～貝殻条痕文土器に分けられ、その各々において細分を行う。

I類(爪形文土器)～これは、爪なしヘラ状工具による刺突文が施された土器群である。本遺跡出土のものは規則性をもって施文されたものが多く、福岡市門田遺跡や沖縄県野国遺跡出土の爪形文のように指頭痕を残すものは存在しないので、ほとんどのものがヘラまたは半截竹管状の工具で施文されたものと考えられるが、ここでは一応爪形文と呼ぶことにする。これらの工具は口縁部の形態等により細分できる。

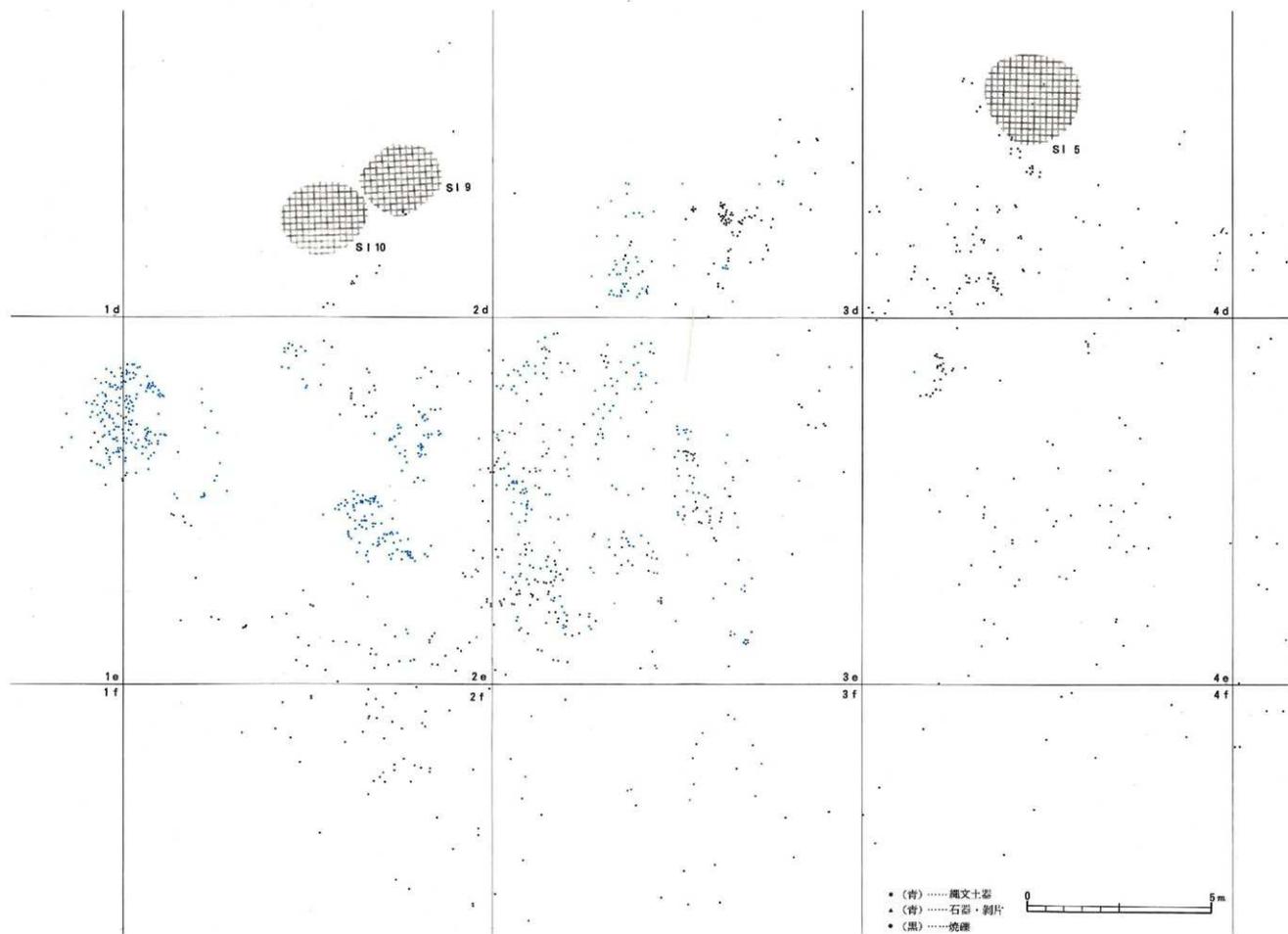


Fig. 12 B区 縄文土器分布図

【A類(1, 2, 3, 6)】爪形文を間隔を置いて施文するもの。口縁部はなく胴部片のみである。1はやや不規則に、2, 3, 6は規則的に施文されている。指頭痕は残らない。

【B類(5, 9, 14)】口縁部直下に3~4条の爪形文を密にまた規則的に施文したもの。ヘラ状工具を3~4本一束にして同時に施文されたと思われる。上下の爪形文の間には若干の粘土の隆起がみられる。口縁部は無文である。口縁部の形態により2分できる。

B1~口縁部が若干外傾して、肥厚するタイプ。(5, 9)

B2~口縁部が短く外反するタイプ。(4)

【C類(7, 8, 10, 11, 14)】口縁部直下に数条の爪形文が規則的に施文されているが、I-B類より間隔があり、浅いタイプ。このタイプは口縁部の形態により2分できる。

C1~口唇部がやや肥厚して外反する。口唇部は太いヘラ状工具による縦方向の刻み目が施されている。(7, 8, 11)

C2~口唇部が丸くおさまられており、斜方向のヘラ状工具による刻み目が施されているタイプ。(10, 14)

【D類(12, 13)】口縁部が出土しておらず胴部片のみであるが、爪ないしは半截竹管状の工具で横位に規則的に数条の施文がなされているもの。

Ⅱ類(隆起線文土器) 口縁部直下に数条の隆起線を貼り付けたもので、口縁部の形態や施文方法によって分類ができる。大きく分類して、隆起線に彫り付ける際に生じたと思われるヘラ状工具による爪形文状の文様を有するもの~A類、有さないもの~B類に分けることができる。その他口縁部の形態等によって数類に分類できる。

Ⅱ-A-1類(18, 20)~口縁部は無文で、隆起線に残る爪形文は浅いものがある。このタイプには18のように短く外反するものと20のように大きく外反するものがある。

Ⅱ-A-2類(22, 25, 26, 27)~若干外反する口縁部で、口唇部に右~左方向の斜位の刻み目を有す。隆起線に残る爪形文はⅡ-a-1類に類似するがより明確で上部が深くなっている。

Ⅱ-A-3類(33)~口縁部が丸味をおびて外反し、口唇部に縦方向の太いヘラ状工具による刻み目が施されている。口縁部直下には3条の隆起線を彫り付ける。隆起線の上下には深い爪形文を有す。

Ⅱ-A-4類(28)~口唇部がやや偏平になり左~右の斜方向の刻み目を有す。口縁部直下に密着した隆起線を施しその上にヘラ状工具による爪形文が施文される。

Ⅱ-A-5類(34, 35, 38, 40)~口唇部に斜方向の刻み目を施し、2~3条の隆起線を施し、その上から斜方向のヘラ状工具による刻み目を施すもの。

Ⅱ-B-1類(15, 16)~口縁部が無文で口縁部直下に1~3条の隆起線を有す。15は1条でおしつぶされたような隆起線であり、16は断面三角形を呈している。

Ⅱ-B-2類(21, 23, 24)やや外反し、丸味を帯びた口唇部に縦ないし斜方向の細い刻み目を有す。口縁部直下には2~3条の隆起線が密着した形で施されている。

Ⅱ-B-3類(31, 28)~若干外反してやや偏平な口唇部に左~右斜方向の刻み目を有す。31はやや細めの隆起線が施されているが、28は断面三角形の大きな隆起線が施こされ、縦方向の細い刻み目がなされている。

### Ⅲ類(貝殻条痕文土器)(50~53)

口唇部およびその直下に斜方向の刻み目または貝殻条痕による刺突文が施されている。胴部は貝殻条痕文を地文としているが、50, 51はナデ消している。また51, 53は口縁部内面に明瞭な段を形成する。唇形は円筒形平底を呈す。細分は可能であるが、個体数がすくないのでここでは行わない。

### 石器(第9図25~28)

B区においては、縄文土器とともに石器及び剥片が数点出土している。25は凝灰質粘板岩製の局部磨製の石斧である。長さ11.7cm、幅5.2cmを計る。偏平で刃部は両側より磨かれている。28は砂岩製の石鏃である。二等辺三角形形状を呈し、若干折りがはいるタイプである。長さ2.2cm、重さ1.0gを計る。26、27は黒曜石製であり、26は細石刃である。長さ1.4cm、重さ0.1gを計る。27は厚みのある剥片石器で右側面には自然面を残しており、左側面に主に剥離が施されている。長さ2.3cm、重さ1.6gを計る。

(日高孝治)

## 2. 中世

B区においては、調査当初中世の遺構の存在が予想されるほど地表面には土師器の破片が散布している状況であった。しかし、実際調査を行ってみると、アカホヤ層まですでかなりの削平が行われており、表土層直下には褐色硬質土層（IV層）が存在しているような状況であった。そのためピット群は検出できたが、掘立柱建物等の遺構は確認できなかった。またピットの中には集石遺構（S I 5）と切り合っているものも存在した。これらのピット群にともなって多量の土師器が出土したが、そのほとんどが細片であった。

### 土師器（杯・小皿）（第29・30図）

出土した土師器は全て杯・小皿の類である。

杯はヘラ切り（I類）と糸切り（II類）が存在する。I類は、底部から丸味をもって立上り直線的に外へ開くもの（1類）（1）、底部と体部の境目に明瞭な稜を有し直線的に立上るもの（2類）（2、3）と立上りに段を形成して外に開くもの（3類）（4、5、6、7、8）の3つのタイプが存在する。

II類は23で1点のみであるが、底部から丸味をもって立上るタイプである（1類）

小皿もヘラ切り（I類）と糸切り（II類）が存在する。

I類は9-19で、中でも底部から体部へ丸味をもって立上るもの（1類）（18）と底部と体部の境目に稜を有し反気味に立上るもの（2類）（9-17、19）がある。2類の中には「縁増部がシャープなもの、丸くつまみだしただけのもの」が存在する。

II類（20-22、24-27）I類と同様に底部と体部の境目に稜を持つもの（2類）と持たないもの（1類）に分けられる。その他26、27のように杯と小皿の中間形態をとるもの（3類）もある。また、全体器形は不明であるが22のように脚台を有するものがある。

※尚、土師器の分類は大まかには「山内石塔群」の分類に従い、I類-ヘラ切り、II類-糸切り、として表記し細分についてはみ本遺跡の出土遺物に沿って分類を行った。

(日高孝治)

## Ⅲ. C区（第31図）

C区はB区の南に位置し、開析谷の最も奥にあたる。C区の北側にはB区から続く傾斜地がひろがる。この傾斜地は砂質の層の堆積が厚く、開析谷がもっと西まで入り込んでいたことを示し、遺構、遺物は確認できなかった。その南にひろがるC区は、北が平坦な地形で、南は中央部が高く、南と北に傾斜する屋根状の地形となっている。すでにA区でみられるIV層はほとんど削平されており、傾斜地や東側ではV層上部まで削平をうけている。このため、縄文早期の集石遺構のものと思われる焼燥の二次的集積が2-3ヶ所みられる。調査は削平の度合の少ない北側の平坦地を中心に行った。その結果、V層中より、集石遺構2基と約100点の石器群を検出した。

### 1. 遺構

旧石器時代の遺構としては、3CグリッドのV b層から隣接する2基の集石遺構を検出した。標高はいずれも42.2mである。

S I 1（第33図）は赤褐色の掌大〜掌大の角礫・破砕礫20〜30個が約40cm×50cmの範囲に集積し、堂地西Aの

旧石器文化層の集石遺構と同じタイプである。若干窪みはあるが掘り込みとは言えない。南側に10数個の焼礫の集中がみられる。S12は、S11の南西約2mの所にある。約60cm×50cmの範囲にS11と同様の焼礫が平面的に集中する。廃棄されたと思われる焼礫と石器群の分布はほぼ同様のひろがりを見せる。(第32図)

縄文早期の集石遺構のものと思われる焼礫群は挙大～掌大のやや赤味を帯びた角礫と破砕礫が 区の東側に3ヶ所見られた。いずれも耕作土からの検出で削平時の二次的集積と思われる。縄文早期の土器片もあわせて出土している。

## 2. 遺物 (第34図1～4)

旧石器時代の遺物(1～3)は、2基の集石遺構の周辺約500㎡に約100点の石器群がみられた。石器類はみられず剥片や砕片が主体をなす。剥片は縦長剥片ものが多い。石材も黒色頁岩が大半を占め、花崗質中粒砂岩、細粒砂岩、凝灰質頁岩のものも含まれており、堂地西Aの石器群と類似する。1～3は、縦長剥片のもので、いずれも自然面を残す。1は花崗質中粒砂岩、2・3は黒色頁岩を石材とする。

4は縄文土器である。円筒形を呈し、胴部はやや外傾しながら直行するもので、外面の口縁部にはへら状工具による2列の刺突文が、胴部には荒い貝殻条痕が施されている。内面は口縁のみはナデ調整がおこなわれている色調は淡黄色を呈し、胎土には石英粒及び白色の砂粒を多く含む、焼成は良好である。(永友良典)

## 第5節 まとめ

### 堂地西遺跡の集石遺構について

堂地西遺跡では、A区で18基、B区で8基、C区で2基の計28基の集石遺構を検出したが、これらの集石遺構は構焼礫や掘り込みの有無、礫の集散状態などの構造面から5つに分類される。

- I類……かなりの火燃を受けたらしく、赤褐色を呈する挙大～掌大の破砕礫と角礫が直径約50cmの範囲に集積する。掘り込みはなく、床面に炭化物を含む。(I a—重って密集するタイプ。A—S11・2・3, C—S11。I b—平面的に集中するタイプ。A—S14・5・6, C—S12)
- II類……直径約1mの範囲に淡い赤褐色の挙大～掌大、さらに挙大より小さい角礫や破砕礫が集積する。掘り込みは持たない。(II a—集積するタイプ。A—S110・12・15・23, B—S11・2・10・12。II b—散積するタイプ。A—S124)
- III類……直径約1mの掘り込みを持ち、淡い赤褐色の挙大～掌大より小さい礫が集積する。(III a—焼礫が掘り込み内に集中するタイプ。A—S19・14・17・18。焼礫が一部掘り込み外に散布するタイプ。A—S18)
- IV類……直径約1m～0.5mの範囲に灰黄色の挙大より小さな小角礫が200～300個密集する。掘り込みや黒褐色の落ち込み面を持つ(B—S14・5・8)
- V類……人頭大の配石を持つ。(A—S126・27, B—S19)
- 次に、集石遺構の分布状況を見ると、A・B両区とも集石遺構は、同じ等高線上にグループ性を持って分布する傾向がみられる。A区ではVb層でI群(a群)、IV層で4群(b～e群)、B区でもIV層で3群(f～h群)の計8群がみられる。
- a群… I類の集石遺構。西側の標高40～39m付近の平坦面に分布。40m付近にS11・2の2基、39m付近のS13・4・5・6の4基が分布し、S11・2(a-1)と、S14・5・6(a-2)の2グループからみられる。
- b群… 標高39m付近に5基が分布する。このうち、南側にⅢ類のS18・9(b-1)、北側にⅢ類のS110とⅡ類のS111・12(b-2)が2つのグループを作る。
- c群… 標高37m付近にⅡ類のS115とⅢ類のS114が分布する。

d群…標高35m 付近南斜面に4基が分布する。西側にⅢ類のS117・18 (d-1)、東側にⅡ類のS123・24 (d-2) が2つのグループを作る。

e群…標高33m 付近の先端部にV類のS126・27の2基が分布する。

f群…標高52m 付近にV類のS19、Ⅱ類のS110・12が分布する。

g群…標高50～49m 付近にⅣ類のS14・5・8が分布する。

h群…標高46m 付近にⅡ類のS11・2が分布する。

一方、集石遺構を検出した文化層の出土遺物からその時期判別を検討してみると、堂地西遺跡の集石遺構は、A層 (BP21,000～22,000年) とアカホヤ火山灰層 (BP6,000～6,500年) には含まれたⅣ層とⅤ層から検出している。遺物もⅣ層からA区で縄文早期の壺ノ神式、B区で前平式と爪形文系土器、Vb～Vc直上からは、A区で剝片尖頭器とナイフ形石器を伴う石器群を出土しており、Ⅳ層が縄文早期、Vb層が旧石器文化層に分かれる。Ⅰ～Ⅴのうち、Vb層で検出された集石遺構はⅠ類のみで、他のⅡ～Ⅴ類はすべてⅣ層で検出されている。Ⅱ～Ⅴ類の集石遺構のうち、明確にその時期を判別できる供伴遺物はなかった。しかし、Ⅳ層での出土遺物からみると、爪形文・隆起線文系土器—前平式土器—壺ノ神式土器の3時時期の文化層が考えられ、旧石器代出土のVb層とあわせると4時時期の文化層が確認されたことになる。

また、堂地西遺跡ではA・B区で何か所かの集石遺構の焼礫の熱ルミネッセンス分析を行った<sup>(2)</sup>。(試料のサンプリングが調査途中であったため全集石遺構の分析は行えなかった。)

分析の結果からみると熱ルミネッセンス (T・L) 年代にBP14,000～12,000年 (Ⅰ期)、同10,000～9,000年 (Ⅱ期)、同9,000～8,000年 (Ⅲ期)、同8,000～7,000年 (Ⅳ期) の4時期の年代差が出た。

A区の集石遺構では、Ⅰ期 (A-S12・4) Ⅱ期 (A-S18・9・27) Ⅲ期 (A-S15・16・25) Ⅳ期 (A-S123・24) の4時期に区分される。B区の集石遺構では、Ⅱ期 (B-S16・7・8・11・12) とⅣ期 (B-S14・5・9・10) の2時期に区分される。このTL年代と文化層との関連性をみると、旧石器群—爪形文・隆起線文系土器—前平式土器—壺ノ神式土器の4文化層の年代をTL年代のBP14,000～12,900年、10,000～9,000年、9,000～8,000年、8,000～7,000年の4期の集石遺構に伴う焼礫の年代と対比される。

以上の結果から堂地西遺跡における集石遺構の時期的特徴を考えてみると、旧石器時代の集石遺構についてはⅠ類がそれによる (TL年代ではBP14,000～12,000年にあたる) が、縄文創草期—早期の集石遺構については、時差による集石遺構の形態差は明確には言えない。そこで、堂地西遺跡の集石遺構はある程度の分布状況によって7つのグループ (Vb層検出のa群ははぶく) に分けられる。その7群にはそれぞれTL年代の示された集石遺構が伴っており、その年代と対比されてみると、Ⅱ期 (BP10,000～9,000年) にはb-1群・c群・f群、Ⅲ期 (BP9,000～8,000年) には、b-2群・c群・d-1群、Ⅳ期 (BP8,000～7,000年) にはd-2群・g群がそれぞれ対比できる。さらに、これらを集石遺構の構造面からの分類と対比すると、Ⅱ期=Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ類、Ⅲ期=Ⅱ・Ⅲ類、Ⅳ期=Ⅱ・Ⅳ類の集石遺構がそれぞれみられるが、特にⅡ期ではⅢ・Ⅴ類、Ⅲ期ではⅢ類が主体を占めている。このことから堂地西遺跡における縄文時代の集石遺構の時期差を考えるうえで、構成面からは、配石を持つ集石 (Ⅴ類) や掘り込みを持つ集石 (Ⅱ類) が古い様相を持ち、掘り込みを持たない集石 (Ⅲ類) が比較的新しいという仮説が考えられる<sup>(3)</sup>。

さて、これまで集石遺構の構造について述べてきたが、機能面から2・3述べてみると、旧石器時代の集石遺構はかなり火熱を受けたと思われる程赤褐色をしており、顔度の高さを示す。集積の状態でも、平面的なものや積み重なった状態のものがみられるがいずれも、集石の状態が良好で、使用の際、何度も利用した可能性も考えられる。一方、縄文時代の集石遺構では、集積の状態が良好なものは少なく、ほとんどがいわゆる廃棄の状態にある。例えば、大きな礫の集中の中に1～2ヶ所に中心となる集積がみられ、周辺には焼礫が散乱する集石。また、掘り込

みの外に焼礫を除いた状態の集石。掘り込み内に炭化物を含む2層の堆積がみられ、その上層に礫が散乱する集石(2時期にわたる使用?)。配石と思われる人頭大の礫が周辺に散乱する集石。それとは反対に、配石のみが残る集石などいずれも廃棄を考えるうえで良好な資料となる。

このように、堂地西遺跡でみられた集石遺構からは構造や機能を考えるうえでいくつかの資料を提供できたが、この1・2年のうちに田野町の芳ヶ迫遺跡<sup>(5)</sup>や新富町の瀬戸口遺跡<sup>(6)</sup>で良好な集石遺構を大量に検出する調査例<sup>(4)</sup>があり、集石遺構の構造や機能についてのさらに詳しい考察が今後、いくつか出されるであろう。(永友良品)

#### 堂地西遺跡の旧石器文化について

堂地西遺跡A区(以下堂地西A)ではVb層から6基の集石遺構に伴う旧石器群を検出しており、旧石器文化層が確認された。

この文化層であるVb層は、堂地西Aの基本層序からみると、IV層(縄文早期文化層)ーV層(旧石器文化層)ーVI層(第2オレンジ層:Va層が給良丹沢火山灰一以下、A、T-21,000~22,000年前)となっており、AT上位の文化層と言える。さらにV層は3層に分かれVb層とAT層との間には漸移層(Vc層)が入る。石器群の垂直分布は、集石遺構の廃棄礫の分布とほぼ同一で、Vb層中でも比較的中位から下位にかけて分布し、中にはVc層直上のももみられる。(集石遺構はほとんどがVb層下位からVc層直上に検出される)。水平分布も後で述べるが、Vb層の比較的厚く堆積(20~40cm)する範囲に限られる。

この石器群を構成する石器類の特徴としては、縦長剥片を素材とした二側辺加工のナイフ形石器と一側辺と両側辺の基部に加工のある剥片尖頭器が多くみられる。しかし、堂地西Aで尖頭器として規定した石器のうち、最も大型の尖頭器以外の4個についてはナイフ形石器の機能も十分持っており、いづれも剥片の一端につまみ状の柄を作り出し<sup>(7)</sup>ており有茎石器にも分類できる。この種の石器は鹿児島県小牧Ⅲ<sup>(8)</sup>や長崎県中山<sup>(9)</sup>、佐賀県平沢良の後期の遺跡からも出土する。また、横長剥片がみられる点も特徴と言える。数的にはナイフ形石器や剥片に3点と少なく、技法自体も、はっきりせず見逃してしまう程度の剥離ではあるが、横割ぎの技法も使われていたと言える。

層位や石器のセット関係から、堂地西Aの石器群はAT上位の九州旧石器編年<sup>(11)</sup>で言う、後期の前半にあたると思われる。

さて、次に、堂地西Aの生活の場としての広がりを考えてみる。(付図1)

堂地西Aでは、旧石器人たちの生活遺構としては集石遺構6基を検出している。いわゆる礫群である。堂地西遺跡では縄文早期の集石遺構も検出されており、旧石器時代の集石遺構と構造面や機能面であまり大差が見い出せなかったため、旧石器時代の礫群も集石遺構として名称を統一した。集石遺構は直径約20mの範囲に6基が検出しており、標高40mの地点にS11とS12(Aブロック)、39m地点にS14、S15、S16(Bブロック)とS13(Cブロック)の分布がある。

また、石器群の分布と集石遺構の廃棄礫と思われる焼礫の分布には著しい違いはみられない。全体的な傾向としては集石遺構の東ー南方向に分布の集中がみられる。また、石器群と焼礫の分布箇所もほぼ一致する。これは、地形が若干、南東方向に傾斜している点も影響していると思われるが、生活遺構を考えるうえで重要である。

一方、石器群のユニットを考えてみるとAブロックの南西(4b-5bグリッド)に黒色頁岩と風化凝灰質頁岩などの石核・剥片が100点近く分布する。石器類は何点かの使用痕のある剥片や二次加工のある剥片が含まれているが、ナイフ形石器や剥片尖頭器がユニット端に4点(4, 8, 9, 11)みられる。また、風化凝灰質頁岩はこのユニットだけにしか分布せず、しかもこのユニットで最も多い石材である。おそらく、このブロックで剥離作業を行ったらしく石核との接合資料もみられるが、この石材を使った石器は堂地西Aをはじめ本遺跡では検出されていない。

Bブロックの集石遺構の周辺には、焼礫の分布はみられるが、石器群の著しい分布はみられない。Bブロックの全

域にわたり点散するが、石器類はS15・6の東の6Cグリッドにナイフ形石器(3)と剃片尖頭器(1, 2, 6)が4点, S14の南-南東約5~6mの5dグリッドに剃片尖頭器(7), ナイフ形石器(10)が各1点づつ分布する。また、5Cグリッド南西端に影器1点(13)がみられる。石材は花崗質中粒砂岩, 黒色頁岩, 凝灰質頁岩が主である。

Cブロックでは焼礫がS13の南東側に長く分布する。石器類はみられず、7bグリッド南東角に接合可能な花崗質中粒砂岩の剃片が20点ほど分布する。

このように、堂地西Aでは石器類4~6個を持つ最少2つのユニットが考えられる。(水友良典)

#### 堂地西遺跡出土の縄文土器について

堂地西遺跡においては、A・B・C区に分けられた調査区において、それぞれ違った様相の縄文土器が出土している。

A区においては、出土量は少ないのであるが、6~8-c-eを中心にいわゆる壺ノ神式土器が出土している。壺ノ神式土器は南九州を中心に分布し、アカホヤ層直下より出土する1群の縄文土器である。その器形および文様により種類に分類ができる。それは戦前より研究が行われてきた所であるが、1972年河口貞徳氏によって大成され、A a式, A b式、(燃系文系)、B c式, B d式(貝殻文系)の4分類が一系統のもとにA a→A b→B c→B dと発展すると提起されている<sup>12</sup>。その後、新東晃一氏や多々良博氏らによって貝殻文系と燃系文系の2系統による発展の系譜を示されている<sup>13</sup>。また木崎康博氏は人吉市大丸藤ヶ追遺跡の調査結果より貝殻文系より燃系文系へ発展するという新なる説を提起している<sup>14</sup>。

また、県内においては、戦前の柏田貝塚の発掘調査を初めとして現在の所62ヶ所の遺跡が知られている<sup>14(15)</sup>。

本遺跡出土の土器群は地文に燃系文を施し、その上に凹線文および割突による連点文を施すもので河口氏の分類によるA a式に相当するものが存在している。周辺の遺跡では、学園部市遺跡群内では、赤坂・入料・下田畑遺跡で燃系文系・貝殻文系各種が確認されており、その他、滑武町辻遺跡<sup>17</sup>、若宮田遺跡<sup>18</sup>、田野町又五郎遺跡等でも各種出土している。今後、遺跡間の土器及びそれに伴う遺構の検討が重要な課題となるであろう。

またA区においては14のような貝殻条痕を施した円筒土器も出土している。これは壺ノ神式土器を主体として出土した鹿兒島県小山遺跡土器のものに類似しておりほぼ同時期のものであろうと思われる。

またB区においては、IV層~V層上部にかけて本県では類例の少ない爪形文土器・隆起線文土器が出土している。これらの土器は約500点出土している。これらの土器群はそのほとんどが口縁部付近に文様が集中して施されている。大きく分けて本文中で示したように爪形文を主体とする土器群(I類)と隆起線文を主体とする土器群(II群)に分かれ、それぞれについて分類を試みた。

爪形文についていえば、福岡県門田遺跡<sup>21</sup>や沖縄県野国遺跡<sup>22</sup>等で特徴的に見えるような土器整形時に印されたもので指頭痕の残るタイプとは違い、本遺跡のものは文様として爪ないしヘラによる規則的に施されたものである。その点では河口貞徳氏が爪形文土器を土器の成形工作にもとづくもの(指頭押印痕)と土器成形に関係なく文様として施されたもの(爪形文)の2つに大別して分類を試みられている<sup>23</sup>が本遺跡例は後者に属するものである。

なお今回はI類として取り扱っているI-b類およびc類は、a類と若干文様構成が異なり文様が口縁部付近に密集した状態で施されており上下の爪形文の間に粘土の隆起が認められる。これは、施文原体が不明な現時点においては推定の域をでないが、3~4条程度のヘラを1束として押ししながら押し引きを行っていることも想定される。これは隆起線文土器の施文方法に類似しており、今後解明していかなければならない問題であろう。

またII類とした隆起線文土器の1群は、概ね指頭による隆起線の張り付けが行われたもの(b類)と隆起線の上下に張り付けの際についたと思われる爪形文が文様となって残っているもの(a類)に分けられる。特にII-b-1

類とした16は隆起線が断面三角形を呈しており鹿児島・鹿屋市伊敷遺跡出土の土器にその類例が見られる。またa類の中でもⅡ-a-1類とされる18、20などは串間市大平遺跡Ⅵ層出土の七器や志布志町東黒土田、鎌石橋遺跡出土の土器に類例が求められる。この中でも、東黒土田、鎌石橋、伊敷遺跡出土の土器は、桜島起源の火山灰とされるいわゆる薩摩（約11,000年前）より下層で出土している。また北方町岩土原遺跡においても第2文化層より細石器を伴って隆帯上に爪形文を施した土器が出土し、調査者は、隆帯を張り付けた際の指頭押圧時に印されたものであろうとしており、本遺跡の土器と技法的に似通っていると思われる。また本遺跡のものは岩土原のものより隆起線が細く、細隆起線文の可能性もある。層位的にみるとやや傾斜地に位置しているため若干の流動を考えなければならないが、ほぼⅣ層～Ⅴ層上部にかけての出土である。このⅤ層はA地区においてⅤa～Ⅴcに細分されており、その中半・Ⅴb層よりナイフ形石器、剥片尖頭器が出土している。その上のⅤa層は佐土原町船野遺跡において細石器が出土した層と対比できるのではないかと想定されており、これらの土器群はその直上に位置するのではないかとと思われる。

以上のことにより、B区出土のⅠ・Ⅱ類土器群は縄文時代草創期に位置する土器群であろう。

また、この中のⅡ-a-1類やⅡ-a-3類などは口縁部形態がそれぞれⅠ-D-1類、Ⅰ-B-2類やⅠ-c-1類に類似しており近接した関係をしめすものと思われる。

なお、B区においては上記の土器群以外にⅢ類土器として分類した貝殻条痕文土器が出土している。これらの土器は胴部に貝殻条痕文を施し、口唇部およびその直下に貝殻ないしへら条工具による施文が行なわれる円筒土器で、いわゆる前平式土器とよばれるものであり、鹿児島県指宿市岩本遺跡出土の土器群に類似している。また51は口唇部直下にへら掻きによる文様を施しており今まで例のないタイプとして注目される。これらの土器群とⅠ・Ⅱ類の土器群とは近接した地点で出土しているものもあるが、出土数が少なくその関連性を述べるのは今後の資料の増加に期待したい。

またC区においてはB区のⅢ類土器と同じ系統の土器が出土している。

以上、堂地西遺跡出土の縄文土器について概観してきた。この中で特にB区のⅠ・Ⅱ類土器はその出土状態が表土層直下にあるという不利な状況にはあるものの、県内における縄文時代草創期の土器群として注目されるものである。尚、層位や爪形文・隆起線土器の時期および関連性や施文本体の復元等の種々の問題点は残っているが、今後の資料増加を待ちながら解決していきたい。

また堂地西遺跡においてその集石をサンプリングし、熱ルミネッセンス法による年代測定を行った所、B区のⅠ・Ⅱ類土器が出土している付近ではBP10,220やBP9,450の測定値を得た。その他の縄文時代と想定される集石の年代値を見てみるとA区においては1ヶ所BP7,050を計り、他はほとんどがBP8,000年代を示しており、これに対してB区ではほとんどBP7,000年代を計測している。これは考古学的に見た場合、遺物の出土はまばらであるが、A地区は壱ノ神式土器を出土し、B地区は前平式土器を出土しており計測値との間もギャップが生じている。これは畑等による削平によるものか、種々問題点が残る所である。また田野町の前平遺跡群においても同様の測定をおこなっており今後資料の増加とともに解明しなければならない問題である。

(日高孝治)

## まとめ

堂地西遺跡では、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、歴史時代の4つの文化層がある。

特に、旧石器文化層の調査例は県内では少なく、層的、面的にこれほど大規模な調査ははじめてであった。さらに、縄文早期文化層とあわせて、火山灰層と文化層との関連させるうえで貴重な調査となった。

アカホヤ層（A h 6,500～6,000年前）と第二オレンジ層（A T 22,000～21,000年前）との間に堆積する2層のローム層（Ⅳ層とⅤ層）から旧石器時～縄文早期の遺構、遺物を検出した。旧石器文化層はA T層上位のハードローム

層(VI b層)より縦長剥片を主体としてナイフ形石器と剥片尖頭器を出土しており、九州の旧石器時代編年の後期にあたり、細石器文化(宮崎平野では船野遺跡に代表される)<sup>(3)</sup>に先行する。TL年代ではBP14,000~12,000年の分析結果が出ており、ほぼ一致する。これまで宮崎平野では船野遺跡をはじめ数十ヶ所でA T上位のローム層よりナイフ形石器や尖頭器、それに細石刃、細石核などを検出しており(船野以外は表採資料)、県内では北部の五ヶ瀬川流域の旧石器分布圏に対して、宮崎平野にも一大分布圏の存在が考えられていたが、堂地西Aの旧石器文化層が学術的にもその実証を行ない良好な資料となった。

一方、縄文早期文化層からは、前平式と壱ノ神式の土器がいずれもIV層から出土している。さらに、IV層下層~V a層直上から前平式の土器より古手と思われる串間市大平遺跡等<sup>(4)</sup>でみられる隆起線文系土器等が出土しており、あわせて細石刃、局部磨製石斧もみられる。このことは、この隆起線文等の土器が縄文草創期のものであると言える。このように、堂地西でのA h層とA T層の間には、V b層(旧石器時代後期文化層)-V a層-V a層~IV層(縄文草創期文化層)-IV層(縄文早期文化層・前平式-壱ノ神式)の4つの文化層が確認できたことになる。

旧石器時代については宮崎平野は大分と東九州文化圏に分類されている。堂地西Aでみられる有蓋石器(ナイフ形石器、剥片尖頭器)も、東九州や西九州でもみられるが、南九州の小牧遺跡でもみられる。縄文土器については、隆起線文系の土器が宮崎県南部の串間市大平遺跡でみられるなど、南九州の様相が強い。このことは、旧石器においても、南九州の影響を強く受けていると思われる。

弥生後期の文化層についても、熊野原や堂地東遺跡でみられる間仕切り型の住居跡に先行する時期のもので、堂地東遺跡の後期前葉?の住居跡とほぼ併行するものと思われる。

歴史時代の文化層からは柱穴群が検出され、土師器の糸切り底の小皿等を出土しており中世の時期のものと思われる。柱穴は小形で明確な建物跡と思われる柱穴の並びでは確認できなかった。堂地西Bは学園都市内でも最も標高が高く、傾斜も若干急である。そのため、堂地西Bの柱穴群は見張台的な役割を果たしていたとの推測もできる。

(永友良典)

註1) 本遺跡では当初4ヶ所で焼礫の集中箇所を検出し集石(S1)としたが、そのうち礫の集中の疎な集石については、散石とした。

2) 本書付録参照

3) 大分県天瀬町平草遺跡の調査では、土趾と配石を持つ集石が→土趾を持たない集石という変遷がみられた。

天瀬町教育委員会「平草遺跡」『大分県日田郡天瀬池区遺跡群発掘調査報告書』1982

4) 岩永哲夫・菅付和樹「宮崎県内の集石遺跡①」『九州考古学』第58号

5) 出野町教育委員会「芳ヶ池第1遺跡」『県営農地開発事業前平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』1984

6) 1984年2月~3月にかけて新富町教育委員会が発掘調査を実施した結果、縄文早期の集石遺構を検出。未報告

7) 加藤幸平・鶴丸俊明「図録石器の基礎知識I、先土器(上)」柏書房 1980

8) 長野真一「小牧3A遺跡の紹介」指宿史談創刊号 1979

9) 萩原博文「平山遺跡」『日本の旧石器文化3』1976

10) 杉原莊介・戸沢充則「佐賀県伊万里市平沢良遺跡発見の旧石器文化」『畿台史学』No.12 1962

11) 橘昌彦・萩原博文「九州における火山灰層序と旧石器時代の石器群」『第四紀研究』第22巻3号 1983

12) 河口貞徳「壱ノ神式土器」『鹿児島考古学』第6号 鹿児島考古学会 1972

13) 新東晃一「壱ノ神式土器」『縄文文化の研究3』雄山閣 1982

14) 多々良友博「壱ノ神式土器群の文様構成」『壱ノ神式土器』縄文研究会 1985

15) 木崎康弘「熊本県大丸・藤ヶ池遺跡の壱ノ神式土器について」『壱ノ神式土器』縄文研究会 1985

16) 石川順太郎「宮崎県の考古学」吉川弘文館 昭和43年

17) 北郷泰通・長津宗重「辻遺跡」清武町土地開発公社、清武町教育委員会 1980

18) 岩永哲夫「若宮田遺跡」清武町教育委員会、南宮崎農業協同組合 1979

19) 田町教育委員会により発掘調査が行なわれ現在整理中である。

- 08 河口貞徳他「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(20) 小山遺跡」鹿児島県教育委員会 1982
- 09 柳田康雄他「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第11集 門出遺跡」福岡県教育委員会 1979
- 20 岸水敏彦他「沖縄県文化財調査報告書第57集 野国・野国貝塚群 B地点発掘調査報告」沖縄県教育委員会 1984
- 21 河口貞徳・本田道輝、瀬戸口翠「中甫洞穴」『鹿児島考古第17号』鹿児島考古学会 昭和58年
- 04 鹿児島県教育委員会「鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(25) 大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」1983
- 03 河口貞徳・峯崎幸清・上田耕「鎌石橋遺跡」『鹿児島考古第16号』鹿児島考古学会 昭和57年
- 05 瀬戸口翠「東嶽土遺跡」『鹿児島考古第15号』鹿児島考古学会 昭和56年
- 07 09に同じ
- 08 鈴木重治「本邦における土器起源に関する研究—岩土原遺跡を中心に—」『南九州大学園芸部研究報告第3集』南九州大学園芸学部 昭和48年
- 09 橋品信「船野遺跡」『考古学論叢第3号』1975
- 08 指宿市教育委員会「岩本遺跡」1978
- 01 本書付録を参照
- 03 本県では出羽洞穴(1966年調査)岩土原遺跡(1969年調査)船野遺跡(1970~72年調査)の3例だけで残りの資料は表録。
- 03 堂地西遺跡のV<sub>a</sub>層は船野遺跡の細石器文化層を検出したソフトローム層と併行と思われる。
- 04 本書第1章第2節旧石器時代参照

表16 A区旧石器遺物計測表

グリッド・遺物番号	器種	最大長(m)	最大幅(m)	最大厚(m)	重さ(g)	石材	図面番号	備考
1	3b-1	剥片 I	5.5	3.3	1.4	28.1	砂-Ⅱ	
2	3b-2	*	6.7	3.7	1.1	30.4	砂-Ⅰ	14
3	3b-3	*	3.5	2.2	0.8	5.8	*	18
4	3b-4	*	5.4	2.2	1.5	14.2	*	21
5	4a-6	*	5.8	2.7	0.8	13.4	頁-Ⅳ	
6	4a-7	*	5.2	4.6	1.6	30.2	砂-Ⅲ	
7	4b-3	*	5.9	3.0	1.2	18.2	*	
8	4b-5	剥片 II	7.0	7.0	4.7	182.4	*	
9	4b-13	剥片尖頭器	6.6	2.8	1.0	16.2	砂-Ⅱ	8
10	4b-14	ナイフ形石器	5.7	2.8	1.6	22.7	*	9
11	4b-143	剥片 I	5.8	5.0	1.7	50.0	*	22
12	4b-154	*	5.7	4.7	1.4	27.5	砂-Ⅰ	
13	4b-155	石核	6.5	4.5	4.0	117.0	砂-Ⅲ	
14	4c-1	剥片 II	8.8	3.6	1.4	49.5	砂-Ⅰ	17
15	5a-16	石核	6.4	5.7	4.2	106.2	*	
16	5a-17	*	7.7	6.6	5.2	255.0	頁-Ⅳ	
17	5b-6	剥片 II	4.6	4.3	1.0	2.3	砂-Ⅲ	23
18	5b-17	石核	6.8	7.5	5.8	242.0	*	
19	5b-56	ナイフ形石器	7.2	4.1	1.6	45.1	砂-Ⅰ	11
20	5b-80	*	2.9	1.1	1.1	3.9	頁-Ⅰ	4
21	5c-90	剥片 I	3.2	1.4	1.0	10.3	*	24
22	5c-141	形器	4.5	2.6	1.1	9.3	砂-Ⅲ	13
23	5c-148	剥片 II	5.0	4.8	0.7	20.2	*	
24	5d-10	剥片尖頭器	9.1	3.4	1.2	3.4	砂-Ⅰ	7
25	5d-18	剥片 I	7.8	4.3	1.8	44.2	*	
26	5d-22	*	6.3	2.8	0.9	16.0	*	
27	5d-42	剥片 II	8.9	3.1	0.8	26.0	*	16
28	6b-3	剥片 I	11.4	3.9	2.2	94.2	*	
29	6b-51	*	7.2	2.8	1.7	21.2	*	
30	6b-54	剥片 II	13.6	4.4	2.5	100.2	*	
31	6c-1	剥片尖頭器	12.3	5.7	1.7	84.0	*	1
32	6c-8	剥片 II	8.1	3.2	2.1	50.4	砂-Ⅲ	
33	6c-46	剥片 I	8.7	2.6	2.0	4.0	*	
34	6c-47	剥片尖頭器	6.8	2.4	1.2	18.7	砂-Ⅱ	6
35	6c-50	*	10.0	3.8	1.4	48.8	*	2
36	6c-51	剥片 II	6.8	3.9	1.4	19.0	砂-Ⅳ	
37	6c-53	ナイフ形石器	3.6	1.7	1.7	5.5	頁-Ⅲ	3
38	6c-55	剥片 II	4.4	3.7	1.2	10.0	砂-Ⅳ	19
39	6c-236	剥片 II	7.2	3.2	0.8	2.1	砂-Ⅲ	15
40	6d-1	ナイフ形石器	5.3	2.8	0.7	8.6	頁-Ⅰ	10
41	6d-118	*	4.3	3.1	0.9	12.3	*	10
42	7b-5	剥片 I	6.9	4.1	1.8	42.0	砂-Ⅰ	
43	7b-11	*	4.3	7.2	1.2	11.3	*	
44	7b-16	石核	4.6	4.2	2.2	49.0	*	
45	7b-20	剥片 I	4.8	4.6	1.3	40.2	砂-Ⅳ	
46	9c-2	槌器	6.6	3.4	1.6	25.5	頁-Ⅰ	12
47	13e-3	ナイフ形石器	2.9	1.5	0.7	3.1	*	5
48	13g-2	剥片 I	2.9	1.8	0.8	3.7	*	
49	11g-185	*	6.3	4.0	1.4	35.1	頁-Ⅲ	20

剥片……使用痕のある剥片  
剥片II……二次加工のある剥片

砂Ⅰ……花崗質中粒砂岩  
砂Ⅱ……凝灰質粗粒砂岩  
砂Ⅲ……凝灰質砂岩  
砂Ⅳ……細粒砂岩

頁Ⅰ……黑色頁岩  
頁Ⅱ……石灰質頁岩  
頁Ⅲ……凝灰質頁岩  
頁Ⅳ……風化凝灰質頁岩

表17 縄文土器観察表

図番番号	地区名	出土地	器部及び残存	文様	胎土	混和物	色		焼成	備考
							表	裏		
1	A	7c	胴部	注繪・刺突文 筋赤文	石灰・長石の砂粒と1.5mm大の黒色の粒を含む	7.5YR 5/6 褐色	10YR 5/6 におい黄褐色	良好		
2	"	7d	"	注繪・刺突文 筋赤文	1mm内外の石灰・長石と黒色の砂粒を含む	10YR 5/6 におい黄褐色	10YR 5/6 におい黄褐色	やや良好		
3	"	7c	"	注繪文 刺突文	石灰・長石と褐色顔色の砂粒を含む	10YR 5/6 におい黄褐色	10YR 5/6 におい黄褐色	良好		
4	"	8c	"	注繪文 刺突文	石灰・長石・黒色・白色の砂粒を含む	10YR 5/6 におい黄褐色	10YR 5/6 におい黄褐色	良好		
5	"	8d	"	注繪文	石灰・長石・黒色・白色の砂粒を含む	10YR 5/6 におい黄褐色	10YR 5/6 におい黄褐色	良好		
6	"	8d	"	注繪・刺突文 筋赤文	石灰・長石・黒色・白色の砂粒を含む	10YR 5/6 におい黄褐色	10YR 5/6 におい黄褐色	やや良好		
7	"	8e	"	注繪文 筋赤文	石灰・長石・黒色の砂粒を含む	10YR 5/6 洗黄褐色	7.5YR 5/6 褐色	良好		
8	"	6d	"	注繪文 刺突文	1mm内外の石灰と2mm-3mm大の長石を含む	10YR 5/6 洗黄褐色	10YR 5/6 におい黄褐色	良好		
9	"	6d	"	注繪文 刺突文	石灰・長石と黒色の砂粒を含む	10YR 5/6 洗黄褐色	10YR 5/6 におい黄褐色	やや良好		
10	"	8e	"	筋赤文	石灰・長石・黒色・白色の砂粒を含む	7.5YR 5/6 褐色	10YR 5/6 洗黄褐色	やや良好		
11	"	7c	"	注繪・刺突文 筋赤文	石灰・長石・黒色・白色(クリーム)の砂粒を含む	10YR 5/6 褐色	10YR 5/6 洗黄褐色	やや良好		
12	"	8d	"	筋赤文	石灰・長石・黒色・白色の砂粒を含む	10YR 5/6 洗黄褐色	10YR 5/6 におい黄褐色	良好		
13	"	8c	"	注繪文 筋赤文	1mm内外の石灰と長石・黒色粒・白色粒を含む	7.5YR 5/6 褐色	2.5Y 5/6 洗黄褐色	良好		
14	"	11f	口縁部	具縁条痕文	石灰・長石・白色粒・褐色粒を含む	10YR 5/6 におい黄褐色	7.5YR 5/6 黄褐色-褐色	良好		

図番番号	地区名	出土地	器部及び残存	文様	胎土	混和物	色		焼成	備考
							表	裏		
1	B	1e	胴部	爪形文	石灰と雲母・黒色粒を含む	2.5YR 5/6 黄褐色	7.5YR 5/6 褐色	良好		
2	B	2e	口縁部-胴部	"	石灰・長石・褐色粒を含む	10YR 5/6 におい黄褐色	10YR 5/6 におい黄褐色	良好		
3	B	2e	口縁部-胴部	"	石灰の砂粒を含む	10YR 5/6 におい黄褐色	10YR 5/6 におい黄褐色	良好		
4	B	2e	口縁部-胴部	"	石灰と雲母を含む。特殊	7.5YR 5/6 褐色	7.5YR 5/6 褐色-におい褐色	良好		

図番番号	地区名	出土地	器部及び残存	文様	胎土	混和物	色		焼成	備考
							表	裏		
5	B	2e	口縁部-胴部	爪形文	石灰・白色粒を含む	7.5YR 5/6 褐色	5YR 5/6 におい黄褐色	良好		
6	B	3e	口縁部-胴部	"	石灰の粒を少々含む	10YR 5/6 におい黄褐色	10YR 5/6 におい黄褐色	良好		
7	B	2e	口縁部-胴部	"	石灰・白色粒を含む	黄褐色 7.5YR 5/6 5YR 5/6	5YR 5/6 褐色	良好	口縁部に割目あり	
8	B	3e	口縁部-胴部	"	石灰・石灰・白色粒を含む	5YR 5/6 褐色	5YR 5/6 褐色	良好	口縁部に割目あり	
9	B	2e	口縁部	"	石灰・白色粒を赤み粘土に褐色土が混じる	5YR 5/6 褐色	5YR 5/6 褐色	良好		
10	B	2e	口縁部-胴部	"	石灰・白色粒を含む	10YR 5/6 におい黄褐色	7.5YR 5/6 褐色	良好	口縁部に割目あり	
11	B	3e	口縁部	"	石灰・白色粒を含む	2.5YR 5/6 暗赤褐色	2.5YR 5/6 暗赤褐色	良好		
12	B	1e	口縁部	(単位) 爪形文	石灰・白色粒を含む	10YR 5/6 におい黄褐色	7.5YR 5/6 褐色	良好		
13	B	2e	口縁部	(単位) 爪形文	石灰・白色粒を含む	10YR 5/6 におい黄褐色	7.5YR 5/6 褐色	良好		
14	B	3b	口縁部-胴部	爪形文	石灰・白色粒を含む	5YR 5/6 褐色	5YR 5/6 褐色	良好		
15	B	3e	口縁部-胴部	筋条痕文	石灰・雲母を含む	10YR 5/6 褐色	10YR 5/6 褐色	良好		
16	B	3e	口縁部	"	石灰を含む	7.5YR 5/6 洗黄褐色	10YR 5/6 におい黄褐色	良好		
17	B	2e	口縁部-胴部	"	石灰・雲母・白色粒を含む	10YR 5/6 におい黄褐色	10YR 5/6 におい黄褐色	良好		
18	B	2e	口縁部-胴部	"	石灰・白色粒を含む	10YR 5/6 洗黄褐色	10YR 5/6 におい黄褐色	良好		
19	B	1e	口縁部-胴部	"	石灰・長石を含む	7.5YR 5/6 褐色	7.5YR 5/6 褐色	良好		
20	B	1e	口縁部-胴部	"	石灰・長石・雲母・白色・褐色粒を含む	10YR 5/6 洗黄褐色	10YR 5/6 洗黄褐色	良好		
21	B	3e	口縁部-胴部	"	石灰・白色・褐色粒を含む	5YR 5/6 褐色	5YR 5/6 褐色	良好	口縁部に割目あり	
22	B	1e	口縁部	"	石灰・白色粒を含む	10YR 5/6 におい黄褐色	10YR 5/6 におい黄褐色	良好		
23	B	表採	口縁部-胴部	"	石灰・白色粒を含む	5YR 5/6 褐色	5YR 5/6 褐色	良好		
24	B	3e	口縁部	"	石灰・白色粒を含む	5YR 5/6 褐色	5YR 5/6 褐色	良好		
25	B	1e	口縁部	"	石灰・長石・白色粒を含む	5YR 5/6 褐色	5YR 5/6 褐色	良好	スス付着	

図番番号	地区名	出土地	露部及び残存	文様	胎土	混和物	色		焼成	備考
							表	裏		
25	B	2e	I露部一部	隆起線文	0.1~1.5mm大の白色粒・石英を含む		10YR 5/1 に濃い黄褐色	10YR 5/1 に濃い黄褐色	良好	
27	B	2o	I露部	*	0.1~0.5mm大の白色粒・石英を含む		5YR 5/1 に濃い褐色	5YR 5/1 に濃い褐色	良好	
28	B	1e	II露部一部	*	白色・赤褐色を含む		7.5YR 5/1 褐色	7.5YR 5/1 に濃い褐色	良好	
29	B	1e	I露部	*	石英・白色粒を含む		5YR 5/1 褐色	7.5YR 5/1 褐色	良好	
30	B	2e	II露部	*	石英・角閃石・白色粒を含む		10YR 5/1 浅黄褐色	10YR 5/1 浅黄褐色	良好	
31	B	3e	II露部	*	0.1mm大の白色粒を多く含む		5YR 5/1 褐色	5YR 5/1 明赤褐色	良好	
32	B	3o	II露部	*	石英・白色粒を含む		7.5YR 5/1 浅黄褐色	7.5YR 5/1 浅黄褐色	良好	
33	B	2e	II露部一部	*	石英・白色粒を含む		5YR 5/1 褐色	7.5YR 5/1 褐色	良好	
34	B	2・3c	II露部	*	石英を含む		5YR 5/1 褐色	5YR 5/1 に濃い赤褐色	良好	
35	B	1f	II露部	*	石英・角閃石・白色粒を含む		5YR 5/1 褐色	5YR 5/1 に濃い赤褐色	良好	
36	B	2e	II露部	*	石英・角閃石を含む		7.5YR 5/1 褐色	10YR 5/1 浅黄褐色	良好	
37	B	2・3e	II露部	*	石英・白色粒を含む		7.5YR 5/1 褐色	7.5YR 5/1 褐色	良好	
38	B	3d・e	II露部	*	石英・黒石を含む		5YR 5/1 褐色	5YR 5/1 褐色	良好	
39	B	2e	II露部	*	石英・白色粒を含む		10YR 5/1 に濃い黄褐色	7.5YR 5/1 に濃い赤褐色	良好	
40	B	3c	II露部一部	*	白色粒を多くと石英を含む		5YR 5/1 褐色	5YR 5/1 に濃い赤褐色	良好	
41	B	2c	II露部	*	石英を含む		7.5YR 5/1 浅黄褐色	10YR 5/1 浅黄褐色	良好	スチフ着
42	B	3e	II露部	*	白色粒を含む		5YR 5/1 明赤褐色	2.5YR 5/1 赤褐色	良好	
43	B	3d・e	II露部	*	0.1~0.5mm大の白色粒・石英を含む		7.5YR 5/1 に濃い褐色	7.5YR 5/1 に濃い褐色	良好	
44	B	1e	II露部	*	石英・白色粒を含む		2.5YR 5/1 に濃い赤褐色	2.5YR 5/1 明赤褐色	良好	
45	B	1o	I露部	*	石英・白色粒を含む		7.5YR 5/1 褐色	7.5YR 5/1 褐色	良好	
46	B	3d・o	II露部	*	石英・白色粒を含む		5YR 5/1 に濃い赤褐色	5YR 5/1 に濃い赤褐色	良好	

図番番号	地区名	出土地	露部及び残存	文様	胎土	混和物	色		焼成	備考
							表	裏		
47	B	2e	I露部	隆起線文	白色粒を含む		7.5YR 5/1 褐色	7.5YR 5/1 褐色	良好	
48	B	1e	I露部一部	*	0.1~1mm大の白色粒・石英を含む		10YR 5/1 に濃い黄褐色	7.5YR 5/1 褐色	良好	
49	B	1o	II露部一部	*	0.1~0.2mm大の白色粒を含む		7.5YR 5/1 明赤褐色	7.5YR 5/1 褐色	良好	
50	B	3e	II露部一部	昇送網痕 具散条痕	0.1~1mm大の白色粒を多く含む 石英・砂粒を含む		10YR 5/1 に濃い黄褐色	10YR 5/1 に濃い黄褐色	良好	スチフ着
51	B	S17	II露部一部	ヘラ跡と 具散条痕	0.1~1mm大の白色粒を多く含む 石英・砂粒を含む		10YR 5/1 に濃い黄褐色	10YR 5/1 明赤褐色	良好	
52	B	表層	I露部	ヘラ跡と 具散条痕	石英を含む 0.1~1.5mm大の砂粒を含む		7.5YR 5/1 褐色	7.5YR 5/1 褐色	良好	
53	B	4e	II露部一部	具散条痕 具散条痕	石英・角閃石を含む		10YR 5/1 に濃い黄褐色	2.5Y 5/1 浅黄褐色	良好	

○胎土における不明な混和物については色調で表記した。

表 18 土師器観察表

番号	出土位置	器種	器形	法 量			色 調		胎 土	焼 成	調 整			備 考
				口 径	底 径	高	内 面	外 面			内 面	外 面	底 部	
1	表 探	土師器	杯	12.0	7.8	3.45	黄 橙 色	黄 橙 色	赤みが強い	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
2	B-44-SH-90	*	*	13.0	9.0	3.95	浅黄橙色	浅黄橙色	赤みが強い砂粒を含む	*	横ナデ	横ナデ	*	
3	B-5c-SH-104	*	*	12.4	9.0	4.6	*	*	赤みが強い	*	横ナデ	横ナデ	*	
4	表 探	*	*	—	8.4	—	浅黄 色	浅黄 色	赤みが強い	*	ナデ	*	*	
5	表 探	*	*	—	7.6	—	浅黄橙色	浅黄橙色	細砂粒を含む	*	*	*	*	
6	B-SH-197	*	小皿	—	7.4	—	*	*	褐色の砂粒を含む	*	*	*	*	
7	B	*	杯	—	10.8	—	浅黄橙色	浅黄橙色	赤みが強い	*	*	*	*	底面がやこばこし 小石が埋まっている
8	表 探	*	*	—	8.6	—	*	*	赤みが強い	*	*	*	*	
9	B	*	小皿	8.2	6.65	1.3	*	*	赤みが強い	*	横ナデ	*	*	
10	表 探	*	*	7.6	6.4	1.2	*	*	赤みが強い砂粒を含む	*	*	*	*	
11	B-SH-102	*	*	7.5	6.4	1.15	黄 橙 色	黄 橙 色	赤みが強い 約 5mm 位の黒い粒わず かに含まれている	*	*	*	*	
12	B-SH-103	*	*	—	—	1.3	浅黄橙色	浅黄橙色	赤みが強い	*	ナデ	*	*	
13	表 探	*	*	9.3	7.2	1.5	浅黄橙色	浅黄橙色	赤みが強い砂粒を含む	*	*	ナデ	赤切り	
14	B-SH-197	*	*	6.8	6.2	0.9	*	*	赤みが強い	*	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
15	表 探	*	*	7.4	5.9	1.1	*	*	赤みが強い	*	*	*	*	
16	B-SH-79	*	*	7.4	5.8	1.2	*	*	赤みが強い	*	*	*	*	
17	B-5c-SH-124	*	*	—	6.2	—	浅黄橙色	浅黄橙色	赤みが強い	*	*	*	*	
18	B	*	*	—	4.4	—	橙 色 (He 7.5YR 5)	橙 色	赤褐色の砂粒を含む	*	*	*	*	外面酸化が著しい
19	B	*	*	8.2	6.6	1.4	浅黄橙色	浅黄橙色	赤みが強い 約 5mm 位の黒い粒を わずかに含む	*	*	*	*	
20	B-SH-19	*	*	9.4	6.8	1.3	浅黄橙色	浅黄橙色	赤みが強い	*	*	*	赤切り	
21	B	*	*	—	—	—	黄 橙 色	浅黄橙色	赤みが強い	*	ナデ	*	*	

番号	出土位置	器種	器形	法 量			色 調		胎 土	焼 成	調 整			備 考
				口 径	底 径	高	内 面	外 面			内 面	外 面	底 部	
22	B	土師器	舞台付杯	—	7.0	—	上記器種 (He 7.5YR 5)	上記器種	赤褐色の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	赤切り	
23	B	*	杯	—	7.8	—	黄 橙 色	黄 橙 色	赤みが強い	*	*	*	*	
24	B	*	小 皿	—	5.0	—	浅黄橙色	浅黄橙色	赤みが強い	*	ナデ	*	*	
25	B-7e	*	*	—	5.0	—	黄 橙 色	黄 橙 色	赤みが強い	*	*	*	*	
26	B-SH-172	*	*	—	—	1.3	褐 灰 色	褐 灰 色	赤みが強い	*	*	*	*	
27	B-4b	*	*	10.0	6.6	1.4	浅黄橙色	浅黄橙色	赤みが強い	やや良	ナデ	ナデ	*	

○土師器の色調については基本的に下記の色調に分類した

- 赤橙色 (10R 5)    ○赤黄橙色 (2.5YR 5)    ○橙 色 (5YR 5)    ○黄 橙 色 (7.5YR 5)    ○黄 橙 色 (7.5YR 5)  
 ○浅黄橙色 (10YR 5)    ○浅黄 色 (2.5Y 5)    ○浅黄 色 (2.5Y 5)    ○灰 灰 色 (2.5Y 5)    ○褐 灰 色 (10YR 5)

## 第V章 平畑遺跡の調査

### 第1節 調査の経過と概要

平畑遺跡の調査に着手したのは、昭和57年9月6日である。発掘区全域に6箇所の長トレンチを南北に設定し、表土層の厚さ、地形の傾斜を確認した後、全面発掘を期して表土層を重機により除去した。トレンチによる観察結果は、南東方向への地形傾斜に対し、北面の高い部分と南側の低い部分の両地区に包含層がほとんど残留しておらず、表土層と若干の黒色土の残りを除いてはすぐアカホヤ層面に当たり、遺構が露出する状態であった。そして、傾斜が最も急になる標高29~30mの地区に一部厚く包含層が残り、9~10世紀を中心とする遺物類も検出されることが確認された。

2ヶ月に及ぶ表土剥ぎによって発掘区の南半分の様相が明らかになり、表土層が薄いわりには意外に竪穴住居跡などの遺構の残りが良いことが確認され、包含層の厚い中央部から北半分にかけての調査に期待がもたれた。まずその成果は、土師器、内黒土師、布痕土器などを伴う掘立柱建物跡の検出となって表われたが、その地区には縄文の竪穴住居跡がむしろ少なく分布していることが明らかとなった。

そして、年度末に及ぶ調査によって、27棟の縄文竪穴住居跡、14棟分の掘立柱建物跡が検出された。

こうした発掘調査と並行して、10haに及ぶ平畑遺跡の遺物散布地の取り扱いについて、宮崎大学、地域振興整備公団と協議を重ねた結果、西半分については大学農場として現況利用するというで、造成地から当面は避けられることになったので、以降は大学の造成・建設計画に伴ない発掘調査を進めることになった。そのため、昭和58年度には、大学内道路及び温室等付属施設の建設される地区を対象とすることになり、昭和58年7月18日から11月21日まで南北・東西に建設されるL字形の道路敷部分を、11月10日から昭和59年3月19日まで温室等付属施設の建設される西方の地区を調査し、発掘区に性格上断片的な成果に終るしかないが、成果としては28棟の縄文竪穴住居跡、10棟の掘立柱建物跡を検出することが出来た。

なお、平畑遺跡における以降の発掘調査は、数地の譲渡を受けた宮崎大学が直接、土地利用計画に伴ない実施することになっているが、独自で調査体制を組むことが出来ないため、異文化課に調査の依頼がなされている。本年度（昭和59年度）は、58年度に継続した西方の地区の一部の発掘調査を実施し、来年度は農場道路敷の発掘調査を実施することになっている。

(北 郷 泰 道)

### 第2節 遺跡の立地と環境

野塚山系の北東へのびる丘陵のひとつが、北を清武川、南を加江田川に挟まれて、日向灘に迫る舌状台地を形成している。この台地の北東部、清武川に面した所から、台地は南西或るいは西方向に二枝に分かれてのびる谷底低地によって、東の丘陵地帯と南北ふたつの台地（南台地・北台地）に区切られている。そして、さらに、谷底低地から枝分かれした開析谷や直接入り込む多数の開析谷によって台地は刻まれる。宮崎学園都市遺跡群は、これら舌状台地を中心に、その北西、清武川支流の田上川を挟んだ丘陵地帯（北丘陵地）にまで点在する。その中で平畑遺跡は、南台地の西端、平坦地が丘陵地帯に接するあたりの約10万㎡に及び広大な面積に位置している。

遺跡は、地形分類上、平坦地中位面のⅠ~Ⅱ<sup>(1)</sup>に及び、標高40m~25mで途中数段の段差をもちながらも南東方向にゆるやかに傾斜しており、台地南端は、急斜面をもって比高差30数mの沖積地水田面へと下っている。そして、

そこに向かって開析谷が数条形成される。遺跡の北側は、東西方向にのびる谷底低地で区切られ、その西端は開析谷が形成されている。これら遺跡の周囲の開析谷には湧水が見られ、現在は小規模な溜池に利用されるなど、水の便はよい。また、遺跡の南端から加江田川までは、直線距離にして500～600m前後である。遺跡の西地区標高40m前後の地点からは東に海岸が遠望でき、直線距離で約4km前後である。

平畑遺跡は、早くから縄文時代後期以穀文系土器の散布地として周知されていた木花野首遺跡を包含しており、今回の一連の発掘では、新たに縄文時代早期や晩期、古代～中世にかけての複合遺跡であることが判明した。この平畑遺跡の周辺では、縄文時代早期の遺跡として、北へ谷底低地をへだてて約200～300mの位置に堂地西遺跡が存在する。堂地西遺跡は、標高50m～30mのゆるやかな丘陵上に営まれ、ほかに旧石器、弥生時代の住居跡、掘立柱建物跡群など各時代の複合遺跡である。ここから、丘陵を南東へまわると標高25m程の平坦地に堂地東遺跡が存在する。平畑遺跡からは北東へ約500mの所で、弥生時代の住居跡群を中心に、縄文早期集石遺構、後期遺物や中世～近世の石塔群・墓塚、掘立柱建物跡群などが検出されている。また、平畑遺跡と同じ台地上に、北東へ約600mの所には縄文早期や後期の遺物を出した熊野原遺跡C地区が存在する。熊野原遺跡は標高20m程に位置し、弥生～古墳時代の住居跡が主体をしめる。さらに東、台地北東端の小丘陵を中心とした標高17m～13mの地点には、前原西遺跡が存在する。前原西遺跡は、平畑遺跡から北東約1kmに位置し、縄文時代早期集石遺構を中心に旧石器や弥生時代の住居跡、中世の周溝墓、掘立柱建物跡が検出されている。その東隣200mの前原北遺跡は、谷底低地との比高差約5mの台地端部に位置し、弥生～古墳時代の数十軒に及ぶ竪穴住居跡や掘立柱建物跡群が検出され、縄文時代早期の集石遺構も確認されている。そして、さらに南へ約200mの前原南遺跡は、平畑遺跡の東方1200m程の台地東端部に位置し、眼下を東から南にかけて谷底低地が区切る。前原南遺跡は弥生～古代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡群が検出されている。標高は13m程で、南東の水田面との比高差は6mである。

平畑遺跡の北西約1kmの北丘陵地には、東側の小平坦地及び西側の緩斜面等に縄文時代早期集石遺構や古代～中世の住居跡、掘立柱建物跡を検出した遺跡が点在する。この北丘陵地西側の下田畑遺跡は北面する標高33mのテラス状の平坦地に位置し、赤坂遺跡は田上川に南面する標高26mの河岸段丘上に位置する。ともに集石遺構やカマド付住居跡、掘立柱建物跡等を検出している。また、南側のテラス状の緩斜面、浦田遺跡では集石遺構や弥生時代の住居跡・土城等が検出され、その南西、田上川を挟んだ入料遺跡でも集石遺構や古代の土城等が検出されている。北丘陵地東側の標高27m～24mの舌状平坦地では同じく集石遺構等の検出された田上・小山尻等の各遺跡が位置している。学園都市遺跡群の周辺では、清武川を挟んで北方約3kmの対岸丘陵地上に、縄文時代早期の辻・若宮田の各遺跡、そして、南東方向約5.5kmの青島海岸の近くには、縄文時代後晩期の松添遺跡やさらに南へ1.5kmの地点に同じく後晩期の納屋向遺跡等が存在する。また、少量ではあるが縄文晩期中葉の遺物が出た遺跡として、北西方向の清武町小原・城内の両遺跡、西方向の山地を越えた田野町黒草遺跡があげられる。これら平畑遺跡周辺の縄文時代早・後晩期、古代～中世の遺跡は今後さらに発見され増進することが予想される。

(菅 付 和 樹)

註(1)、「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報(Ⅲ)」(宮崎県教育委員会、1982)掲載の外山秀・氏作成、学園都市遺跡群周辺の地形分類図参照。詳細は「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第4集」において再考される予定である。

(2)、「文化庁文化財保護部、全国遺跡地図 宮崎県」には宮崎市熊野山下野首所在となっている。本報告での遺跡名は発掘初年度に住居跡群を検出した地区の字名にちなみ、周辺をも含めて平畑遺跡とした。

(3)、「平畑遺跡では弥生時代の遺物も少量出土しているが、昭和59年現在では遺構を確認していない。

(4)、「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第2集」(本報告)に掲載

(5)、「同上」

(6)、「同上」

- (7). 宮崎県教育委員会「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報(Ⅱ)」1981, 「同(Ⅲ)」1982参照
- (8). 同上(Ⅱ)参照
- (9). 同上(Ⅲ)参照
- (10). 「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第3集」に掲載
- (11). 同上
- (12). 本報告に掲載
- (13). 宮崎県教育委員会「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ」1980参照。
- (14). (10)に同じ
- (15). 清武町土地開発公社・清武町教育委員会「辻遺跡」 「清武工業団地造成工事埋蔵文化財発掘調査報告書」1980  
南宮崎農業協同組合・清武町教育委員会「若宮田遺跡発掘調査報告書」1979
- (16). 宮崎市教育委員会『松添貝塚発掘調査報告書』 「宮崎市文化財調査報告書 第2集」 1974 を参照。松添は、貝塚を含めた周辺地(下宮方遺跡等)をあわせて松添遺跡とした。なお、出土遺物は宮崎市委・宮崎大学・南九州大学に保管され、一部報告されている。
- (17). 納瀨向貝塚は宅遺により一部破壊されている。鈴木重治・賀川光夫の両氏により過去発掘調査されているが、報告書は刊行されていない。遺物は南九州大学に保管されている。
- (18)・(19). 宮崎県教育委員会「九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(3)」1979所収。

### 第3節 包含層の状態

平畑遺跡は、全体的に西から東へ向って傾斜しており、西半は中位面Ⅰ・東半は中位面Ⅱに位置しているといえる。<sup>(1)</sup>  
遺跡全体がほとんど畑として利用されていたために部分的に削平を受けた箇所が存在した。しかし、昭和57年度に調査を行った地区の中でⅠ～Ⅵ区においては、アカホヤ層より上層で良好な包含層が確認できたので、これを平畑遺跡の基本的な層序として取り扱いたい。アカホヤ層までの基本的な層序は次の通りである。0層～耕土(約14cm)、Ⅰ層～暗黒灰色土層(旧耕土・オレンジ色火山灰を少量含む。約20cm)、Ⅱ層～黒色砂質土層(約16cm)、Ⅲ層～黒色シルト質硬質土層(微粒白色火山灰を含む、約7cm)、Ⅳ層～漆黒色シルト質土層(約14cm)、Ⅴ層～黒色シルト質土層(約14cm)、Ⅵ層～アカホヤ層である。平畑遺跡ではⅣ層とⅤ層が遺物包含層であり、Ⅳ層が平安時代(9～10C)、Ⅴ層が縄文時代後晩期に相当すると考えられるが、同じ黒色土層なので平面的に確認することはできなかった。

また、アカホヤ層より下層になると中位面Ⅰと中位面Ⅱとは異なった様相を見せる。中位面ⅠではⅥ層(アカホヤ)の下に暗褐色シルト質土層(縄文時代早期相当)が続くが、中位面Ⅱではその間に黒褐色硬質土層(無遺物層)があるという状況である。さらにその下層は、XXIV区やXXVI区で確認されているが、暗褐色シルト質土層の下にオレンジ色の火山灰層(噴出元不明)が存在しその下層は開折谷をはさんで北に位置する堂地西遺跡と同様暗褐色硬質土(旧石器時代相当)～黄褐色砂質土層(AT)と続いて行く。

また堆積状態も一様ではなく、中位面Ⅰと中位面Ⅱの境界付近と思われるXXIV～XXVI区等においてはアカホヤ層が存在せず暗褐色シルト質土層が表土の直下に位置している所もある。当初は、畑等の開削によってアカホヤ層が消滅したものと推定していたが、XXIV区・XXVI区において、縄文時代後晩期の竪穴住居跡が暗褐色シルト質土層にⅠ～Ⅳ区においてアカホヤ層に掘り込まれたのと同様な形で掘り込まれているのが確認されたので、この付近ではアカホヤ層が流失したか、堆積していたとしてもかなり薄いものであったと思われる。

(1) 宮崎県教育委員会「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ」1982。

(日高孝治)

## 第4節 縄文時代の遺構と遺物

### 1. 住居跡

#### 分布状態

現在までに発掘を終えた地区は、平畑遺跡の東半分の内、農学部校舎・実験棟などの建設敷地、南北・東西の大学内道路敷、そして西半分よりの温室・ガラス室・農場道路敷などで、竪穴住居跡は、最も広く発掘の対象となった校舎建設敷地で27棟が、東西の道路敷とその周辺で15棟、そして温室その周辺で13棟が検出されている。SA1からSA27までの竪穴住居跡は、ほぼ等高線のラインに添うかのように北東～南西に集中して分布し、その延長線の分布範囲でSA28からSA42までの竪穴住居跡が東西の道路敷でも確認されるという傾向をもっている。そのことは、南北の道路敷とその東手の校舎建設敷地において全く縄文の竪穴住居跡が検出されていないことから、分布範囲が限定されることを指示している。

そして、再び竪穴住居跡が現われるのは、西側の一段高いSA43からSA55までの竪穴住居跡で、現在の把握の範囲では大まかに東と西の二群に分かつことが出来る。

なお、55棟中2棟以上の切り合いが認められたのは、SA10とSA11、SA13とSA14、SA24とSA25、SA33とSA34の4例に過ぎない。

#### 形態

竪穴住居跡はすべて円形ないしは楕円形を呈し、方形の平面プランをもつものは認められない。床面積の上から最も大きなものは、27㎡のSA54で、ついで20㎡のSA46、19㎡のSA34などである。いずれもこの手のものは楕円形プランを呈し、支柱は4本を基本としていて考えられる。他は、円形プランで支柱は2本、そして床面積は5㎡前後のものと、10㎡程度のものに二分されそうである。(表19)

そして、支柱からする竪穴住居跡の軸は北西～南東方向をとるものが多く、SA1、2、7、13、15などはその明瞭なものである。それに対し、床面において支柱穴を検出しえない竪穴住居跡も多く、床面に柱を置くだけの簡単な形態も主体であったのかもしれない。

なお、床面上に焼土が検出されたのは、6棟で全体の約1割に過ぎない。また、埋没が確実に認められた例としてSA30がある。

#### 遺物堆積の状態

遺物、ことに土器を豊富に堆積・包含する竪穴住居跡があるかと思えば、ごくわずかにしか検出されない竪穴住居跡もある。興味あることは、隣接する二棟の竪穴住居跡の場合、一方が多く土器を包含する時、片方はごくわずかに包含するに過ぎないという相反する現象が確認されることである。住居の廃絶と土器類の廃棄の空間的・時間的關係を考える上で、考慮すべき現象であると思う。

また、SA12の場合は、多くの竪穴住居跡と同じように、本来の掘り込みからするとアカホヤ層上面まで後世の耕作などで削平された状態であったが、検出面においてあまりに整った円形の掘り込みと、堆積土がアカホヤ及びアカホヤ下の褐色土のブロックを多量に混じえる状態であったため、印象的には新しい近時的な掘り込みかと思われたものもある。そして、床面上及び堆積土中からほとんど土器類が検出されず、堆積土というには流入土などの堆積過程が追えない状態からすれば、堆積土とするより埋め土というべきで、竪穴住居跡の廃絶と同時に意識的に埋められた可能性が指摘出来るのではないか。このことは、住居の廃絶の意味付けを考える上で示唆的な現象といえる。

表19 縄文墓穴住居跡一覧表

住居跡 番号	平面形	長径 (m)	短径 (m)	壁面での深さ (cm)		主柱穴	主柱穴間 の距離(m)	床面積 (㎡)	焼土	備 考
				最深	最浅					
1	円形	4.45	3.94	16.2	2.8	2	2.28	12		
2	◇	3.87	3.57	11.5	4.9	2	1.95	10		
3	◇	4.29	3.97	26.1	2.4	—	—	10		
4	◇			4.6	2.6	—	—	(1)		残わずか(±)
5	◇	3.49	3.10	19.0	7.1	—	—	7		
6	◇	3.40	3.09	14.0	2.4	2	1.20	8		
7	◇	3.78	3.50	12.1	4.5	2	1.20	10		
8	◇	2.64	2.43	6.3	2.5	—	—	4		
9	◇	3.05	2.83	20.5	5.7	—	—	6		
10	◇			3.2	2.5	—	—	(1)		残わずか(±)
11	◇	3.74	3.52	15.1	4.1	—	—	10		
12	◇	3.44	3.26	12.5	1.0	—	—	8		
13	◇	2.95	2.50			2	1.53	5	○	
14	◇	2.90	2.45	3.3	0.3	—	—	5	○	
15	◇	3.95	3.69	9.2	3.0	2	2.38	9		
16	◇	3.70	1.35(半)	8.3	1.6	—	—	6		±残
17	◇	2.84	1.32(半)	8.2	3.8	—	—	6	○	
18	◇	3.82	3.40	5.6	1.8	2	1.52	10	○	
19	◇			3.3	2.6	—	—	(3)		残わずか(±)
20	◇			5.4	0.8	—	—	(3)		±
21	◇	3.25	3.13	5.4	3.9	—	—	8		
22	◇					—	—			
23	◇					—	—			
24	◇			9.5	2.4	—	—	(2)		残わずか(±)
25	◇	4.08	2.33(半)	6.0	1.3	—	—	10		±残
26	◇	3.70	3.15	5.9	1.8	—	—	9		
27	◇	2.67	2.24	2.9	0.2	2	2.01	4		
28	◇	3.32	3.05			2	1.43	8	○	
29	◇					—	—			
30	◇					—	—			
31	◇					—	—			
32	◇	4.00	2.06(半)	8.9	3.1	—	—	9		±残
33	◇	3.15	1.55(半)	10.9	5.6	2	2.21	6		
34	◇	5.92	(4.30)	18.3	3.0	4	$\frac{3.68 \times 3.78}{1.82 \times 2.03}$	19		
35	◇					—	—			
36	◇	2.76	2.52	6.4	1.2	—	—			
37	◇					—	—			
38	◇					—	—			
39	◇	2.70	2.50			—	—	5		
40	◇	4.10	3.86	12.6	5.1	—	—	4		±残
41	◇	3.10		6.1	1.7	—	—	4		±残
42	◇	3.36	2.92	25.2	4.1	—	—	6		
43	◇	2.90	2.48			2	1.60	6		
44	◇	2.84	2.78			2	1.65	7		
45	◇	3.24	2.96			—	—	6		
46	◇	6.10	4.14	20.7	6.0	—	—	20		
47	◇	4.64	4.48			2	2.45	16		
48	◇	3.04	2.84	11.7	4.2	2	2.42	7	○	
49	◇	3.88		16.5	3.6	—	—	9		±残
50	◇	4.14	3.40	23.7	3.7	2	1.70	10		
51	◇	3.58	3.08	8.2	3.1	2	1.55	8		
52	◇	3.88	3.14	22.0	5.2	2	2.50	9		
53	◇	3.66		10.3	4.0	—	—	8		
54	◇	7.50	6.58	13.7	3.6	—	—	27		±残
55	◇	3.30	1.80	21.5	15.6	—	—	3		±残

## 2. 遺物

石器については考察の中で一括してふれるため、ここでは土器を中心に述べることにする。

平畑遺跡出土の縄文土器は、後期後半から晩期に及ぶ時期の所産であるが、竪穴住居跡に包含されたものは晩期前半に中心を置くものが主体である。出土した器種は、縄文後・晩期土器文化の多様性を示し、深鉢(甕)形土器、浅鉢形土器、塊形土器、壺形土器、高杯形土器、脚台付土器などがある。しかし、これらの時期に特徴的な黒色磨研土器といわれる精製土器には目立ったものがなく、またその出土量も少ない。そして、黒色磨研とは呼び難いものも含まれているため、ここでは精製磨研土器との呼称を用いている。それに対し、粗製土器にはクセのある特徴的なものが多く、最初に粗製深鉢形土器について記述する。

### 深鉢A類

深鉢形土器の内単純な口縁部をもつ無文のもので、さらに幾つかの細分が可能である。ただ、無文土器の中でも貝殻条痕によって器面調整された、色調の傾向からは橙色～赤褐色を呈する土器については、貝殻文系土器として一部を除いてこの類には含めない。従って、この類の器面調整は、一部貝殻条痕を含むが、主体としてはナデ、磨き、削りの調整で、色調の傾向は灰黄褐色～灰褐色系の粗製土器である。

#### A-1類

この類に分類するのは、口縁部が外反する無文土器である。さらには、胴部にふくらみがあり頸部にかけ内曲し口縁部が外反するもの(4・6・52・83・99・113・116・117・216など)と、ほぼ胴部から直線的に外反する口縁部に接続するもの(49・147・208など)に細分されるし、前者においては胴張りの状態、器壁の厚さによってもさらに細分されるであろう。

#### A-2類

ほぼ口縁が直立するタイプのもの(2・197・297)で、細分についてはA-1類と同様のことがいえる。

#### A-3類

口縁端部にかけてが内湾ぎみになるもの(1・50・51・188・189・201)で、この類は底部から胴部にかけて直線的に大きく開き、口縁部が胴部上方から直立ぎみに立つため、全体的なプロポーションとしては内湾ぎみの口縁部を形成する。これには、浅鉢とした方がよいもの(50・51)も含まれている。

#### A-4類

口縁部にかけてが直線的にしろあるいは外反するにしろ、胴部最大径から内傾する口縁部を形成するもの(5・15・54)である。

### 深鉢B類

口縁部を有し、数条の沈線を施すもの(12・144・181・182・184・246・281)を一括している。編年上の指標的なタイプであるが、その出土量は少ない。多くのものはナデ調整であるが、144などは貝殻条痕文を基礎的な器面調整とし、その上をナデ調整している。

### 深鉢C類

口縁部が短かく「く」字形に直立するタイプ(3・133など)で、大きな破片で全体像を復元出来るものはない。ナデ調整を基本とし、色調はおおむね黄褐色を呈する。

### 深鉢D類

口縁部が肥厚化するタイプで、明確な突帯を形成するものも含まれている(115・118・178・200・215・288・299・399・408)。口縁端部の整形には二種が認められ、端部が突帯を呈するものと平坦に整形するものとがある。

## 深鉢 E 類

口縁部が肥厚化し、凹線ないしは沈線による文様帯をもつもの（13・30～35・95・629～634）で、器形はおおむね胴部がふくらみ、胴部最大径部に凹線ないしは沈線による文様帯をもつこともある。文様は単なる線文のほか、鋸歯状、三ヶ月状の凹文ないしは刺突文など幾つかのパラエティーをもっている。これらに対し、器形および口縁部の肥厚化は共通しながら凹線文などの文様を施さないもの（198・202）もあるが、この手の土器の色調は黒褐色系で共通しており、他とは若干異なる印象を与える。

## 深鉢（甕）F 類

刻目突帯文土器で、弥生時代へと生き延びる代表的な土器（609・652～654）である。器面は明瞭な貝殻条痕文で調整され、色調は黄褐色系の傾向をもつ。

以上が、深鉢（甕）形土器のおおまかな分類であるが、底部までの完形資料に乏しい。62・75・167・186などの周縁部をもつ若干の上げ底、74・264・316などの平底と二分されるが、588のように脚台に近い上げ底もある。つぎには、これら深鉢形土器に比してやや小型のものを小型鉢形土器として一括するが、ほぼ一点一点に示される特徴があり、強いて類別は行っていない。

### 小型鉢形土器

67は、口縁端部を外傾した面取りで整形し、口縁内側に若干の凹みが生じる。胴部最大径は明瞭な屈折をもつ。82はこれに対し、胴部最大径の屈折は共通するが、外反する口縁とその端部は丸みを帯びる。この器形は大型の深鉢土器とも通ずるものである。145は、最も小型の部類で、口縁端部まで単調に直立する。176は、これに近いが、底部が小さく厚く高くなり、胴部も長く直立し、わずかに口縁部が外反する。208・209は深鉢形土器の小型版であるが、237は口縁までが内湾するタイプである。又、385も口縁が直線的な形状を示すが、底部と体部との境がくびれる特徴をもつ。

以上のように一点一点での類別すら可能な状態であるが、基本的には大型の深鉢形土器と共通した器形をもち、その小型化とすべきものと、小型のものにしかみられない器形をもつものとの二大別されるであろう。前者は大型の深鉢形土器の分類に対応させ、小型特有のものにまた別の位置付けを与えることも可能であろう。

次に、壺形土器、壙形土器とすべきものであるが、壺形土器では7・263がその可能性をもつものとして、壙形土器では17を上げるにすぎない。

又、貝殻文系土器は完形ないしはそれに近い大片もなく、わずかに540が口径の復元出来る土器である。他は細片にすぎないが、しいてその中で特徴的なものを求めれば口縁下が断面「く」の字に肥厚化し、その頂部を境とした上下に貝殻腹縁文を施すもの（233・438・495など）があり、多くは波状口縁を成す。これに対し、540は口縁部からさらに下方に下りた胴部に貝殻腹縁文を施すタイプである。これらの底部には、535・612にみるように底の部分までほぼ器壁にかりなく、比較的厚さの薄い底部がつくと思われる。また一方では485・486・580のような脚台がみとめられ、多くは橙色系の色調を示し、この傾向は貝殻文系土器の一つの特徴である。

さて、後・晩期の指標というべき精製磨研土器もまた壑穴住居跡から多くは出土していないし、また細片が主なものである。そしてほとんどが浅鉢形土器のもので、晩期を主としたもので占められている。ただSA50・54などの中に含まれる深鉢、浅鉢の磨研土器の中で後期とすべきものも含まれている。指標となる特徴的なものは、80・374の浅鉢形土器で口縁内部に一条の沈線をもち、胴部最大径から小さな屈曲をくり返し短かい口縁部を形成する。150などは、胴部から口縁にかけての屈曲部がやや長くなる。これに対し、187は胴部最大径から内反りぎみに外に開く頸

部から直立口縁に至るもので、口縁外部に二条の沈線が施されている。この類に含まれるのは、383・527・566などで、口縁によって細分が可能であろう。

#### その他の遺物

#### 玉 類

玉類は、竪穴住居跡とそれ以外を含め5個出土している。いずれも硬玉を素材としているが、管玉2、勾玉2、それに未製品なのか現径1.9×1.5cmの欠損しているが円形状の硬玉が1点である。

#### 石 刀

SA23に含まれる可能性のある包含層中で検出された。長さ29.4cm、最大幅4.2cm、厚さ1.7cmを測る完形資料である。

(北 郷 泰 道)

### 3. 主な遺構と遺物の状態

#### SA 1 (Fig. 13)

SA 1は、最も竪穴住居跡の密集したほぼ中央部に位置し、遺構の残存も良く、多量の土器類が検出された。平相遺跡における一つの代表例といえる竪穴住居跡である。4.45×3.94mのほぼ円形を呈し、主柱穴は2箇所で2.8mの間隔で位置していた。主軸の方向は北西～南東にあり、平相遺跡における基本的な構造を示すものと思える。

堆積土中からは多くの遺物が検出されたが、上層と下層におおむね二分され縄文土器では12・13ほかE類の多くは上層からの出土である。1・2・4などの大片は床面上で検出されている。

その他の遺物では、石鏡、石斧、砥石、石鏃、石匙、敲石とほぼ石器の器種が出そろっている。又、土器片錐の出土もみられる。そうした中で注目されるのは、勾玉の出土で、上層からであったが、緑色を呈する硬玉製の現長1.4cm、幅2.4cm、厚さ0.2cmの小型のものである。

#### SA33・34

SA33はやや小型の竪穴住居跡で、SA34はそれに後出する大型の竪穴住居跡である。両者とも比較的多くの遺物を包含していた。SA34の主柱は4本柱であったと思われ、3.78×2.03mの楕円形プランを呈している。

SA33からは完形の深鉢形土器が2個体出土しており、いずれもわずかに上げ底となる周縁部のある底部で口縁部までほぼ直線的に開口する器形をもっている(297・298)。これに対し、SA34の深鉢形土器には完形品がないが、胴部最大径の屈折がやルーズな外反する口縁をもつものが出土している(318・319)。SA34の時期比定には349～352の磨研土器が役立つと思う。

(北 郷 泰 道)

#### SA46 (Fig. 14)

ⅡⅢ区で検出した。アカホヤ火山灰層の堆積はみられず、表土(Ⅰ層)を除去しても異色だが同質の暗茶褐色砂質土層(Ⅱ層)が続いた。そして住居跡内の埋土とこのⅡ層とは識別がつかず、先ず遺物が集中出土する状況で住居跡は検出され、遺構はⅢ層めの暗褐色硬質土層に掘り込まれていた。この層は、白色や黄褐色、透明な細砂粒(白斑)を多含し、きめ細かなシルト質で、ブロック状に剥落する性質を持っている。そして、そのブロックのすき間には上層の暗茶褐色砂質層が入り込んでいる周辺のアカホヤ層の堆積し遺存する所では、アカホヤ層下第Ⅲ層の層にあたると思われる。しかし、遺物・遺構の検出状況からみて、ここは遺構が営まれた当時からほかの中位面Ⅱなどと異なり、アカホヤ層及び上層の堆積がなかったものと考えられ、遺構は遺物の集中がみられはじめたⅡ層(周辺ではアカホヤ層下第Ⅱ層相当)の下半部または、その上部から掘り込まれたと思われる。

住居跡の平面プランは、北西～南東方向に長軸をもつ楕円形である。南壁と北壁はプランが不明瞭で、南壁では不整形な張り出し状に、北壁ではなだらかなま壁面の検出ができなかった。長軸方向の床断面をみると、西壁床面から東へ

約3mの中央や東寄りの床面まではゆるやかに10cm程低くなり、さらに東へ70cm程緩傾斜してゆき、そこから東壁床面までは平坦となる。東西床面の比高差は、約30cmである。また、遺構検出面も東西で約30cmの比高差があり、住居跡は全体的に東へ低くなっている。

住居跡床面から計36個のピットが検出された。しかし、ピット内の土上と住居跡上の覆土とは判別し難く、後世のピットと住居跡に伴うピットは識別できなかった。ピットは、壁面近くと中央の東西とに集まっている。中央東側のピット群は15~20cmの深さを有し、西側のは17~32cmの深さである。壁面近くのピット群は10cm前後から50cm前後とばらつきが大きい。その他には何らの掘り込みも検出してない。

遺物は前述のように、住居跡上に特に集中し、住居跡内全体に点在している。そして、中央より東側に割合多く、東壁近くと南壁の推定線あたりは密度が高い。東壁付近では、第108区3の石皿を中心にやや南よりに密集する。床面上、約30cm前後から遺物の出土が観察された。そして、その殆どが覆土上層~中層で出土している。

粗製深鉢形土器ではA類が主体をなし、B類・D類は少ない。また、貝殻文系深鉢形土器は点数は多いが、いずれも細片である。貝殻文系土器と思われる脚台(486等)が2点出土している。

精製磨研土器は、口縁部外面に沈線を1条めぐらせ、端部が短く立ちあがるもの(455・456など)や、厚手で口縁部外面に凹線を有するもの(461等)、口縁部内外面に沈線を1条めぐらすもの(454)などが出土している。また、口縁部に凹線をめぐらす粗製土器(446)も出土している。

石器は、敲石・石鏃・剃片石器・石錘・石皿等が出土した。石鏃は完形が少なく、五角形で基部が左右斜め上へ切れあがり、挟りのあるものが特徴的である。石皿は、東側床面にすえられた状態で出土した。また石錘は長軸両側を打欠くものが、切目石錘より多く、その他に、土器片を利用した切目のある石錘が出土した。

#### S A 50 (Fig. 15)

ⅩⅦ区の東端で、ほかの3基(S A 48・49・51)と近接して検出された。ⅩⅦ区は当初、後世の造成により相当の削平・整地が行われていると考えられた。しかし、考えられた程の擾乱は受けておらず、部分的ではあったが表土除去後、淡茶褐色砂質土層(Ⅱ層)中に遺物の集中する形で遺構を検出し、さらに下層の暗褐色砂質土層(Ⅲ層)に掘り込まれた状態で確認した。埋土は、Ⅱ層と同じ淡茶褐色砂質土である。S A 50はほかの住居跡に比べて最も残りがよく検出面からの深さも深かった。床面は、暗褐色硬質土層(Ⅳ層)まで達している。

竪穴住居跡は、北西~南東方向に長軸をもつ不整形円形の平面プランを呈する。床面から大小13のピットが検出された。このうち、長軸方向床面中央から南東約55cmに位置する直径26cm、深さ25cmのピットと、同じく中央から北西約90cmに位置する直径24cm、深さ24cmのピットとが主柱穴をなすものと考えられる。この場合の柱穴間は約1.7m、軸方向はN-38°-Wを計る。床面にはこれらピット以外の掘り込みはみられない。遺物は遺構検出面から約20cm、床面から約35~40cm上から、遺構上に集中する状況で出土した。また、遺物は住居跡全面に散布しているが、特に南壁に近い部分と南東側主柱穴の南付近及び直上付近には多量に出土した。床面は平坦であるが、遺構検出面が北から南へ傾斜し低くなっているため、南側に特に遺物の集中がみられた事は、住居跡埋没過程での地形的な影響も考慮する必要がある。この竪穴住居跡でとりわけ多量に出土した石鏃は、中央を中心に南側半分で出土し、土器などと同じ状況を呈する。しかし、全体的に西壁側が最も遺物量が少なく、次に東壁付近が少なかった。

遺物は厚手の粗製深鉢形土器A類が主体を占め、次に貝殻文系深鉢形土器が多くみられた。その外に、B類・C類・E類、精製磨研の口縁部が直立する浅鉢形土器片・凹線文のめぐる深鉢形土器片、貝殻文系の脚台片などが出土した。小破片の土器が多い。

石器では、石鏃が目される。三角形あるいは五角形の基部の左右を斜めに落とした形態のものが多い。長軸方向に両端を打欠いた石錘や切目石錘、土器片錘もみられるが量的には多くない。また、剃片石器の存在も特徴的である。

Fig. 13 SA1 出土遺物一覽表

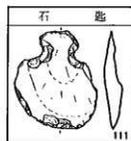
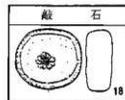
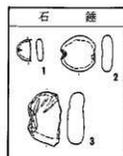
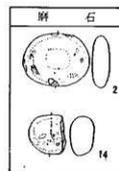
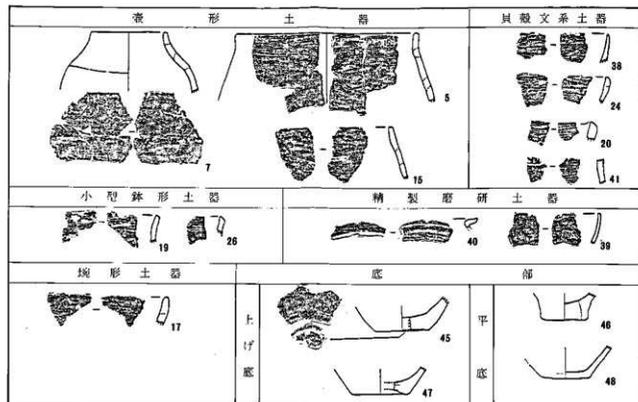
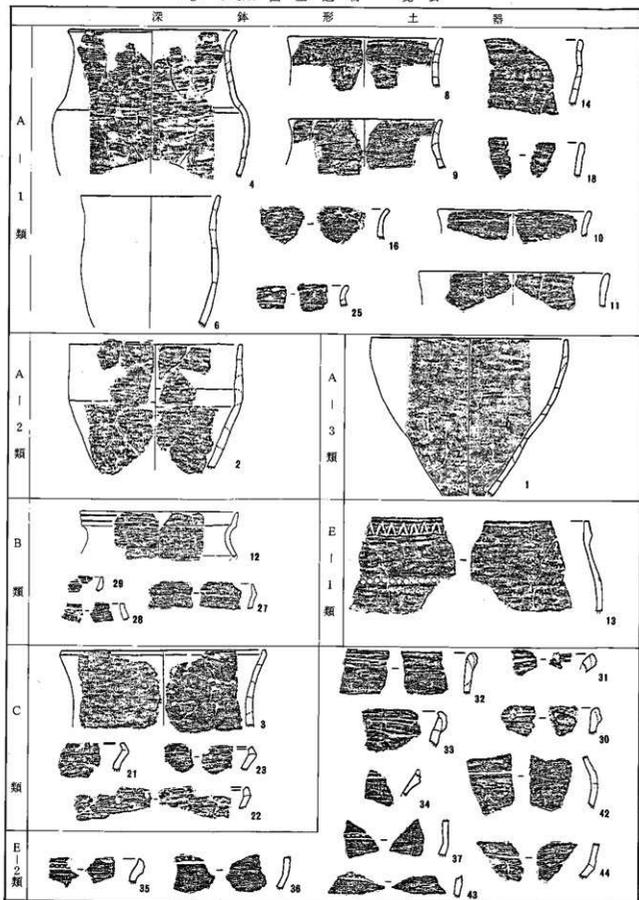


Fig. 14 SA46 出土遺物一覽表

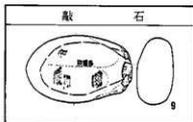
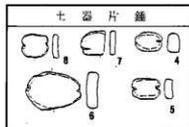
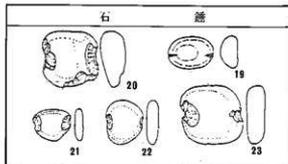
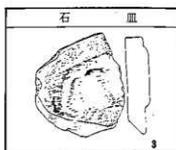
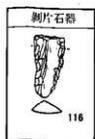
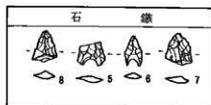
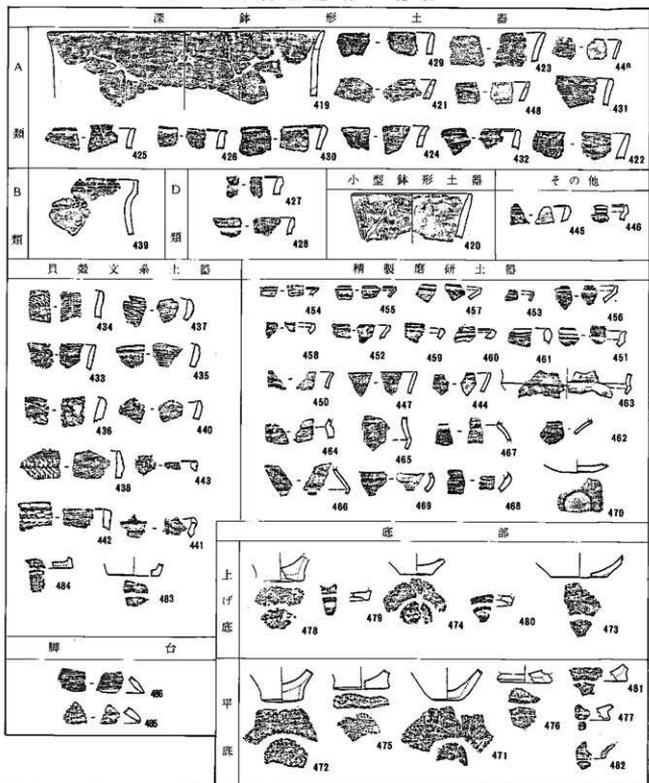
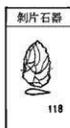
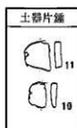
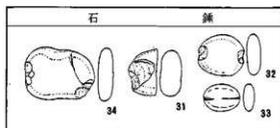
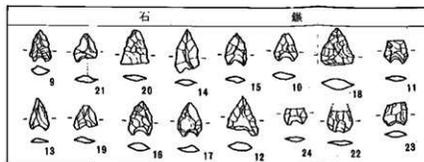
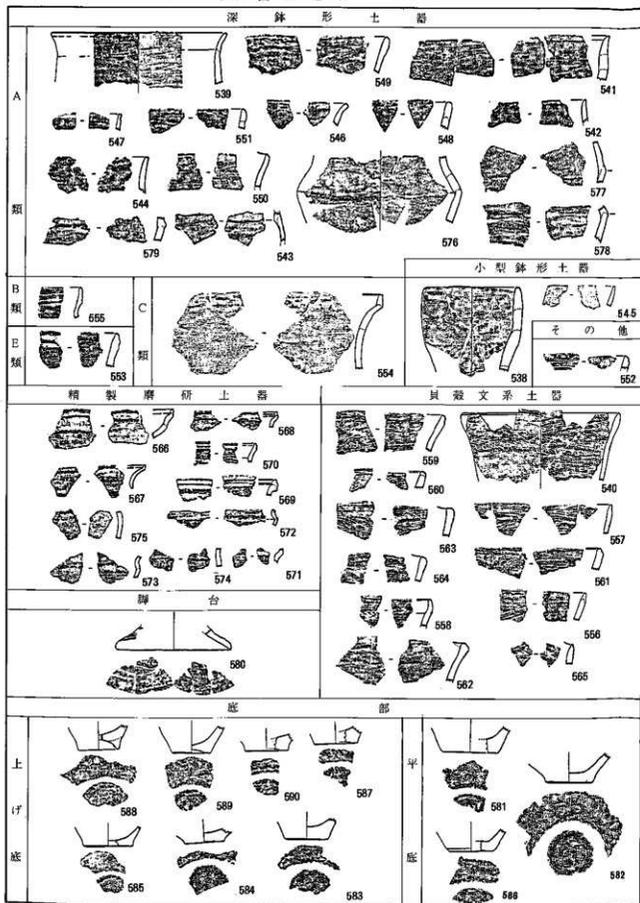


Fig. 15 SA50 出土遺物一覽表



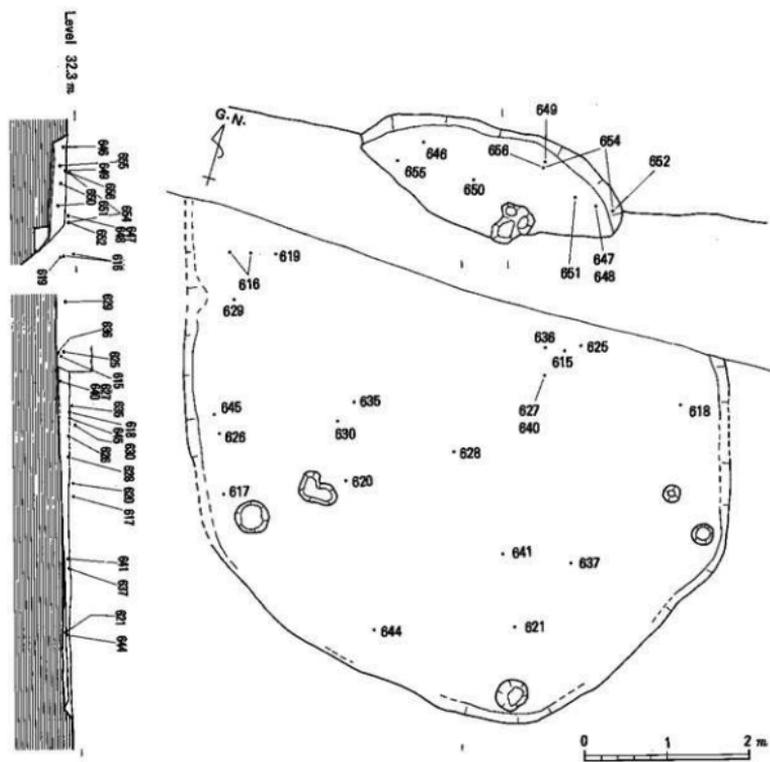


Fig. 16 SA54 出土遺物平面分布及び垂直分布図

## S A54 (Fig. 16・17)

ⅡⅦ区で検出された。最初、道路敷部分として調査された南側竪穴住居跡と、後に工事途中で事前調査範囲を越えて掘削されてしまい、新たに拡張して検出した北側の残存部とからなる。遺構は、量的には少なかったが、周囲にくらべ遺物が集中した状態で検出され、暗黄褐色砂質土層及び暗褐色硬質土層が平面的に境をなして観察される面に掘り込まれた状況で確認した。西側の暗褐色硬質土層が東側の暗黄褐色砂質土層下にもぐり込み状況から、暗褐色硬質土層が下層になるものと考えられる。南側竪穴住居跡は平面での輪郭が一部不明瞭であったが、北側の残存部は、掘削断面から検出したところ遺存状況がよく、全体としては、長軸を北西～南東方向にもつ円形に近い楕円形プランといえよう。住居跡内に合計21のピットが検出された。このうち、床面で検出できたのは、Fig. 16にある南側5、北側3の計8ピットであり、ほかはすべて土色の違いあるいは、土質の違い（その部分のみ柔らかい）によって埋土中より検出したものである。床面検出のピットのうち、南西隅のピットは中世の掘立柱建物跡の柱穴の可能性があり、住居跡に伴うピットは床面残存部分については残りの7個である。遺物は遺構内全体に出土した。しかし、南東側の密度が高く、遺構の遺存状態の悪い南西側では、分布密度が低い。遺構は上部がかなり削平されていたと思われ、遺構検出面より約10cm、床面より約25cm上から遺物が出土しはじめている。このS A54は、縄文時代晩期後半の要素を持つ土器（652・654等）や後期末～晩期初頭の要素を持つ土器（636・650・629等）が出土し、遺物に時期差がみられた。しかし、Fig. 16の平面分布、垂直分布に示されるとおり、刻目突帯文土器652・654の方が北壁ぎわ床面上約20cmに出土し、住居跡外からの流入の可能性が高い。また、636・615等は、中央床面近くで、凹線文系土器の650は、北壁よりの床面上約10cmの埋土中で出土して、この住居跡に伴うものと考えられる。

粗製深鉢形土器A・D類、貝殻文系土器が細片のみ少量出土している。主体を占めるのはE類で、630・629は外面をヘラナアあるいはヘラマガキした精製深鉢形土器である。そのほかに、内外面をナデ調整した小型深鉢形土器615や616、精製磨研の浅鉢635や636等住居跡に伴うと考えられるもの、そして、流入の可能性の強いF類が出土している。また、内外面に貝殻縁による余痕が強く残るなどF類に近い調整をもつ碗形土器649は、北壁ぎわの住居跡上面から出土しており、F類同様流入の可能性も考えられる。石器は量的に少なかった。三角形で基部の両端を斜めに欠いた石鏝は1点出土し、石鏝は、長軸両端打欠のものが出土している。

### その他の遺構

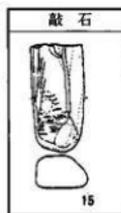
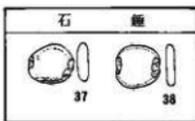
#### ⅡⅦ区 SC1 (第18図、付図3-4)

ⅢⅠ区北東隅で検出した。ⅢⅠ区の層序は基本的には東のⅤ・Ⅵ区等と同じである。即ち、Ⅰ層表土、Ⅱ層黒色シルト質土層、Ⅲ層暗褐色砂質土層（アカホヤ層）、Ⅳa層硬質黒褐色砂質土、Ⅳb層暗褐色シルト質土の順である。ⅢⅠ区は以前東西2筆の畑地であり、表面がかなり削平されていると考えられる。そのため、西側では、Ⅱ層及びⅢ層上部まで削平され、Ⅲ層下部のバミス層以下が観察される。東側では、Ⅲ層まで削平されていてⅣ層以下の層が観察された。1号土壌はこのⅣb層で検出され、埋土は、ほかの多くのピット同様、Ⅱ層黒色シルト質土であった。埋土中にアカホヤ塊がみられたことから、Ⅱ層堆積時に掘り込まれたものと思われる。平面プランは、楕円形である。北西～南東方向を長軸とし、長径1.15m、短径0.91mを計る。中央での深さは1.77m、床面は直径0.55mの不整円形を呈し、ほぼ逆円錐台形をしている。遺構上面北側は掘り込みが不明瞭であり、検出時に掘りすぎたきらいがある。遺物は、検出面下約5cm～床面上約15cmまで万遍なく出土しており、検出面下約80cmを中心に中央よりに出土している。

出土遺物(第79図上、第109図) 土器は全て縄文時代後期の貝殻文系土器である。口縁部に屈折や肥厚がみられず直線的に反すること、底部内面の立ちあがりなどから、貝殻文系土器の新しい時期のものであろう。このほかに、石皿片が4点程出土している。

Fig. 17 SA54 出土遺物一覽表

深鉢形土器		小型鉢形土器		
A類 ほか				
			<p>環形土器</p>	
	D類	<p>貝殻文系土器</p>		
E類				
F類			<p>精製磨研土器</p>	
	<p>底部</p>			
		<p>その他</p>		



## ⅪⅠ区 S11 (第18図, 付図3-4)

SC1の南側で検出された。遺物は伴っていないが、Ⅳb層暗褐色シルト質土層中で確認され、縄文時代早期のものと考えられる。5~20cm角の自然礫の砕片が3×3mの範囲に広がり、いずれも加火されたと思われる赤褐色を呈していた。礫表面にはひびがはいり、もろくなっていた。このうち、西端部にはややまとまった出土状態がみられたが、礫の下に何ら掘り込み等は確認されなかった。また、礫群の周辺に、炭火物、焼土等は確認されていない。

## ⅪⅡ区 埋壘 (第19図, 付図3-3)

SA46の東約1.7mに検出された。遺物は口縁部と底部、胴部上側を欠き、下側のみ遺存していた。口縁部を南東に向け、深く傾いた状態で埋置されたと思われる。掘り込み面は暗茶褐色砂質土層と思われ、床面は、暗褐色硬質土層に達する。検出面での掘り込み平面プランは、長軸N-131°-Eの楕円形である。長径36cm, 短径約30cm, 深さ17cmを計る。

遺物(第19図下) 遺存状態が悪く殆ど小破片であり、器形がわかる程には復元し得なかった。誤差があると思われるが、参考までに図化復元すると、推定胴部径40.8cmを計る。外器面はよこナデ、内器面はナデ調整されているが、ともに表面の風化が著しい。外器面胴部最大径のあたりにススの付着がみられる。胎土はきめがやや粗めで、1mm前後の砂粒を多量に含み、白色の長石らしい砂粒が目立つ。雲母類は殆ど含まれない。色調は外器面が明黄褐色(10YR7)で内器面はややくらい感じの同色である。焼成はあまり良くない。

(菅付和樹)

## 4. 包含層の遺物

### ⅪⅣ区の土器 (第85図~第98図)

ⅪⅣ区では、旧地形が緩傾斜地であった地点から多量の遺物が出土した。このうち、土器は縄文時代後期の貝殻文系土器が主体を占めている。その外に、後期から晩期にかけての精製~粗製の土器等も出土している。これらはいずれも主包含層であるⅢ層を中心に出土した。ⅪⅣ区の層序、出土状況については後に述べることにするが、ここでは、調整・色調・胎土の特徴・形態などから南九州貝殻文系土器群とその他の土器群とに大別し、分類を行った。なお、個々の土器については、別に観察表を作成した。

### (1) 貝殻文系土器群

堅く焼きしまった赤褐色~(黄)橙褐色の色調を特徴とする土器群で、器面調整をアナグラ属の二枚貝条痕やよこナデで行っているもの。細部ではその他の土器群との折衷的な器形・調整・文様を持つものもあるが、焼成や色調の特徴からこの群に一括した。<sup>(1)</sup>深鉢・鉢(浅鉢)・脚台付皿などの形式がみられるが主体をなすものは深鉢である。

註1) 最近、胎土分析の結果から、この土器群のSr(ストロンチウム)含有率が著しく、他の土器群との区別が容易に出来る可能性がでて来た。現在、奈良教育大学教授の三辻利一氏に追加分の土器分析をお願いしている。

## I. 深 鉢

深鉢A 薄手の平底の底部から大きく開く重心の低い胴部が直立し、頸部が外反するもの。最大径は口縁部にある。口縁部の断面形態より3種に細分できる。

A-1 口縁部断面が「く」字形をなし、内器面に屈曲がみられる。外面屈曲部に上下2段の文様帯があるもの。器面は二枚貝条痕による調整が顕著であり、貝殻腹縁文を有する。口唇部は尖る。

a 波状口縁のもの(935, 1005~1009, 1011)。

b 平口縁のもの(936, 937。同一個体と思われる)。

A-2 口縁部に殆ど屈曲がみられず、頸部からゆるやかに外反するもの。器面調整は二枚貝条痕が顕著にみら

れ、只殻腹縁文を有する。口唇部は外面がやや膨らんで丸い。

a 波状口縁のもの。外器面には屈曲部がわずかに肥厚して残り、2段の文様が施される(1010)。

b 平口縁のもの。文様帯は頸部の方へさがる(1013, 1016)。

A-3 口縁部に屈曲がみられず、頸部は直立気味に外反する。全て波状口縁である。器面調整はナデを主体とするが、ナデ消しの不十分な所に只殻条痕文が残る。口唇部は、外面が膨らみ、斜めに削げた様な平坦面を持つ。波頂部は尖るものやきざみを有するものがあり、内面端部は削いだ様に尖り気味になる。無文のもの(938~941, 1003~1004)と胴部に文様帯の下がった有文のもの(942)がある。

深鉢 B 底部の不明なものが多いが、胴部から頸部がわずかに外反気味に立ちあがり、口が広く開くもの。口縁部と胴部の径がほぼ等しくなる。頸部形態により2種に細分できる。

B-1 胴部と頸部の境がないもの。口縁部径と器高によって2種に細分できる。

a 口縁部径に比べて長胴になると推定されるもの(944, 974)。

b 口縁部径と器高がほぼ等しくなると推定されるもの。有文のもの(1019, 1022~1023)と無文のもの(976, 978, 981, 983~984, 998)がある。このうち984は、小さな頂部を4カ所持つと思われるもので、また、998は金雲母を含み他と胎土が異なるものであったため、口縁部だけの小片であるがこの類に入れた。

B-2 頸部内器面に稜あるいは段を有するもので、直立気味の口縁を持つものが多い。肩の張ったもの(979, 996)と張らないもの(947, 966~967, 975, 997)がある。

深鉢 C 頸部がくびれて屈曲し、口縁部が外傾する特徴を有するものを一括した。

C-1 波状口縁をなし、ゆるやかにくびれる頸部とわずかに膨らむ胴部を持つもの。口縁部断面は「く」字状または三角形となり、口縁部と肩部に文様帯、波頂部にきざみを有する。器面調整はナデまたはヘラナデを主体とし、一部貝殻条痕も残る。色調は、灰黄褐・赤褐~橙色系を呈す(1020~1021, 1029, 1031)。

C-2 胴部以下がないため全体器形は不明だが、頸部で屈曲するので一類に入れる。口縁部に文様が有り、波状口縁(1061~1062)と平口縁(1060)がある。

C-3 無文のものである。胴部の特徴によってさらに3種に細分できる。

a 胴部が強く張るもの。頸部内器面に稜を持つもの(943, 954~955, 971~972, 995, 1002, 1093)と稜のないもの(951, 970, 973, 991)がある。943は4カ所の頂部を持つと考えられる波状口縁のものである。

b 胴部の張りの弱いもの。頸部内器面に稜を持つもの(945, 952, 957~959, 968~969, 990, 992, 994)と稜のないもの(960~965, 993)がある。このうち945は、口縁部が全て打欠かれ成形されたと考えられ、平口縁を意図したものと思われる。波状口縁をなしていたものかどうかは不明である。

c 胴部最上段が張るもの。肩部を有し、頸部内器面に稜が入る(946, 956, 1001)。このうち956は、精製磨研深鉢J-1 a類に類似の形態を持つ。

これらC-3類のうち、頸部内器面に稜を持つものは、一般に口縁端部内側がそがれた様に鋭い角をなし、端部外面は丸く膨らむか、壺の刃状に斜めにけずられた平坦面を有するという特徴がある。また、器面調整はナデを主体とし、ヘラナデやヘラミガキ、ヘラケズリもみられ、一部に地文の只殻条痕の残るものがある。

深鉢 D 殆ど破片で全体器形は不明だが、頸部が内傾あるいは直立し、胴部が大きく張り出して膨らむもの。頸部内器面に稜を持つもの(989)と稜を持たないもの(948, 953, 999~1000)がある。

深鉢 E 底部までみられる例はないが、底部から口縁部へ直行気味に大きく開くもの。

E-1 わずかにくびれを有するもの(950, 980, 982)。

E-2 くびれを有さないもの。直行するもの(985~987)とやや内湾するもの(949, 988)がある。

**深鉢 F** 口縁部のみで全体器形が不明だが、有文のものを一括した。器面調整はナデを主体とし、ヘラナデや貝殻条痕等がみられる。色調はにぶい橙色・赤褐色~にぶい褐色を呈す。文様は沈線文、凹線文、刺突文、貝殻腹線文等バラエティに富むが、施文部位により3種に細分した。口唇部の特徴として、内器面側が削がれた様な鋭い角をなし、外面が丸く膨らんだり、平坦面を有するものが多いことがあげられる。

F-1 口唇部または直下に施文されているもの(1012, 1024~1028, 1030, 1032~1044, 1046~1050)。このうち、1012は内器面にも施文され、1012・1030・1032は波状口縁をなす。

F-2 文様帯が胴部の方へ下がるもの(1014~1015, 1017, 1045, 1052)。

F-3 文様帯が口縁部と頸部の2カ所あるもの(1018, 1051)。このうち、1018は波状口縁をなすと考えられる。

## II. 鉢(淺鉢)

外傾しつつ内湾する胴部下平から縁をなして胴部上半が短く直立し、頸部で屈曲して外傾する口縁部をなすもの。推測される器高は口縁部径より小さくになると思われる(977)。

## III. 脚台付皿

全体器形の判明するものが出土していないため、皿部あるいは脚部に該当しないものも含まれるかもしれないが、器面調整や色調、傾きからこの類として一括した。

**脚台付皿 A** 皿部に刺突文や貼付文等の装飾を施すもの(1135~1137)。

**脚台付皿 B** 器面調整はナデを主体にヘラナデ・ヘラミガキがみられる浅黄橙色を呈す土器(1138, 1140, 1153)。

**脚台付皿 C** この形式の主流をなすもので、器面調整はナデを主体に地文の貝殻条痕が多く残る。また、ヘラナデ・ヘラミガキ・ヘラケズリ等もみられ、色調は明赤褐~橙色系を呈する(1139, 1141, 1142~1152, 1154~1155)。このうち、1142は残りが悪いが方形波状の脚台・皿部をなすと思われるものである。

## IV. その他の土器

**深鉢 G** 破片ではあるが、直行する口縁部に1~2個の貼付突起を有する土器片が出土した(1076~1077)。貝殻文系の土器か否かは不明であるが、市来・草野式土器を出す草野貝塚(鹿児島市)に同種のもの<sup>(2)</sup>がみられるので、この類に含めた。

**紡錘車** 貝殻条痕の地文のみられる有孔円盤片である(1127)。

註2) 鹿児島市教育委員会で整理中の発掘資料を見せていただいた折に、実見した。

## (2) その他の土器群

貝殻文系土器群以外では、磨消縄文土器、精製磨研土器、粗製土器等が含まれ、深鉢・浅鉢・高環・小型鉢・注口土器などの各形式がみられる。平畑遺跡では精製土器に典型的な黒色磨研のものが少なく、また、研磨の手法が簡略化され、ヘラナデや(丁草な)ナデですまされる例が多く観察されたこと、そして、後期末~晩期の深鉢の粗製化などを考慮して、ここでは、各形式毎の分類を行った。

## I. 深鉢

**深鉢 H** 磨消縄土器を一括した。点数はごく少量で、全体器形の判明するものがないが、波状口縁で頸部が強く屈曲し、球形の胴部を持つと思われるもの（932～933, 1086）や、波頂部に渦巻状の突起を持つもの（931）等がみられる。

**深鉢 I** 口縁帯を有し、凹縁または沈線を巡らすもの。口縁部内面の形態により2種に細分できる。

I-1 屈曲の強いもの。凹縁を巡らす精製磨研土器（871～872）と沈線を巡らす粗製土器（1055）がある。

I-2 屈曲が殆どみられないか弱いもの。さらに2種に細分した。

a 屈曲の弱いもの。凹縁を巡らす精製磨研土器（873～874）と沈線を巡らす粗製土器（1036）がある。

b 屈曲のみられないもの。口縁部が肥厚するものは、精製磨研のもの（875, 877）と粗製のもの（1057～1058）がある。口縁帯の一部と思われる肥厚しない多条沈線を巡らすもの（1059）もある。

**深鉢 J** 口縁帯を有さない精製磨研土器を一括した。頸部形態により2種に細分した。

J-1 頸部の屈曲の強いもの。さらに2分できる。

a 胴部と頸部の境が明瞭で肩部が張るもの。口縁部が外傾するもの（863）と外反するものがあり、外反するものには波状口縁（865）と平口縁（864）がある。

b 口縁端部内側が鋭く尖る特徴的なもので肩部はなめらかに胴部に続く。頸部に刺突列点文と沈線を施す（1053）。

J-2 頸部のくびれが弱く、胴部との境が明瞭でないもの。口縁部が直行するもの（867～868）と外反するもの（866, 869～870）がある。肩部は張りが無い。

**深鉢 K** いずれも破片で全体器形は不明であるが、頸部が直立し、口縁部が肥厚あるいは突帯を持つものを一括した。口縁部形態により3種に細分した。

K-1 擬似口縁にさらに口縁部を足したもの（1074～1075）。

K-2 口縁部を肥厚させたもの。さらに3分できる。

a 口縁部断面が三角形をなす精製磨研土器（878～880）。

b 口縁端部を厚く肥厚させて突帯とするもの。精製磨研（876）と粗製（1066）のものがある。

c 口縁端部を外側へ折返した無文の口縁帯を有する粗製土器（1063～1065）。

K-3 口縁部に突帯を貼付けるもの（1067～1073）。粗製土器である。

## II. 浅鉢

浅鉢は全て精製磨研土器である。

**浅鉢 A** 口縁帯を有するもので、頸部・肩部の有無により2種に細分した。

A-1 底部から大きく外傾し直行する胴部に直立または外反する口縁部がつくもの。口縁部の内面の屈曲によりさらに細分できる。

a 明瞭な屈曲を持つもの。2条の凹縁を巡らすもの（886～887）と無文のもの（918～919）とがある。

b 屈曲のやや弱いもの。2～3条の凹縁を巡らす（888～889, 891～892）。892は短かい細線羽状文を持つ。

c 屈曲がさらに甘く幅広い口縁帯を持つもの（890）。

A-2 外反する頸部に直立する口縁部がつく。胴部は小さく張出し、肩部あるいは頸部に沈線を1条巡らす。肩部に沈線のあるものは、口縁部に楕円形の押圧文を有する（893～896）。

**浅鉢 B** 外傾し開いた胴部から口縁部が内湾気味に立上るもの。

B-1 口縁部と胴部に2条の沈線を巡らすもの(884)。

B-2 口縁部に沈線を1条巡らすもの(885)。

浅鉢C 内湾気味に外傾する胴部から頸部が外反して立上がり、口縁部が直立する。口縁部内面の屈曲によって2種に細分できる。

C-1 屈曲の強いもの(882~883)。

C-2 屈曲の弱いもの(881)。

浅鉢D 11頸部が外反気味に長く伸び、肩部は稜をなして小さく張る。口縁部は短かく直立し、外面に1条の沈線を巡らすもの(904~906)。

浅鉢E 口頸部が短く外反し、塊状の胴部に続くもの。口頸部の形態によって2種に細分できる。

E-1 口縁部が短く外傾しつつ立上がり、頸部は小さく湾曲し肩部に続く。

a 口縁部外面に沈線を巡らすもの(897)

b 沈線がなく、肩部のやや張るもの(903)

E-2 頸部内面に顕著な稜をなし、肩部がやや張る(898~902)。

浅鉢F 肩部が内傾し、口頸部は屈曲して外反するもの。口頸部の屈曲により2種に細分できる。

F-1 頸部が「く」字形に屈曲し外傾するもの。胴部形態によりさらに細分できる。

a 胴部が丸く張るもの(907~909)。

b 胴部が稜をなして鋭く屈曲するもの(916)。

F-2 頸部の屈曲が弱く、鋭い稜をなさないもの。口縁部形態により3種に細分できる。

a 口縁端部が内傾し屈曲を持つもの(912~913)。

b 口縁部が小さく直立し、胴部は稜をなして張出すもの(917)。

c 口縁端部が小さくまろく直立する(910~911)。

浅鉢G 直行する口縁部が外傾するもの。

G-1 肩部が小さく張り、口縁~胴部まで直線的に開くもの(920)。

G-2 頸部が「く」字状に屈曲し、その内側上部に沈線を施すもの。肩部は小さく張出すと思われる。波状口縁(914)と平口縁(915)がある。

### Ⅲ. その他の土器

塊 小破片であるが、口唇部が丸く胴部が内湾するもの(921)。

小型鉢 4条の突帯の巡る丹塗精製磨研土器である。突帯間の器面にも沈線による曲線文を施す(1156)。

高坏(脚台) 小型の脚台及び坏部が出土している。ナデまたはヘラミガキによる粗製・精製の別がある(1128~1134)。

注口土器 注口部が出土している。色調は橙色系でナデ調整のものである(1126)。また、黄褐色系の磨消縄文土器の胴部(934)も注口土器の可能性が有る。

### (3) 底 部

完形から小片まで多数出土した。時間の関係で十分に整理できなかつたが、接合の見落としがあつたとしてもそう多くはないと考える。はっきり確認できた底部総数をあげると810個になる。個数が個体数を表すわけではないが、XXIV区の包含範囲内に堆積した土器の個体数を考える上での参考にならう。

形態や器面調整、焼成、色調の特徴などから3類に分類できる。

**底部A** ぶい橙色～赤褐色系の色調を呈する薄手の土器で、器面調整に貝殻炭灰やそのナデ消し、ヘラケズリ等を用いるもの。内器面底部に明瞭な屈曲を有する。平底が主体で、やや上底気味のものもある。

A-1 胴部が底面から直立気味に立上がり外反するもの(1094～1097)。

A-2 胴部が底面から大きく外傾してのびるもの(1098～1101, 1124)。

**底部B** 底部側面が外反してのびるもの。内器面底部には屈曲を殆ど生じない。

B-1 底面から直立気味に外反するもの。一般に厚手である(1112～1113, 1116～1117, 1121～1123)。

B-2 底部端部が張出し、屈曲を持つもの。

a 屈曲の強いもの(1110～1111)。底部中央が極端に薄くなる。

b 屈曲の弱いもの(1114～1115)。

B-3 底面から短く直立し、内湾する胴部に続くもの(1106～1109)。

**底部C** 底部側面が胴部から底面へ直行するもの。

C-1 高台状の上底をなすもの。底壁の厚さは薄手である(1102～1105)。

C-2 黄橙～赤褐色系の色調を呈し、ゆるやかに内湾する胴部と小さな上底が特徴である。全般に器壁が薄い。

a 器面調整をヘラミガキで行うもの(922～926)。

b 器面調整をナデで行うもの(927～930)。

C-3 C類の中で底の厚いもの(1118～1120, 1125)。

(菅付和樹)

## 第5節 古代～中世の遺構と遺物

本遺跡においては、縄文時代の遺構・遺物とともに、古代～中世にかけての遺構・遺物が確認されている。層的に言えば、もっとも残存状況の良好であったⅠ～Ⅵ区においては、第Ⅳ層～漆黒色シルト質土層が包含層に相当すると思われるが、縄文時代の包含層である第Ⅴ層～黒色シルト質土層とほとんど同様な黒色土層を呈するため、平面的に識別することが困難であった。そのため、遺物出土状況を観察しながら、平板測量により出土位置を確認し徐々に掘り下げていく方法を取り、第Ⅵ層～アカホヤ層の上面まで掘り下げて遺構確認を行った。

また包含層の薄いⅣ区、Ⅷ区、Ⅸ区、Ⅺ区等においては、表土層直下に暗褐色シルト質土層がでてくるような状況であったので、縄文時代後晩期の遺構・遺物と混在する形でしか確認しえなかった。

### 1. 遺構

遺構としては、掘立柱建物跡が、Ⅲ区に2軒、Ⅳ区に6軒、Ⅴ区に3軒、Ⅵ区に3軒、Ⅶ区に4軒、Ⅸ区に2軒、ⅩⅥ区に4軒の計24軒、竪穴住居跡が、Ⅰ区、Ⅴ区で各1基、土城がⅩⅦ区で1基、全体にわたってピット群と溝状遺構が確認されている。

#### 掘立柱建物跡

本遺跡において確認された掘立柱建物跡の規模および主軸方向については表20に示す通りである。

全体的に見て、柱間は2間×3間が主体であり、その他に、SB8～2間×4間、SB10～2間×2間、SB16～5間×2間等が存在する。また規模的に大きい部類に属するSB1(西廂)、SB4(東西両廂)、SB16(北廂)が廂を有する。特にSB4は、桁行方向に若干揺がりながら陥状の施設が存在しており特異な形態を持つものである。柱間寸法は、SB4が最大で2.7m(約9尺)をはかるが一軒のみで、その他は、概ね2m前後(約7尺)、1.8m前後(約6尺)、1.5m前後(約5尺)の3段階程度に集約できるとと思われる。

また主軸方向は、ほぼ東西方向と南北方向にわかれるが、東西方向をなしているものが19軒と圧倒的に多い。これ

は遺跡が、北西から南東方向に向って傾斜しているという立地的なものに規制された可能性が考えられる。

掘立柱建物の分布状況は、層的にいえば高位にあたる中位面Ⅰにほとんどの掘立柱建物跡が分布する状況である。これは、中位面Ⅱに相当する部分が、極端に水はけの悪い地域（発掘期間中の観察）であるという自然条件によるものと思われる。これは縄文時代後・晩期の竪穴住居跡の分布とは異なっている。また、建物の切り合い関係はSB9（新）SB10（古）の1ヶ所で認められる程度であった。

掘立柱建物跡はその遺構の性格上共伴する遺物は少ないが、SB7のSH7より土師器製の破片(32)、SB4のSH4より土鍾(439)、SB8SH10より土器片転用の紡錘車(382)とSH1より土鍾(435)が出土している。

また、掘立柱建物の周辺には、ピット群が存在したが(付図2)、掘立柱建物跡としては確認できなかった。しかし、ピットの中にはV区SH178のように土師器製(33)が出土したり、またXXVI区のSH8などのように陶器壺(380)、石鍋、土師器杯(134)、小皿(135)が出土しているものがある。

### 竪穴住居跡

古代の竪穴住居跡は2軒が確認されているが、縄文時代後・晩期の竪穴住居跡と番号重複をさけるため、V区～SA101、I区～SA102とした。

#### SA101(第134図)

V区のSB5の西側5mの所に確認された竪穴住居跡である。方形プランを呈し2.9m×2.8mを計り北側にカマドを有していると思われる。炉等の開削により残存状態が悪く深さ約5cmをはかる程度であった。カマド部分は大きな攪乱をうけており構造は不明であるが屋外に煙道を有しており、1.2m北側に平面プラン0.4m×0.5mを計る煙出しの部分が確認できた。煙道及び煙出しの部分には40cm×30cmの平偏な石と変形土器(3)が出土している。これは、カマドを廃棄する際捨てられたものか、あるいは、学園都市遺跡群内の下田畑遺跡で見られるように、煙道の石蓋および煙突に使用された甕の可能性が考えられる。

出土遺物は少なく須恵器のみ(1)土師器の甕(2、3)があげられる。1は杯の底部で、底部から丸く立ち上り、底面はヘラ切りの後荒いナデ調整を行うものである。2は甕の口縁部で、頸部でくの字状にくびれ、直線的に外反し、頸部外側に明瞭に接合痕を残すタイプである。3は煙出しの部分より出土した土器で甕の口縁部～胴部片である。頸部から丸味をおびて直線的に外反するタイプで、胴部の外面は縦位のハケ、内面はヘラケズリによる調整が行なわれている。

#### SA102(第135・136図)

I区の中央部に他の掘立柱建物跡と離れて検出された竪穴住居跡である。形態的には方形プランを呈し規模は4.2m×4.6mを計り、深さは25～30cmを計る。床面は全体的にしまっていた。北・東壁の中央部分に、屋外に煙道を延ばすカマドが存在する。北カマドでは、カマド部分と想定される部分には、焼土が残存するのみで、カマドの構築物と思われる遺物は出土しなかった。煙道は幅0.6m、長さ1.2mをはかり、煙道の先端は0.5m×0.4mで深さ0.4mを計る煙出し部分が存在する。煙道には焼土や粘土が混入しているのみで、煙道途中で偏平な石が出土した以外は土器の細片が出土したのみであった。

東カマドでは、焚口付近と思われる部分に40×40cmと30×30cmを計る偏平な石が2個置いてあり、煙道の入口付近には、偏平な石が立たた状態で検出されている。煙道のプランは北カマドと同様で、一部攪乱をうけているが、幅50cm×50cm、深さ50cmを計る煙出し部分が存在する。カマドおよび煙道の部分には、焼土や粘土が混入している。遺物は、Fig.19にみられるように煙道の入口部分およびその周辺に集中して出土している。出土遺物としては、土師器→甕(4～10)環(14～18)、布痕土器(19～28)、須恵器(11～13、29、30)が出土している。土師器、布痕土器は東カマドおよびその周辺に集中的に分布しており、その他は細片が主であるが、須恵器は、カマドより離れた地点で

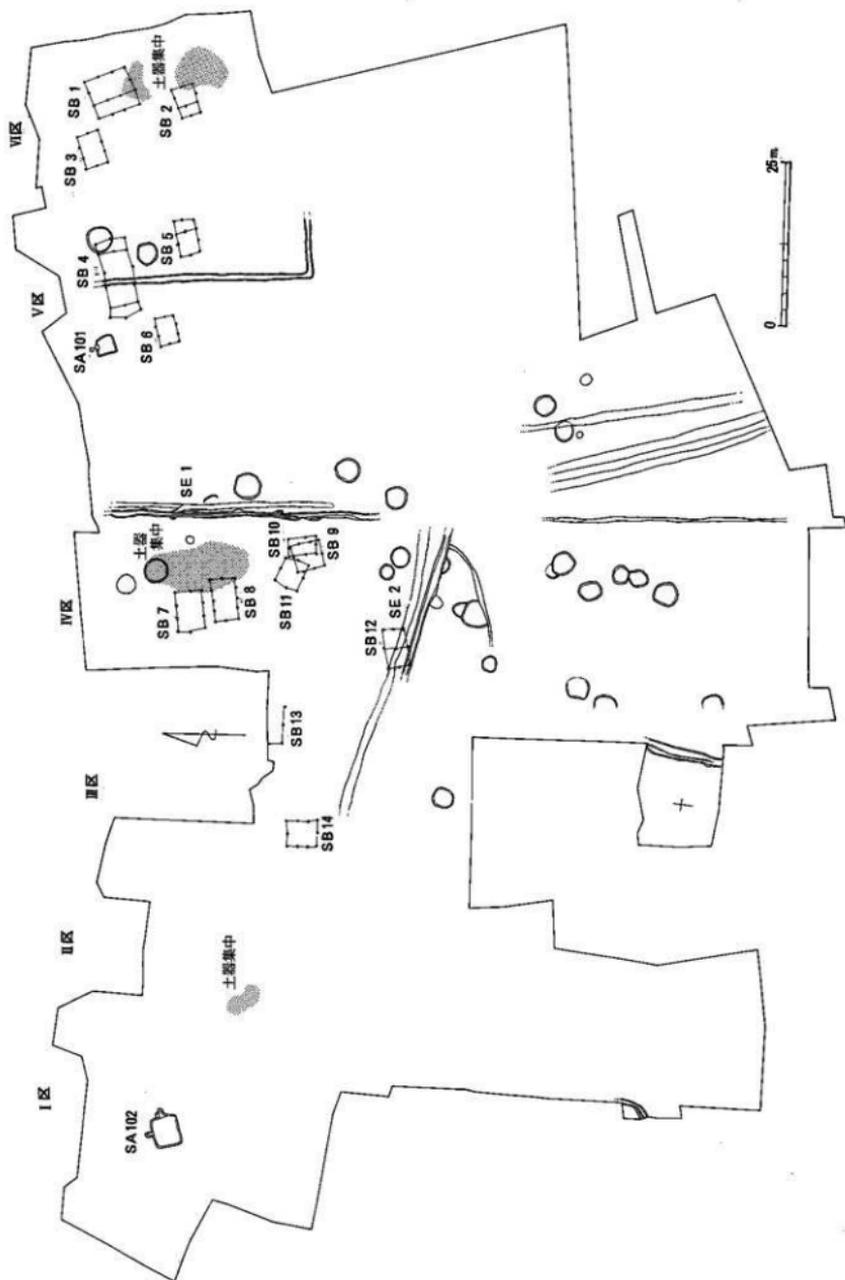


Fig. 18 掘立柱分布図及び土器出土集中分布図

表20 掘立柱建物一覧表

建物 No.	柱間	桁行	梁行	柱間寸法		主軸方向	備考
				桁行	梁行		
SB-1	3間×2間 (3間×3間)	6.5 <sup>m</sup>	3.8 <sup>m</sup> (6.0)	2.2 <sup>m</sup>	1.9 <sup>m</sup> (2.2)	N-22°-W	西側に溝を有する
SB-2	3間×2間	4.6	2.9	1.6	1.4	N-70.5°-E	建物内にカマドを有する
SB-3	3間×2間	5.1	3.4	1.7	1.7	N-72°-E	
SB-4	3間×2間 (5間×2間)	8.1 (12.2)	4.5	$\begin{matrix} 2.7 \\ (2.2 \sim 3.1) \\ \text{間} 1.1 \end{matrix}$	$\begin{matrix} 2.2 \\ (2.3 \sim 2.7) \end{matrix}$	N-78.5°-E	東・西両方向に溝を有する
SB-5	3間×2間	4.9	2.9	$\begin{matrix} 1.6 \\ (1.5 \sim 1.8) \end{matrix}$	$\begin{matrix} 1.5 \\ (1.4 \sim 1.5) \end{matrix}$	N-78°-E	
SB-6	3間×2間	4.1	2.7	$\begin{matrix} 1.4 \\ (1.2 \sim 1.5) \end{matrix}$	$\begin{matrix} 1.4 \\ (1.3 \sim 1.4) \end{matrix}$	N-75°-E	
SB-7	3間×2間	5.9	4.2	$\begin{matrix} 2.0 \\ (1.8 \sim 2.0) \end{matrix}$	$\begin{matrix} 2.3 \\ (1.7 \sim 2.3) \end{matrix}$	N-85°-E	建物(壁)有
SB-8	4間×2間	6.3	3.5	$\begin{matrix} 1.5 \\ (1.4 \sim 1.8) \end{matrix}$	$\begin{matrix} 1.7 \\ (1.6 \sim 1.9) \end{matrix}$	N-84°-E	建物(納箱車)有
SB-9	3間×2間	4.8	3.8	$\begin{matrix} 1.5 \\ (1.4 \sim 1.7) \end{matrix}$	$\begin{matrix} 1.9 \\ (1.8 \sim 2.0) \end{matrix}$	N-11.5°-W	SB-10, 11と切り合っている SB-10より新しい
SB-10	2間×2間	4.1	2.7	2.4, 1.7	$\begin{matrix} 1.4 \\ (1.2 \sim 1.4) \end{matrix}$	N-6.5°-W	SB-9, 11と切り合っている ピットの切り合い関係により SB-9より古い
SB-11	2間×2間	EW 3.7	NS 3.8	$\begin{matrix} 1.9 \\ (1.9 \sim 2.1) \end{matrix}$	$\begin{matrix} 1.8 \\ (1.8 \sim 2.1) \end{matrix}$	N-64°W	SB-9, 10と切り合っている。
SB-12	3間×2間	8.5	3.2	$\begin{matrix} 2.7 \\ (2.6 \sim 3.1) \end{matrix}$	$\begin{matrix} 1.6 \\ (1.5 \sim 1.7) \end{matrix}$	N-76.5°-E	東西溝と切り合っている
SB-13	-	-	-	2.8	2.0	N-90°-E	カクラン
SB-14	3間×2間	4.4	4.0	$\begin{matrix} 1.5 \\ (1.3 \sim 1.7) \end{matrix}$	2.0	N-2.5°-W	
SB-15	3間×2間	4.6	3.6	$\begin{matrix} 1.6 \\ (1.4 \sim 1.8) \end{matrix}$	$\begin{matrix} 1.8 \\ (1.6 \sim 2.0) \end{matrix}$	N-76°-E	
SB-16	5間×2間 (3間)	9.1	4.1 (5.1)	$\begin{matrix} 1.8 \\ (1.7 \sim 1.9) \end{matrix}$	$\begin{matrix} 2.0 \\ (1.1 \sim 2.9) \end{matrix}$	N-88°-E	北側に溝を有する
SB-17	3間×2間	5.9	3.0	$\begin{matrix} 2.0 \\ (1.8 \sim 2.1) \end{matrix}$	$\begin{matrix} 1.5 \\ (1.4 \sim 1.6) \end{matrix}$	N-83°-E	
SB-18	3間×2間	4.8	8.8	$\begin{matrix} 1.7 \\ (1.5 \sim 1.7) \end{matrix}$	$\begin{matrix} 1.9 \\ (1.9 \sim 2.0) \end{matrix}$	N-67°-E	カクラン
SB-19	3間×2間	6.0	-	2.0	2.1	N-83.5°-W	陸揚区外
SB-20	5間×(間)	10.3	-	$\begin{matrix} 1.8 \\ (1.7 \sim 2.6) \end{matrix}$	$\begin{matrix} 1.1 \\ (\text{間の部分}) \end{matrix}$	N-81°-W	陸揚区外(北側に溝を有する可 能性あり)
SB-21	2間×2間	4.2	3.8	1.9, 2.3	1.9	N-7°-E	
SB-22	3間×2間	5.0	3.6	$\begin{matrix} 1.6 \\ (0.9 \sim 2.3) \end{matrix}$	$\begin{matrix} 1.8 \\ (1.4 \sim 2.1) \end{matrix}$	N-62°-W	
SB-23	2間×2間	5.9	3.6	$\begin{matrix} 2.7 \\ (2.9 \sim 3.2) \end{matrix}$	$\begin{matrix} 1.9 \\ (2.1 \sim 1.8) \end{matrix}$	N-65°-W	
SB-24	2間×3間	4.6	2.4	$\begin{matrix} 1.6 \\ (1.6 \sim 1.3) \end{matrix}$	$\begin{matrix} 1.2 \\ (1.4 \sim 1.2) \end{matrix}$	N-7.5°-E	

・柱間寸法は平均値をとり差が大きい場合は( )に最大・最小を示した。

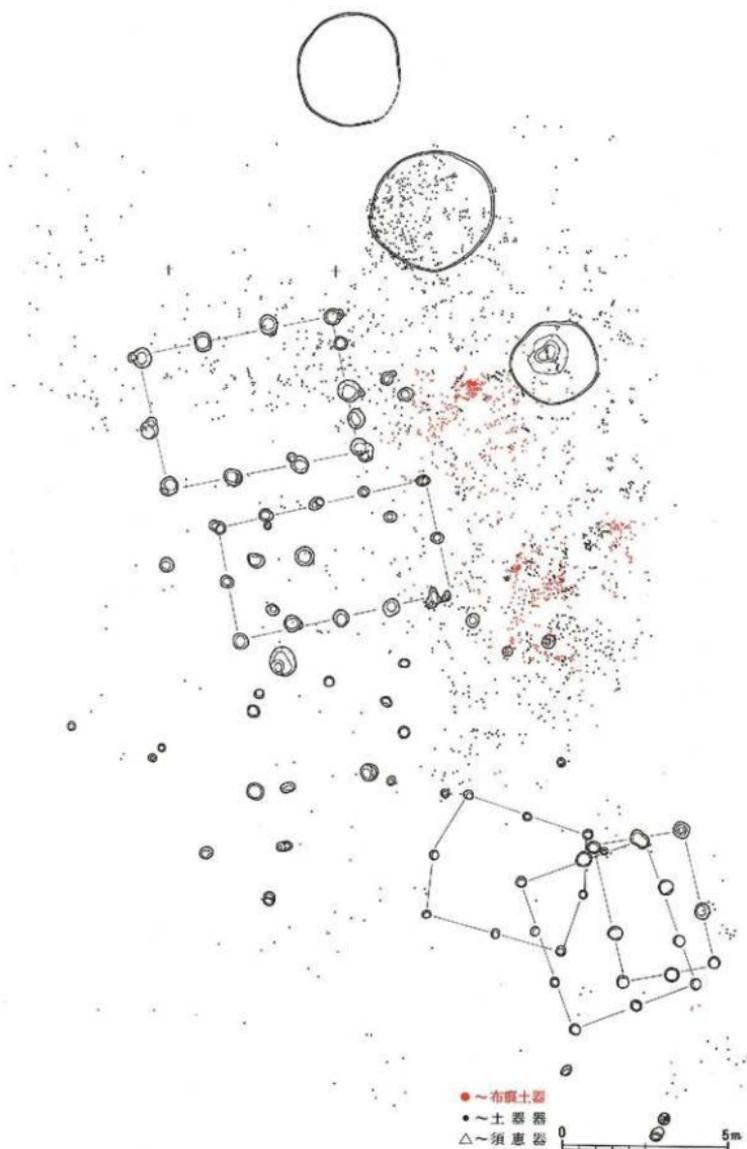


Fig. 19 IV区 土器器・布痕土器出土分布図

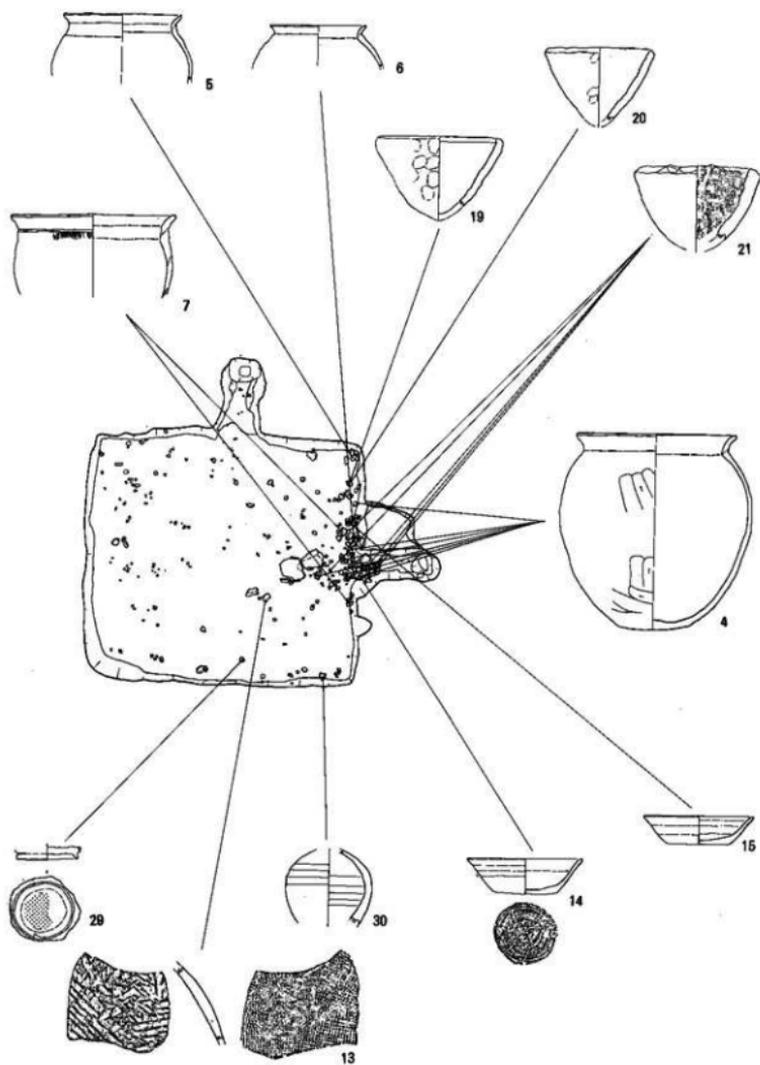


Fig. 20 SA 102 遺物分布状況

出土している。特に注目されるのは、須恵器（高台付埴）で、高台内部を硯として転用使用しているもので、表面がなめらかで、曇痕がのこっている。

#### 土埴（付図3-2）

XXII区において土埴が1基確認されている。平面プランは方形を呈し1.2m×1.2mで深さ20cmを計る。土埴内よりは土師器一坏（106, 107）2点と小皿（108, 110~112）4点が出土している。

#### 溝状遺構

本遺跡においては、10本近くの溝状遺構が検出されているが、そのほとんどは浅く遺物も出土していないものが多かった。もっとも良好な状態を示したものはV区の西側に位置するSE1とIV区の南側を東西に走るSE2である。遺物はほとんど出土していないが、III~IV区に存在する掘立柱建物を規制するような形を呈しておりほぼ同時期に該当するのではないと思われる。その他の溝は、縄文時代の竪穴住居跡を切って走っており、それ以降のものであるが、時期は確定しえない。

## 2. 遺物

古代~中世の時期に相当する遺物としては、土師器（坏・小皿・高台付埴・黒色土器・甕）・布直土器・須恵器（火罏・甑・壺・蓋）・緑釉・陶器（瀬戸・備前・常滑・魚住）・磁器（青磁）・土師等の各種遺物が出土している。しかし、竪穴住居跡（SA 101, 102）を除いては、掘立柱建物跡という遺構が主体をなしている関係上ほとんどが包含層よりの出土であった。その中でもFig. 18にみられるように掘立柱建物にともなうと思われる数ヶ所の遺物集見が見られた。

#### 土師器

土師器は全体的に出土している。器形としては、坏・小皿・高台付埴・黒色土器（内黒）・甕が出土している。

#### 坏・小皿

本遺跡より出土している坏・小皿はほとんどがヘラ切りである。出土遺物は破片が多く完形品になるものは少量である。体部は横ナデ調整が行なわれ、底部もヘラ切り離しの後、ナデ・ヘラナデによる再調整が施されているものが多い。底部や口縁部の形態や底部よりの立ち上りにより分類を行う。分類の名称は「山内石塔群」<sup>(1)</sup>で使用している分類に準拠して、I類~ヘラ切り、II類~糸切り、A類~坏、B類~小皿とし新たにC類~皿を設けて分類を行う。

I-A-1類、法量は、口径13~15.6cm、器高4~4.6cm、底径5.6~9.4cmを計る。偏平な底部より内湾気味に立ち上り、そのまま口縁部へ至る。内面は滑らかに立ち上る。底部は切り離しの後ヘラナデ調整を行う。このタイプは法量により細分が可能である。（34, 37, 41, 50, 63, 68, 70, 74, 80, 92, 96, 98, 102, 113）

I-A-2類、偏平ないし若干丸味をおびた底部より立ち上りは段を形成して外へ開く。外底は、切り離しの後ヘラナデ調整が行なわれる。内底面は一段凹みを有す。この類は完形品がなく底径しか判明しないが5.5~9.9cmを計り、細分の可能性がある。（46, 51, 66, 71, 72, 77, 83~88, 90, 91）

I-A-3類、法量は、口径12.6~14.6cm、器高3.7~4.7cm、底径5.6~9.2cmを計る。偏平な底部より内湾気味に立ち上り口縁部付近でわずかに外反する。外底はヘラナデ調整である。個体数は少ないが、法量的に2種類に分けられる。（35, 54, 55, 59, 81）

I-A-4類、法量は、口径10~13.5cm、器高3.5~4.5cm、底径6.6~8cmを計る。偏平あるいは若干下上げ底気味の底部より直線的に外へ開く。内面または外面の半に稜を有するものもある。外底はヘラナデを行っているがヘラ切り痕が残る。数類に分けられる可能性を有す。（36, 42, 43, 45, 47, 48, 50, 53, 56）

I-A-5類、法量は、口径~14~15.8cm、器高3~3.3cm、底径7.6~8.6cmを計る。偏平な底部より丸味をもって外へ開く。口縁部付近で外反する。器高が低くやや皿に近い形態をとる。外底の仕上げはヘラナデ調整である。

I-A-6類, 法量は, 口径12.2~12.7cm, 器高 3.8~ 4.3cm, 底径 7~ 7.7cmを計る。底部より直線的に立ち上りやや内湾気味に外へ開く。厚手である。底部には板目状痕が残る。(58, 64, 114)

I-A-7類, 法量は, 口径13.2~13.8cm, 器高 3.4~ 4.2cm, 底径 7.8~ 8.5cmを計る。底部と体部の境目に明瞭な稜を有す。直線的に立ち上り外へ開く。ヘラ切り痕が残る。薄手である。(105~107)

I-A-8類, 法量は, 口径12.3~13.0cm, 器高 3~ 3.7cm, 底径 8.5~ 8.7cmを計る。底部と体部の境目に明瞭な稜を持ち直線的に立ち上る。外面中半に稜を有する。(119, 131)

I-A-9類, 脚台を有するもの。完形品は出土していない。(103, 132)

I-B-1類, 法量は, 口径 8cm, 器高 1.6cm, 底径 5.7cmを計る。底部と体部の境目が丸味をおびており、直線的に立ち上る。外底は若干ヘラ切り痕が残るがナゲ調整を行っている。(104)

I-B-2類, 法量は, 口径 7.5~ 8.3cm, 器高 1.1~ 1.4cm, 底径 5.8~ 7.1cmを計る。底部と体部の境目は丸味をおびており一反外へ開きながら内湾気味に立ち上る。(402, 404, 405)

I-B-3類, 底部と体部の境目に稜を有する。やや外反ぎみに立ち上る。これは内部の形態により細分できる。

3 a類, 内部が深く薄手のもの。法量は, 口径 6.9cm, 器高 1.4cm, 底径 5.7cmを計る。(401)

3 b類, 内部がなめらかに立ち上り、浅く、厚手である。法量は, 口径 6.9~ 8.5cm, 器高 0.9~ 1.2cm, 底径 6.3~ 7.5cmを計る。(108, 110~112, 115)

I-C-1類, 法量は, 口径15cm, 器高 3cm, 底径 6.4cmを計る。唯一皿形になるとと思われるもので、若干丸味をおびた底部より直線的に外へ開く。(61)

II-A-1類, 法量は, 口径12cm, 器高 3.3cm, 底径6.75cmを計る。一点のみの出土であるが、底部から丸味をもって直線的に立ち上る。(391)

II-B-1類, 法量は, 口径6.75cm, 器高 1.6cm, 底径6.15cmを計る。底部より一反段を形成して直立的に立ち上る。口縁端部で若干外反する。(113)

#### 高台付塊 (136~144)

高台付塊と思われる破片は埴に比べると少ないが、主にIV~VI区で出土している。いずれも底部(高台)のみで口縁部まで復元できるものはないので全体的器形は想定しえないが、高台の形態で見ると、高台が外へ開くもの(137, 138, 139)、直線的に付くもの(142)、短い高台で端部が角張っているもの(136, 140)の3種類がある。

#### 黒色土器(内黒) (145~174)

本遺跡では学園都市遺跡群内において黒色土器の出土量がもっとも多い。その中でも特にIV区付近に数多く出土している。器形としては、埴・高台付塊が出土している。

#### 埴

埴は形態的には、偏平な底部より内湾気味に立ち上り口縁部付近でわずかに外反するものがほとんどで中には1~2点外反せずにそのまま口縁部に至るものもある。外面は体部・底部ともにヘラミガキが施されている。法量的には少しばらつきがあり2~3類に分類できる可能性があるが、ここでは法量が計測できる個体が4点しかなかったので細分はおこなわなかった。

#### 高台付塊

高台付塊は全体が復元できるものは1点しかないが、高台等の形態により分類を行った。

I類~高台が短く直線的に付く。体部は直線的に開き口縁部付近で若干外反するもの。(162, 163)

II類~高台が長く外反気味に付くもの。(171, 172)

III類~高台が直立するような形で付き、端部は内面に切り込むように角張っている。(174)

I・II類は両者とも坏のように外面にヘラミガキは施こされていない。III類は1点しか出土していないが体部の外面も黒色磨研されているものである。

また高台付碗の破片とおもわれるものの中に外面に墨書が施こされるものが2点存在する。(169, 170) 破片のどのような文字かは判別できなかった。

## 甕

本遺跡においては、土師器・坏と同様に出土量が多い。破片が多いため個体数については不明である。I口縁部・頸部の形態や器面調整等によって数類に分けることができる。

これらの変類は大きく胴部内面にヘラケズリを施すもの(I類)とそうでないもの(II類)に分けられる。それぞれ形態の特徴により数類に分類が可能である。

A類 (2, 3, 175~183, 187, 188, 198, 202, 205, 214, 221, 225)

頸部はややくびれ、口縁部が外反するタイプ。胴部はあまり張らずに最大径を口縁部に持つ。I類・II類ともある。I類は頸部に接合痕を明瞭に残すもので、大型と小型に分けられる。

B類 (206, 208, 223, 224, 230, 235)

頸部がくびれ、口縁部が直線的に外反する。口縁端部がやや厚みをおびるものもある。胴部がやや張る。頸部に接合痕と思われる横ナアによって生じた凹みがある。I類・II類ともある。II類の内面には斜め方向のヘラケズリが施されている。

C類 (184, 185, 190~192, 204, 210~212, 220, 229, 234)

形態的にA類に類似しているが、頸部が丸味をおびて口縁部が大きく外湾するタイプ。口縁端部は角張っているものとシャープなものとがある。I類・II類ともある。

D類 (193~197, 209, 216, 215, 217)

形態的にはA類に類似するが、内面に明瞭な稜をもつ。I口縁部内面が横ハケ調整である。II類のみである。

E類 (231, 232, 237)

直線的な胴部より口縁部が短く外反する。II類のみである。

F類 (203)

頸部がくびれ口縁部が内湾気味に外反するタイプ。II類のみである。一点のみの出土である。

G類 (186, 199)

頸部がくびれず口縁部がやや外反するのみで、ラップ状に開く。平底である。外面は荒いヘラミガキである。I類のみである。

H類 (4, 5, 6, 207)

頸部が極端にくびれ、蓋に近い形態となる。口縁部は丸味をおびて外反する。底部はやや丸底に近い平底を呈す。I類のみである。小型品がある。

以上、おおまかに甕を分類してきたが、その他には200の甕形土器、33のような鉢形土器、222のような鉢形土器のミニチュアや238のように内面に金属等の溶解片の付着した増場と思われるものも出土している。

布痕土器 (19~28, 258~306)

布痕土器とは、土器の内面に布目圧痕を有する土器である。本遺跡においては、土師器に伴って多量に出土している。分布状況は、土師器と同様にI区、IV区、VI区の土器集中部分に多く出土しており特にIV区のSB-8の南東部に集中して出土している。

器形はほとんどが、若干ふくらんだ円錐形を呈し、底部は尖底ないしそれにちかい丸底を呈す。色調はほとんど橙色

を呈す。胎土は荒く、4～5mm程度の砂粒を含む。非常にろい土器であるため多量に出土しているが破片が多くまた割れ口も磨耗が激しいために接合はむずかしく完形に復元したものの数量は少量である。これらの土器はその器面調整等を考えると、布目瓦と同様型作りで製作された土器であろうと考えられる。内面の布痕は型はずしを容易にするために型にまかれた布の圧痕であろう。外面はほとんどが指頭痕がのこる荒い作りで、口縁部はヘラであまった粘土を切り落したのか、外方へそぎ落されている。型作りによりある程度規格性をもって作られたとするならば、布痕土器の総出土重量が50.5kgであるので1個体が約600gと考えて単純に計算すると約85個体分の土器が出土したと考えられる。内面の布の種類は口のこまかいものから荒いものまで各種存在する。容量的には400～500cc程度である。

須恵器 (11～13, 29, 30, 307～362, 406～413)

須恵器は特にV・VI区に多く出土している。そのほとんどが薬の破片であるが、その他に高台付埴・蓋・瓶等が少量ながら出土している。

#### 高台付埴

高台付埴は3点出土しているが、323, 324の2点はVI区より出土しており、体部が丸味をもって立ち上るタイプである。29はSA 102よりの出土で高台部分のみであるが転用碗として使用されたものである。

#### 蓋

321は短頸壺等の蓋になるものと思われる破片である。天井部が残存していないのでつまみの有無は判別できない。

#### 瓶

320は瓶の口縁部である。口縁部は大きく外反して立ち上り口縁端部付近で直立気味に屈曲して立ち上る。口縁端部は丸くなっている。調整は横ナデであり外面には部分的に自然釉がかかっている。309, 325は瓶の底部である。底部は平底で直線的に胴部へ立ち上る。調整は309は外面にカキ目が施されている。325は横位のヘラケズリがほどこされている。

#### 甕

甕のほとんどは叩きの施された胴部片である。内外面の叩きの組み合わせによって分類を行う。

I類 (326～347)

外面が格子目文叩きで内面は円内に放射状の線が入る車輪文叩きでVI区を中心に出土している。薄手である。底部付近は内面の叩きがナデ消しである。326はこの類の胴部につく口縁部である。

II類 (318, 351, 352, 356)

外面は格子目文(長方形)叩きで内面は大きく深い同心円文叩きを施す。

III類 (350, 354)

外面は平行線文叩きが施され部分的にナデ消しである。内面は同心円文叩きを施すがII類よりは小さな単位である。

IV類 (359, 357～361)

外面は重なりあった平行線文叩きが施されている。内面は平行線文叩きの上に同心円文叩きが重なっている。

V類 (308～355)

外面は平行線文叩きが重なり合って施こされている。内面は深い平行線文叩きが施されている。

VI類 (310, 307)

外面は格子目文叩きが施され、内面は同心円文叩きが施されている。

VII類 (317, 353)

外面は平行線文叩きに格子目文叩きが重なっており、内面は同心円文叩きの上から平行線文叩きが施されて

いる。

Ⅰ類 (313~316, 348)

平行線文印きの重なりが一部ナデ消してある。内面は平行線文印きが施されている。

その他、外面に、格子目文、平行線文等の印きが施されており、内面はナデ消されているものもある。

#### 線軸

本遺跡からは緑釉陶器が、13点出土している。分布はⅤ、Ⅵ区に集中しており他の区では出土していない。これらの緑釉は胎土によってⅠ類(灰色の胎土~硬陶)とⅡ類(浅黄橙色の胎土~軟陶)のものに分けられる。それぞれに高台付碗及び皿に分けられる。

Ⅰ一碗 (363, 364, 367, 368, 371, 372, 373)

この中では363が全体形を復元しうるが、底部は蛇ノ目高台を有し内湾気味に立ち上り口縁端部付近で若干外反するタイプである。軸は高台の外底までかかっており底部にはかかっていない。368, 371, 372, 373は同タイプである。364は口縁端部で外反せず口縁へ至るタイプである。367は充実した高台をしめし底部は糸切り底である。

Ⅰ一皿 (366)

皿の口縁片である。厚手の体部から直線的に外へ開く口縁端部は丸く取められている。

Ⅱ一碗 (369, 370)

口縁部片が出土している、Ⅰ類とほぼ同形態である。

Ⅱ一皿 (365, 370, 374, 375)

375が全体を復元しうるが、底部は蛇ノ目高台を呈し内湾気味に立ち上りそのまま薄くなりながら口縁部へ至る。軸はほとんど剥落している。365は皿の口縁部でⅠ類と同タイプである。

土 鍾 (第155図421~442)

土鍾は総数55点出土しており、そのうち34点が完形品である。(表28) 1点を除いて全て土師質で筒状をしたものである。形態や調整の違いにより6分類できる。

Ⅰ類~(表28 1~13)

中央部に最大径をもち、両端がすぼむ。両端の仕上げは粗いものが多い。色調は淡黄色(5YR 5/2)を呈す。

Ⅱ類~(表28 14~37)

中央部に最大径をもつが、Ⅰ類ほどふくらまない。両端ともにていねいなナデ調整が施されている。色調は黄褐色(7.5YR 5/2)を呈するもので、中には黒斑を有するものがある。

Ⅲ類~(表28 38~44)

中央部に最大径をもち、両端がすぼむ、Ⅰ類に類似しているが小型である。色調は黄褐色(7.5YR 5/2)を呈するものが多い。

Ⅳ類~(表28 45~51)

胴部があまり膨らまず細長いタイプ、小型である。

Ⅴ類(表28 51~54)

胴部があまりふくらまず両端は丸く仕上げられている。大型品である。色調は黄褐色を呈す。完形品は出土していない。

Ⅵ類(表28 55)

Ⅴ類同様大型品であるが、両端が平坦になっており、ていねいに仕上げられている。焼成がよく固い。黒褐色を呈す。

## 陶磁器

本遺跡においては、土師器・須恵器とともに少量ではあるが陶磁器が出土している。分布は調査区の西端にあたるXXIV, XXVI区に集中している。

380は壺である。器高25.5cm, 口径10cm, 胴部19.7cmを計る。胴部上半に最大径を有し、胴部に1条の沈線が施されており、外面は明赤褐色、内面は褐色を呈す。頸部よりゆるやかに外反しながら口縁部に至る。口縁部外面に自然釉がかかる。胴部には窯印らしきものも存在するが破損しているため不明である。

417, 420は大甕の口縁部と底部である。両者とも外面は灰赤色を呈し、胎土は砂粒を含む。同一個体であろうと思われる。口縁部は縁帯が広がって下方に下がっている。常滑の製品である。379, 418, 419は搦鉢である。379は灰色～黒褐色を呈し、口縁は肥厚せず、内面に6条を単位とした条線が間隔をあけて施してある。418, 419は口縁部が肥厚するものである。備前焼であろう。414～416, 376～378は鉢である。口縁端部を若干上方へつみ出し口縁外面は丸く仕上げられており、口縁外面はほとんどのものに自然釉がかかっている。内面には条線はいらず、416のような片口鉢も存在する。こね鉢の一種である。東播磨(魚住窯)の製品であろうと思われる。

### その他の遺物

381は雁股鉄鍔である。先端部は欠損しているが、2股に分かれるタイプである。残存長は9cm, 幅1.2cmを計る。V区出土である。382はSB8・SH10出土の土器片転用の紡錘車である。383, 384はXXIV区出土の五輪塔の一部分である。383は水輪で幅31.5cm, 高さ20cmを計る。厚手の中型である。納骨孔は持たない。384は空風輪である。尖頭型でやや腰ばりである。法量は高さ19cm, 幅16.5cmを計る。細身で大型である。<sup>(2)</sup>

385～390は弥生土器である。385～387は甕の口縁部である。いずれも頸部が鋭くくびれて口縁部が外反するもので、385は外面に三角凸帯を持ち386, 387は頸部内面がやや出張り明瞭な稜線を有す。389は高杯の脚部である。円筒形をなした脚部に杯部を差し込んでいる。388は壺形土器、390は鉢形土器の底部である。

またその他古銭が3点出土している。そのうち2点はXXVI区出土であるが、風化がはげしいため判読不能である。あとの1点は表採である。「嘉慶通寶」の初鑄は、1796年で清朝時代のものである。(日 高 孝 治)

### 注

(1), (2). 高崎県教育委員会「高崎学園都市埋蔵文化財発掘調査報告第1集 山内石塔群」1984 中の石塔および土師器の分類による。

## 第6節 縄文時代の総括と考察

### 1. 貝殻文系土器群について —— XXIV区出土土器を中心に ——

先に、XXIV区出土の土器を「貝殻文系土器群」と「その他の土器群」とに2大別して形式毎の分類を行った。前者は器面調整に貝殻条痕を用いたA-1・A-2類の外、一部条痕を残しつつもナデを主体とする様相の異なる土器群(A-3・B-G類)を含んでいる。これらは施文や調整においてわずかに貝殻使用の痕跡を残し、また、最も特徴的なその色調と焼成は、平畑遺跡の土器群の中では、貝殻条痕を有する土器にのみ類似性がみられるものであった。一方、胎土組成の中で類似性を識別することは、肉眼では甚だ困難であった。ところが、住居跡出土土器の胎土分析の結果から、平畑遺跡のほかの土器群と貝殻文系土器群の胎土の違いを識別できる可能性がでてきた。この胎土の違いが土器の製作上の違いか時期的な違い、または土器製作集団や文化の違いか等、今後の分析結果により解明されると思う。それによれば、現在「貝殻文系土器群」としたものが、将来分離されることもあるだろうが、現時点では胎土以外の諸特徴で分類した。「その他の土器群」としたものは、精製磨研や磨消縄文の土器及び住居跡群などでみ

られた粗製土器を包括したものであった。ここで、これらの土器群の出土状態等前項で触れなかったXXIV区の概要と包含層について記し、出土貝殻文系土器群について、若干の考察を行いたい。

#### (1) XXIV区の立地及び層序について

XXIV区は平畑遺跡のほぼ中央に位置する。地形分類上、中位面Ⅰの端部にあたり、下位の中位面Ⅱとの比高差約1mの南面する段丘上に立置する。調査は段丘端部から北へ約40m、幅約20m（途中から約±幅）で、「L」字状の範囲を行った。この南端から北へ約14mを境として、南北で層序の違いがみられる。南側は平畑遺跡の基本層序が残存し、北側はアカホヤ層の下位の層が表土下に出て来る。これは、あたかも傾斜面を水平に削平したかの様な状態で、下位の層が横倒りに観察できた。また、包含層も南側には遺存し、北側にはみられなかった。しかし、北側の北西端ではアカホヤ層より下位の層が露呈しており、そこに住居跡が3基検出された。北側が後世の大規模な削平（小規模な削平はあったと考える）を受けていれば床面すら残り得ない様な下位の層での検出であり、既に縄文期には上位の層が失われていたか、ごく薄い堆積状態であったことが想定される。発掘区南側の西壁で層序を記録した（第3図）以下のとおりである。

- I層…灰黄褐色（10YR 5/2）砂質土層。表上（耕作土）下部。上部は重機により除去した。南側斜面は、幾層もの土砂の流入・堆積がみられる。中・近世以降の遺物を包含。
- II層…暗褐色（10YR 3/2）砂質土層。縄文時代の遺物を少量包含。
- III層…灰黄褐色（10YR 5/2）砂質土層。暗褐色土混入。大粒の砂粒が混じる。土器片を少量包含するが細片が多く、土師器（土片）もみられる。流入土と思われる。
- IV層…ぶい黄褐色（10YR 5/2）砂質土層。固く締っている。多量の縄文土器片・石器・刺片類を包含する。
- V層…暗褐色（10YR 3/2）砂質土層。土器細片をまばらに含み、II層より締っている。
- VI層…黒褐色（10YR 3/2）シルト質土層。IIIとIVの漸移的な層。
- VII層…無褐色（10YR 3/2）シルト質土層。遺物包含のみられない自然形成土層。
- VIII層…褐色（7.5YR 5/2）砂質土層。アカホヤ火山灰。無遺物層。

#### (2) 包含層及び遺物出土状況

XXIV区南東端では、I層下部で石錘・砥石・凹石・敲石・五輪塔（空風輪、水輪）及び刺片類が、礫と共に積重ねた状態で出土している。これは、周辺の畑地脇でもよく見られ、耕作時に拾い集められ、畑脇に寄せたものが埋没したものと考えられる。ここで、各層の遺物出土状況を見ると、I層下部・II・III層では発掘区南端にやまとまった出土状況がみられ（陶磁器・土師器は主にこの層位で出土している）、北側はまばらな出土状態である。III層は、発掘区南端から北へ約3.5mを境に北側は夥しい遺物が出土し、南側は少量出土するだけであった。このIII層北側は、上部から下部までほぼ全面に遺物が出土するが、先述の約14mのラインで、上部に上がって来た包含層は削平され消滅する。この層は上部・下部での土色や土質等の差異は見出せず、I層として確認された。しかし、IV層に近くなるとやや出土量は減り、IV層では上部に一部混入する程度である。図からもわかるように、IV・V層は自然傾斜し、図左側（南）約2mのあたりから南は、次第に傾斜が弱く平坦化して行く。そして、III層はこの傾斜に沿って堆積する。これらのことから、現在の段丘は、先ずIV層の傾斜が急になるあたりから北側に主としてIII層が堆積し、その後、土砂の流れ落ちや耕作等によって次第に段丘が形成され、さらに南側へと大きくなって、現況の様になったことがわかる。また、III層主包含層は、何らの遺構も検出されず、傾斜地に夥しい土器片が捨てられる土器廃棄の場として認識できるとと思われる。

Ⅲ層の出土状況については、図面整理がまだ十分に消化されたとはいえない状態であるため詳しく提示できないが、出土傾向としては次のとおりである。遺物量は上・下層より中層が多く、大きな破片は中層から下層にかけて多く見られた。また、有文土器に大きな破片が少ないのに対して、無文土器には大きな破片が多かった。出土量も無文土器の方が多い。精製磨研土器は割合出土しているが、粗製土器はそれより圧倒的に量が多い。一方、磨消縄文土器はごく少なく10点に満たない数であった。そして、精製磨研土器は、後期的特徴を持つものは上層からも出土しているが全体に下部に多く、晩期的特徴を持つものは下部からも出土しているが、より上層に多い傾向にあり、粗製深鉢K-3類においては、例外なく上層から出土している。また、特殊な遺物として、砂岩製と思われる岩偶や器高11.3cm、口径11.4cmを測る丹塗磨研の小型鉢形土器が出土し、Ⅲ層最下部では東西2カ所に、完形に近い大きな破片を含む遺物の集中箇所がみられた。他の多くの遺物は小破片であり、まとまりを欠く無秩序な出土状態を示したが、これらは（特に完形に近いものは）包含層最下部で安定した状態で出土している。

第20図はⅠⅣ区Ⅲ層の北西端部で出土したものである（以下、一括Ⅰ群とする）。遺物は貝殻痕の地文と腹縁刺突文を持つ935～937（A-1類）である。また第21図はⅢ層東端部で出土したものである（以下、一括Ⅱ群とする）。遺物は、貝殻文系の938～942（A-3類）、944（B-1a類）、947（B-2類）、943・945～946・951～952（C-3類）、948・953（D類）、949～950（E-1類）及び精製磨研の884（浅B-1類）、1053（J-1b類）などである。一括Ⅰ群は、あと5～6cmでⅣ層にかかわるというⅢ層の最下部で、数個体の土器が押し潰れた様な状況で出土した。周開や上層からも小破片が多く出土したが、この様な大破片の集中としてはなかった。また、一括Ⅱ群もⅢ層最下部、あと8～10cm程でⅣ層にかかわる位置に出土している。一個体がそのまま押し潰れた様な土器をはじめ、大破片がまとまって出土し、その周辺や上層には小破片が多かった。集中箇所の出土状況を見ると、波状口縁の938は口縁部を下に逆さの状態に出土し、その東側約15cmには、刺突列点文と沈線文を有する磨研土器1053が出土している。938の口縁部とほぼ同レベルである。938は潰れているが、その上層約8～9cmの位置には、丹塗磨研土器1156が出土している。この1156の北西方向約6.25mの位置に、傾斜面であるためやや正確さを欠くがほぼ同様な高さで、1157の岩偶が出土し、その約50cm南西に波状口縁土器1020（C-1類）が位置していた。また、この一括Ⅱ群の範囲内では、946（C-3c類）の西約50cmの位置で、約9cm上層に磨研土器の口縁部885（浅B-2類）が、943と945の間で上層約16cmの位置には磨研土器895（浅A-2類）が出土しているが、一括Ⅰ・Ⅱ群以外のこれらは、傾斜地であることや土壌形成作用等を考えると、必ずしも安定した出土状況は示していない。

### (3) まとめ

以上が、ⅣⅣ区の縄文時代包含層の概要である。出土土器のうち、「その他の土器群」としたものは、後期から晩期にかけての数型式を含むもので、その中には既に型式内容の判明している三万田式・御傾式土器に相当すると思われるものも含んでいた。一方、「貝殻文系土器群」としたものは、型式内容の判明している1型式の外、平畑遺跡の住居跡群にも殆どみられない型式のものを含んでいた。ここで、前節で各形式毎に行った分類を若干まとめて、その後、深鉢C類をはじめとする貝殻文系土器群の考察を試みたい。

先ず、「その他の土器群」の中では、深鉢Ⅰ-1・J類が三万田式土器に相当すると考えられる（以下、深鉢を深、浅鉢を浅と略記する）。深H類の磨消縄文土器は、これにやや先行し、この土器群で最も古い様相を示す。また、深Ⅰ-2類は御傾式土器の系統を引き晩期初頭に、深K類はそれに後出すると考えられるが、これらの土器は平畑遺跡住居跡群出土土器にもみられ、考察が別項で述べられる。

浅鉢では、浅A類が御傾式土器に相当すると考えられ、浅B-1類はやや先行するものと思われる。浅C類は肩部や口縁部の形態から後期末に、浅D・E類はそれに後出し晩期前半半葉に、そして浅F・G類はさらに後出するものと考えられる。

底部では、底部A類(以下、底と略す)が貝殻文系土器の底部と考えられ、後期後半に位置付けられると考える。また、底C-2類は精製(磨研)土器の底部と考えられ、後期後葉を中心として晩期初葉まで残るものと思われる。ほかの底部については、口縁部から底部まで出土した例がなく、時期的には不明であるが、おおよそ、出土深鉢と同一時期と思われる。ただ、底B-2類については、隣県の晩期前半の深鉢彩土器の底部に類似のものがみられ、この時期に相当する可能性がある。

次に脚台付皿形土器のうちC類は、器面調整、色調等明らかに貝殻文系土器群に属するものである。完形土器がなく全体器形が不明である上、他に類例をみないため、時期は不明である。ただ、文様が簡素なことなど、無文土器の増加が著しい草野式相当の時期か、やや先行する時期に位置付けられるのではないかとと思われる。脚A類はその裝飾の華麗さからさらに先行する時期(市来式の盛行期あたり)に位置付けられると思われる。また脚B類は、その色調や調整から、C類に後出する可能性がある。いずれにしう類例の増加を待ちたい。

そのほか、丹塗磨研土器1156は文様や器面調整の特徴から、岩偶1157とともに後期後葉に位置付けられよう。また、注口部1126や高杯の脚台と思われる1128-1134等は、器面調整等から、精製磨研土器がかなり簡略化されたか、磨研の伝統のない後期貝殻文系文化との融合の結果生じたものである可能性があり、やはり後期後葉の所産と思われる。

さて、最後に「貝殻文系土器群」についてであるが、このうち深A-1類は、型式の判明する唯一のものである。即ち、この類は河口貞徳氏のいう市来式土器の最も新しい段階のものである<sup>(2)</sup>と思われる。ただ、口縁部の裝飾が貝殻腹縁文のみで割合単純である点、多少異なるようでもある。この類は近隣では、末吉町丸尾遺跡や都城市成山遺跡、串間市下弓田遺跡等にみられ、あるいは大隅半島海岸部から宮崎県南部にかけてみられるものかもしれないが、鹿児島県側について浅学であるため詳細な分布についてはわからない。

次に、深A-2類~G類を考えるにあたって、南九州後期中葉以降の市来式~草野式について、若干見てみたい。市来式土器は、口縁部断面三角形のものから口唇部がのび、内面に屈曲を生じ、「く」字形口縁をなすものに、そして、さらに「口縁部を立ち上がらせることによって、市来式の口縁形態を形式的には踏襲しているもの、文様帯の厚さは、他の部分と変化がないもの<sup>(3)</sup>」へと変遷することが河口貞徳氏や本田道輝氏によって指摘されている。また、草野貝塚の市来式を検討考察された河川氏によって「市来式は簡素な文様から複雑な文様へ、(中略)一般に単純なものから、華麗なものへと移行している傾向<sup>(4)</sup>」及び「素文土器も数を増してくる傾向<sup>(5)</sup>」が指摘されている。また、一方、草野貝塚出土の「第三(群)の土器<sup>(6)</sup>」とされた草野式土器について河川氏は「市来式の一特徴である口縁部の三角形又は「く」字形の断面は失われる形となり、(中略)文様の施される場所は、頸部、肩部に移行している。器形は鉢形、頸部がしまり口縁部の外反した壺形、或は壺形等の平底で<sup>(7)</sup>、文様については、「華麗な弧形凹線文に貝殻圧痕等を併用したもの、或は貝殻圧痕のみのもが行われるが、一方無文のものが著しく増加<sup>(8)</sup>」するとし、また、草野貝塚の「第三の土器(草野式土器)についての報告の中で「口縁部が外反し、頸部がしまり胴部の張った壺形土器」には「貝殻文のあるものと、素文のものとなり、貝殻による条痕をつけたものが多い」と指摘し、さらに、「山形隆起を有し、素文で市来式のように口縁部段面が三角形をなしていないもの」や「鉢形素文土器」「赭褐色の壺形土器」の存在に触れている<sup>(9)</sup>。最近の報告書では、佐多町大泊貝塚の採集遺物の報告の中にXIVの深A-2類と口縁部形態の類似するものが「草野式」として報告されている。また、末吉町丸尾遺跡の確認調査の報告の中では、深A-2類と類似のものを、「市来式土器」として報告してある。

以上のことから、深A-2類の口唇部断面のまるさや施文部位、貝殻条痕や貝殻圧痕等は、草野式に近いものといえよう。しかし、全体器形や口縁部ののび方、施文等を考えるとこれは市来式土器の変化に沿うものと考えられ、市来式土器の最も新しい、草野式土器よりやや先行する時期のものと思われる。また、深A-3類の938や、深B・C

一3・D・E類土器の形態の組み合わせは、草野貝塚出土の「第三の土器」の組み合わせと非常に似ていることに気付く。特に、市来式以来の伝統的な器形態を受け継ぐと考えられる深A類に対し、深C-3類に代表される頸部がくびれて外傾する一群は、それまでの伝統的な器形にみられないものであり、市来式土器と草野式土器の形態の違いによく似た関係にあると考えられる。従って、時期的にも同様の時期が想定されよう。この深C-3類に代表される一群の頸部形態は、それまでの伝統の中から発生した形態とは現在のところ考え難いと思う。それでは、何の影響によるものなのか、未だ推定の域を出ないのであるが、次のように考えられないだろうか。深A-3・B・D・F類の口縁端部の形態にみられる内側が削られた様に鋭い角をなし、外側は斜め下へ丸くなるか、鑿の刃状に平坦面を持つ特徴、そして、深C-1類に端的にみられる頸部のくびれや施文形態、また、深B-1b類1019の土器にみられる施文部位の特徴等々、ある特定の文化の影響によるものという考え方である。深C-1類は、研磨がみられず、焼成や色調も貝殻文系土器文化の所産と思われるものであるが、形態は磨消縄文の西平式系の土器に類似する。しかし、器面には縄文(擬縄文)もみられず、平畑遺跡内でも磨消縄文土器はごく少量で、しかも西平式と考えられるものは殆ど出土していないことなどを考えると、これは、後出の三万田式期の土器文化の影響をXXIV区の貝殻文系文化が取り入れたものと想定されるのである。

最近、XXIV区のすぐ東隣でXXIV区の発掘調査が行われた。その出土遺物は殆ど未整理の状態であるが、水洗作業の途中、器面調整がナデで仕上げられ、波状口縁をなす橙色系の土器を数点見る機会があった。これらの土器は、丸く張った胴部に強くくびれた頸部を持ち、口縁は外傾するもので、頸部内器面には皺がみられた。底部はみられなかったが、器高は割合低いようであった。この土器に形態的に類似するものが深C-3a類の943の土器である。この土器の方が器高は高い。口縁部内面には沈線等を有さない土器である。そして、もうひとつ深C-3a類の970と973の土器に注目したい。970はふい褐色を呈したナデ調整の土器で、973は灰黄褐〜ふい褐色を呈し、ヘラミガキを施された土器である。これらは、ともに深C-3a類、貝殻文系の土器と考えられるものである。このうち、973に類似するものが、鹿兒島県末吉町中岳洞穴で出土している。中岳1類C土器とされたもので、やや先行するか同時期と思われるものに1類A土器・1類B土器が報告されている。1類C土器については「1類Bと同一器形であるが、口縁内面の沈線文が消失したもので「張りのある胴部に外反する口縁部を付けたもの」とされる。そして「口縁部内面の沈線は、まったく失なわれているが、頸部内面の沈線は残存するものが多く、「口唇部はやや丸味をおびるようになり、口縁部外反の角度が弱くなり、やや立ちあがったものも見られる」とある。その器面調整については、「荒による研磨の手法は同様であるが、器壁が厚くなり、粗製の感のあるものもある」と報告されている。そして、1類B土器については、器形は「上辺の張った胴部に、外反する平坦な口縁部がつき、口縁先端内面には、沈線を1条めぐらし、頸部内面に沈線を有するもので、素文の土器」とされる。この内面の沈線については1類A土器(有文)の項で「西平式の「く」字形に屈曲した口縁端の、退化形態」と考えておられる。器面はやはり研磨による調整である。1類A土器は、XXIV区深J-1b類に類似しており、ただJ-1b類には口縁部内面に沈線がみられない。また、ほかの出土土器の中の「西平式土器」については、「く字形の屈曲部が不明瞭になり、内側に沈線を施して、口縁部屈曲の痕跡を残している」と報告され、波状口縁の黒色磨研土器も図示されている。

この中岳洞穴の「西平式土器」に類似するものが、鹿兒島県志布志町片野洞穴で出土している。共存遺物には、口縁部に2条、胴部に4条の平行沈線と刺突列点文を施し、磨消縄文を持つ西平式系土器と、平口縁で器面に研磨がみられず口縁端部が「く」字形に屈曲し頸部のくびれる土器が出土している。

また、中岳洞穴で出土した「西平式土器」は鹿兒島市若宮遺跡でも出土している。同じく波状口縁で「く」字形の口縁部を沈線として名残りをとどめたものや、端部が「く」字形になりながらも、内面に沈線を巡らすもの、そして、中岳1類B土器に類似する平口縁で口縁部内部に沈線をめぐらすものも出土している。

そして、この若高遺跡で出土した「西平式より稍々後に<sup>16</sup>」波状口縁と平口縁の土器とほぼ同類のものが、大分県大野町の駒方C遺跡で深鉢I類・II類として出土している。深鉢I類は平口縁で、胴部が丸く張り、口縁部が反折し、素文である。口縁部内面に1条沈線が巡る。深鉢II類は、3-4カ所に頂部を持つ波状口縁で、頂部は尖るが外は平坦な面を持ち、口縁部内面には1条の沈線が巡る。これらは共に器面調整は「外面より内面の方がより丁寧に研磨されており、さらに浅鉢と比較すると、外面は研磨と表現するより、撫でに近い<sup>17</sup>」と報告されている。この駒方C遺跡の深鉢形土器は、熊本県の太郎迫遺跡E地点出土の太郎迫式土器との類似性から「東九州の三万田式土器」として位置付けられているものである。

さて、XXIV区深C-3a類の970・973に類似するもの及びそれに共伴する波状口縁土器をみてきたが、深C-3a類で先述した波状口縁土器943もまた、この駒方C遺跡の深鉢II類、若高遺跡等の波状口縁土器に類似すると思われるものである。貝殻文系土器であるため器面調整はナデであるが、駒方C遺跡のものはナデに近いへう研磨であり、相違点は、口縁部内面の沈線の有無だけである。これまで紹介してきた土器群と、XXIV区深C-3a類との最大の相違点は精製(黒色)磨研系土器文化と貝殻文系土器文化の違いであり、精製磨研系土器文化の強い影響を受けて変容した貝殻文系土器文化が、このXXIV区出土土器にみられるものではないだろうか。そうだと仮定するならば、深C-3類を代表とする、従来の伝統と異なる器形の一群も、三万田式相当期以降のものと思われる。そして、中岳洞穴の中岳1類土器が草野貝塚でも出土しており、西平式の後に位置付けられた中岳Iを草野式と併行期に位置付けられた河口氏の編年<sup>18</sup>は、中岳1類が三万田式相当の時期のものであるなら、草野式もまた三万田式相当の時期にまで下がることを示している。このように、西平式の形態は東九州から南九州の方では三万田式期以降に残り、また、さらに凹線文系土器文化の影響を受けて残り続けると予想される。南九州で典型的な三万田式土器が何故少ないのかを考える上で、重要であると思う。

また、一括II群の出土状況からも深C-3類をはじめとする一群の時期は推定されよう。一括出土の遺物群がIII層最下部で割合安定した状況で出土したことは、その中での遺物の同時期性が考えられると思う。もし仮に、時期のわかる様な小破片の土器(特に1053など)が土壌形成作用や土砂の流入等で移動して来たものだととしても、前述の周辺の遺物の出土状況から、これら一括II群は三万田式相当期を遡ることはないと考えられる。しかし、943, 946, 951~952など深C-3類に属する土器が完形に近い土器ではなく、それらを模倣したような945が、他の完形に近い938~939, 942など深A-3類や944など深B-1a類土器と同じく完形に近い状態で安定出土していることは、深C-3類(945を除く)は、それらにやや後出し、土砂とともに流れ込んで来た可能性もある。

以上、深A-1・2類以外の貝殻文系土器群はほかに類例がみられないものであり、貝殻文系土器文化が精製磨研系土器文化の強い影響を受けて変容したものであるという仮定のもとに、その時期を大分県の「東九州の三万田式土器」に相当する時期と考えたわけであるが、いずれにしても、住居跡に伴う類例を待つことにし、ここは予想にとどめておきたい。

#### (4) おわりに

宮崎大学の施設拡充、整備に伴って、平畑遺跡の発掘調査はこれからも継続される予定であるが、XXIV区周辺ではまだ深A-3・B・C-3・D・E類を検出した住居跡がみられない。例外的にSA54の616などは深B-1b類に属するもので共伴する遺物などから、後期末あたりに位置づけられそうであるが、類例を待ちたい。XXIV区に貝殻文系土器を捨てた縄文人たちの住居跡は未だに検出されていない。しかし、平畑遺跡は、試掘の結果や、耕作・抜根等による遺物の出土から、最西部、標高37m程の高台(β地点)には市来式土器の古い段階のものが、また、南西端、標高約30mの位置(α地点)には、平行沈線を有するさらに先行する土器片が出土することが判明している(第1図)。

この方面か、あるいは、北～北西部の晩期後半の遺物が出土する方面に XXIV 区に關係した人達の住居跡があると思われる。今後の調査結果に期待し、深 C-3 類を代表とする一群の土器内での編年等は後の課題としたい。

なお、河口貞徳、本田道輝、鹿児島県文化課、鹿児島市社会教育課の諸先生・諸氏には、年末のお忙しい中、資料見学の便宜をはかっていただき、また、多くの御指導・御教示を賜わった。記して深甚の謝意を表します。

(菅付和樹)

註(1) 最近、熊本県下ではこの時期の細分化の研究が行われているが、県内ではこの時期の精製磨研土器の出土する遺跡の発掘例が、県北の高千穂町陣内遺跡や県南の山田町中村遺跡等数少ないため細分化にいたっていない。ここでは、磨研縄文系・黒色磨研系を含むものとする。

富田絃一「三万田式土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣 1981

山崎純男・島津義昭「九州の土器」『同上』

鈴木重治・賀川光夫「陣内遺跡」口内遺跡総合調査報告第二輯 宮崎県教育委員会 1962

日高孝治・北塚泰道「中村遺跡」山田町文化財調査報告書第1集 宮崎県北諸郡山田町教育委員会 1983

(2) 最近、河口貞徳氏は、市来式土器を3段階に分類しておられる。深 A-1 類は、その中の第3段階目、即ち、口縁部が「く」字形になり外面屈曲部を狭んで文様帯が広がる段階と思われる時期に相当するものであろう。

(3) 本田道輝「市来式土器」『西之表市納骨遺跡』鹿児島考古第12号 鹿児島県考古学会 1978

(4) 河口貞徳「南九州後期の縄文式土器—市来式土器—」考古学雑誌42-2 日本考古学会 1957

(5) 河口貞徳 同上

(6) 河口貞徳「草野貝塚発掘報告」鹿児島県考古学会紀要第1号 鹿児島県考古学会 1952

及び、註4)の文献。

(7)・(8) 註4)の文献による。

(9) 註6)の文献による。

(10) 長野真一・中村純治「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(25) 鹿児島県教育委員会 1983

(11) 池畑耕一・中村純治「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(29) 鹿児島県教育委員会 1984

(12) 河口貞徳「中岳洞穴」末吉町教育委員会 1980

(13) 昨年来、河口氏にお伺いしたところ、研磨といってもそれ程でもないとのことであった。

(14) 河口貞徳「鹿児島県片野洞穴」『日本の洞穴遺跡』平凡社 1967

黒色磨研の素文土器で図によると、上部で強く張る胴部に外植する口縁部がつくもので、頸部は強くくびれ、口縁端部は「く」字形に内傾するようである。口縁部内面の沈線は不明であるが、口縁端部の屈曲は残っている。

(15) 河口貞徳「先史時代」『鹿児島のおいたち』鹿児島市 1955

(16) 同上

(17) 清水宗昭他「駒方C遺跡の調査」『大野原の先史遺跡』大分県大野郡大野町所在遺跡発掘調査報告書 大分県文化財調査報告第65輯 大分県教育委員会 1984より抜粋。

(18) 註1)の富田絃一氏の文献に従来の磨研縄文系三万田式を太郎迫式に、黒色磨研系(細頸羽文系)のものを三万田式に型式を変更する旨を提案されている。

(19) 註12)の文献による。この中で中岳目とされた2類土器は、平畑遺跡の住居跡出土土器の編年から、晩期初頭にまで残ると思われる。2類土器は、胴部で「く」字状にゆるやかに屈曲し、口縁部が直立気味に外反して立ちあがる器形で口縁部と胴部に文様帯を有し、凹線を巡らす。器壁は厚く、磨ききされているものである。

## 2. 縄文晩期土器について — 住居跡出土土器を中心に —

平畑遺跡は、大きく西半分と東半分の様相に分けることが出来、大方の傾向としては西の後期、東の晩期とに区分することが出来るようである。ただし、西半分においても晩期の遺物が含まれているし、東半分においても後期とす

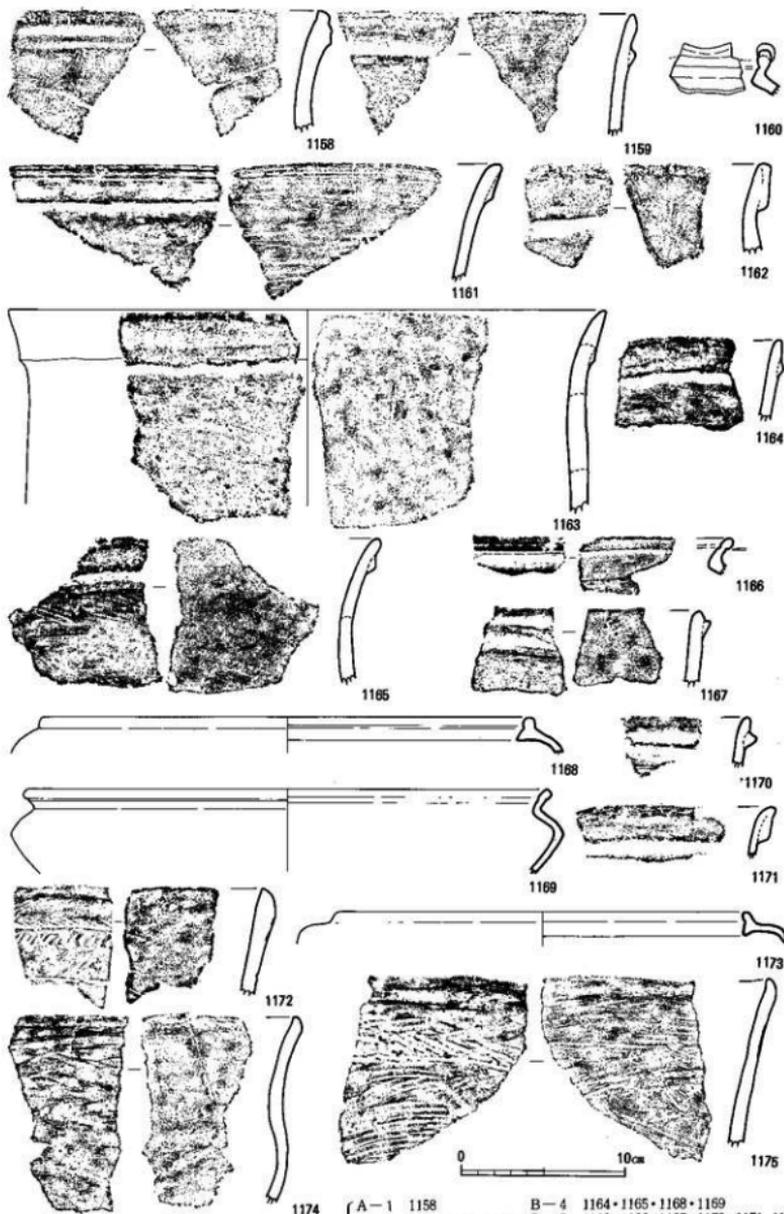


Fig. 21 松添貝塚出土縄文土器実測図・拓影

A-1	1158	B-4	1164・1165・1168・1169
A-4	1159・1160・1163	B-5	1162・1166・1167・1170・1171・1173
A-5	1161	C	1172・1174・1175

べき遺物が含まれている。しかし、西半分における発掘調査がまだ未完である現在、ここでは東半分において検出された竪穴住居跡出土の土器を中心に現時点での編年案を提示するにとどめるしかない。そしてそれは、おおよそ晩期に中心をおくものと考えられる。さらにその内、晩期前半に集中している。

平畑晩期Ⅰ式としたものは、SA1出土土器に代表されるものである。先述したようにSA1の土器出土状態からは上層出土と下層出土は区別される可能性があるが、たとえば上層出土の12はB類の深鉢形土器としては古い様相をもつものであるし、下層出土の4も無文深鉢形土器として古い様相をもつもので、いずれも晩期初頭に位置付けることが可能であろう。

A類とした無文深鉢形土器は、福岡県の広田Ⅱ式とするものに相当させることが出来る。4の胴部から頸部にかけての屈曲には後期土器の残影を見ることが出来る。B類の12の口縁部の沈線は2条施され、施文も粗くなっているが、頸部の強い屈曲と胴部最大径の稜までのプロポーシオンにも後期土器の残影を認めることが出来る。

黒色磨研土器の代表としてはSA16の187を上げるが、口縁外部に2条沈線が施されるものの、口縁部の立ち上がりはやや弱く、また頸部の屈曲も弱いことから若干下げて考えることも出来よう。このことは、SA2の出土土器をSA1より若干後出し、次のⅡ式との過渡的な部分に位置付ける時間的開きに対応する程度のものであるとして考えている。

SA2は、49-52のほぼ全体形を知り得る資料にめぐまれている。その内、49の外反する口縁部をもつタイプと52の胴部から口縁部にかけて屈曲をもつタイプに、SA1の深鉢形より後出する要素というより、次のⅡ式に近い新しい要素が含まれはじめているということから、若干下げて考えたい。それは、口縁が内湾するという要素で共通したプロポーシオンをもつSA1の1とSA2の50・51という、一部重なる要素も含み得ている。

晩期Ⅱ式としたものは、SA8・SA26を代表例として上げられるものである。A類とした無文深鉢形土器には、113・116・117にみるような胴部最大径に比較的是っきりとした稜をもち口縁部が外反するという器形を典型として考えることが出来るものがある。

B類には指標的な土器がSA26から出土している。346は直立する口縁部と屈曲した頸部そして直線的に直立する胴部、その下方から屈折して底部を形成する器形を示し、器形的には、熊本県の天城式にも見出し得るものであるが、口縁部の施文は細沈線の上一条一条が完結してめぐりぜらずな施文をもっており、<sup>(3)</sup> 時期的には古閉式に併行するものと出来よう。又、SA15の181・182・184のような頸部が屈曲し、胴部最大径が稜を成するものもある。

この時期から、D類とした口縁部が肥厚化するタイプの深鉢形土器がふえ、SA8は先述した無文深鉢の外は、この類でほとんど占められているといった状態である。115・118にみるような口縁の肥厚化から、後の突帯文が導き出されるか検討を要する資料である。

SA6の82は小型のものであるが、胴部最大径が稜を成し、外反する口縁部をもつという器形から、先の深鉢形に共通するように、SA8の磨研土器114にも同様のことがいえるようである。そうした精製磨研の浅鉢形土器には、SA5の80、SA35の374などを上げることが出来る。

晩期Ⅲ式としたものは、SA11・SA32・SA34などを中心とする土器群である。A類無文深鉢形土器には、Ⅱ式に似た胴部最大径の稜がルーズに全体の屈曲も間のびしたものが多くなる。SA11の147、SA18の216などをその代表として上げておく。

B類では、SA11の154、SA32の281を上げるが、前者は内傾する口縁部と、直線的な胴部が特徴的である。それに対し、後者は同じく口縁部は内傾するが、ゆるやかに頸部が屈曲するタイプである。

D類における口縁部の肥厚は厚く、断面「く」の字に突出する傾向にあるものもみられ、次のⅣ式につなぐ、突帯化を示す資料もみられる。そうした中でSA7の98、ⅩV区の857を特徴とする外反した一段目の口縁の上に、もう一段口縁を重ねた外形的には一部口縁が肥厚化したとみられる資料があり、近畿・瀬戸内地方との関係も考慮される

	A 類	B 類	C 類	D 類	E 類	小型鉢形	貝殻文系	精製磨研
後期								
晚期								
								
前期								
								
半式								
								
晚期後半								
								

Fig.22 縄文晩期土器編年案

(4)  
資料であろう。

精製磨研土器では、浅鉢形土器で、SA 11の 150, SA 32の 282, SA 34の 349・350のようにⅡ式に対し、頸部の屈折の間が間のびするものも出てくるが、SA 7の 100・101, SA 21の 226を典型とする、口縁の「く」字形の屈折、ゆるやかな頸部の内湾、胴部最大径の明瞭な稜という要素からなる特徴的なものが存在する。

晩期Ⅳ式とする資料は、竪穴住居跡においては検出されていない。しかし、周辺包含層においてそれと判断出来る資料が確実にある(1063-1073)が、ここでは松添貝塚の資料を採用して指示しておきたい。この時期は無文の貼付け突帯文が出現する時期で、1170が典型として上げられるが、それにつなぐ資料として、細い粘土紐の貼り付けによってかすかに突出した肥厚を成すものもあり、Ⅲ式の終りから継続させるであろう。ただし、いわゆる貼付け突帯文を直接的に導き得るものかは、先のSA 7の98のような口縁に口縁を重ねたようなタイプからの変遷も指摘される。いずれにしても印象的には、口縁が短かく立ち上がるC類からも、肥厚化するD類からも、E類の一部からも形状的には、導き出され得る可能性も残されているように思う。

磨研土器では、この時期に特徴的な口縁部径より胴部最大径が大きく、頸部から横に胴部が張り出すタイプが主体を占めている。

以上を晩期前半の様相として位置付けたいと思う。さらに、晩期後半を刻目突帯文土器の出現に求めるとするならば、SA 53の 609, SA 54の 652-654を上げることが出来るが、いずれも竪穴住居跡内の堆積土中の上層から出土しており、他の土器との型式にも大きなギャップも認められることから、ここでは一応他の土器と切り離して考えておきたい。

しかし、このことは今後の日向における縄文晩期土器編年の課題ともいえるが、ことにE類とした肥厚化した口縁外部に凹線文を施すタイプの土器、それに貝殻腹線文土器といった、特徴があり後期からの伝統を強く受けるこの一連の土器がどのような息の長さを示すものなのかは再考すべき必要があるであろう。まず、前者の凹線文土器については、SA 54で晩期後半の刻目突帯文土器と出土し、その層位関係から先の一応切り離すとしたが、本当に共伴しないものなのか——この場合どちらの土器の時期に引き寄せるかによって、種々の重大な問題が引き起こされるであろうが——慎重に資料の蓄積を求めたいと思う。こうした意識の根底には、縄文から弥生への転換が行われる時、縄文晩期土器がある地域においては弥生前期中葉あるいは中期の弥生土器に直接継続する可能性をどの程度まで実証し得るかが想定されている。

その一方で貝殻文土器については、ここにいう晩期Ⅳ式に松添貝塚では貝殻腹線文土器が共伴するとされたが、松添貝塚についてはそれらの土器類が出土地点により二分される可能性があるし、平畑遺跡における貝殻腹線文土器を多く含む竪穴住居跡内での土器組成の様相には他と異なる様相が認められることから、基本的には後期に主体をおくものとさかのぼらせて位置付けるべきかもしれない。

又、晩期Ⅰ-Ⅲ式とした分類も、竪穴住居跡の位置関係なり切り合い関係から強いて区分したきらいもあり、型式的差に備すにはむりなものも含まれている。

いずれにしても、土器編年を検討しはじめて、いまさらながらに日向における活用・使用出来る資料が乏しいことを思い知らされた。実は、それとは逆に意外に多くの重要な資料が眠っていることも知ったが、そうした資料を合わせ再考に他口を期したいと思う。

### 3 石鏃について

#### (1) 石鏃の分類

石鏃の全体形は、大きく三つに分けることが出来る。Aは三角形の形状を示すもので、Bは肩部が一段角ばる将棋

表21 石鐮形態分類及び出土点数表

A	a	I		
		II		
	b	I	1	
			2	
	II	1		
		2		
B	a			
	b			
C	b	I	1	
			2	
	II			

- A 三角形式  
 B 五角形式  
 C 磁弾形式
- a 基部の両端部を斜角に加工  
 b 加工なし
- I 先端角度40°以上  
 II 先端角度40°以下
- 1 基部挟り有り  
 2 基部挟りなし

(表記例) A b - I 1

A	a	I	22点 (26%)	
		II	6点 (7%)	
	b	I	1	15点 (17%)
			2	4点 (5%)
	II	1	11点 (13%)	
		2	3点 (3%)	
B	a	5点 (6%)		
	b	4点 (5%)		
C	b	I	1	10点 (12%)
			2	4点 (5%)
II	1点 (1%)			

駒状の五角形を呈するもので、Cは先端部から基部にかけてが弧状を成すもので、ここでは砲弾形と呼んでおく。

これらは、C類にはみられないが、縄文後・晩期に特徴的に示される基部両端を斜角に加工するものと同様ではな  
いものとさらに二分される。この加工は凹基式にのみみられるが、基部の脚先端を鋭角に残さず、斜めに面取りし、  
そのため両側部から基部脚先端にかけ 110° 以上の鈍い角が残される。a、bを用いそうした加工のあるものとな  
いものとを分類する。

さらに、三角形の場合正三角形に近いものか二等辺三角形に近いものかの表現で分類されるものを、打製品とい  
うことから極めて計測し難いが、一応の基準として先端角度40° 以上と以下とに分け、I、IIと表記する。五角形式

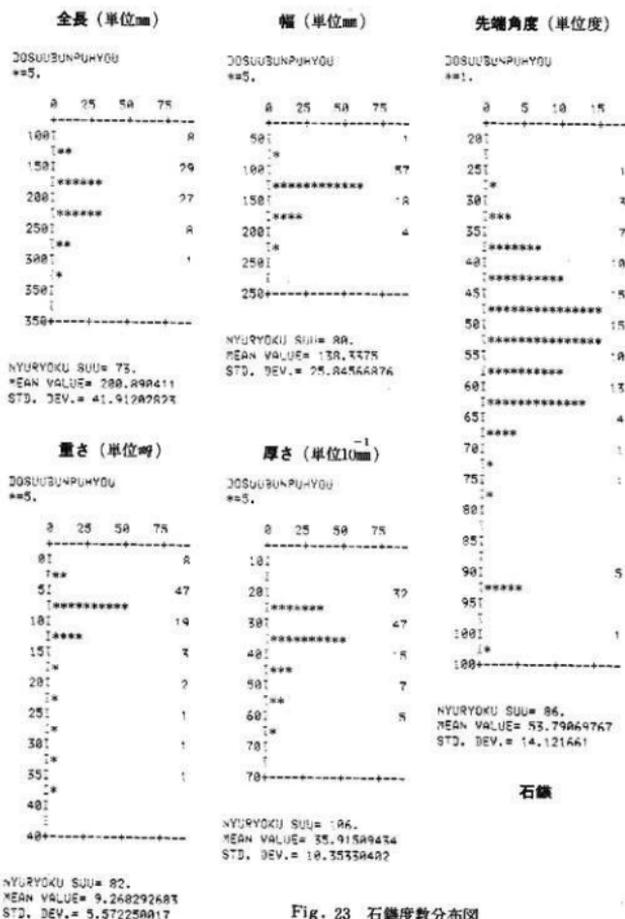


Fig. 23 石鏡度数分布図

のものについては、肩部の角ばる場所が先端部に近いか、基部に近いかで、先端角度に変化が生じ分類可能であるが、ここでは点数も少ないため、あての分類は示していない。それに対し、砲弾形式のものについては短形のものと同長形のものの特微的であるため、分類しておいた。ただし、両側部が弧状を成すことから厳密な先端角度は計測し難く、ほぼ先端と基部両端を直線的に結ぶ角度を一応の日安すとしている。

次に基部の挟りの有無を1, 2として分類し、これは凹基式、平基式といわれるものに相当する。

## (2) 石鏢の様相

以上の分類を出土点数の上から数字的にみれば、表21のようになる。最も多いのがA a-Iのタイプで次がA b-I Iのタイプである。また、全長、幅、先端角度の度数分布図 (Fig. 23) の傾向も、全長 1.5~2cm、幅 1~2cmと比較的に正三角形に近いものが主体を占め、従って先端角度も40°以下の鋭利なものより40°~65°までのものが多い結果となっている。技術的に石鏢先端の鋭利さを求めれば、より幅が狭まり製作段階で破損しやすいことも考えられるが、出土した石鏢の全体の傾向としては先端部破損例は脚部破損例に比して数少なく、IIの類にもさほど破損例がないことから、そうした技術面というより、狩猟に適した先端角度として、むしろ40°以上の石鏢の方が多用されたとみた方がよいであろう。

一方、石材についてはチャート質のものが最も多く全体 106点の内37点 (35%) を占め、次いで硬砂岩が31点 (29%)、黒曜石が18点 (17%)、そして頁岩質のものが7点 (7%)、その他不明等が13点ばかり存在する。黒曜石については、いわゆる姫島産のものが含まれている。

## 4. 石鏢・土器片鏢の総括

### (1) 石鏢の分類

石鏢は、大きくは4種に分類出来る。A類としたものは、いわゆる切目石鏢あるいは磨製石鏢と呼ばれているもので、ほとんど石の長軸に切目を入れるものである。B類以下は、打欠石鏢あるいは打製石鏢と呼ばれているもので、その内長軸に打欠をもつものである。それに対し、C類は石の短軸に打欠をもち、D類は長軸・短軸両方に打欠をもつものである。さらに、石斧や凹石からの転用 (凹石の場合、逆にごろごろな大きさの石鏢が凹石に転用されたこともあるであろう) と思われる石鏢があるがとりたてた分類はしていない。

### (2) 石鏢の様相

まず、A類とB類以下の大きさを比較してみれば、A類がほぼまとまりのある大きさの分布を示すのに対し、B類以下の大きさは大から小まで幅が広い。その中で、A類は長軸5~6cm短軸3~4.5cmに集中がみられるのに対し、B類以下はとくにといえば長軸7~8cm短軸6~7cmにピークがある。つまり、切目石鏢に対し打欠石鏢は一回り大きい形状をもつといえ、それは重さにおいてもみられる傾向である。A類は30~50gにピークがあり、B類以下は50~200gと一段重量が重い。以上を平均値で比べれば、長軸はA類 5.4cm、B類 7.7cm、短軸はA類 3.9cm、B類 6.4cm、重さはA類53g、B類 186gとなり、画然とした違いを指摘出来る。

### (3) 土器片鏢の分類

土器片鏢は、周知の通り土器の破片を鏢として転用しているとみなし得るもので、その主たる位置付けは、土器片鏢から切目石鏢へといった変遷論とは無関係に、自然の石ではかえり得ることの出来ない、形状の扱い易い大きさへの

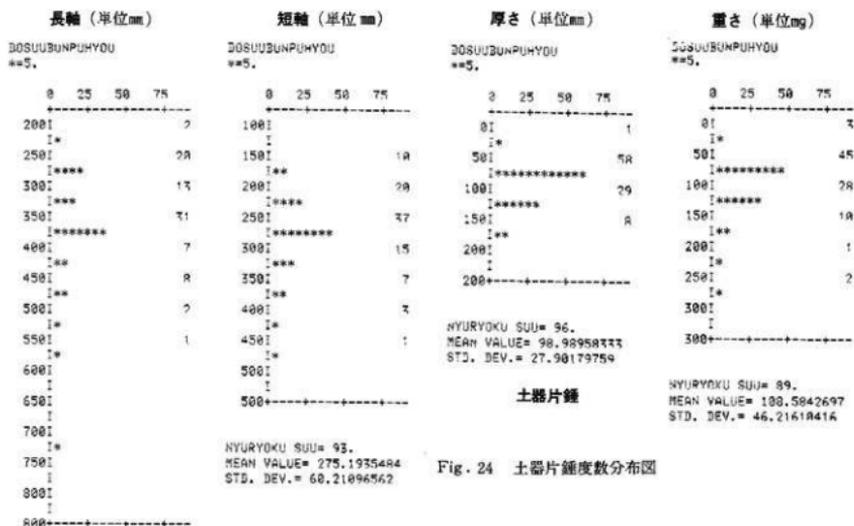


Fig. 24 土器片鍍度数分布图

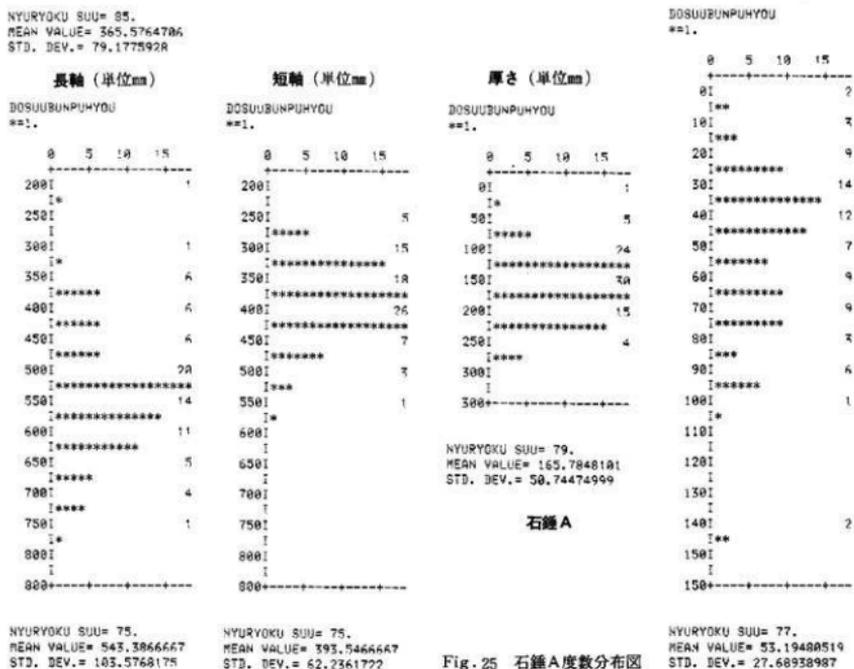


Fig. 25 石鍍A度数分布图

加工が容易だということと、大きさに比べ比較的軽量の錘が得られるというその二点にあると思われる。

大きくは3種に分類出来、A類は土器片の長軸に切目を入れるもの、B類は長軸、短軸両方に切目を入れるもの、C類は溝を土器片に切るものであるが、圧倒的にA類が主流を占めている。土器片であればアトラナムに利用に供されたようで、利用器部は一個の土器の中に占める割合の多い胴部片が圧倒的であるのは当然であるが、厚い底部を

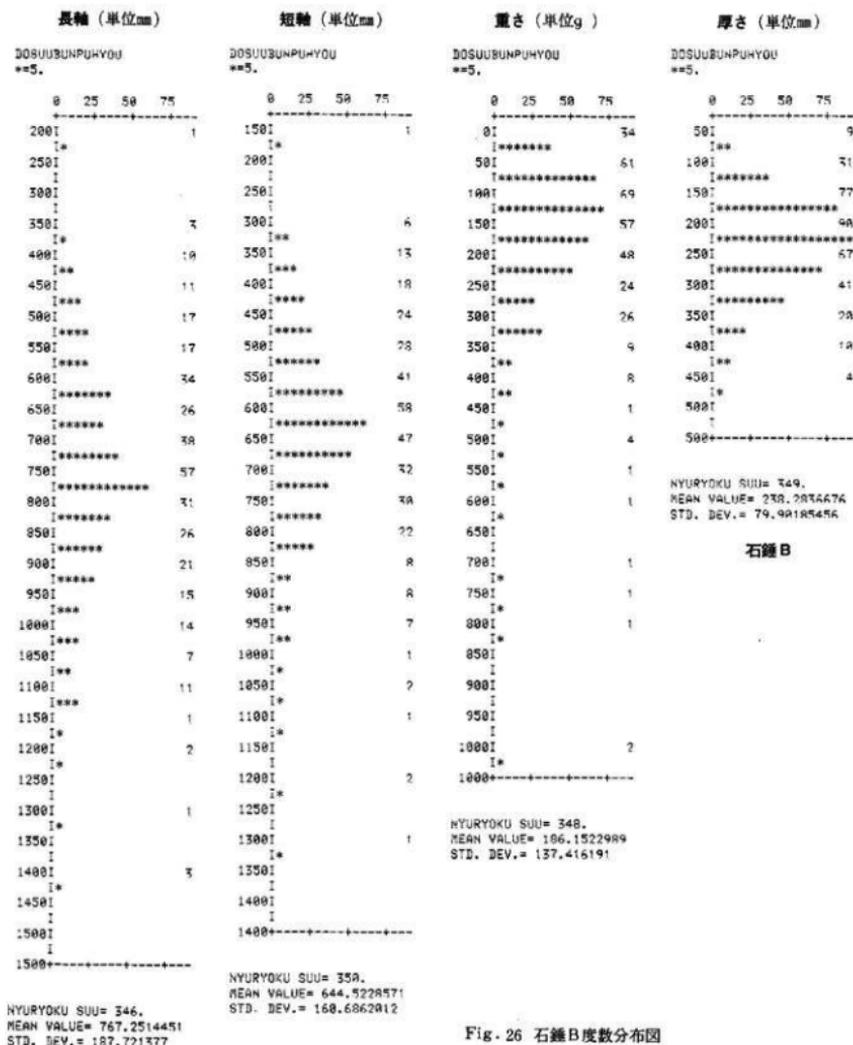


Fig. 26 石鐘B度数分布図

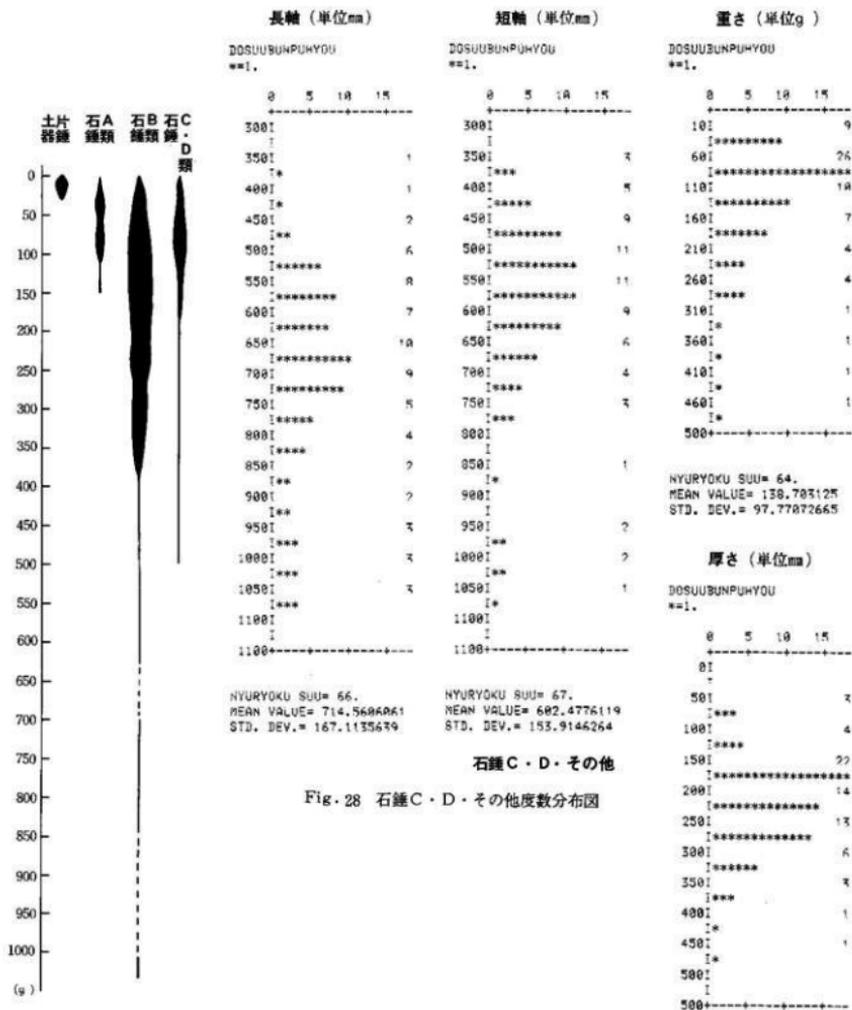


Fig. 28 石錐C・D・その他度数分布図

Fig. 27 土錐・土器片錐重量傾向比較図

除き口縁部なども利用されている。厚い底部が利用されないのは、厚いことに比例した重量の錘は、石錘の役割で充足されていたからと思われる。また、利用器種も深鉢片あり精製土器片ありであるが、ススを付着したものと充分に活用しつくされた土器片であったのだろう。

#### (4) 土器片錘の様相

長軸、短軸など大きさ及び重量において、石錘A類の一段階小型、軽量の部類にまとまりがみられる。すなわち平均値からいえば、長軸 3.7cm、短軸 2.8cm、重さ10.8gで、重さの上では石錘に比べかなり軽量であることが知られる。

#### (5) 石錘・土器片錘の機能と役割

以上の中で、一つの留意されるべき事は、縄文時代人の重さに対する感覚なり意識なり知識といったものである。大ききあるいは形状の比較、そして選択といった感覚なり意識なり知識は、並べあるいは重ね見比べるといった視覚的な判断によって比較的確実に安易に実行することが出来る。それに対し、重さについてのそれは、物質それ自体のもつ重量に帰すべき不可視の要素がある。現代の我々の知識においても、計量器のない場合、物質それ自体が特質的にもつ重量はとりえず度外視され、一握りの大ききさは何g、といった視覚に移し変えられた比較法が試みられることがある。また、両手なりに持ち比べることの比較の困難さは、よく経験し得るところであろう。そうした意味で、石錘・土器片錘の機能から最も重要な要素として摘出される「重さ」については、大ききに対する経験則に基礎付けられた重量感があるとしても、それ程に厳密な選択とはなり得ていないというしかない。それにも関わらず、かつて田中熊雄氏がすぐれて指摘したように、現行の漁撈網錘の重量傾向と近似し重なり合う部分があることは、きわめて重要であろう。

そうであるとした時にも、<sup>(6)</sup>小林行雄氏の指摘のとおり石錘・土器片錘といわれるものの中には織物の錘などとして使用されたものが含まれることは想像し得る。とはいえ、打欠石錘を漁撈網錘の範疇から等閑視する渡辺 誠氏の見解<sup>(7)</sup>は適切とはいえない。いずれにしろ、織物用の錘を想定するとしても、ある類のある重量のもの、というような特定は不可能に近いであろう。それが有り得るとすれば、出土状態なり、幸運な腐爛物の遺存を待つしかあるまい。以上のことから、伝統的な生業の一つであり、生業の在り方及び道具の上からほとんど変化がないと思われる漁撈網錘に限って考えることは、決して前提のないことではない。

<sup>(8)</sup>田中熊雄氏の指摘と分類にそくしていえば、現行の網錘の内、7.5~22.5g までの間に9種ほど網錘の数えられる範囲は、土器片錘の重量域に重なることがまず指摘されよう。さらに、5種以上ある網錘の重量と網錘の数では、75gの錘が8種、112.8gの錘が最も多く10種、150g、187.5gの錘が共に7種を数えたとされ、切日石錘(A類)と打欠石錘(B類以下)の重量傾向に重ね合わせる時、75g錘は切日石錘と、その他が打欠石錘と近似し、重ね合わせることが出来る。

こうした事から、土器片錘、石錘A類、石錘B類(など)は、網種に応じて使い分けられていた蓄然性は極めて高いと判断される。そう考えた時、土器片錘、石錘A類の攪り切りの切日はせいぜい2~3mm程度であり、それに巻かれる紐の細さも当然制約された形で想定されるし、打欠石錘のどちらかといえば大きき加工は比較的太い紐なり縄なりをも巻くことが出来るものと考えられる。そこにも、逆に網種の違いとする根拠があると思われる。

#### 5. 石斧・収穫具について

石斧といわれる形状をもつ石器は多く、おおよそ80点を数える資料が出土している。そして、現在では石斧の用途

は、かなり広く考慮され、第1義的には切断具としての用途が上げられるが、他に土耕具——この場合、栽培に先立つ場合と収穫に際してという二用途があろう——としてもその役割が想定されるようになった。弥生時代前期の扁平片刃石斧、柱状片刃石斧、挿入片刃石斧など石斧との名をもつ石器と縄文時代のそれを比べる時、弥生時代のものが切断具ないしは彫刻具として洗練された形態を示すのに対し、石斧との名を示えるにしても大型で打製・磨製に関わらず粗い整形の縄文の石斧は、細かな切断・彫刻に向くものとはばかりは考えられない。また、収穫具とすべき打製石斧丁、石鎌の明確な資料は乏しいが、数点刃部を認められるものについてを指摘しておきたいと思う。

## 6. 集落について

現在までに検出された55棟の竪穴住居跡は、発掘面積約30,000㎡に対して決して多い数ではない。これは全時代を通じて学園都市遺跡群についていえることだが、ここは過疎の地であったとすら言える。しかし、このことは、かえって興味あることで、単純かつ単純な形で集落の構成を割り出し得る可能性があるからである。

しかし、半畑遺跡の現在までの成果ではまだ断片にすぎないきらいがあり、隔靴掻痒の感がある。とりあえず、各時期に対応させれば3時期おのおの10数棟の竪穴住居跡を抽出することが可能であるが、同時期のムラとしての戸数は4～5棟程度であったと考えられ、主要な竪穴住居跡の主軸を北西～南東にとる住居跡が散在していた様子を描くことが出来る。だが、集落のはしが確認されていないことと、途中で空白があることから完結した集落像を結ぶことがまだ現段階では出来ないのが現状である。

(北 郷 泰 道)

注 (1) 小池史哲ほか「広田遺跡O区の調査」『二丈・浜玉道路関係歴史文化財調査報告』福岡教育委員会 1980

小池史哲「福岡第二町広田遺跡の縄文土器—晩期初頭広田式の設定—」『森貞次郎博士古種記念古文化論集』上巻 1982

(2) 島津義昭ほか「天城遺跡」『古保山・古閑・天城』熊本県教育委員会 1980

(3) 別府大学考古学研究室「古閑遺跡」(2)に同じ。

(4) 家根祥多「近畿地方の土器」『縄文文化の研究』4, 1981

(5) 山崎純男・島津義昭「九州の土器」(4)に同じ。

(6) 小林行雄「図解考古学辞典」

(7) 渡辺誠『縄文時代の漁業』1984

(8) 田中雄雄「石鎌考」『宮崎大学開学記念論文集』1953

## 第7節 古代～中世の総括と考察

平畑遺跡では、掘立柱建物跡—24軒、カマド付竪穴住居跡2軒が確認されている。それらはその占地および土器の出土状況により5群に分けられる。東よりV・VI区を中心とするA群、Ⅲ・Ⅳ区を中心とするB群、Ⅰ・Ⅱ区を中心とするC群およびXXIV・XXVI区を中心とするD群である。以下群構成および諸特徴を述べる。

A群～S B 1～6およびS A 101によって構成されている。規模的にはS B 1・4が大型で廂を有しており、S B 2・3・5・6がほぼ同一の2間×3間である。その主軸方向および占地によりS B 1・2・3とS B 4・5・6の2つに分けられる。遺物はS B—1・2の周辺に集中してみられ、S B 4・5・6周辺は希薄である。

B群～S B 7～14の8軒およびそれを取り囲む溝によって構成されている。廂を有するものはなく、その主軸方向および規模によって、S B 7・8およびS B 9・10・11の1群とS B 13・14の1群とに分かれる。S B 12はS E 2によって切られており他の建物とは時期的に異なると思われる。S B 7・8は近接しすぎておりまたS B 9・10は切

り合っている所からこの1群には2時期存在すると思われる。遺物出土状況はS B 7・8の周辺に集中しており、(Fig. ), S B 13, 14周辺には希薄である。

C群～S A 102およびその周辺のピット群によって構成されている。遺物はS A 102内及びI・II区の境目に集中している。

D群～XV区に南北に細長く位置するものでS B 15・16・17・18によって構成されている。かなりの削平をうけていたため包含層が薄く遺物の出土量は少ない。S B 16は大型で北方向に廂を持つ2間×5間の建物である。

E群～XXIV区やXXVI区に位置するS B 19～24で構成されている。この群は調査区が小さいため掘立柱建物も全体を確認できなかったものがあるがほぼ2間×3間、2間×2間である。その中でもS B 20はS B 16と同様な廂をもつ建物であろう。

以上A～Eの群にわけられるが、それらの出土遺物とみるとA～C群は土師環・埴、甕、布痕土器、須恵器、緑釉陶器を主体としD・E群は土師器環・小皿、陶器(煮・播鉢)を主体としており、時期的に大きくI期(古代)II期(中世)に2分できるとと思われる。

I期(A～C群)の時期においては、土師器(環・甕)等が普遍的に出土しているが、それぞれ分類が可能であり、とくに環においてはI-A-1～5類に分類を試みた。この中でI-A-1～3類は外底にヘラナデが施され、I-A-4類はヘラ切り痕を若干残すという特徴を有し、また前者の中には法式的に細分できるものがあると思われる。ゆえに1～3時期程度に分かれる可能性がある。

またその他の特徴的な出土を示している遺物としては布痕土器・緑釉陶器・土錘・須恵器があげられる。

特に布痕土器は本遺跡で多量に出土している。これは内面に布目瓦痕のある土器で、県内では昭和36年に発掘調査された下弓田遺跡<sup>(1)</sup>で縄文時代後期の遺物に混って出土したのをはじめとして、西都市三宅や九州縦貫道関係で調査された、小林市竹山遺跡<sup>(2)</sup>、こまくらげ遺跡<sup>(3)</sup>、清武町小原遺跡<sup>(4)</sup>、城内遺跡<sup>(5)</sup>、清武町辻遺跡<sup>(6)</sup>、山田町中村遺跡<sup>(7)</sup>、宮崎市内野々第1遺跡における出土例が報告されている。学園都市遺跡群内においては、本遺跡をはじめとして下田畑、赤坂、小山尻東、浦田、入科、前原南および周辺の西ノ原<sup>(8)</sup>の各遺跡より出土している土器である。当初、下弓田遺跡では縄文時代の遺物とされていたが、出土例が増すにつれて、ほぼ平安時代に相当する土器であるとされてきたが、用途等については不明な点の多い土器であった。北部九州においては、福岡市海の中道遺跡を初めとして数ヶ所の製塩遺跡で出土例が増加し、焼塩壺として注目されている土器である。近年、近藤義郎氏や森田勉氏によってその性格等について論考がなされている所である。森田氏は北部九州各地で出土しているこれらの土器に注目し、形態的にI・II類に分け、またその出土が生産遺跡から遠く離れた内陸部にまでおよびること、それらが出土する遺跡が大宰府を中心として官衙と推定される遺跡に分布していることから、古代の公的施設の性格解明や流通路すなわち官道の復元等に有力な証拠となりうると指摘されている。

本遺跡において出土している布痕土器は森田氏の分類されたII A類にあたるものであり、A・B・C群のそれぞれに出土しているが、特にB群のS B 8の周辺に集中して出土しているようである。また本遺跡の布痕土器の出土量は県内のその他遺跡よりも群を抜いて多量であることは注目される。

次に緑釉陶器であるが、本遺跡においては硬陶と軟陶の両者が出土しており全て皿・埴の類である。その出土分布が、A群に集中しておりB・C群には出していない状況である。

また、土錘であるが全部で55点出土している中で約33点がC群より出土しており、そのほとんどがI・II類としたやや大型のものであるのに対しB・C群で出土するほとんどがIII・IV類とした小型品であるという傾向を示す。

最後に須恵器であるが、その内外面に施された叩き目によって分類を試みたが、その中で特徴的にあつかわれたのはI類とした内面に車輪文叩きを有する土器群で本遺跡ではA群に出土が集中しており他の群では見られない。この

車輪文印きは県内でも2例目で延岡市の葎田窯跡にみられるのみであるが、本遺跡のものは葎田窯跡のものとは異なり蜘蛛の巣状を呈するものである。また車輪文印きは現在の所6～7世紀を初源とし9世紀まで存在が確認されている。

以上のように、布痕土器・緑釉陶器・土罐・須恵器はA～C群において異なった出土を示しており、これらの群の間には時期差を考えるとともに機能差の存在を考えなくてはならないであろう。

また、I期とした集落の時期であるが、これらの出土遺物より見て概ね9～10世紀(平安時代前半)に相当すると思われる。尚、詳細な土師器等の編年については、学園都市遺跡群内の他の遺跡と比較して、後日再度検討を試みたい。

また、布痕土器や緑釉陶器の出土量の多さおよびやや内陸にあることなどから考えて、前述の森田氏の説に従い、また熊野という地名が「延喜式」記載の日向十六駅の1つである教麻駅に比定されていることを考えれば、本遺跡が駅の一部ないしは官道沿いの集落の1つであると考えられる。

またII期に属するD・E群であるが、土師器ではI-A-9類とした脚台付の底部をもつ坏が出土している。これは、学園都市遺跡群内の小山尻東遺跡において10世紀中頃の越州窯系青磁と共存しており、ほぼその年代に比定されるものである。XXII区の土城においては、I-A-7類とした坏とI-B-3b類とした小皿が一括資料として出土しており今後編年上の有効な資料となりうるであろう。またXXIV区・XXVI区(E群)においては、14世紀前半代に比定される備前焼の鉢や13世紀代と思われる魚住窯の鉢等が出土している。

以上のことよりII期～D・E群では、古代末期から中世にかけての集落が営まれていたものと考えられる。この時期の集落としては同じ学園都市遺跡群内においては、堂地東遺跡、熊野原遺跡C地点、前原北遺跡等にその存在が示されており今後これらの遺跡と関連して論を進めることによって宮崎平野部における中世村落の様相が明確になってくるとと思われる。

註1) 宮崎県教育委員会「日向遺跡総合調査報告第1輯 下弓田遺跡」1961

(2) 茂山謙「竹山遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書1』宮崎県教育委員会 1972

(3) (2)に同じ。

(4) 田中茂「こまくりけ遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書1』宮崎県教育委員会 1972

(5) 面高智郎「小原遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書3』宮崎県教育委員会 1979

(6) 石川恒太郎・面高智郎「城内遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書3』宮崎県教育委員会 1979

(7) 北郷泰道・長津宗重「辻遺跡」清武町土地開発公社・清武町教育委員会 1980

(8) 日高孝治・北郷泰道「山田町文化財調査報告書第1集 中村遺跡」山田町教育委員会 1983

(9) 野間重孝・資村和樹他「内野々第1・第2遺跡」宮崎市教育委員会 1982

(10) 昭和59年宮崎市教育委員会によって発掘調査され現在整理中である。

(11) (1)に同じ。

(12) 横山浩一他「海の中道遺跡」延岡市教育委員会 1982

(13) 近藤義郎「土器製塩の研究」青木書店 1984

(14) 森田勉「焼塩査考」『太宰府古文化論叢、下巻』吉川弘文館 1983

(15) 小田富士夫「葎田窯跡」『宮崎県文化財調査報告書第24集』宮崎県教育委員会 1983

(16) 横山浩一「須恵器に見える車輪文印き目の起源」『九州文化史研究所紀要第26号』九州大学九州文化史研究施設 1981

(17) (16)に同じ

(18) 藤岡謙二郎「古代日向の地獄的中心と交通路の問題」『景観変遷の歴史地理学的研究』大明堂 1978

(19) 間壁忠彦編「備前編年図表」『世界陶磁全集第3巻』小学館 1977

(20) 大い敬通他「県文化財調査報告書第19冊 魚住古窯跡群」兵庫県教育委員会 1983

## 凡 例

- 色調の表記については、「標準土色帖」（農林省農林水産技術会標準器局監採）を基にしている。  
 橙色=5 Y R 号、にぶい橙=7.5 Y R 号、浅黄褐色=7.5 Y R 号、浅黄褐色=10 Y R 号、明黄褐色=10 Y R 号、  
 にぶい褐色=7.5 Y R 号、灰黄褐色=10 Y R 号、褐色=10 Y R 号、にぶい黄橙=10 Y R 号、褐色=7.5 Y R 号、  
 明赤褐色=5 Y R 号、暗赤褐色=2.5 Y R 号、にぶい赤褐色=2.5 Y R 号、灰褐色=7.5 Y R 号、黒褐色=10 Y R 号
- 1~660までの胎土の表記については、試験的に次のような基準に基づいている。ことに、混和材については肉眼観察の限界性を認めた上で、今回の表記に留めた。  
 胎土の内、混入率としたものは土器断面1cm当りの観察の中で、何%程度の鉱物粒が含まれているかを表している。混和材については、透明及び半透明としたものには長石ないしは火山ガラスが含まれ、白としたものは石英におおむね相当し、黒としたものは角閃石におおむね相当し、褐色ないしは灰としたものには火山ガラスを中心としたものが相当する。また、それぞれの数値は、土器断面1cm当りに確認された粒子数である。
- 661~1175までは次のように表記している。  
 「器面調整」の方向の不明確なものは記入しなかった。2種類以上の調整法は並列して記した。「文様」の項の「具彫線様式」は、原則としてアナタラ属の模様による連続押文をきた。「胎土」の項の混入物は時間的に同定を行うにいたらなかったため、ガラス状物質のうち、白色不透明（半透明）のものを「長石」、無色透明なものを「石英」と表現し、「雲母」については、色による区別を記入した。「磨き」欄で、粗製土器は特に注記はしなかった。口徑の記している土器は殆ど復元口徑であり、完形は、935、938の2点である。
- 土師器の色調については基本的に下記の色調に分類した。それ以外の色調については観察表中に明記した。  
 ○赤褐色 (10R 号) ○淡赤褐色 (2.5Y R 号) ○橙色 (5 Y R 号) ○にぶい褐色 (7.5 Y R 号)  
 ○黄褐色 (7.5 Y R 号) ○浅黄褐色 (10Y R 号) ○淡黄色 (2.5Y 号) ○浅黄色 (2.5Y 号)  
 ○灰黄色 (2.5Y 号) ○黒色 (7.5Y R 号) ○黒褐色 (5 Y R 号) ○にぶい黄褐色 (10Y R 号)
- 土師器の胎土については、石英・雲母等については表記したが、その他については色調で表記した。

表22 縄文土器観察表

国 番	地区名	遺構名	器 形	器 面 調 整	文 様	胎 土	色 調	統 成	備 考
1	Y	SA1	口縁部一部	→ナデ	—	—	—	中や不良	表面ともに部分的にスス付着
2	*	*	→ナデ	ハケナデ	—	—	3 (黒色) 礫を含む半透明2, 白7, 灰2	橙 明赤褐 *	*
3	*	*	口縁部一部	→ナデ	→ナデ	—	2 (赤灰色) 礫を含む透明1, 半透明4, 白3, 黒2	にぶい褐 明黄褐 *	*
4	*	*	口縁部一部	貝子手彫刻の上ナデ	ナデ	—	3 (白, 灰色, 灰色) 半透明10, 白1, 黒2	橙 灰黄褐 *	*
5	*	*	口 縁 部	→ナデ	→ナデ	—	2 半透明11, 黒3(白)	灰黄褐 *	*
6	*	*	口縁部一部	→ナデ	→ナデ	—	3 白4, 半透明3, 黒2	暗赤褐 明赤褐 *	*
7	*	*	*	→ナデ	へろ調整	—	3 (灰色) 灰色の礫を含む透明2, 半透明2, 白2, 黒3	橙 灰黄褐 *	表面部分的にスス付着
8	*	*	11 線 部	→ナデ	→ナデ	—	3 灰1 (黒) 透明2, 半透明6, 黒3	灰黄褐 *	*
9	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	5 半透明8, 透明2, 白2, 灰1 (黒, 茶濁)	*	良好
10	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	3 半透明6, 白2, 黒1	*	中や不良 部分的にスス付着
11	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	3 値 半透明3, 灰4, 黒5, 白3(黒)	明赤褐 暗赤褐 *	*
12	*	*	口縁部一部	→ナデ	内側, 二条筋	—	2 透明, 黒色, 白	灰黄褐 灰黄褐 良好	表面スス付着
13	*	*	口縁部一部	へろミダキ	口縁, 連続山形, 連続筋	—	7 半透明, 白	暗赤褐 灰褐 *	*
14	*	*	口 縁 部	ナデ	ナデ	—	3 透明2, 半透明6, 白1, 黒1, 灰1	灰黄褐 灰黄褐 *	表面部分的にスス付着
15	*	*	*	ナデ	ナデ	—	2 半透明7, 黒3, 白2(茶濁)	暗赤褐 にぶい褐 良好	*
16	*	*	*	ナデ	→ナデ	—	3 半透明10, (白, 黒) 礫	灰黄褐 灰黄褐 *	口縁外反, スス付着
17	*	*	浅鉢	*	→ナデ	—	1 白4 (新透明)	*	不良 スス付着
18	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	3 半透明6, 白7 (黒色) 礫	*	中や不良 口縁部やや肥厚
19	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	5 半透明4, 透明2, 白2, 黒2, 灰1	*	良好
20	*	*	*	ナデ	ナデ	—	1 茶2 (礫)	橙 橙 不良	山形口縁
21	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	3 (礫, 灰, 灰色) 半透明4, 白2, 黒1	灰黄褐 灰黄褐 良好	スス付着

図 番 号	地区名	通称名	器 形	器部及び 機 件	調 整 文 様				胎 土		色 調		焼 成	備 考
					表	裏	表	裏	混入率	混 和 材	表	裏		
32	V	SA1		口縁部	→ナデ	—	—	—	3	黒1, 半透明2, 透明1, 白2, 茶1(茶濁)	→白濁	灰 黄 褐	中や不良	口縁部内縁 スス付着
24	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	—	2	半透明4, 茶3(白, 黒)	灰 黄 褐	*	*	*
23	*	*	洗鉢	*	→黒ゴテ 赤灰	→黒ナデ	—	—	3	粒子が細かくて数えられない(黒, 灰, 半透明, 白)	澄	澄	*	*
25	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	5	半透明8, 白3, 黒4	*	*	良好	口縁外反 スス付着
26	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	—	2	半透明3, 茶2(白)	灰 黄 褐	灰 黄 褐	中や不良	口縁部中央肥厚 部分的にスス付着
27	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	口縁部肥厚 二条沈線	—	3	半透明5, 白1, 黒2, 茶2	→白濁	明 赤 褐	不 良	*
28	*	*	*	*	ナデ	→ナデ	→黒粒赤濁	—	2	半透明2, 茶2, 白2, 黒2 (濁)	澄	澄	*	*
29	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	—	2	黒6, 半透明2, 白1(透明)	灰 黄 褐	暗 赤 褐	中や不良	口縁部中央肥厚
30	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	口縁部肥厚 一条沈線	—	5	半透明13, 白1, 黒3(茶濁)	暗 赤 褐	*	良好	*
31	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	1-2	白3, 黒2(半透明は粒子 が小さく数えられない)	*	*	*	*
32	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	口縁部肥厚 二条沈線	—	3	透明3, 半透明7, 白3, 黒3(茶濁)	明 赤 褐	明 赤 褐	不 良	*
33	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	口 縁 部 二条沈線	—	3	半透明7, 茶7, 白3(黒)	暗 赤 褐	*	良好	*
34	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	二条沈線	—	7	半透明11, 白3, 黒4	*	暗 赤 褐	中や不良	口縁部肥厚 部分的にスス付着
35	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	二条沈線 透粒赤濁	—	3	半透明11, 白3, 黒1	*	*	*	*
36	*	*	*	胴部	→ナデ	→ナデ	—	—	2	*	*	*	*	スス付着 筒一箇所(?)
37	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	—	2	*	*	*	*	*
38	*	*	*	口縁部	→ナデ	→ナデ	貝殻赤濁	—	2	半透明3, 白3(黒, 濁)	灰 褐	明 赤 褐	*	液状口縁部
39	*	*	洗鉢	*	ミガキ	ミガキ	—	—	2	半透明4, 茶2 粒子が小さい	黒 濁	黒 濁	良 好	口縁内か
40	*	*	*	*	→ミガキ	→ミガキ	—	—	2	半透明7, 白2(黒)	→白濁	→白濁	良 好	*
41	*	*	*	胴部	→ナデ 貝殻赤濁	→黒赤濁	透粒赤濁 透粒赤濁	—	3	半透明3, 茶5, 黒2(白) 濁(粒子が小さい)	澄	澄	*	*
42	*	*	*	*	→ナデ 調製	ナデ	一条沈線	—	2	半透明3, 茶2, 白2, 黒1(濁)	明 赤 褐	灰 黄 褐	中や不良	部分的にスス付着

図 番 号	地区名	通称名	器 形	器部及び 機 件	調 整 文 様				胎 土		色 調		焼 成	備 考
					表	裏	表	裏	混入率	混 和 材	表	裏		
43	V	SA1		胴部	ナデ	ナデ	透粒赤濁 透粒赤濁	—	3	半透明4, 白1, 黒2	灰 褐	黒 濁	良 好	*
44	*	*	*	*	ナデ	→ナデ	一条沈線	—	3	半透明8, 白1, 黒1(茶)	暗 赤 褐	暗 赤 褐	*	*
45	*	*	*	底部	ナデ	ナデ	—	—	3	透明5, 半透明2, 白2(茶濁)	明 赤 褐	灰 黄 褐	中や不良	あけ底
46	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	5	半透明1, 透明5, 白1, 黒2, 茶濁1	*	*	不良	中やあけ底
47	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	→ナデ	—	5	半透明6, 白5, 黒2(黒濁)	*	黒 濁	*	あけ底, 裏面部分的 にスス付着
48	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	3	半透明3, 透明2, 白5 (黒色) 塵を含む	*	灰 黄 褐	中や不良	内面灰化物付着 平底
49	*	*	*	口縁部 一箇所付着	→ナデ	→ナデ	—	—	2	半透明6	*	*	不 良	スス付着
50	*	*	洗鉢	口縁部一箇所	→ナデ	ナデ	—	—	3	半透明5, 白3, 黒1(茶濁)	灰 黄 褐	*	中や不良	*
51	*	*	*	口縁部一箇所	→赤灰	→赤灰	—	—	5	半透明5, 白2, 灰2 (こまかい白い粒子混濁)	→白濁	*	*	*
52	*	*	*	*	→黒ナデ	→ナデ	—	—	2	半透明5, 透明2, 白1(黒濁)	灰 黄 褐	*	良好	部分的にスス付着
53	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	—	3	半透明5, 白2, 黒1, 黒1(濁)	明 赤 褐	明 赤 褐	中や不良	*
54	*	*	*	口 縁 部	→ナデ	→ナデ	—	—	3	半透明7, 白4, 黒1, 黒1(濁)	灰 黄 褐	灰 黄 褐	不 良	*
55	*	*	*	口縁部一箇所	→ナデ	→ナデ	—	—	5	半透明5, 白5, 灰2(黒)	*	*	良好	*
56	*	*	洗鉢	口縁部一箇所	→ミガキ	→ミガキ	—	—	10	半透明1, 黒6, 茶5, 灰5	→白濁	→白濁	*	*
57	*	*	*	口縁部一箇所	→ナデ	→ナデ	—	—	3	半透明4 (白, 粒子が小さい黒)	灰 黄 褐	灰 黄 褐	*	部分的にスス付着
58	*	*	*	胴部	→ナデ	ナデ	沈 線	—	2	茶3(大きな粒子) (半透明, 濁)	澄	澄	*	*
59	*	*	*	*	ナデ	→ナデ	—	—	5	半透明9, 黒2, 白3	灰 黄 褐	灰 黄 褐	中や不良	スス付着
60	*	*	*	口 縁 部	→ナデ	→ナデ	貝殻赤濁	—	2	半透明7, 黒2, 白1	明 赤 褐	明 赤 褐	良 好	*
61	*	*	*	胴部	ナデ	ナデ	貝殻赤濁	—	5	粒子がこまかくてキラキラと していることかわかる透粒赤濁(茶濁)	澄	澄	中や不良	*
62	*	*	*	胴部一箇所	→ナデ	→ナデ	—	—	5	白13, 黒2(茶濁)	→白濁	→白濁	不 良	スス付着, あけ底
63	*	*	*	底部	→ナデ	→ナデ	—	—	5	半透明8, 黒5, 白4	明 赤 褐	明 赤 褐	良 好	*

国 道 番 号	地 区 名	道 標 記 号	部 部 及 び 境 界	調 査 表		文 種		国 道 入 庫 量	給 土 材		色 調		検 査 成 果	備 考
				査 査	査 査	表	裏		表 裏	裏	表	裏		
64	V	SA 2	底 部	→ナゲ	→ナゲ	-	-	-	1	小豆白,黒5,シトナケラ1,白5 半透明4(大きな粒)	明 黄 濁	灰 黄 濁	不 良	平座
65	*	*	*	ナゲ	ナゲ	-	-	2	半透明6,白2(黒,茶)	*	黒 濁	*	不良	あげ底 内蔵炭化物付着
66	*	*	*	ナゲ	ナゲ	-	-	3	半透明4,黒2,茶1(白,糖)	*	におい濁	中や不良	内蔵炭化物付着	
67	*	SA 3	口縁部→一部	ケズリ	→ナゲ (ヘラナゲ)	-	-	5	黒5,半透明4(白,灰)	灰 黄 濁	*	*	不良	スス付着
68	*	*	口 縁 部	→ナゲ	→ナゲ	-	-	3	半透明7,黒子が多い(白,灰)	*	*	良好	良好	口縁部内蔵
69	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	二条沈線	-	2	(茶)わりに黒子がこまかい 灰の半透明7,白1,灰2	暗 赤 濁	灰 黄 濁	中や不良	文種不明,スス付着	
70	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	二条沈線	-	3	こまかいシト 半透明6,黒1,白2,茶2	暗 赤 濁	灰 黄 濁	良好	良好	山形口縁
71	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	二条沈線	-	2	(茶,灰,糖) 黒子が細かいため見えにくい	*	検 査 濁	中や不良	文種部中央や口縁部	
72	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	二条沈線	-	2	半透明1(黒,白,微粒子)	*	検 査 濁	良好	良好	山形口縁
73	*	*	底 部	→ナゲ	→ナゲ	-	-	3	黒5,半透明4	におい濁	におい濁	*	不良	内蔵炭化物付着
74	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	-	-	3	半透明10,黒1,白3	*	*	中や不良	平座	
75	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	-	-	3	半透明12,茶1,黒1	淡 黄 濁	灰 黄 濁	*	不良	あげ底
76	*	SA 4	口縁部→一部	→ナゲ	→ナゲ	-	-	3	半透明6,白3,黒1(半透明)	灰 黄 濁	*	不良	部分的にスス付着	
77	*	*	口 縁 部	→ナゲ	→ナゲ	-	-	2	半透明7,黒子が多い(白)	*	明 黄 濁	中や不良		
78	*	SA 5	*	→ナゲ	→ナゲ	二条沈線	-	1	半透明1,茶1(微粒子のため)	*	検 査 濁	不良		
79	*	*	口縁部→一部	→ナゲ	→ナゲ	-	-	3	黒1,半透明5,白2(茶)	におい濁	におい濁	良好	良好	表面部分的にスス付着
80	*	*	改 裝	→ナゲ	→ナゲ	-	-	5	(茶,黒)の微粒子 半透明12,白1,灰2	灰 黄 濁	灰 黄 濁	不良	粗製研砕土器	
81	*	*	底 部	→ナゲ	→ナゲ	-	-	3	半透明10,白2,黒1(茶)	淡 黄 濁	*	不良	中や不良 内蔵炭化物付着	
82	V	SA 6	口縁部→一部	→ナゲ	→ナゲ	-	-	3	(白,灰) 茶1(大きな)半透明5,黒1	明 黄 濁	黒 濁	中や不良		
83	*	*	口 縁 部	→ナゲ	→ナゲ	-	-	5	(茶) 半透明8,灰1,黒2,白3	におい濁	淡 黄 濁	*	不良	
84	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	-	-	3	半透明7,白2(黒,茶,灰)	灰 黄 濁	灰 黄 濁	*	不良	

国 道 番 号	地 区 名	道 標 記 号	部 部 及 び 境 界	調 査 表		文 種		国 道 入 庫 量	給 土 材		色 調		検 査 成 果	備 考
				査 査	査 査	表	裏		表 裏	裏	表	裏		
85	V	SA 6	口 縁 部	-	-	-	-	3	半透明7,茶1,白3,黒2	灰 黄 濁	黒 濁	中や不良		
86	*	*	*	→ケズリ	→ナゲ	-	-	5	半透明12,白2,黒5	淡 黄 濁	淡 黄 濁	良好		
87	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	-	-	7	(茶) 半透明30,白1,微粒子	におい濁	灰 黄 濁	中や不良	粗製口縁,スス付着 口唇や口縁部	
88	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	-	-	3	(黒,茶) 半透明5,白2	*	におい濁	*	不良	山形口縁 表面部分的にスス付着
89	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	-	-	3	半透明2,白5,黒3(糖)	灰 黄 濁	灰 黄 濁	良好	表面部分的にスス付着	
90	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	-	-	1	半透明1(白)	暗 赤 濁	暗 赤 濁	*	不良	
91	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	二条沈線	-	3	半透明7,白1,黒3(糖)	暗 赤 濁	暗 赤 濁	*	不良	
92	*	*	底 部	→ナゲ	→ナゲ	-	-	2	半透明4(黒,白,微粒子6)	淡 黄 濁	灰 黄 濁	不良	スス付着,内蔵炭化物付着	
93	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	-	-	3	半透明4,黒3,茶3	*	*	不良	平座	
94	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	-	-	3	半透明4,黒2,茶1,糖2	*	*	不良		
95	*	SA 7	口縁部→一部	具懸糸状	ナゲ(?)	沈 線	二 条 沈 線	5	半透明12,茶5,白3,黒4,黒1	灰 濁	灰 濁	中や不良		
96	*	*	口 縁 部	→ナゲ	→ナゲ	-	-	2	(半透明,白,黒) 粒子がこまかく見えにくい	灰 黄 濁	灰 黄 濁	良好		
97	*	*	口縁部→一部	→ナゲ	→ナゲ	-	-	3	半透明3,黒3(白,糖)	*	*	不良		
98	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	-	-	3	半透明4,白3,黒4,透明1(茶)	*	*	不良		
99	*	*	口 縁 部	→ナゲ	→ナゲ	-	-	5	半透明11,黒4,白5(茶,糖)	暗 赤 濁	暗 赤 濁	*	中や不良	口縁部内蔵 スス付着
100	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	-	-	2	半透明5 (茶,灰,糖)の微粒子	灰 濁	灰 濁	良好	良好	口縁部底下
101	*	*	底 部	→ナゲ	→ナゲ	-	-	5	(茶,灰,糖) 半透明9,白2,黒3	暗 赤 濁	暗 赤 濁	良好	良好	山形口縁
102	*	*	口 縁 部	→ナゲ	→ナゲ	-	-	3	半透明4,白2,黒4	におい濁	灰 黄 濁	中や不良		
103	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	-	-	3	半透明6,白3,黒2(茶)	*	*	不良		
104	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	二条沈線	-	2	半透明4,黒1,白1(糖)	におい濁	におい濁	*	不良	表面部分的に スス付着
105	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	-	-	3	黒4,半透明(微粒子)9,白1	淡 黄 濁	淡 黄 濁	良好	良好	

国 番 号	地区名	産種名	部 形	即部及び 残	調 整 文 様				産入率	産 土 色		調 査	製 成	備 考
					表	裏	表	裏		産 和 材	産 裏			
106	IV	SA7	口 縁 部	**ナゲ	**ナゲ	三条沈織	—	—	5	半透明9,黒5,灰の半透明1,茶1,黒1,白1	産 裏	産 裏	不 良	
107	*	*	口 縁 直 下	**ナゲ	**ナゲ	沈 織	—	—	5	半透明5,茶5,白5(黒,産)	灰 産	灰 産	良 好	
108	*	*	口 縁 部	**ナゲ	**ナゲ	—	—	—	3	半透明7,白4 (灰)	灰 産 裏	灰 産 裏	*	表面部分的に スス付着
109	*	*	*	* ナゲ	* ナゲ	—	—	—	3	半透明6,白1 (黒,灰,茶)	灰 産	に 白 じ	*	
110	*	*	*	* ナゲ	**貝殻糸織	貝殻縫製文	—	—	1	(備あり)こまかい 織粒のため数えられない	産 産	産 産	不 良	
111	*	*	産 部	* ナゲ	* ナゲ	—	—	—	5	(黒,産) 半透明4,茶1,白2	明 赤 産	明 赤 産	中 不 良	あげ底
112	*	*	*	*ヘラミダキ	* ナゲ	—	—	—	5	(黒,産) 半透明8,茶白,織粒子	洗 黄 産	洗 黄 産	不 良	平底
113	*	SA8	口縁部-一部	**ナゲ	**ナゲ	—	—	—	—	織粒子の島(黒,茶,産)	灰 裏 産 ~に 白 じ	灰 裏 産	良 好	表面、部分的に スス付着
114	*	*	残 糸	**ナゲ	**ヘラミダキ	—	—	—	2	半透明9 (黒)	洗 黄 産	*	中 不 良	
115	*	*	口 縁 部	**ナゲ	**ナゲ	—	—	—	3	半透明6,白2,黒は織粒子	灰 裏 産	灰 産	*	口縁部肥厚、表面部 分的にスス付着
116	*	*	口縁部-一部	*産糸の上 **ナゲ(?)	*産糸 **ナゲ	—	—	—	7	(茶,産) 半透明16,黒9,白4	産 灰 ~洗 黄 産	に 白 じ	不 良	
117	*	*	*	**ナゲ	* ナゲ	—	—	—	3	半透明3,黒6,白2	洗 黄 産	洗 黄 産 ~洗 黄 産	中 不 良	表面ごく部分的に スス付着
118	*	*	口縁部-一部	* ナゲ	**ナゲ	—	—	—	5	(産,黒) 半透明14,白の織粒子茶の織粒子	産 産 ~に 白 じ	産 産 ~に 白 じ	不 良	
119	*	*	口 縁 部	**ナゲ	**ナゲ	—	—	—	3	(産) 半透明9,黒5,白1,茶1	洗 黄 産	産 灰	中 不 良	表面部分的に スス付着
120	*	*	*	**ナゲ	**ナゲ	—	—	—	7	(茶) 半透明24,白2,黒4,産	産 産	産 産	良 好	穿孔あり
121	*	*	*	**ナゲ(?)	**ナゲ(?)	—	—	—	3	半透明5,黒3,白3	産 灰 産	灰 産	*	
122	*	*	*	* ナゲ	* ナゲ	—	—	—	3	黒5(他に織粒子あり?) 半透明5 (内,産)	洗 黄 産	洗 黄 産	*	口縁部肥厚、穿孔あり、 おろし少産区
123	*	*	*	* ナゲ	* ナゲ	—	—	—	3	半透明7,黒5,茶2,灰1	黒 産	洗 黄 産	中 不 良	口縁部肥厚、表面 部分的にスス付着
124	*	*	*	**ナゲ	**ナゲ	—	—	—	3	半透明8,黒3,茶1,白1	明 黄 産	洗 黄 産	良 好	口縁部肥厚
125	*	*	*	* ナゲ	* ナゲ	産 製 文	—	—	5	(6小あり) 半透明9,白3,黒10	明 黄 産	明 黄 産	良 好	
126	*	*	*	**ナゲ	**ナゲ	—	—	—	3	半透明5,黒6,白1,茶3	洗 黄 産	洗 黄 産	*	穿孔らしき点あり

国 番 号	地区名	産種名	部 形	即部及び 残	調 整 文 様				産入率	産 土 色		調 査	製 成	備 考
					表	裏	表	裏		産 和 材	産 裏			
127	IV	SA8	口 縁 部	**ナゲ	**ナゲ	—	—	—	5	半透明6,茶3,黒3,内5	に 白 じ	黒 産	中 不 良	口縁部中肥厚
128	*	*	胴部-一部	1ケズリ	* ナゲ	—	—	—	5	半透明9,黒7,白1,茶1(産)	洗 黄 産	洗 黄 産	不 良	中 不 良
129	*	*	産 部	* ナゲ	* ナゲ	—	—	—	3	半透明8,黒6,白1(茶,産)	洗 黄 産	に 白 じ	*	あげ底
130	*	*	*	* ナゲ	* ナゲ	—	—	—	5	(産) 半透明12,黒2,茶1,白1	明 黄 産	産 産	*	
131	*	*	*	* ナゲ	* ナゲ	—	—	—	3	半透明7,黒6(産,白)	洗 黄 産	灰 産 裏	*	平底
132	*	*	*	* ナゲ	* ナゲ	—	—	—	3	半透明11,黒5 (白,産)	洗 黄 産	洗 黄 産	*	あげ底
133	*	SA9	口 縁 部	* ナゲ	* ナゲ	—	—	—	—	半透明7,白4(茶,産)	明 黄 産	明 黄 産 ~灰 産 裏	*	口縁部内わん 穿孔あり
134	*	*	*	**ナゲ	* ナゲ	—	—	—	3	半透明4,黒3(と織粒子) 白は織粒子	に 白 じ	に 白 じ	中 不 良	スス付着
135	*	*	*	**ナゲ	* ナゲ	二条沈織	—	—	3	半透明7,黒3(織粒子茶4,白1)	産 産	明 赤 産	良 好	*
136	*	*	残 糸	**ミダキ	**ミダキ	—	—	—	3	半透明11,黒9 (白)	産 灰 産	灰 産 裏	良 好	
137	*	*	*	**ナゲ	**貝殻糸織	貝殻縫製文	—	—	3	半透明2,黒5,白4	灰 裏 産	明 赤 産	中 不 良	表面部分的に スス付着
138	*	*	口 縁 直 下	* ナゲ	* ナゲ	—	—	—	2	(産) 茶1,黒5,白半透明の織粒子	明 赤 産	産 産	不 良	*
139	*	*	胴 部	**ナゲ	**ナゲ	—	—	—	5	(産) 半透明15,茶5,黒5,白	明 赤 産	灰 産 裏	中 不 良	*
140	*	*	産 部	*ナゲ	*ナゲ	—	—	—	3	半透明7,白1,茶1,黒4(産)	に 白 じ	産 裏 産	不 良	スス付着 あげ底
141	*	*	*	* ナゲ	* ナゲ	—	—	—	7	(産,茶) 半透明25,黒7,白は織粒子	洗 黄 産	灰 産 裏	*	添子のあげ底
142	XI	SA10	口 縁 部	**ナゲ	**ナゲ	—	—	—	5	半透明9,黒4,白3	灰 裏 産	灰 産 裏	中 不 良	
143	*	*	*	貝殻糸織	貝殻糸織	—	—	—	5	白半透明,茶の織粒子	産 産	灰 産	良 好	
144	*	SA11	口縁部-一部	*産糸の上 **ナゲ	*産糸の上 **ナゲ	3本沈織	—	—	5	(茶,産) 半透明12,白3(と織粒子)黒1	灰 裏 産	灰 産 裏	不 良	表面部分的に スス付着
145	*	*	胴部-一部	*産糸の上 **ナゲ	*産糸の上 **ナゲ	—	—	—	3	(産) 半透明5,黒8,白4,茶の織粒子	洗 黄 産	産 灰	中 不 良	
146	*	*	口 縁 部	**ナゲ	**ナゲ	—	—	—	7	(産) 半透明16,白4,黒1 (産)	に 白 じ	産 裏 産	不 良	表面部分的に スス付着
147	*	*	口縁部-一部	**ナゲ	**ナゲ	—	—	—	3	半透明5,白4	洗 黄 産	洗 黄 産	不 良	*

国 番 号	地区名	産種名	製 法	製 法 及 存 続	調 整 文 種				胎 上 色	胎 上 色	調 製	成 成	備 考	
					調 製	文 種	調 製	文 種						
148	XI	SA11	口 緑 部	**ナゲ	**ナゲ	—	—	3部	半透明3,白2,黒4(茶)	灰 緑	に濃い	不 良	表面部分的に スス付着	
149	*	*	*	**ミギキ	**ミギキ	紙 編 文	—	5	半透明15,白6(黒)	灰 黄 緑	灰 黄 緑	中 不 良		
150	*	*	浅 緑	**ミギキ	**ミギキ	—	—	2部	半透明6,黒4,白1	暗 灰 緑	灰 黄 緑	*	表面部分的に スス付着	
151	*	*	*	**ナゲ	**ナゲ	—	—	7部	(小スス粒) 半透明12,白1,黒14(茶)	暗 赤 黒	灰 黄 緑	*	口縁部肥厚	
152	*	*	*	**ナゲ	**ナゲ	—	—	5	半透明7,白6,黒4(茶)	灰 黄 緑	灰 黄 緑	*	部分的に表面 スス付着	
153	*	*	*	**ナゲ	**ナゲ	—	—	3	半透明7,黒3(白)	暗 灰 緑	灰 黄 緑	*	*	
154	*	*	口 緑	**貝殻色	**貝殻色	紙 編 文	—	3部	半透明4,白5,黒3(茶)	明 赤 黒	明 赤 黒	不 良	口縁口縁	
155	*	*	網 部	**ミギキ	**ミギキ	—	—	3	半透明6,白4,黒粒(茶)	に濃い赤黒	に濃い赤黒	中 不 良	表面部分的に スス付着	
156	*	*	*	**ナゲ	**ナゲ	—	—	5	半透明15,白7(黒,茶,薄)	に濃い緑	灰 黄 緑	*	*	
157	*	*	*	**ナゲ	**ナゲ	—	—	3	半透明10,白4(黒,茶,薄)	に濃い赤黒	に濃い赤黒	*	*	
158	*	*	*	**ナゲ	**ナゲ	—	—	3	(茶,薄) 半透明12,白1,黒は微粒子	浅黄緑- に濃い黒	明 黄 緑	不 良		
159	*	*	*	**ナゲ	**ナゲズリ	—	—	2	半透明4,白1,黒は微粒子	に濃い赤黒	に濃い赤黒	浅黄緑	中 不 良	スス付着
160	*	*	*	**ナゲ	**ナゲ	—	—	3	半透明6,黒4(白,薄)	灰 緑	浅 黄 緑	*		
161	*	*	*	**ナゲ	**ナゲ	紙 編 文	—	3	(黒,茶) 半透明8,茶1(黒,茶,薄)	灰 黄 緑	灰 黄 緑	良 好	スス付着	
162	*	*	*	**ナゲ	**ナゲ	—	—	3	半透明9,茶1(黒,茶,薄)	浅 黄 緑	明 黄 緑	中 不 良		
163	*	*	*	**ナゲ	**ナゲ	—	—	3	半透明6,白4,茶1(黒)	に濃い赤黒	灰 黄 緑	不 良	表面部分的に スス付着	
164	*	*	底 部 桑 紙	**ナゲズリ	**ナゲズリ	—	—	3	半透明11,白は微粒子(茶)	浅 黄 緑	浅 黄 緑	*	平底	
165	*	*	胴部一底部	**赤黒の上 をナゲ	**ナゲ	—	—	3	(黒,茶) 半透明15,茶の透明4,白1	に濃い黒	浅 黄 緑	*		
166	*	*	底 部 ナゲ	ナゲ	ナゲ	—	—	5部	半透明10,黒1(微粒子)白1(微粒子)	明 黄 緑	明 黄 緑	中 不 良	あげ底	
167	*	*	*	ナゲ	ナゲ	—	—	3	(茶,薄) 底の半透明4,白1,白2,黒3	暗	浅 黄 緑	不 良	*	
168	*	*	*	ナゲ	ナゲ	—	—	5	(茶,薄) 半透明10,黒5,白は微粒子	明 黄 緑	明 黄 緑	*		

国 番 号	地区名	産種名	製 法	製 法 及 存 続	調 整 文 種				胎 上 色	胎 上 色	調 製	成 成	備 考
					調 製	文 種	調 製	文 種					
169	XI	SA13	底 部	**ナゲ	**ナゲ	—	—	3部	(白,黒は微粒子6) 半透明4,白1,黒1	明 黄 緑	に濃い	中 不 良	あげ底
170	*	*	*	**ナゲ	**ナゲ	—	—	5	半透明12,黒3	明 黄 緑	明 黄 緑	不 良	平底
171	*	SA12	浅 緑 部	ミギキ	ミギキ	—	—	7部	(黒5,白3) 半透明34(緑子こまかい)	浅 黄 緑	浅 黄 緑	良 好	
172	*	SA13	*	**ナゲ	**ナゲ	—	—	10	半透明20,白1,黒2,茶1	灰 黄 緑	灰 黄 緑	中 不 良	表面部分的に スス付着
173	*	*	底 部	**ナゲ	**ナゲ	—	—	7	半透明13,茶2,黒2(微粒子)	明 黄 緑	に濃い	不 良	あげ底
174	*	*	*	ナゲ	ナゲ	—	—	7	半透明16,黒4,白2	浅 黄 緑	に濃い	中 不 良	平底
175	*	SA14	口 縁 部	ナゲ	ナゲ	—	—	7部	半透明11,茶7,茶1,薄(白)	灰 黄 緑	に濃い赤黒	*	口縁部肥厚
176	*	SA15	口縁部一底部	**赤黒の上 をナゲ	**赤黒の上 をナゲ	—	—	3	半透明6,茶1,白は微粒子	浅黄緑-灰 黒	暗 灰	*	中 不 良 底, 表面 部分的にスス付着
177	*	*	口 縁 部	**ナゲ	**ナゲ	—	—	5	半透明7,白2,茶1,黒6	灰 黄 緑	灰 黄 緑	*	
178	*	*	*	**ナゲ	**ナゲ	—	—	3	半透明4,黒5(と微粒子)	灰 黄 緑	灰 黄 緑	*	
179	*	*	*	**ナゲ	**ナゲ	浅 編	—	3部	半透明12,白2(黒)	に濃い黒	に濃い黒	*	
180	*	*	*	**ナゲ	**貝殻色	紙 編 文	—	3	半透明10,白2(黒)	明 赤 黒	明 赤 黒	良 好	
181	*	*	*	**ナゲ	**ナゲ	浅 編 (2集)	—	5	半透明13,黒2	明 赤 黒	暗	中 不 良	
182	*	*	網 部	**ナゲ	**ナゲ	浅 編	—	5部	半透明10,白3,黒4,茶1(薄)	に濃い赤黒	に濃い赤黒	*	
183	*	*	胴 部	ヘラミギキ	ナゲ	—	—	3	半透明,白,黒,透明	灰 黄 緑	灰 黄 緑	良 好	表面にスス付着
184	*	*	口縁部一底部	**ナゲ	**ヘラミギキ	浅 編	—	5	半透明9,黒5,白1,茶1(薄)	に濃い黒	に濃い黒	中 不 良	表面部分的に スス付着
185	*	*	底 部	**貝殻色 の上ナゲ	ナゲ	—	—	3	半透明6,茶の半透明,黒2,白1	明 黄 緑	に濃い黒	不 良	平底
186	*	*	胴部一底部	**ナゲ	**ナゲ	—	—	3	半透明7,白1(黒)	に濃い黒	灰 黄 緑	中 不 良	*
187	XII	SA16	浅 緑 部	口縁部一底部	**ヘラミギキ	二条浅編	—	5部	半透明10,茶の透明,白2,透明	黒 緑	灰 黄 緑	良 好	
188	*	*	*	**ナゲ	**黒 **ナゲ	—	—	3	半透明7,白1(と微粒子) 黒3(と微粒子)(茶)	灰 黄 緑	灰 黄 緑	中 不 良	表面部分的に スス付着
189	*	*	*	**ナゲ	**ナゲ	—	—	3	半透明10,白黒,黒粒(茶,薄)	暗-暗黒	に濃い黒	*	

国 番 号	地区名	道標名	形	器部及び 残	調 整 文 様				器人部 寸法	胎 土		色	調 査	焼 成	備 考
					表	裏	表	裏		器 胎	材				
190	Ⅱ	SA16	浅鉢	口 縁 部	ミガキ	ミガキ	—	—	3	半透明14, 黒10, 白3, 茶2	灰 黄 褐	灰 黄 褐	良 好	中や不良	
191	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	5	半透明14, 黒10, 白3, 茶2 (薄)	灰 黄 褐	灰 黄 褐	良 好	*	表面部分的に スス付着
192	*	*	*	口縁部一部	→ナゲ	→ナゲ	—	—	5	半透明17, 白1, 茶1, 黒焼粒子	黒 灰 褐	灰 黄 褐	良 好	*	表面部分的に スス付着
193	*	*	*	*	→糸痕 →ナゲ	ナゲ	—	—	3	半透明9, 茶, 白, 黒, 焼粒子	黒 灰 褐	灰 黄 褐	良 好	*	
194	*	*	*	口 縁 部	→ナゲ	→ナゲ	—	—	2	半透明4, 白(焼, 茶)	*	*	*	*	
195	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	沈 線	—	2	半透明9, 黒1 (赤土は焼粒子)(白)	緑	緑	中や不良	*	
196	*	*	*	口縁部一部	→ナゲ	→ナゲ	—	—	5	半透明10, 白5, 黒3, 茶1 (薄)	灰 黄 褐	灰 黄 褐	良 好	*	表面部分的に スス付着
197	*	*	*	*	→ナゲ →ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	5	半透明9, 白5, 黒3, 茶, 黒	灰 黄 褐	灰 黄 褐	良 好	*	*
198	*	*	*	*	→ナゲ →ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	3枚	半透明9, 黒4, 白は焼粒子	灰 黄 褐	灰 黄 褐	良 好	*	口縁部肥厚
199	*	*	*	底 縁	ナゲ	ナゲ	—	—	5	半透明14, 茶2, 黒2 (と焼粒子)白は焼粒子	明 赤 褐	黒 灰 褐	良 好	*	あけ底
200	*	*	*	口縁部一部	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	3	半透明10, 白2, 黒は焼粒子(茶)	黒 灰 褐	灰 黄 褐	良 好	*	口縁部肥厚, 表面部分 的にスス付着
201	VII	SA17	*	有袋縁部の上 二ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	5	半透明14, 白2, 茶1 (茶)	浅黄褐	黒 灰 褐	良 好	*	
202	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	5	半透明14, 白3 (半透明, 黒は焼粒子)	灰 黄 褐	灰 黄 褐	良 好	*	口縁部肥厚
203	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	輪 刻	—	3回	半透明4, 白8 (茶)	黒 灰 褐	黒 灰 褐	良 好	*	
204	*	*	*	割 部	ミガキ	ミガキ	沈 線	—	2	半透明10, 茶, 白, 黒は焼粒子	灰 黄 褐	緑 赤 褐	良 好	*	
205	*	*	*	*	ミガキ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	2	透明10, 黒4	灰 黄 褐	灰 黄 褐	良 好	*	
206	*	*	*	底 部	ナゲ	ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	7	半透明13, 白6, 黒 (は焼粒子)(茶, 焼)	浅黄褐	灰 黄 褐	良 好	平底	口縁部肥厚 表面スス付着
207	*	SA18	*	口縁部一部	→ナゲ	→ナゲ	太形凹線	→ナゲ	7	透明3, 半透明20, 茶5, 茶2(白)	黒 灰 褐	灰 黄 褐	中や不良	*	口縁部肥厚 表面スス付着
208	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	7	透明5, 白10, 黒5	浅黄褐	黒 灰 褐	不良	*	
209	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	3	透明1, 半透明12, 茶3, 白は焼粒子	灰 黄 褐	灰 黄 褐	中や不良	*	表面部分的に スス付着
210	*	*	*	口 縁 部	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	5	半透明16, 白2, 黒は焼粒子(茶)	黒 灰 褐	灰 黄 褐	良 好	*	

国 番 号	地区名	道標名	形	器部及び 残	調 整 文 様				器人部 寸法	胎 土		色	調 査	焼 成	備 考
					表	裏	表	裏		器 胎	材				
211	VII	SA16	*	口 縁 部	→ハケ月	ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	5	半透明13, 黒9, 茶1(白)	緑	緑	良 好	*	
212	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	3	半透明13, 茶1, 白は焼粒子	灰 黄 褐	灰 黄 褐	中や不良	*	
213	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	3	半透明10, 白1, 茶1, 黒1(薄)	灰 黄 褐	灰 黄 褐	中や不良	*	
214	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	3	半透明5, 白, 黒は焼粒子	灰 黄 褐	黒 灰 褐	良 好	口縁部欠損	
215	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	3	半透明9, 白3, 茶1, 黒3	明 赤 褐	緑 赤 褐	不良	*	
216	*	*	*	→糸痕	→糸痕	→糸痕	→糸痕	→糸痕	5個	半透明3, 茶5, 茶の透明1, 黒1(焼)	灰 黄 褐	灰 黄 褐	中や不良	*	
217	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	7	半透明10, 黒2, 白は焼粒子(茶)	灰 黄 褐	黒 灰 褐	中や不良	*	
218	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	2	白1, 黒5, 茶1	灰 黄 褐	灰 黄 褐	中や不良	*	表面部分的に スス付着
219	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	3	半透明10, 黒4, 茶1(白)	黒 灰 褐	明 赤 褐	良 好	*	
220	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	3	半透明, 茶1と焼粒子(茶は焼粒子)(薄)	黒 灰 褐	灰 黄 褐	良 好	*	
221	*	*	*	割 部	ナゲ	ナゲ	沈 線	→ナゲ	5	半透明13, 白3, 黒は焼粒子	灰 黄 褐	灰 黄 褐	良 好	*	
222	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	7	半透明14, 黒3, 白は焼粒子	灰 黄 褐	灰 黄 褐	中や不良	スス付着	
223	*	*	*	底 部	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	5	半透明15, 茶4, 黒は焼粒子(白)	明 赤 褐	灰 黄 褐	不良	平底	
224	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	5	半透明3, 黒6, 白1	明 赤 褐	灰 黄 褐	中や不良	中やあけ底, 内面部分 的にスス付着	
225	Ⅱ	SA19	*	ナゲ	ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	3回	半透明4, 白は(と焼粒子)(茶)	灰 黄 褐	灰 黄 褐	良 好	平底	
226	V	SA21	*	口縁部一部	→ハケ月 (?)	→ナゲ 浅黄褐	→ナゲ	→ナゲ	3枚	透明1, 半透明12, 白, 黒は焼粒子(茶)	灰 黄 褐	明 赤 褐	良 好	*	表面部分的に スス付着
227	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	3	半透明9, 黒1(と焼粒子)(茶白焼)	浅黄褐	灰 黄 褐	良 好	*	
228	*	*	*	口 縁 部	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	5	半透明13, 白, 黒は焼粒子	黒 灰 褐	灰 黄 褐	良 好	*	
229	*	*	*	底 部	ナゲ	ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	2	白の焼粒子半透明の焼粒子(茶)	明 赤 褐	黒 灰 褐	不良	内面スス付着, 平底	
230	*	SA22	*	口 縁 部	→ミガキ	→ミガキ	沈 線	→ナゲ	3	半透明(と焼粒子)白, 黒の焼粒子	灰 黄 褐	灰 黄 褐	良 好	表面部分的に スス付着	
231	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	→ナゲ	3	半透明13, 黒3, 白は焼粒子	灰 黄 褐	灰 黄 褐	良 好	*	

項番	地区名	産地名	品名	器部及び形状	調整文様			胎土	色調			焼成	備考	
					表	裏	裏		底	裏	裏			
232	IX	S A 22		胴部	→ナデ	→ナデ	龍刻	—	3	半透明9, 白	暗赤褐	暗赤褐	やや不良	表面部分のス付着
233	*	*			—	—	龍曲文(?)	—	3	(茶)半透明9,白(白と緑粒子)	明赤褐	明赤褐	やや不良	
234	*	*		口縁部	ナデ	ナデ	沈線	—	5	半透明17(と緑粒子)白(と黄粒子)黒(と緑粒子)	灰黄褐	灰黄褐	良好	
235	*	S A 23			→ナデ	→ナデ	—	—	5	半透明17(と黄粒子)茶1,白(と黄粒子)黒(と緑粒子)	暗赤褐	暗赤褐	やや不良	
236	*	*		胴部→底面	↑ナデ	ナデ	—	—	3	半透明4,白は黄粒子	に白い濁	に白い濁	不良	
237	*	S A 25	洗鉢(?)	口縁部→胴部	ナデ	→ナデ	—	—	3	半透明11,黒,白は黄粒子茶1	*	*	やや不良	表面部分的にス付着
238	*	*		口縁部	↑ナデ	→ナデ	—	—	3	半透明1と黄粒子の白と黄粒子の(茶)	暗赤褐	暗赤褐	やや不良	
239	*	*			↑ナデ	↑ナデ	—	—	3	半透明1,黒2,白(黄粒子)	灰黄褐	灰黄褐	良好	
240	*	*			→黄緑部(?)	→黄緑部(?)	—	—	3	茶, 赤のこまかい半透明1と黄粒子(と黄粒子)	暗赤褐	暗赤褐	やや不良	
241	*	*			→ナデ	→ナデ	—	—	?	半透明黒,白,茶の黄粒子	橙	橙	不良	
242	*	*			→ナデ	ナデ	二条沈線	—	?	白透明,半透明黒(黄粒子)	暗赤褐	*	不良	口唇部肥厚
243	*	*			→ナデ	→ナデ	*	—	3	半透明(と黄粒子)白,黒の黄粒子	暗赤褐	灰黄褐	良好	*
244	*	*	洗鉢	*	→ミガキ	→ミガキ	—	—	3	半透明9,茶の黄粒子白(と黄粒子)	黒	黒	に白い濁	
245	*	*		底面	ナデ	ナデ	—	—	5	(茶)半透明1,黒(と黄粒子)白(と黄粒子)	橙	黄緑	不良	平底内面ス付着
246	V	S A 26		口縁部→胴部	黄緑の上を→ナデ(?)	黄緑の上を→ナデ(?)	龍沈線	—	5	半透明1,黒4,白(と黄粒子)(茶)	に白い濁	に白い濁	やや不良	
247	*	*		口縁部	→ナデ	→ナデ	→ナデ	—	?	半透明10,白(黄粒子)黄緑(茶)	明赤褐	暗赤褐	不良	
248	*	*		*	ナデ	ナデ	—	—	7	半透明白,黒	に白い濁	に白い濁	不良	
249	*	*		*	→ナデ	→ナデ	—	—	5	半透明12,茶2,黒5,白(茶)	に白い濁	洗黄橙	やや不良	
250	*	*		*	—	—	—	—	2	半透明白,黒	洗黄橙	洗黄橙	良好	
251	*	*		底面	ナデ	ナデ	—	—	3	透明半透明1,白(と黄粒子)白(と黄粒子)	洗黄橙	灰黄褐	不良	あげ底
252	*	*		口縁部→胴部	ナデ	ナデ	—	—	5	半透明茶2,白1,黒は黄粒子(茶)	灰黄褐	灰黄褐	やや不良	

項番	地区名	産地名	品名	器部及び形状	調整文様			胎土	色調			焼成	備考	
					表	裏	裏		底	裏	裏			
253	IX	S A 27		胴部	→ナデ	→ナデ	—	—	3	半透明10,内,茶は黄粒子	に白い濁	灰黄褐	やや不良	
254	*	*		*	→ナデ	→ナデ	—	—	3	半透明8白,黒,白(と黄粒子)黒(黄粒子)	灰黄褐	灰黄褐	良好	
255	*	*		底面	↑ナデ	ナデ	—	—	5	半透明黒,白,茶は黄粒子(茶)	に白い濁	暗赤	やや不良	ややあげ底
256	*	*			→黄緑の上をナデ	ナデ	—	—	2	半透明9(と黄粒子)茶1(白)	洗黄橙	灰黄褐	不良	平底
257	XVI	S A 28		口縁部	↑ナデ	→ナデ	—	—	5	(茶)半透明16,白(と黄粒子)黒(と黄粒子)	に白い濁	に白い濁	*	
258	*	*		*	→ナデ	→ナデ	—	—	7	半透明10,黒9,茶1(白)	暗赤褐	暗赤褐	良好	
259	*	*		*	→ナデ	→ナデ	—	—	3	半透明5(茶)白(と黄粒子)茶1,黒の黄粒子	明赤褐	橙	不良	
260	*	*		*	→ナデ	→ナデ	—	—	5	半透明14茶1,黒(黄粒子)白(白)	に白い濁	灰黄褐	やや不良	表面部分のス付着
261	*	*		胴部	赤黄	ナデ	龍刻	—	2	こまかい白2,茶2,半透明黄粒子(茶,黒)	橙	橙	不良	
262	*	*		口縁部	→黄緑部	→黄緑部	→黄緑部	—	2	半透明4,黒(黄粒子)こまかい	に白い濁	橙	良好	
263	*	*		胴部→底面	→ナデ	→ナデ	—	—	5	半透明12,白3,茶2,黒(黄粒子)(茶)	に白い濁	灰黄褐	やや不良	ややあげ底表面部分のス付着
264	*	*		*	→ナデ	→ナデ	—	—	5	半透明15白5,黒6,茶2(茶)	洗黄橙	洗黄橙	不良	内面黄化物付着
265	*	S A 29		口縁部	→ナデ	→ナデ	—	—	3	きめの粗い半透明10,黒,茶,白は黄粒子	明赤褐	橙	*	
266	*	*	洗鉢	*	→ミガキ	→ミガキ	—	—	3	半透明3(と黄粒子)茶3,白(と黄粒子)黒(黄粒子)	灰褐	灰黄褐	やや不良	表面部分のス付着
267	*	*		底面	→ナデ	→ナデ	—	—	3	半透明5黒1,白(と黄粒子)茶(黄粒子)	に白い濁	明赤褐	不良	ややあげ底
268	*	*		*	→ナデ	→ナデ	—	—	2	半透明の黄粒子(茶,黒)	*	*	*	平底
269	*	S A 30		口縁部	→ナデ	→ナデ	—	—	5	半透明14,白5,黒7(茶)	灰褐	明赤褐	*	表面部分のス付着
270	*	*		*	→黄緑部(部分的)	→ナデ	—	—	3	黒6,半透明7,白(と黄粒子)(茶)	暗赤	灰	*	
271	*	*		*	→ナデ	→ナデ	二条沈線	—	3	半透明14,黒4,白(と黄粒子)黒	橙	橙	やや不良	
272	*	*		胴部	ナデ	ナデ	龍刻	—	—	白,黒の黄粒子,茶4	*	*	*	
273	*	*		*	→ナデ	→ナデ	水部内縁と背文	—	—	黒と半透明の黄粒子,茶1	*	*	良好	

図番 号	地区名	通称名	器形	器部及び 残存	調 整			文 様	透入率	胎 土			色 調		焼 成	備 考
					表	裏	裏			混	和	材	表	裏		
274	Ⅷ	SA30	瓶	部	→ナズリ	ナゲ	—	—	2	半透明4,白3(と微粒子), 黒微粒子	灰黄緑	灰黄緑	中々不良	表面部分のスス付着		
275	*	*	底	部	→ナゲ	→ナゲ	—	—	5	半透明15,白1(と微粒子), 黒7	明黄緑	灰黄緑	*			
276	*	*	胴部一箇所	→ナゲ	→ナゲ	—	—	—	5	半透明10(と微粒子),黒4(と 微粒子),白は微粒子	明黄緑	灰黄緑	*	ややあけ底 スス付着		
277	*	SA31	胴	部	→ミガキ	→ミガキ	—	—	2強	半透明7,白3(それぞれ微 粒子5)(茶)	明黄緑	灰黄緑	良好	精製研土器		
278	*	*	*	*	ナゲ	ナゲ	—	—	3	半透明5,黒12(と微粒子), 茶1	にぶい緑	黒 緑	不良	表面とともに部分的 スス付着		
279	*	*	底	部	ナゲ	ナゲ	—	—	5	半透明13,黒,白(微粒子), (茶)	明黄緑	灰黄緑	中々不良	平 底		
280	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	3	半透明4(と微粒子), 黒(微粒子)(白)	にぶい緑	→黄 黒	不良	平 底 内面部分のスス付着		
281	*	SA32	口縁部	ナゲ	ナゲ	四象沈線	—	—	3	半透明6(と微粒子), 白(微粒子)(茶)	にぶい緑	黒 黒	不良	表面部分の 裏面全体にスス付着		
282	*	*	洗鉢	*	→ミガキ	→ミガキ	—	—	3	半透明11,白,黒は微粒子	洗黄緑	灰黄緑	中々不良	精製研土器		
283	*	*	*	*	→ナゲ	→ミガキ	—	—	2	半透明4(と微粒子),白2 (と微粒子)(茶)こまかい	灰黄緑	緑 灰 黒	良好	*		
284	*	*	*	*	→ミガキ	ミガキ	—	—	3	半透明6(と微粒子),黒1(と微 粒子),白1(と微粒子),茶(微粒子)	灰黄緑	灰黄緑	中々不良	精製研土器 表面ともにスス付着		
285	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	7	半透明,白,黒	灰 緑	灰 緑	*			
286	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	3	半透明,白,茶	灰黄緑	灰黄緑	良好			
287	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	7	半透明,白,黒	灰 黒	灰 黒	中々不良	スス付着		
288	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	7	半透明16,白,茶,黒は微粒 子(茶)	灰黄緑	灰 緑	*	表面部分のスス付着		
289	*	*	*	→貝殻糸痕	ナゲ	貝殻線文	—	—	3弱	半透明4,黒3(ともに微粒 子も)(白,茶)	緑	緑	不良			
290	*	*	*	→貝殻糸痕	→貝殻糸痕	貝殻線文	—	—	—	半透明,黒,白の微粒子(茶)	*	*	良好			
291	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	3	半透明8,白3(茶,茶)	にぶい緑	灰黄緑	中々不良	内外面部分スス付着		
292	*	*	底	部	→ナゲ	→ナゲ	—	—	7	半透明20(と微粒子) 白2(微粒子),黒5(茶)	緑	明黄緑	*	平 底		
293	*	*	*	*	ナゲ	ナゲ	—	—	5	半透明15,黒5(白,茶)	洗黄緑	洗黄緑	不良	平 底 表面にスス付着		
294	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	5	半透明12,白3,黒1(と微 粒子)(茶)	洗黄緑	洗黄緑	中々不良	平 底		

図番 号	地区名	通称名	器形	器部及び 残存	調 整			文 様	透入率	胎 土			色 調		焼 成	備 考
					表	裏	裏			混	和	材	表	裏		
295	Ⅷ	SA32	底	部	ナゲ	ナゲ	—	—	5弱	半透明6 黒3,白3,黒4(茶)	緑	緑 灰	不良	平底		
296	*	*	*	*	ナゲ	ナゲ	—	—	5	半透明10 黒,黒3(と微粒子)白(微粒子)(茶)	洗黄緑	灰 緑	*	ややあけ底 内面スス付着		
297	*	SA33	完	形	→ナゲ	→ナゲ	—	—	3	半透明,白,茶	灰黄緑	灰黄緑	良好	表面スス付着		
298	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	2	半透明,白,茶,黒	洗黄緑	洗黄緑	*	表面スス付着		
299	*	*	口縁部一箇所	→ナゲ	→ナゲ	—	—	—	3	半透明,白,黒	灰黄緑	灰黄緑	*			
300	*	*	口縁部	→ミガキ	ナゲ	—	—	—	3	半透明4 白(微粒子)茶(微粒子)黒(微粒子)	灰黄緑	灰黄緑	中々不良			
301	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	3	半透明8,白4,黒(微粒子)	*	*	良好	黒・全体的にスス付着		
302	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	3	半透明6(と微粒子)黒1 白1(と微粒子)黒1(微粒子)白(微粒子)	*	*	*	表面部分のスス付着		
303	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	7	半透明8,白,黒(微粒子)(茶)	灰黄緑	灰 灰	*			
304	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	沈線2条	—	7	半透明20(と微粒子)茶 黒(微粒子)黒1(微粒子)白(微粒子)	灰 緑	灰 緑	*	表面部分のスス付着		
305	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	四輪2条	—	5	半透明16(と微粒子) 黒4(と微粒子)(茶,白)	灰 緑	明 赤 緑	*	*		
306	*	*	*	*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	—	黒半透明(微粒子)茶(茶)	にぶい赤緑	にぶい赤黒	*	*		
307	*	*	*	→貝殻糸痕	→貝殻糸痕	貝殻線文	—	—	—	茶1,黒,白半透明(微粒子)	緑	緑	不良			
308	*	*	*	貝殻糸痕	→貝殻糸痕	貝殻線文	—	—	3	半透明4,黒,白,茶(微粒子)	*	*	*			
309	*	*	*	*	→	→	口唇部耳付	—	—	半透明4,白,黒(微粒子)	*	*	*			
310	*	*	*	→貝殻糸痕	→貝殻糸痕	貝殻線文	—	—	—	黒,白半透明(微粒子)(茶, 黒)	*	*	*	表面部分のスス付着		
311	*	*	*	→貝殻糸痕	ナゲ	貝殻線文	—	—	3弱	半透明(と微粒子) 黒1(微粒子) 黒1(茶)	*	*	*			
312	*	*	胴	部	ナゲ	ナゲ	—	—	7	半透明19 黒(微粒子)黒1(微粒子)	灰黄緑	灰黄緑	*	表面部分のスス付着		
313	*	*	胴	部	ナゲ	ナゲ	—	—	5	半透明12(微粒子) 黒5(微粒子) 茶3	明黄緑	明黄緑	良好	高杯の胴(?)		
314	*	*	底	部	→	→	—	—	3	半透明5(微粒子) 黒2, 黒2, 白2	洗黄緑	灰黄緑	中々不良	ややあけ底		
315	*	*	*	*	→	→	—	—	3	半透明7, 黒3(白, 緑)	明黄緑	灰黄緑	*	平底		

図面番号	地区名	産地名	器形	器部及び類	調整文様				器入庫	胎土		色調		焼成	備考	
					表	裏	表	裏		表	裏	表	裏			
316	XVI	SA33	*	底部	—	—	—	—	5	半透明6 (微粒子) 黒 (微粒子) (茶)	明赤黄	灰黄褐	やや不良	平底		
317	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	—	5	透明, 白, 黒	暗赤黄	灰褐	*	平底 スス付		
318	*	SA34	*	口縁部-胴部	→ナデ	ナデ	—	—	5	透明, 白, 黒	暗赤黄	灰褐	*	表面スス付 裏面部分的にスス付		
319	*	*	*	口縁部	→ナデ	→ナデ	—	—	3	半透明, 白, 黒	にぶい黄	にぶい褐	*	全面にスス付		
320	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	—	3	半透明7 黒, 赤1, 白1, 各種粒子	にぶい褐	にぶい褐	不良			
321	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	—	3	半透明15 黒2, 半透明, 白黒の微粒子	暗灰	暗灰	やや不良	表面部分的にスス付		
322	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	—	3	半透明13 黒, 茶, 半透明の微粒子 (白)	暗灰	にぶい褐 灰黄褐	*			
323	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	—	3	半透明14 黒, 茶1, 半透明の微粒子	暗灰	にぶい黄	*	表面スス付		
324	*	*	*	*	→ナデ(?)	ナデ	—	—	5	半透明17 白3, 黒6, 茶1 (微粒子)	淡黄橙	淡黄橙	*	穿孔あり		
325	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	—	5	半透明12 白1, 半透明, 茶の微粒子	暗	にぶい黄	*	*		
326	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	—	3	半透明12 白4, 各種微粒子	灰黄褐	灰黄褐	不良	*		
327	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	—	2	半透明6 白1, 半透明, 白, 黒の微粒子	黄	*	やや不良			
328	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	—	5	半透明23 黒7, 各種微粒子	明赤黄	明赤黄	良好			
329	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	—	3	半透明, 白, 黒	にぶい黄	にぶい黄	*	表面部分的にスス付		
330	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	—	3	半透明13 黒, 半透明の微粒子 (茶)	暗	暗	やや不良			
331	*	*	*	*	→ナデ	ナデ	—	—	5	半透明12 茶1, 半透明, 黒の微粒子	にぶい黄	明赤黄	*			
332	*	*	*	*	→ナデ	ナデ	—	—	?	茶, 黒, 半透明の微粒子	暗	灰褐	*	口縁部肥厚		
333	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	—	7	半透明22 黒6, 白2, 各種微粒子	にぶい褐	にぶい褐	不良			
334	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	3	半透明12 茶1, 黒1, 各種微粒子	灰黄褐	暗灰	*	表面部分的にスス付		
335	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	—	—	7	半透明29 黒9, 赤1, 半透明, 茶の微粒子	灰黄褐	灰黄褐	やや不良			
336	*	*	*	*	→ナデ	ナデ	淡い凹線	—	—		茶, 黒 (微粒子) 半透明2と微粒子 (白)	明赤黄	にぶい黄	*		

図面番号	地区名	産地名	器形	器部及び類	調整文様				器入庫	胎土		色調		焼成	備考
					表	裏	表	裏		表	裏	表	裏		
337	XVI	SA34	*	口縁部	ナデ	ナデ	波線(二条)	—	5	半透明15 黒1, 白1, 各種微粒子	暗赤黄	暗赤黄	やや不良		
338	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	凹線	—	5	半透明19 石の塵, 半透明, 白, 黒の微粒子	灰黄褐	灰黄褐	不良	表面スス付 口縁部肥厚	
339	*	*	*	*	ナデ	→ナデ	—	—	7	半透明5 黒1, 半透明, 黒, 白の微粒子	暗	暗	良好	液状口縁	
340	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	二条凹線	—	5	半透明12 白1, 各種微粒子	にぶい黄	暗灰	不良		
341	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	*	—	3	半透明10 透明, 赤1, 半透明, 透明の微粒子	淡黄橙	暗	やや不良	表面部分的にスス付	
342	*	*	*	脚部	ナデ	赤気のおと ナデ(?)	波線	—	7	茶3 白, 黒, 半透明の微粒子	にぶい黄	暗	*		
343	*	*	*	口縁部	貝殻赤 →ナデ	赤気の上 をナデ(?)	貝殻赤文	—	?	黒, 半透明の微粒子	暗赤黄	明赤黄	不良	表面部分的にスス付 液状口縁	
344	*	*	*	*	貝殻赤	ナデ	1回凹線2 (二条)	—	—	半透明4 黒 (微粒子), 茶1 (塵)	暗	暗	やや不良		
345	*	*	*	*	→ナデ(?)	→ナデ(?)	連続斜文	—	—	黒, 半透明 (微粒子) 白3 (微粒子) (茶)	にぶい黄	にぶい黄	良好		
346	*	*	*	*	→ナデ ヘラナデ(?)	→ナデ	—	—	1	黒 茶の塵1, 白, 黒の微粒子	暗	暗	不良		
347	*	*	*	*	貝殻赤	ナデ	—	—	2	透明, 白, 黒	明赤黄	暗赤黄	良好		
348	*	*	*	*	ナデ(?)	ナデ(?)	波線(?)	—	5	半透明17 黒3, 赤1, 微粒子, きぬこまか	淡黄橙	淡黄橙	*		
349	*	*	*	洗鉢	→ミガキ	→ミガキ	三条波線	—	2	半透明7	灰黄褐	灰黄褐	やや不良	あらかめの 精製研鉢土器	
350	*	*	*	洗鉢	→ミガキ	→ミガキ	—	—	5	半透明10, 黒4, 茶1 (白)	灰黄褐	灰黄褐	*	精製研鉢土器	
351	*	*	*	洗鉢	→ミガキ	→ミガキ	—	—	2	透明, 半透明, 黒	暗	暗	良好	*	
352	*	*	*	洗鉢	→ミガキ	→ミガキ	—	—	3	半透明10 (微粒子), 白2, 黒 (微粒子)	暗	暗	*		
353	*	*	*	胴部	ナデ	ナデ	波線	—	3	黒12, 茶2, 白2 (半透明)	暗	暗	*		
354	*	*	*	*	→ナデ	ナデ	凹線	—	?	半透明13 黒, 半透明の微粒子 (茶-灰)	暗	灰褐	やや不良		
355	*	*	*	*	→ナデ	→ナデ	*	—	2	半透明9 白, 半透明, 茶の微粒子	*	*	*		
356	*	*	*	*	ナデ	ナデ	波線	—	3	半透明10, 黒4 (微粒子), 白 (微粒子)	灰黄褐	灰黄褐	*	表面部分的にスス付	
357	*	*	*	*	ナデ ヘラナデ(?)	→ナデ ヘラナデ(?)	凹線	—	3	半透明5 透明6, 白5, 微粒子 (茶, 黒)	暗	暗	*		

区画番号	地区名	道標名	器形	器部及び残存	調 整				器入母	胎 上		色 調		焼 成	備 考
					表	裏	表	裏		泥	和	表	裏		
358	XVI	SA34		胴 部	ナゲ	ヘナナゲ	押 延 文	—	2	灰色っぽい半透明4。(白)	明 赤 褐	灰 黄 褐	やや不良		
359	*	*	*	*	ナゲ	ナゲ	—	—	3	透明。白	灰 黄 褐	灰 黄 褐	良好		
360	*	*	*	*	ヘナナゲ	ヘナナゲ	—	—	7	半透明16。(白,茶,その他無) 黒,半透明の微粒子	灰 黄 褐	灰 黄 褐	やや不良		
361	*	*	*	*	ヘナナゲ	ヘナナゲ	沈 線	—	3	半透明13。(茶) 白2。各微粒子	灰 黄 褐	灰 黄 褐	*	表面部分のスス付着	
362	*	*	*	*	ヘナナゲ	ヘナナゲ	—	—	5	半透明。白,黒	灰 黄 褐	灰 黄 褐	*		
363	*	*	*	*	ナゲ	ナゲ	—	—	3	透明。白,黒	灰 黄 褐	灰 黄 褐	*	表面部分のスス付着	
364	*	*	透 鉢	ナゲの残 ヘナナゲ	ナゲの残 ヘナナゲ	—	—	2強	茶5。きめのこまかい 半透明4,白2,黒の微粒子	黒 褐	にぶい黄 褐	良好	精製磁研土器		
365	*	*	底 部	ナゲ	ナゲ	ケズリ	—	—	1	透明。白,黒	明 赤 褐	灰 黄 褐	不良	平 底	
366	*	*	胴部一底部	ナゲ	ナゲ	—	—	3	*	浅黄 褐	灰 黄 褐	灰 黄 褐	*		
367	*	*	底 部	ナゲ	ナゲ	—	—	6	半透明16 黒,半透明の微粒子	灰 黄 褐	明 赤 褐	灰 黄 褐	*	あけ底	
368	*	*	*	ヘナナゲ	ナゲ	—	—	3	半透明8 茶5,黒1,半透明,黒の微粒子	明 赤 褐	浅 黄 褐	浅 黄 褐	良好	*	
369	*	*	*	ナゲ?	ナゲ	—	—	3	半透明9 半透明,白,黒の微粒子	明 赤 褐	浅 黄 褐	浅 黄 褐	不良	表面部分のスス付着	
370	*	*	*	ナゲ	ナゲ	—	—	7	半透明22 黒3,茶2,各微粒子	浅 黄 褐	灰 黄 褐	灰 黄 褐	*	裏面スス付着,あけ底	
371	*	*	*	ナゲ	ナゲ	—	—	5	透明。白,黒	灰 黄 褐	灰 黄 褐	灰 黄 褐	*	平底	
372	*	*	*	ナゲ	ナゲ	—	—	?	半透明3 白,黒,半透明の微粒子	*	*	やや不良	あけ底		
373	*	*	*	—	—	—	—	3強	半透明11と(微粒子) 黒(微粒子)	橙 橙	橙	*	平 底		
374	*	SA35	透 鉢	口縁部一胴部	ニガキ	ニガキ	—	1	半透明7。(茶,白,黒) 茶5,黒1,半透明,黒の微粒子	明 赤 褐	明 赤 褐	*			
375	*	*	*	口 縁 部	ナゲ	ナゲ	—	—	5	半透明18 透明,黒(微粒子),白(微粒子)	にぶい褐	にぶい褐	*	裏面部分的に スス付着	
376	*	*	*	ナゲ	ナゲ	—	—	3	半透明8(微粒子) 白(微粒子)。(茶)	灰 黄 褐	灰 黄 褐	灰 黄 褐	*		
377	*	*	*	ナゲ	ナゲ	—	—	3	半透明8。白6,白っぽい透明 1,黒3(茶)	*	*	*	表面部分的に スス付着		
378	*	*	*	*	沈 線	—	—	3	半透明6(と微粒子) 透明(微粒子),白3,黒(微粒子)	橙 橙	橙	良好			

区画番号	地区名	道標名	器形	器部及び残存	調 整				器入母	胎 上		色 調		焼 成	備 考
					表	裏	表	裏		泥	和	表	裏		
379	XVI	SA35		胴 部	ナゲ	ナゲ	沈 線	—	3	半透明3,黒5(白)	明 赤 褐	にぶい褐	やや不良	裏面にスス付着	
380	*	*	*	*	ナゲ	ナゲ	沈 線	—	5	半透明17(微粒子) 黒4,茶1,白1	にぶい褐	にぶい褐	良好		
381	*	*	*	口 縁 部	ニガキ	ニガキ	織 刻	—	1	半透明5 黒(微粒子),茶1(微粒子)	橙	橙	やや不良		
382	*	*	*	ニガキ	ニガキ	見取織文	—	—	3	半透明3(微粒子) 黒,白,茶(微粒子)	明 赤 褐	橙	*		
383	*	*	*	*	ニガキ	ニガキ	—	—	3	半透明2 白5,黒(微粒子)	にぶい褐	黒 褐	良好	裏面部分的に スス付着	
384	*	*	*	底 部	—	—	—	—	5	半透明12(微粒子) 白4,黒2(微粒子)(織)	橙	灰 黄 褐	不良	ややあけ底	
385	*	SA36		口縁部一底部	—	—	—	3強	半透明17。(茶) 黒1と(微粒子),茶(微粒子)(織)	にぶい褐	灰 黄 褐	灰 黄 褐	不良	平 底 表面部分的にスス付着	
386	*	*	*	口 縁 部	ナゲ	ナゲ	沈 線	—	3	半透明9,茶2,白(微粒子)	橙 赤	にぶい赤 褐	*	表面部分的にスス付着	
387	*	*	*	ナゲ	ナゲ	—	—	5	半透明12,茶4,黒2(微粒子)	灰 黄 褐	灰 黄 褐	*			
388	*	*	*	口縁部一胴部	ナゲ	ナゲ	—	—	3	半透明10,白(微粒子)(織)	橙一灰黄 褐	橙一灰黄 褐	不良		
389	*	*	*	*	沈 線	—	—	5	半透明17,黒4 茶(微粒子)(織)	灰 黄 褐	にぶい褐	やや不良	表面部分的にスス付着		
390	*	*	*	底 部	—	—	—	3強	半透明8,黒,茶(微粒子)	明 赤 褐	明 赤 褐	良好	平 底		
391	*	SA37		口 縁 部	ナゲ	ナゲ	—	—	5	半透明14,黒3(微粒子)(茶)	明 赤 褐	橙 灰	やや不良	表面部分的にスス付着	
392	*	*	*	ナゲ	ナゲ	—	—	3	半透明5(微粒子) 透明1と(微粒子),白4,黒2	灰 黄 褐	橙 灰	*	*		
393	*	*	*	口縁部付近	ナゲ	ナゲ	—	—	3	半透明5 茶2と(微粒子),白(微粒子)(茶)	にぶい褐	灰 黄 褐	*	*	
394	IX	SA38	透 鉢	口縁部一胴部	ナゲ	ナゲ	—	—	5	半透明14,白1 黒5,茶1 (茶)	明 赤 褐	にぶい褐	不良	表面スス付着	
395	*	*	*	ナゲ	ナゲ	—	—	7	透明21 半透明5,黒は微粒子(白)	灰 黄 褐	明 赤 褐	やや不良	表面部分的にスス付着		
396	*	*	*	口 縁 部	ナゲ	ナゲ	—	—	7	透明21 半透明5,黒5 白3,茶1	にぶい黄 褐	浅 黄 褐	良好	口縁肥厚	
397	*	*	*	底 部	ナゲ	ナゲ?	—	—	7	半透明10,黒多量	暗 赤 褐	灰 褐	やや不良		
398	IX	SA41		胴部一胴部	ナゲ?	ナゲ	—	3強	半透明10 白4,半透明,白,黒の微粒子	灰 黄 褐	灰 黄 褐	灰 黄 褐	*	洗拭口縁	
399	*	*	透 鉢	ニガキ	ナゲ?	—	—	7	半透明18,茶 黒5 (白,半透明,織)	にぶい褐	灰 黄 褐	不良			

調査 番号	地区名	産地名	品名	器部及び 形状	調 整 文 様			胎 土	色 調		焼 成	備 考
					表	裏	裏		裏	裏		
400	XX	SA41	口 縁 部	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明15, 茶2	焼 灰 焼 灰	良 好		
401	*	*	*	ナナデ (ハナダの形)	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明5 白の微粒子	焼 灰 焼 灰	中や不良		
402	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明30, 黒	明 赤 焼 明 赤	中や不良		
403	*	*	底 部	ナナデ?	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明16, 茶 黒3, 白の微粒子 (灰の塵)	浅 黄 焼 灰 焼 焼	*	表面中まで穿孔	
404	*	*	*	ナナデ	ナナデ?	ナナデ	ナナデ	半透明33 茶2, 黒3 (と微粒子) (茶塵)	浅 黄 焼 灰 黄 焼	中や不良	あけ蓋	
405	*	*	*	ナナデ (ハナダの形)	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明11 黒, 白の微粒子 (茶塵)	浅 黄 焼 浅 黄 焼	不 良	*	
406	*	SA42	口 縁 部	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明7, 透明 白1 (黒の微粒子)	浅 黄 焼 黒 焼	良 好	口縁部流状?	
407	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明12, 黒3 透明2, 茶1 (茶塵)	中や不良	中や不良	口縁部流状さみ	
408	*	*	*	*	*	*	*	半透明5, 茶1 白2 (茶塵白2コ)	にぶい焼 焼	不 良	*	
409	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	白, 黒の微粒子	にぶい焼 焼	*		
410	*	*	側 部	ナナデ	ナナデ?	ナナデ	ナナデ	半透明12 黒3, 茶2	明 赤 焼 灰 黄 焼	*	表面部分的に スス付着	
411	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明13, 透明2 黒6, 1.5mmの灰(白の微粒子)	浅 黄 焼 灰 黄 焼	良 好		
412	*	*	底 部	ナナデ	ナナデ?	ナナデ	ナナデ	半透明24 黒の微粒子	明 赤 焼 浅 黄 焼	中や不良	あけ蓋	
413	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明11 黒の微粒子, 白の微粒子 (6 茶塵)	明 赤 焼 灰 黄 焼	中や不良		
414	XXV	SA44	口 縁 部	ナナデ	茶塵付	沈 線	ナナデ	半透明7, 黒1mm角3 茶塵1	中や不良	流状口縁		
415	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明3, 茶の塵2 黒, 茶の微粒子	にぶい焼 焼	良 好		
416	*	*	浅 鉢	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明10 白の微粒子	く500黒 黒 焼	*	黒色磨粉土器	
417	*	*	浅 鉢 底 部	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明7 (透明白)	灰 黄 焼 く500黒焼	*	*	
418	*	SA45	口 縁 部	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明9, 黒 白1, 茶1 (茶灰の塵)	灰 黄 焼 浅 黄 焼	不 良	外 反	
419	XXIV	SA46	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明8, 茶1 黒, 半透明微粒子 (茶の塵)	にぶい焼 焼	良 好	*	
420	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明12 白2 (黒, 灰の塵)	浅 黄 焼 灰 黄 焼	不 良		

調査 番号	地区名	産地名	品名	器部及び 形状	調 整 文 様			胎 土	色 調		焼 成	備 考
					表	裏	裏		裏	裏		
421	XXII	SA46	口 縁 部	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明11 半透明の塵1, 黒の微粒子 (茶)	浅 黄 焼 灰 黄 焼	中や不良	外反	
422	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	灰 3 黒, 白, 半透明, 透明の微粒子(多量)	明 赤 焼	焼	*	
423	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明23, 茶3 透明4, 黒5	にぶい焼 浅 黄 焼	不 良		
424	*	*	*	*	*	*	*	半透明10 白, 黒の微粒子 (黒, 白)	灰 黄 焼 明 赤 焼	*	表面部分的にスス付着	
425	*	*	*	ナナデ (ハナダ)	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明7, 黒1 透明	焼 灰 焼 灰	*		
426	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明7, 黒1 白4 (灰, 半透明, 黒, 白の微粒子)	浅 黄 焼 にぶい焼	中や不良		
427	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明13 白2, 黒3, 赤微粒子	明 赤 焼 明 赤 焼	良 好		
428	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	黒4 半透明2 (茶)	浅 黄 焼 浅 黄 焼	中や不良	口縁部肥厚	
429	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明4 白1, 各微粒子, 茶 黒	浅 黄 焼 浅 黄 焼	不 良		
430	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明5 黒2, 白1	明 赤 焼 焼	不 良	外反	
431	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明11, 灰6 黒6, 茶1, 白と各微粒子	にぶい焼 にぶい焼	良 好		
432	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明5, 黒1, 茶1	にぶい焼 焼	中や不良		
433	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	透明, 半透明, 黒の微粒子	焼 焼	*	流状口縁	
434	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	茶塵1 きめこまかい 白, 黒の微粒子 (灰塵)	焼 焼	不 良		
435	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	黒, 白, 半透明の微粒子 (茶塵)	焼 焼	中や不良	流状口縁?	
436	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	黒4 白, 半透明の微粒子 (茶塵)	焼 焼	*		
437	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	白4 黒, 白, 半透明の微粒子	焼 焼	不 良		
438	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明4 白2, 半透明, 白, 黒の微粒子	明 赤 焼 明 赤 焼	*	流状口縁	
439	*	*	浅 鉢	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	透明13 半透明2 (白, 黒)	にぶい焼 灰 黄 焼	中や不良	表面スス付着	
440	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	半透明4 黒, 白, 半透明の微粒子(黒)	浅 黄 焼 浅 黄 焼	良 好	流状口縁	
441	*	*	*	ナナデ	ナナデ	ナナデ	ナナデ	黒4 (きめが細かい) 白の半透明1, 黒2 (茶塵)	明 赤 焼 黒 焼	不 良	*	

国 番 号	地区名	通称名	器 形	器部及び 残	調 整 文 様				器 入 率	土 色			調	焼 成	備 考
					新	舊	新	舊		新	舊	新			
442	XXIII	SA 46			ナデ	→ナデ	2段の 縁取直文	1	黒3 半透明2 (灰, 濃緑)	灰 黄 緑 10YR 5/6	灰 黄 緑 5YR 5/6	良	やや不良	口縁部に表面と同 じ文様を有す	
443	●	●	●		→ナデ	→ナデ	竹管斜切片 直文	2	灰1 白2, 黒1, 半透明, 白の微粒子	灰 黄 緑 5YR 5/6	灰 黄 緑 5YR 5/6	不	不良	口唇部に表面と同 じ文様を有す	
444	●	●	●		→ナデ?	→ナデ		3	半透明1, 灰の半透明1 白2, 黒3, 茶1	灰 黄 緑 10YR 5/6	灰 黄 緑 10YR 5/6	や	やや不良	流状口縁?	
445	●	●	●		→ナデ	→いはい ナデ		5	半透明4, 黒, 半透明の微粒子 半透明12 (各微粒子)	灰 黄 緑 5YR 5/6	灰 黄 緑 5YR 5/6	●	●	流状口縁?	
446	●	●	●		→いはい ナデ	→黒3		3	半透明12	灰 黄 緑 7.5 YR 5/6	灰 黄 緑 7.5 YR 5/6	良	●	●	
447	●	●	●		→ナデ?	→ナデ		3	半透明1, 灰の半透明1 白2, 黒3, 茶1	灰 黄 緑 10YR 5/6	灰 黄 緑 10YR 5/6	や	やや不良	表面部分的にスス付 着, 縁取, 凹線	
448	●	●	●		→ナデ	→いはい ナデ		1	半透明2 きめこまかい 白2, 黒2	84-105	灰 黄 緑 5YR 5/6	灰 黄 緑 5YR 5/6	良	●	表面部分的にスス付 着, 縁取, 凹線
449	●	●	●		→ナデ	→いはい ナデ		2	半透明6, 黒1, 白2, 灰2 白, 黒, 半透明の微粒子	明 赤 黄 5YR 5/6	明 赤 黄 10YR 5/6	や	やや不良	精製磁器	
450	●	●	●		→ナデ	→いはい ナデ		3	透明5 半透明12 (白, 黒)	灰 黄 緑 10YR 5/6	灰 黄 緑 10YR 5/6	良	●	●	
451	●	●	●		→ナデ	→ナデ		7	半透明5 黒の微粒子(多量), 茶の微粒子	暗 赤 黄 5YR 5/6	暗 赤 黄 7.5 YR 5/6	●	●	口縁部	
452	●	●	●		→ナデ	→いはい ナデ		2	半透明8 きめこまかい 黒3, 半透明, 白, 黒の微粒子	灰 黄 緑 10YR 5/6	灰 黄 緑 10YR 5/6	不	●	口縁部	
453	●	●	●		→ナデ	→いはい ナデ	沈 線	●	透明6 半透明12 (白, 黒)	灰 黄 緑 10YR 5/6	灰 黄 緑 10YR 5/6	や	やや不良	●	
454	●	●	●		→ナデ?	→いはい ナデ	沈 線	7	白2, 黒1, 半透明 黒の微粒子	灰 黄 緑 10YR 5/6	灰 黄 緑 10YR 5/6	●	●	精製磁器?	
455	●	●	●		→ナデ	→ナデ		1	半透明4, 白の微粒子	暗 赤 黄 10YR 5/6	暗 赤 黄 10YR 5/6	良	●	●	
456	●	●	●	洗 鉢	●	●	凹 線	5	半透明丸黒4 (白)	に ぶ け 7.5 YR 5/6	に ぶ け 10YR 5/6	不	●	精製磁器	
457	●	●	●		→ナデ	→ナデ		2	きめこまかい 半透明3, 黒2, 黒の微1	暗 赤 黄 7.5 YR 5/6	暗 赤 黄 7.5 YR 5/6	良	●	●	
458	●	●	●		→ナデ	→ナデ		7	半透明5 茶1, 白, 黒の微粒子	に ぶ け 7.5 YR 5/6	に ぶ け 10YR 5/6	不	●	●	
459	●	●	●		→ナデ	→ナデ		2	透明6 半透明2, 白2, 各微粒子	灰 黄 緑 7.5 YR 5/6	灰 黄 緑 7.5 YR 5/6	良	●	●	
460	●	●	●		→ナデ	→ナデ		2	半透明6 茶4, 白1, 半透明の微粒子	●	●	●	●	●	
461	●	●	●		→ナデ	→ナデ		●	透明3 半透明6, 白3, 各微粒子(黒)	7.5 YR 5/6	7.5 YR 5/6	良	●	流状口縁	
462	●	●	●	洗 鉢 厨 部	●	●		3	茶8, 茶黒1 灰8, 黒の微粒子(灰の微)	灰 黄 緑 10YR 5/6	暗 赤 黄 10YR 5/6	良	●	精製磁器土器	

国 番 号	地区名	通称名	器 形	器部及び 残	調 整 文 様				器 入 率	土 色			調	焼 成	備 考
					新	舊	新	舊		新	舊	新			
463	XXIII	SA 46			→ナデ	→いはい ナデ		7	きめこまかい 白, 半透明, 黒の微粒子(半透明)	灰 黄 緑 10YR 5/6	灰 黄 緑 10YR 5/6	良	●	精製磁器	
464	●	●	●		→ナデ	→いはい ナデ	沈 線	●	半透明4 きめこまかい 茶2, 半透明, 黒の微粒子	に ぶ け 7.5 YR 5/6	に ぶ け 5YR 5/6	不	●	●	
465	●	●	●		→ナデ	→いはい ナデ		7	白, 半透明, 黒の微粒子 きめこまかい	84-105	に ぶ け 7.5 YR 5/6	に ぶ け 10YR 5/6	●	●	表面部分的にスス付 着
466	●	●	●	洗 鉢?	→ナデ	→ナデ		3	白2, 半透明, 黒の微粒子 黒2 (黒の微)	に ぶ け 7.5 YR 5/6	灰 黄 緑 10YR 5/6	●	●	●	
467	●	●	●	洗 鉢	→いはい ナデ	→ナデ		2	半透明 白, 黒, 半透明の微粒子	明 赤 黄 5YR 5/6	明 赤 黄 5YR 5/6	や	やや不良	精製磁器上胎?	
468	●	●	●		→ナデ	→いはい ナデ		7	きめこまかい 半透明, 白, 黒の微粒子	に ぶ け 7.5 YR 5/6	灰 黄 緑 10YR 5/6	良	●	●	
470	●	●	●		→ナデ	→いはい ナデ		5	透明7, 黒1 茶3, 茶黒2 黒, 茶の微粒子 (白)	明 赤 黄 5YR 5/6	に ぶ け 10YR 5/6	不	●	あけ底	
471	●	●	●		→ナデ	→いはい ナデ		2	透明7 (灰の微) 白2, 黒, 白, 半透明の微粒子	灰 黄 緑 10YR 5/6	灰 黄 緑 10YR 5/6	●	●	表面部分的にスス付 着	
472	●	●	●		→ナデ	→いはい ナデ		7	半透明 白, 黒, 半透明の微粒子	明 赤 黄 5YR 5/6	明 赤 黄 5YR 5/6	や	やや不良	精製磁器上胎?	
473	●	●	●		→ナデ?	→いはい ナデ		2	半透明 白2, 黒, 白, 微粒子	灰 黄 緑 10YR 5/6	灰 黄 緑 10YR 5/6	や	やや不良	●	
474	●	●	●		→ナデ	→いはい ナデ		5	半透明12 (白) (灰の半透明) 半透明, 黒, 白の微粒子	灰 黄 緑 10YR 5/6	灰 黄 緑 10YR 5/6	●	●	ややあけ底	
475	●	●	●		→ナデ	→いはい ナデ		3	半透明8, 茶2 (灰の微) 黒4, 白黒1, 白2各微粒子	明 赤 黄 10YR 5/6	灰 黄 緑 10YR 5/6	不	●	●	
476	●	●	●		→ナデ	→いはい ナデ		7	半透明3 黒2, 半透明, 黒, 白の微粒子	明 赤 黄 5YR 5/6	灰 黄 緑 10YR 5/6	●	●	●	
477	●	●	●		→ナデ	→いはい ナデ		2	黒3 (白) 半透明6, 黒, 半透明, 茶の微粒子	明 赤 黄 10YR 5/6	明 赤 黄 10YR 5/6	●	●	●	
478	●	●	●		→ナデ?	→いはい ナデ		3	半透明9, 黒4 (灰の微) 透明2, 白微, 白, 白微粒子	明 赤 黄 7.5 YR 5/6	に ぶ け 7.5 YR 5/6	不	●	あけ底	
479	●	●	●		→ナデ	→いはい ナデ		7	半透明12, 白1, 半透明, 白 黒8, 茶1, 黒茶の微粒子	明 赤 黄 10YR 5/6	明 赤 黄 10YR 5/6	や	やや不良	表面部分的にスス付 着あけ底	
480	●	●	●		→ナデ	→いはい ナデ		3	半透明5, 白1, 茶2 透明1, 黒2 (茶黒)	灰 黄 緑 10YR 5/6	灰 黄 緑 10YR 5/6	●	●	あけ底	
481	●	●	●		→ナデ	→いはい ナデ		5	半透明12, 黒9 透明5 (各微粒子)	明 赤 黄 5YR 5/6	灰 黄 緑 10YR 5/6	不	●	●	
482	●	●	●		→ナデ?	→いはい ナデ		3	半透明4, 茶1, 半透明, 黒 白1, 黒6, 白, 茶の微粒子	明 赤 黄 5YR 5/6	暗 赤 黄 6YR 5/6	●	●	やや不良	
483	●	●	●		→ナデ	→いはい ナデ		7	透明2 半透明8, 黒, 茶, 白の微粒子	に ぶ け 7.5 YR 5/6	灰 黄 緑 10YR 5/6	●	●	●	

図番 番号	地区名	産地名	器形	器部及び 存	調 整				文 種		胎 土	色 調	焼 成	備 考
					真	裏	表	裏	表	裏				
484	XXII	SA 46		底 部	ナデ	→ナデ				胎土	茶 喝1 半透明、茶褐色、白	良	平底	
485	*	*	*	脚 部	*	*	*	*	*	胎土	きめこまかい ほとんと澱入物ない(茶喝)	良	好	
486	*	*	*		貝殻赤褐色			2		胎土	茶 喝1 半透明、茶褐色、白	良	好	
487	*	SA 47		口 縁 部	→ナデ	→ナデ		*		胎土	清 茶 喝 10YR 5/6 半透明、白、黒は微粒子	中 不	表面スス付着(?)	
488	*	*	*		→ナデ	→ナデ		3		胎土	清 茶 喝 10YR 5/6 半透明、白、黒は微粒子	中 不	表面スス付着(?)	
489	*	*	*		*	*		2		胎土	清 茶 喝 7.5YR 5/6 半透明、黒	良	好	
490	*	*	*		*	*		1		胎土	清 茶 喝 10YR 5/6 半透明、黒	中 不	液状口縁	
491	*	*	*		*	*		2		胎土	清 茶 喝 7.5YR 5/6 半透明、黒	良	好	
492	*	*	*		*	*		2		胎土	清 茶 喝 7.5YR 5/6 半透明、黒	良	好	
493	*	*	*		ナデ	→ナデ		7		胎土	清 茶 喝 7.5YR 5/6 半透明、黒	中 不	液状口縁	
494	*	*	*		貝殻赤褐色			2		胎土	清 茶 喝 7.5YR 5/6 半透明、黒	中 不	*	
495	*	*	*		貝殻赤褐色			3		胎土	清 茶 喝 7.5YR 5/6 半透明、黒	中 不	*	
496	*	*	*		→ナデ	→ナデ		3		胎土	清 茶 喝 7.5YR 5/6 半透明、黒	中 不	*	
497	*	*	*		ナデ	→ナデ		2		胎土	清 茶 喝 7.5YR 5/6 半透明、黒	中 不	*	
498	*	*	*		→ナデ	→ナデ		3		胎土	清 茶 喝 7.5YR 5/6 半透明、黒	中 不	*	
499	*	*	*		→ナデ	→ナデ		3		胎土	清 茶 喝 7.5YR 5/6 半透明、黒	中 不	*	
500	*	*	*		→ナデ	→ナデ		3		胎土	清 茶 喝 7.5YR 5/6 半透明、黒	中 不	*	
501	*	*	*		→ナデ	→ナデ		3		胎土	清 茶 喝 7.5YR 5/6 半透明、黒	中 不	*	
502	*	*	*		→ナデ	→ナデ		7		胎土	清 茶 喝 7.5YR 5/6 半透明、黒	中 不	*	
503	*	*	*		→ナデ	→ナデ		3		胎土	清 茶 喝 7.5YR 5/6 半透明、黒	中 不	*	
504	*	*	*		→ナデ	→ナデ		2		胎土	清 茶 喝 7.5YR 5/6 半透明、黒	中 不	*	

図番 番号	地区名	産地名	器形	器部及び 存	調 整				文 種		胎 土	色 調	焼 成	備 考
					真	裏	表	裏	表	裏				
505	XXII	SA 47		底 部	→ナデ	ナデ		3		胎土	清 茶 喝14 茶の半透明1(茶 白2)	中 不	あけ底	
506	*	*	*		ナデ	→ナデ		7		胎土	清 茶 喝26 黒3 (茶喝)	中 不	*	
507	*	*	*		→ナデ	ナデ		?		胎土	清 茶 喝 5YR 5/6 半透明、白、黒、茶	中 不	*	
508	*	*	*		→ナデ	→ナデ		?		胎土	清 茶 喝22 黒3、茶の微粒子 灰の半透明2、茶1	中 不	平底	
509	*	*	*		→ナデ	→ナデ		3		胎土	清 茶 喝11 白4、半透明、白、黒の微粒子	中 不	*	
510	XXV	SA 46		口 縁 部	ナデ	ナデ		5		胎土	清 茶 喝 10YR 5/6 半透明、黒	中 不	表面部分的にスス付着	
511	*	*	*		→ナデ	→ナデ		3		胎土	清 茶 喝 10YR 5/6 半透明、白、黒、茶の微粒子	良	好	
512	*	*	*		→ナデ	ナデ		?		胎土	清 茶 喝 10YR 5/6 半透明、白、黒、茶の微粒子	中 不	*	
513	*	*	*		→ナデ	→ナデ		3		胎土	清 茶 喝 2.5YR 5/6 半透明、黒	中 不	表面スス付着	
514	*	*	*		→ナデ	→ナデ		?		胎土	清 茶 喝 7.5YR 5/6 半透明、白、黒の微粒子	中 不	*	
515	*	*	*		→ナデ	→ナデ		?		胎土	清 茶 喝 5YR 5/6 半透明、白、黒の微粒子	中 不	*	
516	*	*	*		→ナデの上 をヘラ磨き	→ナデ		5		胎土	清 茶 喝 7.5YR 5/6 半透明、黒、白の微粒子	中 不	*	
517	*	*	*		→ナデ	→ナデ		?		胎土	清 茶 喝 10YR 5/6 半透明、黒	良	好	
518	*	*	*		→ナデ	→ナデ		?		胎土	清 茶 喝 5YR 5/6 半透明、黒の微粒子	中 不	*	
519	*	*	*		*	*		5		胎土	清 茶 喝 10YR 5/6 半透明、白、黒の微粒子	中 不	表面部分的にスス付着	
520	*	*	*		→ナデ	→ナデ		2		胎土	清 茶 喝 10YR 5/6 半透明、白、黒の微粒子	中 不	*	
521	*	*	*		底 部	→ナデ		3		胎土	清 茶 喝 10YR 5/6 半透明、黒の微粒子	良	好	
522	*	SA 49		口 縁 部	→ナデ	→ナデ		3		胎土	清 茶 喝 10YR 5/6 半透明、白、黒の微粒子	中 不	*	
523	*	*	*		→ナデ	→ナデ		3		胎土	清 茶 喝 10YR 5/6 半透明、白、黒の微粒子	良	好	
524	*	*	*		→ナデ	→ナデ		?		胎土	清 茶 喝 10YR 5/6 半透明、白、黒の微粒子	中 不	*	
525	*	*	*		→ナデ	→ナデ		?		胎土	清 茶 喝 10YR 5/6 半透明、白、黒の微粒子	良	好	

国番	地区名	通関名	品名	形状	製法	文種				輸入率	色調		調剤	備考
						表裏	裏表	表裏	裏裏		色	調		
528	XXV	SA49	深鉢	口縁部	→ナゲ	→ナゲ	四本沈線	→	→	半透明1 半透明, 黒, 白の微粒子	黄 5.7R 色	黄 5.7R 色	不	波状口縁
527	*	*		口縁→胴部	→ハナダ	→ハナダ	沈 四 線 点	→	→	半透明5 灰1, 黒, 半透明の微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	やや不	表面部分的にスス付着
528	*	*		胴部	→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明8 白2, 茶1, 各種粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	不	不良
529	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明2, 各種粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	やや不	
530	*	*		底	→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明14 黒3, 白1, 各種粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	不	良
531	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明16, 白3 灰の半透明, 黒2, 各種粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	*	精製土質?
532	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明8, 黒1 半透明の黒1, 各種粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	*	
533	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明16, 白3 灰の半透明, 黒1, 各種粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	*	
534	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明15, 黒4 白3, 各種粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	やや不	
535	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	白2, 茶2 黒6, 黒, 白微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	*	断面スス付着
536	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明9 白3, 半透明, 白, 微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	*	
537	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明17 黒7, 白2, 各種粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	*	平底
538	*	SA50	深鉢	口縁部→胴部	→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明11 (黒茶の微) 白6, 黒, 半透明, 白微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	*	表面部分的にスス付着
539	*	*		口縁部	→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明12 灰の半透明, 白, 黒の微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	*	
540	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明5 茶3, 半透明, 黒の微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	*	
541	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明16 (白の微) 半透明, 白, 黒の微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	不	良
542	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	黒, 白, 半透明微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	*	同一個体?
543	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明4 黒, 白の微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	*	
544	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明15, 茶1 白2, 黒1, 半透明, 白, 黒の微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	やや不	
545	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	黒7, 白2, 茶2 半透明4, 各種粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	*	口縁部凹着
546	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明10 黒1, 白2, 各種粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	*	断面スス付着

国番	地区名	通関名	品名	形状	製法	文種				輸入率	色調		調剤	備考
						表裏	裏表	表裏	裏裏		色	調		
547	XXV	SA50	深鉢	口縁部	→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明15 黒3, 半透明, 黒, 白微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	やや不	
548	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明1 白の半透明, 半透明, 黒の微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	不	良
549	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	白, 黒, 半透明の微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	やや不	
550	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明4 半透明, 黒, 白の微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	不	良
551	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	白1, 半透明1 茶2, 白, 黒, 半透明の微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	*	表面部分的にスス付着
552	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明10 白1, 半透明, 黒の微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	やや不	
553	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明5, 茶1 半透明, 白, 黒の微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	*	
554	*		深鉢	口縁部→胴部	→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明16 茶1, 半透明, 白, 黒の微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	良	好
555	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明1, 黒2 茶1, 半透明, 黒, 白の微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	やや不	
556	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明5 茶2, 半透明, 黒, 白の微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	良	好
557	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	茶2 半透明, 透明, 黒の微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	やや不	
558	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	黒, 半透明の微粒子(多量)	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	*	表面スス付着
559	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明7 白2, 各種粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	*	
560	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	透明2 茶1, 半透明, 黒, 白の微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	不	良
561	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明5 (茶の微) 茶1, 白, 黒, 半透明, 黒の微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	*	波状口縁
562	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明3, 茶3 黒4, 各種粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	*	
564	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明, 黒, 白の微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	やや不	
565	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明8 黒4, 半透明, 黒, 白の微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	*	良
566	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	半透明8 黒2, 白2, 各種粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	*	精製耐熱土
567	*	*			→ナゲ	→ナゲ	→	→	→	黒, 白, 半透明の微粒子	黄 5.7R 色	明赤 5.7R 色	やや不	

同番号	地区名	通称名	器形	器部及び 残	調 整		文 様		胎 土 混入率	色 調 表 裏	焼 成	備 考		
					裏	裏	裏	裏						
568	XXVI	SA50	洗鉢	口縁部	ナデ	ナデ	—	—	2	半透明9 黒1,半透明,黒の微粒子	明赤焼	灰黄焼	やや不良	精製磨り土器
569	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	?	半透明11 灰,白,半透明の微粒子	灰黄焼	明赤焼	不良	*
570	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	?	半透明11 灰,白,半透明の微粒子	灰黄焼	明赤焼	やや不良	*
571	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	?	半透明6 茶2,半透明,黒,白の微粒子	明赤焼	明赤焼	*	*
572	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	3	半透明11 茶2,半透明,黒,白の微粒子	洗黄焼	洗黄焼	*	精製磨り土器
573	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	2	半透明7 黒2,半透明,黒,白の微粒子	洗黄焼	明赤焼	*	*
574	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	?	半透明1 茶2,半透明,黒,白の微粒子	明赤焼	明赤焼	*	*
575	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	3	半透明14 黒4,茶1	明赤焼	明赤焼	*	*
576	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	5	半透明22 黒1,半透明,黒,白の微粒子	にぶい焼	明赤焼	不良	表面部分的にスス付
577	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	3	半透明11 黒1,半透明,黒,白の微粒子	にぶい焼	にぶい焼	やや不良	*
578	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	3	半透明10 黒1,半透明,黒,白の微粒子	明赤焼	にぶい焼	良好	*
579	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	3	半透明10 黒1,半透明,黒,白の微粒子	にぶい焼	明赤焼	やや不良	*
580	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	3	半透明10 黒1,半透明,黒,白の微粒子	にぶい焼	明赤焼	不良	*
581	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	3	半透明18 黒3,各微粒子	明赤焼	灰黄焼	*	平底
582	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	3	半透明15 黒2,半透明,黒,白の微粒子	にぶい焼	灰黄焼	やや不良	表面部分的にスス付
583	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	5	半透明21 黒1,半透明,黒,白の微粒子	洗黄焼	明赤焼	*	*
584	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	5	半透明20 黒2,半透明,黒,茶,白の微粒子	明赤焼	にぶい焼	*	平底
585	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	?	半透明26 黒3,茶2,各微粒子	明赤焼	明赤焼	不良	あげ底
586	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	?	茶3 灰の微粒子	にぶい焼	にぶい焼	*	平底
587	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	3	半透明12 灰,白,半透明の微粒子	洗黄焼	明赤焼	*	あげ底
588	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	?	半透明4 黒,白,半透明の微粒子	洗黄焼	明赤焼	やや不良	*

同番号	地区名	通称名	器形	器部及び 残	調 整		文 様		胎 土 混入率	色 調 表 裏	焼 成	備 考		
					裏	裏	裏	裏						
589	XXVI	SA50	底	ナデ	ナデ	—	—	5	半透明13,黒1,半透明の微粒子 土の割合半透明(茶)	明赤焼	灰黄焼	やや不良	外面部分的にスス付 あげ底	
590	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	?	半透明7 黒1,茶,半透明,白の微粒子	明赤焼	灰黄焼	不良	あげ底
591	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	2	半透明7 白2,茶,半透明,黒の微粒子	洗黄焼	灰黄焼	*	*
592	*	SA51	口縁部	ナデ	ナデ	—	—	?	黒,半透明,灰の微粒子	明赤焼	明赤焼	*	表面スス付,流注口縁	
593	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	3	半透明13,白1 黒1,茶2,各微粒子	灰黄焼	明赤焼	やや不良	表面スス付
594	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	?	半透明2 茶,黒,半透明の微粒子	明赤焼	明赤焼	*	流注口縁
595	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	?	半透明10 黒1,黒,茶,白の微粒子	明赤焼	灰黄焼	*	*
596	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	3	半透明10 黒3,茶,半透明,黒の微粒子	にぶい焼	灰黄焼	*	表面部分的にスス付
597	XXI	SA52	脚部	ナデ	ナデ	—	—	?	茶2 灰,半透明の微粒子	明赤焼	明赤焼	*	脚台	
598	XXVI	SA53	口縁部	ナデ	ナデ	—	—	5	半透明22 黒1,半透明,黒,白の微粒子	にぶい焼	明赤焼	良好	*	
599	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	3	半透明22 黒2,茶2,各微粒子	洗黄焼	洗黄焼	やや不良	*
600	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	2	白4 半透明2,半透明,黒の微粒子	明赤焼	明赤焼	良好	表面スス付
601	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	?	半透明,茶,黒の微粒子	にぶい焼	明赤焼	やや不良	*
602	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	2	半透明3 茶,黒,半透明の微粒子	明赤焼	明赤焼	*	表面スス付
603	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	2	茶2 灰,半透明,黒の微粒子	にぶい焼	明赤焼	*	表面部分的にスス付
604	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	?	茶1 黒,半透明の微粒子	にぶい焼	明赤焼	不良	流注口縁
605	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	?	灰 黒,半透明の微粒子	明赤焼	明赤焼	やや不良	*
606	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	2	茶2,半透明5 黒,半透明の微粒子	明赤焼	明赤焼	不良	*
607	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	?	半透明3 半透明,黒の微粒子	灰黄焼	明赤焼	やや不良	表面スス付
608	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	2	半透明7 灰,白,半透明,黒の微粒子	灰黄焼	明赤焼	*	*
609	*	*	*	*	ナデ	ナデ	—	—	3	半透明13 黒3,半透明,白の微粒子	明赤焼	洗黄焼	不良	*

国 番 号	地区名	道標名	形 状	器 材 及 び 存 在	調 整 表	文 様	色 調	施 工 材	施 工 法	備 考					
610	XVI	SA53		調 部	→ナゲ	→ナゲ	—	—	?	薄4 半透明1,半透明,黒の微粒子	緑	明赤緑	不 良	表面部分的スス付着	
611	*	*		底 部	ナゲ	ナゲ	—	—	?	茶2 半透明の微粒子	(白)	明赤緑	明 良	→ 平 底	
612	*	*		*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	3	半透明14 茶2,薄2,半透明,黒の微粒子	(白)	明赤緑	明 良	好 *	
613	*	*		*	→ナゲ	ナゲ	—	—	2	半透明 半透明,黒の微粒子	(白)	浅黄緑	灰黄緑	やや不 良	*
614	*	*		*	→ナゲ	ナゲ?	—	—	?	半透明7 白1,黒1,半透明の微粒子		明赤緑	明 不 良	あけ底	
615	*	SA54	深 鉢	口縁部 →側部	→ナゲ	→ナゲ	—	—	3	半透明11 黒1,半透明,黒の微粒子		灰黄緑	灰黄緑	やや不 良	波状口縁
616	*	*	深 鉢	*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	2	半透明17 半透明の微粒子	(白,黒)	灰黄緑	明赤緑	不 良	表,裏部分のスス付着
617	*	*		口縁部	→ナゲ	ナゲ	—	—	5	黒14,白2 半透明,黒,半透明,白,茶の微粒子		明赤緑	明 不 良		
618	*	*		*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	3	半透明 黒4,各微粒子	(茶)	明赤緑	明 不 良	表面スス付着	
619	*	*		*	→ナゲ	ナゲ	—	—	3	黒2,白1 半透明14,各微粒子		灰 緑	明赤緑	不 良	表,裏部分的に スス付着
620	*	*		*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	2	半透明12 白3,半透明,白,黒の微粒子		浅黄緑	浅黄緑	不 良	表面部分的スス付着
621	*	*		*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	3	半透明12 白2,半透明,白,黒の微粒子		浅黄緑	浅黄緑	不 良	
622	*	*		*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	5	半透明10 白2,黒5,各微粒子	(茶)	浅黄緑	浅黄緑	やや不 良	
623	*	*		*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	?	半透明 半透明,黒,白,茶の微粒子		明赤緑	明 不 良		
624	*	*		*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	3	半透明23 半透明,黒,白の微粒子		明赤緑	灰黄緑	不 良	
625	*	*		*	→ナゲ	ヘナゲ	—	—	3	半透明18 半透明,黒の微粒子	(灰,茶)	灰 緑	明 不 良	表面部分的スス付着	
626	*	*		*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	3	半透明18 黒4,各微粒子	(白)	明赤緑	明 不 良		
627	*	*		*	*	*	—	—	3	半透明9 黒2,茶1,各微粒子		明赤緑	灰黄緑	好	表面部分的スス付着
628	*	*		*	*	*	—	—	1	半透明 黒の微粒子		明赤緑	明 不 良		
629	*	*	深 鉢	口縁部 →側部	→ナゲ	→ナゲ	—	—	2	半透明3 白,黒,半透明の微粒子		明赤緑	明 不 良	表面部分的スス付着 精製研土跡	
630	*	*		*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	3	黒7,白2,茶2 半透明4,各微粒子		黒 緑	明 不 良	精製研土跡 口縁部肥厚	

国 番 号	地区名	道標名	形 状	器 材 及 び 存 在	調 整 表	文 様	色 調	施 工 材	施 工 法	備 考					
631	XVI	SA54		口縁部	→ナゲ	→ナゲ	—	—	3	半透明13 半透明,黒,白の微粒子	黒	明赤緑	不 良		
632	*	*		*	*	浅い凹線	—	—	2	半透明7 半透明,黒,茶の微粒子	灰 緑	灰黄緑	やや不 良		
633	*	*		*	ヘナゲの上をナゲ	ナゲ	凹 点	—	?	半透明7 半透明,白,黒,茶の微粒子		明赤緑	明 不 良	口縁部肥厚	
634	*	*		*	→ナゲ	→ナゲ	凹 線	—	2	透明1 半透明,半透明,黒,茶の微粒子		灰 緑	明 不 良		
635	*	*	深 鉢	*	ヘナゲ	→ナゲ	左側の凹線	—	2	白の半透明2 茶2,黒の微粒子		明赤緑	明 不 良	表面部分的スス付着	
636	*	*	深 鉢	口縁部	→ナゲ	ヘナゲ	沈 線	—	1	半透明4 白の微粒子,半透明の微粒子	(黒)	明赤緑	明 不 良	精製研土跡 表面部分的スス付着	
637	*	*		側 部	→ナゲ	→ナゲ	—	—	3	半透明12 黒1,半透明,黒,白の微粒子		浅黄緑	明 不 良	表面部分的スス付着	
638	*	*		*	ヘナゲ	→ナゲ	凹 線 (深凹線?)	—	?	黒,茶,半透明の微粒子		灰 緑	灰 好		
639	*	*		*	ヘナゲ	→ナゲ	—	—	2	半透明7 半透明,黒,白の微粒子		明赤緑	明 不 良	表面部分的スス付着	
640	*	*		底 部	→ナゲ	→ナゲ	—	—	2	半透明7 茶1,半透明,黒の微粒子		浅黄緑	明 不 良		
641	*	*		*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	5	半透明23 黒7,各微粒子	(茶)	明赤緑	明 不 良		
642	*	*		*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	3	半透明11 黒1,半透明,黒,白の微粒子	(茶)	明赤緑	灰黄緑	*	あけ底
643	*	*		*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	3	半透明10 白3,茶1,各微粒子		明赤緑	明 不 良		
644	*	*		*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	3	半透明10 半透明,黒の微粒子	(茶,白)	明赤緑	灰 不 良	やや不 良	
645	*	*		*	*	*	—	—	3	半透明11 白3,黒1,半透明の微粒子		浅黄緑	灰 不 良		
646	*	*		口縁部	→ナゲ	→ナゲ	—	—	7	半透明25 黒1,半透明,黒,白,茶の微粒子		明赤緑	明 不 良	表面スス付着	
647	*	*		*	→ナゲ	→ナゲ	—	—	2	半透明12 黒1,半透明の微粒子		明 不 良	やや不 良		
648	*	*		*	*	凹線(凹文 竹葉?)	—	—	3	半透明18 黒3,半透明,黒,茶の微粒子		明赤緑	明 不 良		
649	*	*		*	表面部分の上を→ナゲ	→ナゲ	—	—	3	透明3,黒6,茶6 半透明10,茶2,各微粒子	(白の跡)	明赤緑	明 不 良	やや不 良	
650	*	*		*	→ナゲ	→ナゲ	凹線(竹葉?)	—	5	半透明15,白の跡 黒9,各微粒子		明 不 良	明 不 良	やや不 良	
651	*	*		*	表面の上を→ナゲ	→ナゲ	—	—	3	半透明13 黒4,半透明,黒,茶の微粒子		浅黄緑	浅黄緑	*	

図面番号	地区名	通称名	器形	器部及び寸法	調 整 文 様				胎 土	色 調		焼 成	備 考	
					表	裏	裏	裏		表	裏			
652	XXI	SA54	口 縁 部	→ナゲ 長縁糸供										
653	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
654	*	*	網 部	→ナゲ 長縁糸供										
655	*	*	底 部	→ナゲ 長縁糸供										
656	*	*	*	ナゲ	ナゲ	→ナゲ								
657	*	SA55	口 縁 部	→ナゲ										
658	*	*	底 部	→ナゲ										
659	*	*	*	→ナゲ										
660	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*

図面番号	地区名	通称名	器形	器部 (高さ:cm)	器 部 調 整				胎 土	色 調		焼 成	備 考	
					外 器 部	内 器 部	内 器 部	内 器 部		外 器 部	内 器 部			
661	IX	SC1	深鉢	口縁部	よこナゲ→	横いよこナゲ→	→	3条の浅沈線	→	ごく細かい石斑を多量、 1mmの砂粒を含有	暗 褐色 (7.5YR 5/2)	暗 褐色 (7.5YR 5/2)	良好	外器部にスス付着
662	*	深鉢	口縁部	長縁糸供→	長縁糸供→	→	長縁糸供	→	やや多量の粗い0.5mm 程度の砂粒・石斑・ 鉄屑を含有	暗 褐色 (5YR 5/2)	暗 褐色 (5YR 5/2)	良好	流状口縁	
663	*	深鉢	口縁部	よこナゲ→	よこナゲ→	→	長縁糸供	→	やや多量の粗い0.5mm 程度の砂粒・石斑	暗 褐色 (5YR 5/2)	暗 褐色 (5YR 5/2)	良好	→	
664	*	深鉢	口縁部	よこナゲ→	よこナゲ→	→	長縁糸供	→	やや多量の粗い0.5- 1mmの砂粒を多量、石斑 を含有	暗 褐色 (5YR 5/2)	暗 褐色 (5YR 5/2)	良好	→	
665	*	深鉢	底 部	ナゲ	ナゲ	→	不明	→	3-4mmの石斑を少量、 ごく細かい石斑	暗 褐色 (7.5YR 5/2)	暗い褐色 (7.5YR 5/2)	良好	→	
666	*	深鉢	底 部	ナゲ	ナゲ	→	不明	→	ごく細かい石斑と2- 3mmの砂粒を含有	暗 褐色 (5YR 5/2)	暗い褐色 (7.5YR 5/2)	良好	→	
667	西地区	深鉢	口縁部	よこナゲ→	よこナゲ→	→	沈線に19筋の 刺突列点文	→	やや多量の粗い1-1.5mm 程度の砂粒・石斑・ 鉄屑を含有	暗い褐色 (5YR 5/2)	暗い褐色 (5YR 5/2)	良好	流状口縁 内器部にスス付着	
668	*	深鉢	口縁部	よこナゲ→	よこナゲ→	→	沈線、刺突列点文	→	やや多量の粗い0.5mm 程度の砂粒・石斑	暗 褐色 (5YR 5/2)	暗い褐色 (5YR 5/2)	良好	→	
669	*	深鉢	口縁部	よこナゲ→	よこナゲ→	→	沈線、刺突列点文	→	やや多量の粗い0.5mm 程度の砂粒・石斑	暗 褐色 (5YR 5/2)	暗い褐色 (5YR 5/2)	良好	→	
670	*	深鉢	口縁部	よこナゲ→	よこナゲ→	→	内縁文、流線部 に2-2.5mm沈線	→	やや多量の粗い0.5- 3mmの砂粒・石斑	暗 褐色 (5YR 5/2)	暗い褐色 (5YR 5/2)	良好	→	
671	*	深鉢	口縁部	よこナゲ→	よこナゲ→	→	長縁糸供	→	多量の粗い0.5mm程度 の砂粒	暗 褐色 (7.5YR 5/2)	暗い褐色 (7.5YR 5/2)	良好	→	
672	*	深鉢	口縁部	よこナゲ→	よこナゲ→	→	刺突列点文	→	多量の粗い 0.5-1mm程度の砂粒	暗 褐色 (7.5YR 5/2)	暗い褐色 (7.5YR 5/2)	良好	→	
673	*	深鉢	口縁部	よこナゲ→	よこナゲ→	→	長縁糸供	→	多量の粗い 0.5-1mm程度の砂粒、石斑	暗 褐色 (5YR 5/2)	暗い褐色 (7.5YR 5/2)	良好	→	
674	*	深鉢	口縁部	よこナゲ→	よこナゲ→	→	刺突列点文	→	多量の粗い 0.5-1mm程度の砂粒、 石斑を含有	暗 褐色 (7.5YR 5/2)	暗い褐色 (7.5YR 5/2)	良好	→	
675	*	深鉢	底 部	ナゲ	ナゲ	→	沈線文	→	多量の粗い 0.5-1mm程度の砂粒	暗 褐色 (7.5YR 5/2)	暗い褐色 (7.5YR 5/2)	良好	→	
676	*	深鉢	口縁部	よこナゲ→	よこナゲ→	→	太い沈線文	→	多量の粗い 1-1.5mmの砂粒	暗い褐色 (5YR 5/2)	暗い褐色 (5YR 5/2)	良好	→	
677	*	深鉢	口縁部	よこナゲ→	よこナゲ→	→	刺突列点文	→	やや多量の粗い 0.5mm程度の砂粒、 石斑・鉄屑	暗 褐色 (7.5YR 5/2)	暗い褐色 (7.5YR 5/2)	良好	→	
678	*	深鉢	口縁部	よこナゲ→	よこナゲ→	→	刺突列点文	→	やや多量の粗い 1-1.5mm程度の砂粒	暗 褐色 (5YR 5/2)	暗い褐色 (7.5YR 5/2)	良好	→	
679	*	深鉢	口縁部	よこナゲ→	よこナゲ→	→	半割竹葉による 刺突列点文	→	多量の粗い 0.5-1mm程度の砂粒、 石斑	暗 褐色 (7.5YR 5/2)	暗い褐色 (5YR 5/2)	良好	→	
680	*	深鉢	口縁部	長縁糸供→	長縁糸供→	→	刺突列点文	→	やや多量の粗い 0.5-1mm程度の砂粒	暗 褐色 (7.5YR 5/2)	暗い褐色 (7.5YR 5/2)	良好	→	
681	*	深鉢	口縁部	長縁糸供	長縁糸供	→	刺突列点文	→	多量の粗い 1-1.5mm程度の砂粒	暗い褐色 (7.5YR 5/2)	暗い褐色 (7.5YR 5/2)	良好	→	

国産番号	地区名(漢字)	器形	器部(寸法)	器面		文様	胎土	色調		焼成	備考
				外面	内面			外面	内面		
682	西地区	深鉢	口縁部	貝殻赤褐色	貝殻赤褐色	—	—	中々の褐色 1.0-1.5mmの砂粒 (7.5YR 5/2)	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	良好	—
683	*	深鉢	口縁部	貝殻赤褐色 よこナゲ	貝殻赤褐色 よこナゲ	—	—	中々の褐色 1.0-1.5mmの砂粒 多量 (7.5YR 5/2)	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	中々不良	—
684	*	深鉢	口縁部	ナゲ	貝殻赤褐色	—	—	中々の褐色 1.0-1.5mmの砂粒 少量 (7.5YR 5/2)	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	中々不良	—
685	*	深鉢	底面	よこナゲ	ナゲ	網代文	—	中々の褐色 1.0-1.5mmの砂粒 少量 (7.5YR 5/2)	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	良好	—
686	*	浅鉢	口縁部	ヘラミギキ	ヘラミギキ	—	洗練(1条)	中々の褐色 1.0-1.5mmの砂粒 少量 (7.5YR 5/2)	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	良好	精製磁土器
687	*	深鉢	胴部	縄文 よこナゲ	よこナゲ	—	—	中々の褐色 1.0-1.5mmの砂粒 少量 (7.5YR 5/2)	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	良好	精製磁土器
688	*	深鉢	胴部	縄文 よこナゲ	よこナゲ	—	—	中々の褐色 1.0-1.5mmの砂粒 少量 (7.5YR 5/2)	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	良好	精製磁土器
689	I区	深鉢	胴部	山形押型文 ナゲ	ナゲ	—	—	中々の褐色 1.0-1.5mmの砂粒 少量 (7.5YR 5/2)	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	良好	精製磁土器
690	*	深鉢	口縁部	ナゲ	よこナゲ	—	—	1-2.5mmの砂粒多量	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	良好	流紋口縁 外器面にスチ付着
691	*	深鉢	口縁部	よこナゲ	よこナゲ	—	2条の浅い凹線	石灰・炭粒を含む	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	良好	粗製土器
692	*	深鉢	口縁部	よこナゲ	ナゲ	—	短間隔の2列 横線	1mm程度の砂粒	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	中々不良	口縁部にスチ付着
693	*	深鉢	口縁部	よこナゲ	よこナゲ	—	山形の刺型文	石灰・炭粒を含む	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	良好	—
694	*	深鉢	口縁部	ナゲ	よこナゲ	—	—	1mm程度の砂粒	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	中々不良	—
695	*	深鉢	口縁部	ナゲ	貝殻赤褐色 よこナゲ	—	—	石灰・炭粒・その他の 砂粒を含む	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	良好	—
696	*	深鉢	口縁部	貝殻赤褐色 よこナゲ	貝殻赤褐色 よこナゲ	—	—	中々の褐色 1.0-1.5mmの砂粒 少量 (7.5YR 5/2)	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	中々不良	流紋口縁
697	*	深鉢	口縁部	ナゲ	貝殻赤褐色 よこナゲ	—	—	石灰・炭粒を含む	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	良好	流紋口縁
698	*	浅鉢	口縁部	ヘラミギキ	ヘラミギキ	—	洗練(1条)	中々の褐色 1.0-1.5mmの砂粒 少量 (7.5YR 5/2)	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	中々不良	精製磁土器
699	*	浅鉢	口縁部	ヘラミギキ	ヘラミギキ	—	—	中々の褐色 1.0-1.5mmの砂粒 少量 (7.5YR 5/2)	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	良好	口縁部に炭粒 精製磁土器
700	*	浅鉢	胴部	ヘラミギキ	ヘラミギキ	—	—	中々の褐色 1.0-1.5mmの砂粒 少量 (7.5YR 5/2)	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	良好	精製磁土器
701	*	浅鉢	胴部	ヘラミギキ	ヘラミギキ	—	—	中々の褐色 1.0-1.5mmの砂粒 少量 (7.5YR 5/2)	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	良好	精製磁土器
702	*	浅鉢	胴部	よこナゲ	よこナゲ	—	—	1-2.5mmの砂粒 石灰・炭粒	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	良好	粗製土器 内器面にスチ付着

国産番号	地区名(漢字)	器形	器部(寸法)	器面		文様	胎土	色調		焼成	備考
				外面	内面			外面	内面		
703	I区	深鉢	胴部	よこナゲ	ナゲ	—	—	1mm程度の砂粒 石灰・炭粒 (5YR 5/2)	暗赤褐色 (2.5YR 5/2)	良好	—
704	*	深鉢	胴部	ナゲ	よこナゲ	—	—	0.5-1mmの砂粒 石灰・炭粒 (7.5YR 5/2)	暗赤褐色 (2.5YR 5/2)	良好	外器面にスチ付着
705	*	深鉢	胴部	ナゲ	ナゲ	—	—	中々の褐色 1.0-1.5mmの砂粒多量 (7.5YR 5/2)	暗赤褐色 (2.5YR 5/2)	良好	外・内器面にスチ付着
706	*	深鉢	胴部	よこナゲ	ナゲ	—	—	中々の褐色 1.0-1.5mmの砂粒少量 石灰・炭粒 (5YR 5/2)	暗赤褐色 (2.5YR 5/2)	良好	—
707	*	深鉢	胴部	ナゲ	ナゲ	—	—	中々の褐色 1.0-1.5mmの砂粒少量 石灰・炭粒 (5YR 5/2)	暗赤褐色 (2.5YR 5/2)	良好	—
708	*	深鉢	底面	赤褐色	ナゲ	不明	—	1mm程度の砂粒 2-3mmの赤褐色の砂粒 (5YR 5/2)	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	良好	—
709	*	深鉢	底面	赤褐色	ナゲ	不明	—	1-2mmの石灰多量 1mm程度の砂粒多量 (2.5YR 5/2)	暗赤褐色 (2.5YR 5/2)	良好	—
710	*	深鉢	底面	よこナゲ	ナゲ	不明	—	1mm程度の砂粒 石灰・炭粒 (5YR 5/2)	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	良好	—
711	*	深鉢	底面	よこナゲ	ナゲ	不明	—	1mm程度の砂粒 石灰・炭粒 (5YR 5/2)	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	良好	—
712	*	脚部	貝殻赤褐色 よこナゲ	ヘラミギキ よこナゲ	よこナゲ	洗練文	—	中々の褐色 1.0-1.5mmの砂粒 石灰・炭粒 (7.5YR 5/2)	暗赤褐色 (2.5YR 5/2)	良好	脚付磁土器の脚 部。通しがある
713	II区	深鉢	胴部(2.5寸)	ナゲ	よこナゲ	—	—	中々の褐色 1.0-1.5mmの砂粒多量 石灰・炭粒・炭屑 (7.5YR 5/2)	暗赤褐色 (2.5YR 5/2)	良好	外器面にスチ付着
714	*	深鉢	胴部	ナゲ	ナゲ	—	—	石灰多量を含む	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	良好	外・内器面にスチ付着
715	*	深鉢	口縁部	よこナゲ	貝殻赤褐色 よこナゲ	—	—	1mm程度の砂粒 石灰・炭粒 (5YR 5/2)	暗赤褐色 (2.5YR 5/2)	中々不良	外器面にスチ付着
716	*	深鉢	口縁部	よこナゲ	よこナゲ	—	—	1mm程度の砂粒 石灰・炭粒 (5YR 5/2)	暗赤褐色 (2.5YR 5/2)	良好	外器面にスチ付着
717	*	深鉢	口縁部	よこナゲ	ナゲ	—	—	石灰・炭粒を含む	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	良好	—
718	*	深鉢	口縁部	ナゲ	よこナゲ	—	—	石灰・炭粒を含む	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	良好	—
719	*	深鉢	口縁部	よこナゲ	ナゲ	—	—	石灰・炭粒を含む	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	中々不良	流紋口縁
720	*	脚部	よこナゲ	よこナゲ	—	—	—	0.5-1mmの砂粒 石灰・炭粒・炭屑 を含む (7.5YR 5/2)	にぶい褐色 (7.5YR 5/2)	良好	外・内器面にスチ付着
721	*	深鉢	胴部	よこナゲ	ナゲ	—	—	中々の褐色 1.0-1.5mmの砂粒 石灰・炭粒 (7.5YR 5/2)	暗赤褐色 (2.5YR 5/2)	良好	外器面にスチ付着
722	*	浅鉢	胴部	ヘラミギキ	ヘラミギキ	—	—	中々の褐色 1.0-1.5mmの砂粒 石灰・炭粒 (7.5YR 5/2)	暗赤褐色 (2.5YR 5/2)	良好	脚付磁土器 外器面にスチ付着
723	*	浅鉢	胴部	ヘラミギキ	ヘラミギキ	—	—	中々の褐色 1.0-1.5mmの砂粒 石灰・炭粒 (7.5YR 5/2)	暗赤褐色 (2.5YR 5/2)	良好	脚付磁土器 外器面にスチ付着

区画番号	地区名(備考)	地号	図形	部名(図記)	器 面 調 整		文 種		胎 土	色 調		焼 成	備 考
					外部面	内部面(底面)	外部面	内部面		外部面	内部面		
724	Ⅱ区	深鉢	胴部	貝殻赤線 1.5mmの砂粒	ヘラナゲ	—	貝殻線(5条)	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (7.5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	不良	群集文土器 外・内部面にスス付
725	*	深鉢	胴部	貝殻赤線	ヘラナゲ	ナゲ	貝殻線様文	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	群集文土器
726	*	深鉢	胴部	ナゲ(斜方向)	よこなゲ	—	沈線文	—	—	—	—	不良	群集文土器の胎土 中やみ
727	*	深鉢	底面	貝殻赤線	ナゲ	不明	—	—	1-2mmの石片・黒炭 を多く含む	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	中やみ
728	*	深鉢	底面	ナゲ	ナゲ	よこなゲ	—	—	1-2mmの石片・黒炭 を多く含む	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	中やみ
729	*	深鉢	底面	ナゲ(放射状?)	よこなゲ (放射状)	ナゲ	—	—	1-2mmの石片・黒炭 を多く含む	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	中やみ
730	*	深鉢	底面	ナゲ	ナゲ	風化 ナゲ?	—	—	1-2mmの石片・黒炭 を多く含む	灰白色 (7.5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	中やみ
731	*	深鉢	底面	よこなゲ	よこなゲ	ナゲ?	ナゲ	—	1-2mmの石片・黒炭 を多く含む	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	中やみ
732	Ⅲ区	深鉢	口縁部	貝殻赤線	貝殻赤線	—	貝殻線様文	—	0.5mmの砂粒 石灰・黒炭	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	沈線口縁 左右にススあり
733	*	深鉢	口縁部	貝殻赤線	貝殻赤線	—	貝殻線様文	—	1mm程度の砂粒 石灰	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
734	*	深鉢	口縁部	よこなゲ	よこなゲ	—	太い沈線(3条)	—	1mm程度の砂粒 石灰	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
735	*	深鉢	口縁部	ヘラナゲ	よこなゲ	—	—	—	1mm程度の砂粒多 量石灰	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
736	*	浅鉢	口縁部	よこなゲ ナゲ(斜方向)	よこなゲ	—	—	—	0.5mm程度の砂粒 石灰・黒炭	灰白色 (7.5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	群集文土器 外・内部面にスス付
737	*	浅鉢	口縁部	よこなゲ ナゲ(斜方向)	よこなゲ ナゲ(斜方向)	—	—	—	0.5mm程度の砂粒 石灰・黒炭	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	群集文土器 外・内部面にスス付
738	*	深鉢	底面	ナゲ	ナゲ	円状にナゲ	—	—	1-2mmの石片・黒炭 を多く含む	灰白色 (7.5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
739	*	深鉢	底面	ナゲ	ナゲ	不明	—	—	1-2mmの石片・黒炭 を多く含む	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
740	Ⅳ区	深鉢	口縁部 (口)	よこなゲ ナゲ(斜方向)	よこなゲ	—	—	—	1-2mmの石片・黒炭 を多く含む	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	外器面にスス付
741	*	深鉢	口縁部 (口)	よこなゲ	よこなゲ	—	—	—	0.5mm程度の砂粒 石灰・黒炭	灰白色 (7.5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	外器面にスス付
742	*	深鉢	口縁部 (口)	ナゲ	よこなゲ	—	—	—	0.5mm程度の砂粒 石灰・黒炭	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	中不良	胎土
743	*	深鉢	口縁部 (口)	よこなゲ ナゲ(斜方向)	よこなゲ ナゲ(斜方向)	—	—	—	0.5mm程度の砂粒 石灰・黒炭	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	沈線口縁
744	*	深鉢	口縁部	よこなゲ ナゲ(斜方向)	よこなゲ	—	—	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	外器面にスス付

区画番号	地区名(備考)	地号	図形	部名(図記)	器 面 調 整		文 種		胎 土	色 調		焼 成	備 考
					外部面	内部面(底面)	外部面	内部面		外部面	内部面		
745	Ⅳ区	深鉢	口縁部	よこなゲ	よこなゲ	—	—	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
746	*	深鉢	口縁部	よこなゲ	よこなゲ	—	—	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
747	*	深鉢	口縁部	よこなゲ	よこなゲ	—	—	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
748	*	深鉢	口縁部	よこなゲ	よこなゲ	—	—	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
749	*	深鉢	口縁部	よこなゲ	よこなゲ	—	—	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
750	*	深鉢	口縁部	ヘラナゲ	ヘラナゲ	—	—	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
751	*	深鉢	口縁部	よこなゲ	ナゲ	—	—	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
752	*	深鉢	口縁部	よこなゲ	よこなゲ	—	—	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
753	*	深鉢	口縁部	よこなゲ	よこなゲ	—	—	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
754	*	深鉢	口縁部	よこなゲ	よこなゲ	—	—	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
755	*	深鉢	口縁部	よこなゲ	よこなゲ	—	—	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
756	*	深鉢	口縁部	よこなゲ	よこなゲ	—	—	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	中不良	胎土
757	*	深鉢	口縁部	ナゲ	よこなゲ	—	—	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	中不良	胎土
758	*	深鉢	口縁部	貝殻赤線	よこなゲ	—	—	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
759	*	深鉢	口縁部	ナゲ	ナゲ	—	—	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
760	*	深鉢	口縁部	ヘラナゲ	よこなゲ	—	—	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
761	*	深鉢	口縁部	よこなゲ	よこなゲ	—	—	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
762	*	深鉢	口縁部	よこなゲ	ナゲ?	—	—	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
763	*	深鉢	口縁部	よこなゲ	よこなゲ	—	—	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
764	*	浅鉢	口縁部	よこなゲ	よこなゲ	—	—	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	良好	胎土
765	*	浅鉢	口縁部	よこなゲ	よこなゲ	—	—	—	中やみの粗い 1.5mmの砂粒	灰白色 (5YR 5)	灰黄色 (5YR 5)	中不良	胎土







国番号	地区名称(漢字)	地形	部部(標高10m)	断面		文様		胎土		色	調	構成	備考
				外器面	内器面(底面)	外器面	内器面	外器面	内器面				
892	江防区	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ	よこへらミギキ	—	斜め方向に磨鏡 研削(2条)	—	1-2mmの厚さの石 灰・白土の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	特殊研土器
894	*	洗鉢	口縁部	ミギキ	ミギキ	—	凹線(2条)	—	1mm厚の石灰・赤土 の粉砕物	灰黄色 (OYR 5)	灰黄色 (OYR 5)	良好	*
895	*	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ 斜めへらミギキ	ナダ	—	口縁部に凹線(1条)	—	2-3mmの厚さの石 灰・赤土の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	特殊研土器 外・内器面にスチ付
896	*	洗鉢	底面	よこへらミギキ	よこへらミギキ	—	凹線(1条)	—	1-2mmの厚さの石 灰・赤土の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	特殊研土器
897	*	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ	よこへらミギキ	—	沈線(1条)	—	1-2mmの厚さの石 灰・赤土の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	*
898	*	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ	よこへらミギキ	—	—	—	1-2mmの厚さの石 灰・赤土の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	*
899	*	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ	よこへらミギキ	—	—	—	1-2mmの厚さの石 灰・赤土の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	*
900	*	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ	よこへらミギキ	—	—	—	1-2mmの厚さの石 灰・赤土の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	*
901	*	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ	よこへらミギキ	—	—	—	1mm厚の石灰・赤土 の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	*
902	*	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ	よこへらミギキ	—	—	—	1mm厚の石灰・赤土 の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	*
903	*	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ へらミギキ	よこへらミギキ へらミギキ	—	—	—	1-2mmの厚さの石 灰・赤土の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	特殊研土器 外・内器面にスチ付
904	*	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ	よこへらミギキ	—	—	—	1mm厚の石灰・赤土 の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	特殊研土器 外・内器面にスチ付
905	*	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ	よこへらミギキ	—	沈線(1条)	—	1mm厚の石灰・赤土 の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	*
906	*	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ	よこへらミギキ	—	沈線(1条) 磨鏡 穿孔	—	石灰・赤土の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	*
907	*	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ	よこへらミギキ	—	—	—	石灰・赤土の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	*
908	*	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ	よこへらミギキ	—	—	—	1mm厚の石灰・赤土 の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	*
909	*	洗鉢	底面	へらミギキ	ナダ	—	—	—	細粒の赤土・赤土 の粉砕物	灰黄色 (OYR 5)	灰黄色 (OYR 5)	良好	*
910	*	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ	よこへらミギキ	—	沈線(1条)	沈線(1条)	細粒の赤土・赤土 の粉砕物	灰黄色 (OYR 5)	灰黄色 (OYR 5)	良好	*
911	*	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ	よこへらミギキ	—	沈線(1条)	凹線(1条)	1-2mmの厚さの石 灰・赤土の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	*
912	*	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ	よこへらミギキ	—	沈線(1条)	深い凹線(1条)	1-2mmの厚さの石 灰・赤土の粉砕物	灰黄色 (OYR 5)	灰黄色 (OYR 5)	良好	特殊研土器 外器面にスチ付

国番号	地区名称(漢字)	地形	部部(標高10m)	断面		文様		胎土		色	調	構成	備考
				外器面	内器面(底面)	外器面	内器面	外器面	内器面				
913	江防区	洗鉢	口縁部	へらミギキ	ナダ	—	横線(1条)	凹線(1条)	1mm厚の石灰・赤土 の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	灰黄色 (OYR 5)	良好	特殊研土器
914	*	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ	よこへらミギキ	—	—	—	1mm厚の石灰・赤土 の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	特殊研土器 外・内器面にスチ付
915	*	洗鉢	口縁部	へらミギキ	へらミギキ	—	—	沈線(1条)	1mm厚の石灰・赤土 の粉砕物	灰黄色 (OYR 5)	灰黄色 (OYR 5)	良好	特殊研土器
916	*	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ	よこへらミギキ	—	沈線(1条)	沈線(1条)	2-3mmの厚さの石 灰・赤土の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	特殊研土器
917	*	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ	よこへらミギキ	—	沈線(1条)	沈線(1条)	2-3mmの厚さの石 灰・赤土の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	特殊研土器
918	*	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ へらミギキ	よこへらミギキ	—	—	—	1-2mmの厚さの石 灰・赤土の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	特殊研土器
919	*	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ	よこへらミギキ	—	—	—	1mm厚の石灰・赤土 の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	特殊研土器
920	*	洗鉢	口縁部	よこへらミギキ	よこへらミギキ	—	—	—	1mm厚の石灰・赤土 の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	特殊研土器 外器面にスチ付
921	*	洗鉢	口縁部	ミギキ	ミギキ	—	—	—	1mm厚の石灰・赤土 の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	特殊研土器 外器面にスチ付
922	*	底面	ミギキ	ミギキ	斜めへらミギキ	—	—	—	1mm厚の石灰・赤土 の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	特殊研土器 外器面にスチ付
923	*	底面	たてへらミギキ	ミギキ	へらミギキ	—	—	—	1-2mmの厚さの石 灰・赤土の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	特殊研土器 外器面にスチ付
924	*	底面	たてへらミギキ	ミギキ	ナダ	—	—	—	1-2mmの厚さの石 灰・赤土の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	特殊研土器 外器面にスチ付
925	*	底面	ミギキ	ミギキ	—	—	—	—	1mm厚の石灰・赤土 の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	特殊研土器 外器面にスチ付
926	*	底面	よこへらミギキ	へらミギキ	よこへらミギキ	—	—	—	1mm厚の石灰・赤土 の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	特殊研土器 外器面にスチ付
927	*	底面	ナダ	ナダ	ナダ	—	—	—	1-2mmの厚さの石 灰・赤土の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	特殊研土器 外器面にスチ付
928	*	底面	ナダ	ナダ	ナダ	—	—	—	1-2mmの厚さの石 灰・赤土の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	特殊研土器 外器面にスチ付
929	*	底面	ナダ	ナダ	ナダ	—	—	—	1-2mmの厚さの石 灰・赤土の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	特殊研土器 外器面にスチ付
930	*	底面	ナダ	ナダ	ナダ	—	—	—	1-2mmの厚さの石 灰・赤土の粉砕物	黒褐色 (OYR 5)	黒褐色 (OYR 5)	良好	特殊研土器 外器面にスチ付
931	*	深鉢	口縁部	横文 よこへらミギキ	よこへらミギキ	—	横文 凹線(2条)	—	1-2mmの厚さの石 灰・赤土の粉砕物	灰黄色 (OYR 5)	灰黄色 (OYR 5)	良好	特殊研土器
932	*	深鉢	口縁部	横文 ミギキ	ミギキ	—	横文 凹線(2条)	—	2-3mmの厚さの石 灰・赤土の粉砕物	灰黄色 (OYR 5)	灰黄色 (OYR 5)	良好	特殊研土器 外器面にスチ付
933	*	深鉢	底面	横文 へらミギキ	ナダ	—	横文 凹線(2条)	—	1-2mmの厚さの石 灰・赤土の粉砕物	灰黄色 (OYR 5)	灰黄色 (OYR 5)	良好	特殊研土器 外器面にスチ付

図面番号	地区名 (種別)	地形	器部 (径・高)	器 器 器		文 文 文		胎 土 色		焼成	備考
				外 形 商	内 形 商 (断面)	外 形 商	内 形 商	胎 土	内 形 商		
934	以取	製	よこナデ 14.0	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	1-2mmの石・土 多量	にぶい褐色 (10Y R 5)	良好	黄褐色土器
935	*	深鉢	貝殻糸取 (44.3)	貝殻糸取	貝殻糸取	ナデ	貝殻糸取	0.5mmの砂粒多量 石質	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	外器面にスチ付着
936	*	深鉢	貝殻糸取 ヘラナデ	よこナデ	よこナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1-2mmの砂粒	にぶい褐色 (7.5Y R 5)	良好	外器面にスチ付着
937	*	深鉢	貝殻糸取	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1-2mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	深鉢口縁
938	*	深鉢	貝殻糸取	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1-2mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	深鉢口縁
939	*	深鉢	貝殻糸取	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1-2mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	深鉢口縁
940	*	深鉢	貝殻糸取	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1-2mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	深鉢口縁
941	*	深鉢	貝殻糸取	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1-2mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	深鉢口縁
942	*	深鉢	貝殻糸取	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1-2mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	深鉢口縁
943	*	深鉢	貝殻糸取	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1-2mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	深鉢口縁
944	*	深鉢	貝殻糸取	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1-2mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	深鉢口縁
945	*	深鉢	貝殻糸取	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1-2mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	深鉢口縁
946	*	深鉢	貝殻糸取	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1-2mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	深鉢口縁
947	*	深鉢	貝殻糸取	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1-2mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	深鉢口縁
948	*	深鉢	貝殻糸取	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1-2mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	深鉢口縁
949	*	深鉢	貝殻糸取	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1-2mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	深鉢口縁
950	*	深鉢	貝殻糸取	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1-2mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	深鉢口縁
951	*	深鉢	貝殻糸取	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1-2mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	深鉢口縁
952	*	深鉢	貝殻糸取	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1-2mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	深鉢口縁
953	*	深鉢	貝殻糸取	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1-2mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	深鉢口縁
954	*	深鉢	貝殻糸取	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1-2mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	深鉢口縁

図面番号	地区名 (種別)	地形	器部 (径・高)	器 器 器		文 文 文		胎 土 色		焼成	備考
				外 形 商	内 形 商 (断面)	外 形 商	内 形 商	胎 土	内 形 商		
955	以取	深鉢	口頸部 (31.1)	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	1-5mmの砂粒 石質・灰質	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	中やま
956	*	深鉢	口頸部 (31.1)	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	1-4mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	外器面にスチ付着
957	*	深鉢	口頸部 (25.0)	よこナデ	よこナデ	ナデ	ナデ	0.5mm程度の砂粒 石質・灰質	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	外器面にスチ付着
958	*	深鉢	口頸部 (28.4)	よこナデ	よこナデ	ナデ	ナデ	1-2mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	外器面にスチ付着
959	*	深鉢	口頸部 (27.2)	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	1-3mmの砂粒 石質・灰石少量	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	外器面にスチ付着
960	*	深鉢	口頸部 (27.1)	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1mm以下の砂粒多量	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	外器面にスチ付着
961	*	深鉢	口頸部 (27.1)	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1mm以下の砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	外器面にスチ付着
962	*	深鉢	口頸部 (28.7)	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	1mm以下の砂粒多量 灰質	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	外器面にスチ付着
963	*	深鉢	口頸部 (41.9)	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1mm以下の砂粒多量	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	外器面にスチ付着
964	*	深鉢	口頸部 (31.9)	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1mm以下の砂粒多量	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	外器面にスチ付着
965	*	深鉢	口頸部 (28.3)	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1mm以下の砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	外器面にスチ付着
966	*	深鉢	口頸部 (28.3)	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1mm以下の砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	外器面にスチ付着
967	*	深鉢	口頸部 (22.2)	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	0.5-1mmの砂粒 石質・灰石少量	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	外器面にスチ付着
968	*	深鉢	口頸部 (28.4)	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	1-2mmの砂粒 石質・灰石少量	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	外器面にスチ付着
969	*	深鉢	口頸部 (28.4)	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 2mm程度の砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	外器面にスチ付着
970	*	深鉢	口頸部 (19.1)	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1-2mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	内器面にスチ付着
971	*	深鉢	口頸部 (18.3)	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1-2mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	内器面にスチ付着
972	*	深鉢	口頸部 (23.5)	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	1-3mmの砂粒 石質・灰石少量	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	外器面にスチ付着
973	*	深鉢	口頸部 (17.3)	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1mm以下の砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	外器面にスチ付着
974	*	深鉢	口頸部 (28.3)	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 1mm以下の砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	外器面にスチ付着
975	*	深鉢	口頸部 (19.3)	よこナデ	ナデ	ナデ	ナデ	中やまのがれ 2-3mmの砂粒	明赤褐色 (7.5Y R 5)	良好	外器面にスチ付着

図面 番号	地区名 (通称)	形状	設置 高さ(m)	設置調整		文様		防土	色調		構成	備考
				外壁面	内壁面 (底面)	外壁面	内壁面		外壁面	内壁面		
976	IXIX	深鉢	口縁部 (18.8)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
977	*	深鉢	口縁部 (14.7)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
978	*	深鉢	口縁部 (13.0)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
979	*	深鉢	口縁部 (13.4)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
980	*	深鉢	口縁部 (18.1)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
981	*	深鉢	口縁部 (22.7)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
982	*	深鉢	口縁部 (20.3)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
983	*	深鉢	口縁部 (20.3)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
984	*	深鉢	口縁部 (20.5)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
985	*	深鉢	口縁部 (18.5)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
986	*	深鉢	口縁部 (15.5)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
987	*	深鉢	口縁部 (18.3)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
988	*	深鉢	口縁部 (15.7)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
989	*	深鉢	口縁部 (15.7)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
990	*	深鉢	口縁部 (15.7)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
991	*	深鉢	口縁部 (15.7)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
992	*	深鉢	口縁部 (15.7)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
993	*	深鉢	口縁部 (15.7)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
994	*	深鉢	口縁部 (15.7)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
995	*	深鉢	口縁部 (15.7)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
996	*	深鉢	口縁部 (15.7)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好

図面 番号	地区名 (通称)	形状	設置 高さ(m)	設置調整		文様		防土	色調		構成	備考
				外壁面	内壁面 (底面)	外壁面	内壁面		外壁面	内壁面		
997	IXIX	深鉢	口縁部 (18.8)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
998	*	深鉢	口縁部 (14.7)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
999	*	深鉢	口縁部 (13.0)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
1000	*	深鉢	口縁部 (13.4)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
1001	*	深鉢	口縁部 (18.1)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
1002	*	深鉢	口縁部 (22.7)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
1003	*	深鉢	口縁部 (20.3)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
1004	*	深鉢	口縁部 (20.3)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
1005	*	深鉢	口縁部 (20.5)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
1006	*	深鉢	口縁部 (18.5)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
1007	*	深鉢	口縁部 (15.5)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
1008	*	深鉢	口縁部 (18.3)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
1009	*	深鉢	口縁部 (15.7)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
1010	*	深鉢	口縁部 (15.7)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
1011	*	深鉢	口縁部 (15.7)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
1012	*	深鉢	口縁部 (15.7)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
1013	*	深鉢	口縁部 (15.7)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
1014	*	深鉢	口縁部 (15.7)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
1015	*	深鉢	口縁部 (15.7)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
1016	*	深鉢	口縁部 (15.7)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好
1017	*	深鉢	口縁部 (15.7)	よこナデ	よこナデ	—	—	—	—	—	中央	良好

図面 番号	地区名 (建設地)	地形	部 号 (m)	色		胎土	色		焼成	備考
				外	内		外	内		
1018	XXIV	深緑	口緑部	青緑部の上 よこナゲ	青緑部の上 よこナゲ	—	青緑部の上 よこナゲ	青緑部の上 よこナゲ	良好	建設口緑
1019	*	深緑	口緑部	よこナゲ	よこナゲ	—	よこナゲ	よこナゲ	良好	外・内面にスチ付
1020	*	深緑	口緑部	よこナゲ	よこナゲ	—	よこナゲ	よこナゲ	良好	建設口緑、建設土部 に青緑、内面にスチ 付
1021	*	深緑	口緑部	ナゲ	よこナゲ	—	ナゲ	よこナゲ	良好	建設土部 建設口緑
1022	*	深緑	口緑部	よこナゲ	青緑部の上 よこナゲ	—	青緑部の上 よこナゲ	青緑部の上 よこナゲ	良好	建設口緑
1023	*	深緑	口緑部	ナゲ	青緑部の上 よこナゲ	—	ナゲ	青緑部の上 よこナゲ	良好	建設口緑に青あり
1024	*	深緑	口緑部	ナゲ	よこナゲ	—	ナゲ	よこナゲ	良好	
1025	*	深緑	口緑部	よこナゲ	よこナゲ	—	よこナゲ	よこナゲ	良好	
1026	*	深緑	口緑部	よこナゲ	ナゲ	—	ナゲ	よこナゲ	良好	
1027	*	深緑	口緑部	青緑部の上 よこナゲ	青緑部の上 よこナゲ	—	青緑部の上 よこナゲ	青緑部の上 よこナゲ	良好	
1028	*	深緑	口緑部	よこナゲ	よこナゲ	—	よこナゲ	よこナゲ	良好	
1029	*	深緑	口緑部	青緑部の上 よこナゲ	よこナゲ	—	青緑部の上 よこナゲ	青緑部の上 よこナゲ	良好	建設口緑、建設土部 内面にスチ付
1030	*	深緑	口緑部	よこナゲ	よこナゲ	—	よこナゲ	よこナゲ	良好	
1031	*	深緑	口緑部	青緑部の上 よこナゲ	青緑部の上 よこナゲ	—	青緑部の上 よこナゲ	青緑部の上 よこナゲ	良好	建設土部 建設口緑
1032	*	深緑	口緑部	青緑部の上 よこナゲ	ナゲ	—	青緑部の上 よこナゲ	青緑部の上 よこナゲ	良好	建設口緑
1033	*	深緑	口緑部	よこナゲ	ナゲ	—	よこナゲ	よこナゲ	良好	
1034	*	深緑	口緑部	よこナゲ	ナゲ	—	よこナゲ	よこナゲ	良好	
1035	*	深緑	口緑部	よこナゲ	強いナゲ よこナゲ	—	よこナゲ	よこナゲ	良好	
1036	*	深緑	口緑部	ナゲ	よこナゲ	—	ナゲ	よこナゲ	良好	
1037	*	深緑	口緑部	よこナゲ	よこナゲ	—	よこナゲ	よこナゲ	良好	
1038	*	深緑	口緑部	青緑部の上 よこナゲ	青緑部の上 よこナゲ	—	青緑部の上 よこナゲ	青緑部の上 よこナゲ	良好	

図面 番号	地区名 (建設地)	地形	部 号 (m)	色		胎土	色		焼成	備考
				外	内		外	内		
1039	XXIV	深緑	口緑部	よこナゲ	よこナゲ	—	よこナゲ	よこナゲ	良好	
1040	*	深緑	口緑部	よこナゲ	よこナゲ	—	よこナゲ	よこナゲ	良好	
1041	*	深緑	口緑部	よこナゲ	よこナゲ	—	よこナゲ	よこナゲ	良好	
1042	*	深緑	口緑部	よこナゲ	よこナゲ	—	よこナゲ	よこナゲ	良好	外・内面にスチ付
1043	*	深緑	口緑部	よこナゲ	よこナゲ	—	よこナゲ	よこナゲ	良好	
1044	*	深緑	口緑部	青緑部の上 よこナゲ	よこナゲ	—	青緑部の上 よこナゲ	青緑部の上 よこナゲ	良好	
1045	*	深緑	口緑部	よこナゲ	青緑部の上 よこナゲ	—	よこナゲ	青緑部の上 よこナゲ	良好	外・内面にスチ付
1046	*	深緑	口緑部	よこナゲ	ナゲ	—	よこナゲ	ナゲ	良好	
1047	*	深緑	口緑部	よこナゲ	ナゲ	—	よこナゲ	ナゲ	良好	
1048	*	深緑	口緑部	よこナゲ	ナゲ	—	よこナゲ	ナゲ	良好	
1049	*	深緑	口緑部	よこナゲ	よこナゲ	—	よこナゲ	よこナゲ	不良	
1050	*	深緑	口緑部	青緑部の上 よこナゲ	青緑部の上 よこナゲ	—	青緑部の上 よこナゲ	青緑部の上 よこナゲ	良好	
1051	*	深緑	口緑部	よこナゲ	よこナゲ	—	よこナゲ	よこナゲ	良好	
1052	*	深緑	口緑部	よこナゲ	ナゲ	—	よこナゲ	ナゲ	良好	
1053	*	深緑	口緑部	ヘラナゲ	よこナゲ	—	ヘラナゲ	よこナゲ	良好	建設土部 青ありは少ない
1054	*	深緑	口緑部	青緑部の上 よこナゲ	青緑部の上 よこナゲ	—	青緑部の上 よこナゲ	青緑部の上 よこナゲ	良好	
1055	*	深緑	口緑部	よこナゲ	よこナゲ	—	よこナゲ	よこナゲ	良好	建設土部
1056	*	深緑	口緑部	よこナゲ	よこナゲ	—	よこナゲ	よこナゲ	良好	建設土部
1057	*	深緑	口緑部	よこナゲ	よこナゲ	—	よこナゲ	よこナゲ	良好	建設土部
1058	*	深緑	口緑部	よこナゲ	よこナゲ	—	よこナゲ	よこナゲ	良好	建設土部
1059	*	深緑	口緑部	よこナゲ	よこナゲ	—	よこナゲ	よこナゲ	良好	



区分番号	地区名(通称)	形状	部外寸法(m)	部面調整		文種		土色		構成	備考
				外壁面	内壁面	(底面)	外壁面	内壁面	外壁面		
1109	Ⅲ地区	底	ヘラケズリ のあとナゲ	両側のヘラケズリ 深部は上ナゲ	ナゲ	-	1-2mmの砂粒	浅黄褐色 (5.5YR 6/2)	灰黄色 (10YR 6/2)	良好	内壁面にスチ付着
1104	*	底	なてにヘラケズリ	よこナゲの上と 斜面的なナゲ	ナゲ	-	1-2mmの石灰多量 赤褐色粘土少量	浅黄褐色 (10YR 6/2)	浅黄褐色 (10YR 5/2)	良好	
1103	*	底	よこナゲ	印刷のナゲ	印刷のナゲ	-	ややきめの粗い 1mm以下の砂粒	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	灰黄色 (10YR 6/2)	良好	
1105	*	底	ヘラケズリ のあとナゲ	よこナゲ	ナゲ よこナゲ	-	1-2mmの石灰、黒鉄 屑少量	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	灰黄色 (10YR 6/2)	良好	内壁面にスチ付着
1106	*	底	多方向からの 斜めのナゲ	ナゲ	ナゲ	-	1-2mmの石灰、黒鉄 屑少量	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	良好	
1107	*	底	ヘラケズリ のあとナゲ	ナゲ	ナゲ	-	1-2mmの石灰多量 4mm以下の砂粒(赤鉄屑) 少量	浅黄褐色 (10YR 6/2)	浅黄褐色 (10YR 6/2)	良好	
1108	*	底	ヘラケズリ	ナゲ	ナゲ	-	ややきめの粗い 0.5-1mmの砂粒少量	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	灰黄色 (10YR 6/2)	良好	やや不良
1109	*	底	よこナゲ	ナゲ	ナゲ	-	0.5-1mmの砂粒	黄褐色 (10YR 6/2)	灰黄色 (10YR 6/2)	良好	
1110	*	底	ヘラケズリ のあとナゲ	ナゲ	ナゲ	-	1-2mmの石灰、黒鉄 屑少量、2-3mmの 砂粒少量	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	灰黄色 (10YR 6/2)	良好	内壁面にスチ付着
1111	*	底	ヘラケズリ のあとナゲ	ミダナ	ナゲ	-	1-2mmの石灰多量	浅黄褐色 (10YR 6/2)	灰黄色 (10YR 6/2)	良好	
1112	*	底	ナゲ	ナゲ	ナゲ	-	1-2mmの石灰多量 赤褐色粘土少量	浅黄褐色 (10YR 6/2)	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	良好	
1113	*	底	よこナゲ	ナゲ	ナゲ	-	1-2mmの石灰多量 赤褐色粘土少量	浅黄褐色 (10YR 6/2)	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	良好	
1114	*	底	ヘラケズリ のあとよこナゲ	ナゲ	ナゲ	-	1-2mmの石灰、黒鉄 屑少量	浅黄褐色 (10YR 6/2)	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	良好	ややあげ底
1115	*	底	なてナゲ よこナゲ	ナゲ	ナゲ	-	0.5-1mmの砂粒 赤褐色粘土少量	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	良好	
1116	*	底	ナゲ	よこナゲ	ナゲ(?)	-	0.5-1mmの砂粒 黒鉄屑少量	黄褐色 (10YR 6/2)	灰黄色 (10YR 6/2)	良好	
1117	*	底	よこナゲ なてナゲ	よこナゲ なてナゲ	ナゲ(?)	-	1mm程度の石灰多量	黄褐色 (10YR 6/2)	灰黄色 (10YR 6/2)	良好	内壁面にスチ付着
1118	*	底	ヘラケズリ	ナゲ	ヘラケズリ	-	ややきめの粗い 0.5-1mm程度の砂粒 赤褐色粘土少量	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	黄褐色 (10YR 6/2)	良好	
1119	*	底	ナゲ	ナゲ	ナゲ	-	0.5-1mmの砂粒	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	黄褐色 (10YR 6/2)	良好	ややあげ底
1120	*	底	なてナゲ	よこナゲ	ナゲ(?)	-	1mm程度の石灰、黒鉄 屑少量	黄褐色 (10YR 6/2)	黄褐色 (10YR 6/2)	良好	
1121	*	底	なてナゲ(?)	ナゲ	不明	-	1-2mmの石灰、黒鉄 屑少量	浅黄褐色 (10YR 6/2)	灰黄色 (10YR 6/2)	良好	
1122	*	底	斜方向にヘラケズリ のあとナゲ	ナゲ	ナゲ	-	1mm程度の石灰多量 2-4mmの石灰少量	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	黄褐色 (10YR 6/2)	良好	ややあげ底

区分番号	地区名(通称)	形状	部外寸法(m)	部面調整		文種		土色		構成	備考	
				外壁面	内壁面	(底面)	外壁面	内壁面	外壁面			内壁面
1123	Ⅲ地区	底	よこナゲ ナゲ	ナゲ	斜断方向のナゲ	-	-	ややきめの粗い 1-2mmの石灰多量 赤褐色粘土少量	浅黄褐色 (10YR 6/2)	灰黄色 (10YR 6/2)	良好	あげ底
1124	*	底	底面の上とナゲ	よこナゲ	不明	-	-	1-2mmの石灰多量 2-3mmの石灰少量	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	黄褐色 (10YR 6/2)	良好	
1125	*	底	ヘラケズリ	ナゲ	ナゲ	-	-	0.5-1mmの砂粒赤褐色 粘土少量	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	灰黄色 (10YR 6/2)	良好	あげ底
1126	*	注口土留	注口 ナゲ	ナゲ	-	-	-	ややきめの粗い 1mm程度の砂粒	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	灰黄色 (10YR 6/2)	良好	
1127	*	注口土留	注口の部には4 ナゲ(1ナゲ?)	注口の部には4 ナゲ(1ナゲ?)	-	-	-	0.5-1mmの砂粒	黄褐色 (10YR 6/2)	灰黄色 (10YR 6/2)	良好	新設の部、土留外 部も取替
1128	*	高環	よこナゲ	ナゲ	よこナゲ	沈積	-	石灰、黒鉄屑の跡 赤褐色粘土少量	黄褐色 (10YR 6/2)	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	良好	透しあり 跡も取替
1129	*	高環	取りとナゲ	ナゲ	ナゲ	-	-	ややきめの粗い 1-2mmの砂粒	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	良好	あげ底
1130	*	高環	環	ヘラミダナ ミダナ	ミダナ	-	-	0.5-1mmの砂粒赤褐色 粘土少量	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	灰黄色 (10YR 6/2)	良好	
1131	*	高環	脚	よこナゲ	ナゲ	ナゲ	-	0.5-1mmの砂粒赤褐色 粘土少量	浅黄褐色 (10YR 6/2)	灰黄色 (10YR 6/2)	良好	やや不良 あげ底
1132	*	高環	脚	ヘラミダナ ミダナ	ミダナ	ナゲ	-	ややきめの粗い 0.5-1mmの砂粒	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	良好	透しあり あげ底
1133	*	高環	脚	よこナゲ	-	ナゲ	-	ややきめの粗い 1mm程度の砂粒少量	黄褐色 (10YR 6/2)	-	良好	
1134	*	高環	脚	ヘラミダナ ミダナ	ミダナ	-	-	0.5-1mmの砂粒赤褐色 粘土少量	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	灰黄色 (10YR 6/2)	良好	透しあり あげ底
1135	*	脚	脚	具懸垂の一の あとナゲ	-	印刷部に 具懸垂線文	印刷部に 具懸垂線文	きめの粗い 0.5-1mmの砂粒	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	良好	新設の部、土留外 部の取替も1層
1136	*	脚	脚	具懸垂の一の あとナゲ	-	助付曲突部 斜突部点文	助付曲突部 斜突部点文	きめの粗い 0.5-1mmの砂粒赤褐色 粘土少量	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	灰黄色 (10YR 6/2)	良好	脚付具懸垂土留の 部
1137	*	脚	脚	具懸垂の一の あとナゲ	-	助付曲突部 斜突部点文	助付曲突部 斜突部点文	きめの粗い 0.5-1mmの砂粒赤褐色 粘土少量	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	良好	脚付具懸垂土留の 部
1138	*	脚	脚	よこナゲ	よこナゲ	-	-	0.5-1mmの砂粒赤褐色 粘土少量	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	良好	
1139	*	脚	脚	具懸垂の上と ナゲ	よこナゲ	-	-	0.5-1mmの砂粒赤褐色 粘土少量	黄褐色 (10YR 6/2)	明赤褐色 (5YR 6/2)	良好	
1140	*	脚	脚	よこナゲ	よこナゲの上と なてナゲ	-	-	ややきめの粗い 1-2mmの砂粒	浅黄褐色 (10YR 6/2)	にがい褐色 (7.5YR 6/2)	良好	
1141	*	脚	脚	ヘラケズリ	ヘラケズリ	-	-	きめの粗い 白っぽい硬砂粒	明赤褐色 (5YR 6/2)	明赤褐色 (5YR 6/2)	良好	
1142	*	脚	脚	ヘラケズリ 具懸垂の上 とナゲ	ヘラケズリ 具懸垂の上 とナゲ	-	-	ややきめの粗い 1-2mmの砂粒赤褐色 粘土少量	明赤褐色 (5YR 6/2)	明赤褐色 (5YR 6/2)	良好	方形の可能性あり
1143	*	脚	脚	ヘラケズリ 具懸垂の上 とナゲ	ヘラケズリ 具懸垂の上 とナゲ	-	-	きめの粗い 0.5-1mm程度の砂粒	明赤褐色 (5YR 6/2)	明赤褐色 (5YR 6/2)	良好	精緻土留

図面番号	地区名 (建築地)	建物 種類	部 位 (図面 番号)	部 屋 調 整		文 様		胎 土		色 調		構成	備考
				外 部 面	内 部 面 (庇 下)	外 部 面	内 部 面	外 部 面	内 部 面	外 部 面	内 部 面		
1144	XXX	舞台 付座	舞台 座	上方の両側 壁の上部ナ ナ	真鍮色帯の上 をナゲナ	ナゲ ヘナナ	—	—	3mm前後の砂粒 1mm以下の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (2.5YR 5/6)	良好	舞台
1145	*	舞台 付座	舞台 座	不明	赤色の上ナ ナ	ナゲ	—	—	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	舞台
1146	*	舞台 付座	舞台 座	よこナゲ**	ナゲ	ナゲ** (2.5mm前後)	—	—	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	舞台
1147	*	舞台 付座	舞台 座	ナゲ	ナゲ	ナゲ	—	—	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	舞台
1148	*	舞台 付座	舞台 座	真鍮色帯	ナゲ	—	—	—	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	舞台
1149	*	舞台 付座	舞台 座	ナゲ(?)	よこナゲ	—	—	—	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	舞台
1150	*	舞台 付座	舞台 座	よこナゲ 真鍮色帯	よこナゲ	—	—	—	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	舞台
1151	*	舞台 付座	舞台 座	ナゲ よこナゲ	ナゲ ヘナナ	—	—	—	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	舞台
1152	*	舞台 付座	舞台 座	よこナゲ**	よこナゲ**	—	—	—	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	舞台
1153	*	舞台 付座	舞台 座	よこナゲ**	ミガキ	左回りのナゲ みナゲ	—	—	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	—
1154	*	舞台 付座	舞台 座	よこナゲ**	ケズリのと よこナゲ	—	—	—	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	透し入り(図中)
1155	*	舞台 付座	舞台 座	真鍮色帯 ナゲ	ケズリのと ナゲ	真鍮色帯	—	—	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	丹
1156	*	小窓	はば型 (1.1)	よこヘナミガ キ**	ていねいな よこナゲ**	ヘナミガキ (回転方向)	—	—	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	丹 透し入り 精製研土
1157	*								赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	—	真鍮色 石目 透し入り
1158	階段	深縁	口縁部	よこナゲ**	よこナゲ**	—	浅い凹縁 (2条)	—	0.5 - 2mmの砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	—
1159	*	深縁	口縁部	よこナゲ**	よこナゲ**	—	—	—	2mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	外縁面にスス付
1160	*	深縁	口縁部	よこヘナナ	よこヘナナ	—	—	—	0.5 - 2mmの砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	外縁面にスス付
1161	*	深縁	口縁部	赤色の帯 よこナゲ**	赤色の帯 よこナゲ**	—	—	—	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	外縁面にスス付
1162	*	深縁	口縁部	赤色の帯 よこナゲ**	よこナゲ**	—	—	—	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	中不良	—
1163	*	深縁	口縁部	ナゲ 斜め裏入れ	よこナゲ** よこヘナミガ キ	よこナゲ**	—	—	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	外縁面にスス付
1164	*	深縁	口縁部	よこナゲ**	よこナゲ**	—	—	—	0.5 - 1.5mmの砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	外縁面にスス付

図面番号	地区名 (建築地)	建物 種類	部 位 (図面 番号)	部 屋 調 整		文 様		胎 土		色 調		構成	備考
				外 部 面	内 部 面 (庇 下)	外 部 面	内 部 面	外 部 面	内 部 面	外 部 面	内 部 面		
1165	階段	深縁	口縁部	よこナゲ** 赤色の帯の上 をナゲ	ナゲ	—	—	—	1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	—
1166	*	深縁	口縁部	よこナゲ** よこヘナミガ キ	よこナゲ**	—	沈面(1条)	沈面(1条)	ごく細かい砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	精製研土
1167	*	深縁	口縁部	よこナゲ**	よこナゲ**	—	—	—	ごく細かい砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	—
1168	*	深縁	口縁部	よこナゲ** よこヘナミガ キ	よこナゲ**	—	—	—	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	精製研土
1169	*	深縁	口縁部	よこナゲ** よこヘナミガ キ	よこナゲ**	—	沈面(1条)	—	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	精製研土
1170	*	深縁	口縁部	よこナゲ**	斜めナゲ	—	—	—	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	中不良	—
1171	*	深縁	口縁部	よこナゲ**	真鍮色帯の上 をナゲ	—	—	—	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	中不良	—
1172	*	深縁	口縁部	よこナゲ** 赤色の帯の上 をナゲ	ナゲ	—	真鍮色帯	沈面	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	—
1173	*	深縁	口縁部	よこナゲ** よこヘナミガ キ	よこナゲ**	—	—	—	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	精製研土
1174	*	深縁	口縁部	赤色の帯 よこナゲ**	よこナゲ**	—	—	—	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	内縁面にスス付
1175	*	深縁	口縁部	真鍮色帯の上 をナゲ	真鍮色帯の上 をよこナゲ**	—	真鍮色帯	—	赤色の帯 1mm前後の砂粒 若干	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	暖 赤 色 (1.5YR 5/6)	良好	—



表24 土器片鑑定・観察表

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	直径	利用部分	質 量 色				備 考	
								質 量	色	質 量	色		
1	SA 1	A	4.81	3.23	0.57	12.9	胴 部	**ナデ	**ナデ	黒 質	灰 黄	良 好	
2	*	*	3.76	2.71	0.49	9.9	*	磨 き 跡	*	灰 質	黒 質	*	スズ付着
3	SA 3	*	3.70	1.98	1.51	11.3	*	貝殻赤灰	—	—	—	*	
4	SA 40	*	2.87	2.08	1.76	8.8	*	**ナデ	*	に白い煙	に白い煙	*	
5	*	*	2.96	2.65	0.89	7.0	*	磨 き 跡	ナデ	に白い煙	に白い煙	*	
6	*	*	5.84	4.05	1.81	28.3	*	*	*	明赤黄	明赤黄	*	
7	*	*	(2.64)	2.59	0.59	(5.5)	*	—	—	灰黄	*	*	
8	*	*	2.88	2.51	1.71	6.7	*	ナデ	*	—	—	*	
9	SA 47	*	3.53	3.28	1.60	9.6	*	**磨 き	**磨 き	浅黄	浅黄	*	
10	SA 50	*	(1.92)	2.68	1.62	(3.6)	*	ナデ	*	*	*	*	
11	*	*	(2.71)	(3.23)	0.73	(7.0)	*	ナデ	*	*	*	*	
12	I 区	*	2.53	2.46	1.01	7.2	*	—	—	明赤黄	明赤黄	*	
13	*	*	2.96	1.95	0.90	6.1	口縁支線部	貝殻赤灰	*	—	—	*	
14	*	*	3.90	2.82	0.69	9.6	胴 部	—	—	に白い煙	に白い煙	やや良好	表面風化
15	*	*	2.98	2.13	0.85	6.5	*	ナデ	ナデ	に白い煙	に白い煙	良 好	
16	*	*	2.91	2.49	1.09	8.7	*	*	*	—	—	*	
17	IV 区	*	3.78	2.33	0.97	9.7	*	*	*	に白い煙	に白い煙	*	
18	*	*	3.48	2.72	1.05	11.1	*	貝殻赤灰	貝殻赤灰	明赤黄	明赤黄	*	
19	*	C	3.82	3.70	1.68	6.2	*	磨 き 跡	*	灰 質	黒 質	*	
20	*	A	3.15	3.05	0.99	11.0	*	貝殻赤灰	—	灰 質	黒 質	*	スズ付着
21	*	*	(2.61)	2.43	1.04	(7.5)	*	*	貝殻赤灰	浅黄	浅黄	不 良	
22	*	*	3.95	2.69	0.91	11.0	*	ナデ	ナデ	に白い煙	に白い煙	やや不良	
23	*	*	3.61	3.02	0.98	13.0	*	貝殻赤灰	—	浅黄	浅黄	良 好	
24	V 区	*	3.82	2.63	1.09	12.5	*	ナデ	ナデ	灰黄	灰黄	やや不良	
25	*	*	3.82	2.65	1.14	12.8	口縁支線部	貝殻赤灰	貝殻赤灰	明赤黄	明赤黄	良 好	
26	*	*	3.58	3.22	1.25	17.8	胴 部	*	*	*	*	やや不良	
27	*	*	2.48	1.80	0.86	4.3	*	*	*	暗赤黄	明赤黄	良 好	
28	VI 区	*	3.71	2.86	0.71	9.2	口縁支線部	*	*	明赤黄	灰黄	*	
29	Ⅷ区	*	(3.95)	(3.70)	0.64	13.4	胴 部	ナデ	ナデ	灰黄	灰黄	不 良	
30	XV 区	*	2.70	1.90	0.89	5.5	*	*	*	浅黄	明赤黄	良 好	
31	*	*	5.41	4.29	1.09	34.8	胴 部	*	*	明赤黄	明赤黄	やや良好	スズ付着
32	*	*	3.86	2.55	1.14	13.7	胴 部	貝殻赤灰	ナデ	—	—	良 好	

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	直径	利用部分	質 量 色				備 考		
								質 量	色	質 量	色			
33	XV 区	A	3.74	2.21	0.98	8.2	胴 部	—	—	—	浅黄	黒 質	良 好	
34	*	*	(2.61)	4.43	0.96	10.4	*	貝殻赤灰	—	灰黄	—	*		
35	*	*	3.81	3.19	0.70	21.4	*	ナデ	ナデ	*	灰黄	—	やや良好	
36	*	*	2.78	2.22	1.01	8.5	*	貝殻赤灰	ナデ	浅黄	明赤黄	良 好		
37	Ⅷ区	*	7.20	4.93	1.14	41.3	文様部	—	貝殻赤灰	暗赤黄	明赤黄	*		
38	*	*	4.54	3.54	1.27	31.0	胴 部	ナデ	ナデ	浅黄	*	*		
39	*	*	2.38	1.64	0.84	4.5	*	磨 き	*	に白い煙	に白い煙	やや良好		
40	*	*	2.77	1.82	1.11	6.6	*	ナデ	*	—	—	良 好		
41	*	*	2.95	2.27	1.03	8.3	*	ナデ	*	明赤黄	暗赤黄	*		
42	*	*	2.94	2.13	0.95	7.2	*	ナデ	*	に白い煙	に白い煙	*		
43	*	*	2.82	1.82	0.95	4.7	*	貝殻赤灰	*	に白い煙	—	*		
44	*	*	2.66	2.44	0.99	7.5	口縁部付着	—	貝殻赤灰	—	—	*		
45	*	*	2.97	2.37	0.96	7.3	胴 部	*	*	*	明赤黄	*		
46	*	B	2.99	2.04	0.91	6.1	*	—	—	灰黄	灰黄	不 良		
47	*	A	3.15	2.29	0.71	5.9	胴 部	ナデ	ナデ	灰黄	明赤黄	*		
48	*	*	3.32	1.99	0.88	7.0	胴 部	貝殻赤灰	—	明赤黄	—	良 好		
49	*	*	3.55	2.36	0.88	9.4	*	*	*	—	—	やや良好		
50	*	*	2.87	2.17	1.18	5.8	*	磨 き 跡	*	—	—	やや良好		
51	*	*	3.49	1.91	1.14	9.5	*	磨 き 跡	ナデ	に白い煙	に白い煙	やや良好		
52	*	*	2.70	2.88	1.06	9.0	*	*	貝殻赤灰	浅黄	—	良 好		
53	*	*	3.14	2.88	1.34	14.3	*	*	*	—	—	やや良好		
54	*	*	3.41	2.58	0.97	9.7	*	*	*	暗赤黄	に白い煙	良 好		
55	*	*	3.34	2.45	0.92	9.1	口縁部	ナデ	ナデ	灰黄	灰黄	*	スズ付着	
56	*	*	3.62	2.46	0.76	7.6	胴 部	磨 き 跡	灰黄	に白い煙	*			
57	*	*	3.10	2.65	1.03	10.5	口縁部	—	ナデ	—	—	やや不良		
58	*	*	3.06	2.52	0.87	6.7	胴 部	ナデ	赤黄	浅黄	浅黄	不 良		
59	*	*	3.73	2.30	0.96	8.6	*	—	—	*	*	良 好		
60	*	*	3.45	2.53	0.80	8.1	*	—	—	に白い煙	—	やや不良		
61	*	*	3.69	2.68	1.17	14.5	胴 部	ナデ	ナデ	—	—	良 好		
62	*	*	4.19	2.64	1.18	15.2	胴 部	貝殻赤灰	貝殻赤灰	浅黄	—	良 好		
63	*	*	3.95	2.71	0.93	10.4	*	ナデ	ナデ	灰黄	灰黄	不 良		
64	*	*	3.50	2.73	0.68	8.2	*	*	*	灰黄	—	良 好		

番号	原土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	重さ	利用部分	刷色				塗成	備考			
								青	黄	赤	黒					
65	119区	A	3.74	2.81	1.03	13.5	脚部	ナ	ナ	ナ	ナ	良	好			
66	*	*	3.95	2.87	1.04	14.5	*	貝殻色版	*	明赤版	明赤版	*	*			
67	*	*	3.89	2.67	0.78	9.4	*	ナ	*	灰版	灰版	*	*	スス付着		
68	*	*	4.19	2.89	1.60	18.3	*	貝殻色版	貝殻色版	*	黒版	*	*			
69	*	*	3.97	3.18	0.81	17.8	*	磨き	磨き	黒版	明赤版	*	*			
70	*	*	4.00	3.61	0.63	10.4	脚部	*	*	黒版	明赤版	*	*	スス付着		
71	*	*	4.15	3.26	0.96	14.9	口部	ナ	ナ	ナ	灰版	灰版	*	*		
72	*	*	4.40	2.83	0.74	11.8	脚部	貝殻色版	貝殻色版	明赤版	明赤版	*	*			
73	*	*	4.62	2.94	0.98	16.4	脚部	ナ	ナ	ナ	灰版	黒版	*	*	スス付着	
74	*	*	4.28	3.35	0.65	12.0	*	磨き	磨き	灰版	黒版	灰版	*	*		
75	*	*	4.95	3.75	0.65	15.7	*	*	*	黒版	黒版	*	*	スス付着		
76	*	*	4.64	3.52	0.98	19.6	脚部	ナ	ナ	ナ	明赤版	明赤版	*	*		
77	*	*	5.30	3.60	1.13	29.5	脚部	磨き	磨き	磨き	灰版	灰版	*	*		
78	*	*	4.40	3.23	0.93	10.4	*	—	—	灰版	灰版	灰版	*	*	やや不良	
79	*	C	3.54	1.79	0.93	7.7	*	ナ	ナ	ナ	磨き	磨き	*	*	良好	
80	*	*	2.82	2.19	1.16	7.7	*	—	—	洗黄版	洗黄版	洗黄版	*	*	やや不良	
81	*	B	3.28	2.50	1.26	11.7	*	ナ	ナ	ナ	灰版	灰版	*	*	良好	
82	*	*	2.82	2.59	0.98	10.1	*	*	*	磨き	磨き	洗黄版	*	*		
83	*	A	3.88	2.86	0.80	7.6	*	*	*	明赤版	明赤版	*	*			
84	*	*	(2.24)	3.30	0.81	11.1	*	磨き	磨き	洗黄版	洗黄版	洗黄版	*	*		
85	*	*	4.86	(2.71)	0.81	10.2	*	ナ	ナ	ナ	黒版	磨き	*	*	スス付着	
86	*	*	(3.40)	3.27	0.81	9.8	*	*	*	灰版	明赤版	明赤版	*	*	不良	
87	*	*	(3.40)	3.62	0.66	8.7	*	磨き	磨き	灰版	黒版	灰版	灰版	*	*	良好
88	*	*	(2.72)	3.40	0.71	6.7	*	*	*	磨き	洗黄版	洗黄版	*	*		
89	*	*	3.35	2.67	0.84	8.8	*	—	—	磨き	灰版	灰版	*	*		
90	*	*	3.68	2.72	1.18	15.4	*	ナ	ナ	ナ	磨き	*	*			
91	*	*	(2.51)	3.41	0.94	9.3	*	磨き	一	磨き	磨き	*	*	やや不良		
92	*	*	3.56	2.80	0.87	7.9	*	ナ	ナ	ナ	洗黄版	磨き	*	*	良好	
93	*	*	3.50	3.35	0.95	14.1	*	貝殻色版	—	磨き	洗黄版	洗黄版	*	*		
94	*	*	3.82	2.88	1.02	13.6	*	*	貝殻色版	洗黄版	洗黄版	*	*			
95	*	*	4.56	2.59	1.33	19.8	*	*	洗黄版	洗黄版	洗黄版	*	*			
96	*	*	4.00	3.25	1.89	19.7	*	ナ	ナ	ナ	灰版	灰版	*	*		

表25 石斧計測一覧表

番号	原土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	備考
1	SA1	A-1	10.3	4.5	1.3	
2	*	A-2	(8.4)	4.7	2.4	
3	SA43	*	(10.6)	4.9	2.5	
4		C	9.2	2.3	1.7	
5		D	5.4	2.4	0.8	
6		A-1	(5.8)	2.7	1.4	
7	*	*	9.5	2.1	0.6	
8	A-4	8.9	5.2	2.3		
9	A-3	12.0	8.1	1.0		
10	A-2	(9.1)	5.8	3.6		
11	*	*	14.5	(5.4)	3.4	
12	A-1	(17.5)	5.9	1.3		
13	A-2	(10.3)	4.1	2.4		
14	*	*	(11.7)	5.2	3.1	
15	*	*	13.4	5.5	1.6	
16	*	*	(13.4)	4.6	2.0	
17	*	*	(8.9)	5.7	2.9	
18	A-1	10.0	5.0	1.3		
19	A-4	12.9	6.9	3.3		
20	A-2	(8.0)	4.4	2.5		
21	*	*	(7.2)	4.9	1.7	
22	*	*	(9.5)	4.6	2.8	
23	*	*	13.0	5.5	3.1	
24	*	*	(11.5)	5.1	3.1	
25	A-1	10.9	6.2	1.5		
26	A-3	(10.0)	4.2	3.0		
27	*	*	(9.0)	4.4	3.2	
28	*	*	9.3	4.9	2.2	
29	A-4	(9.0)	5.4	3.2		
30	—	—	15.4	6.9	2.2	磨黄版
31	A-2	14.0	7.6	1.2		
32	*	*	(8.8)	4.9	3.1	
33	*	*	(8.6)	5.6	2.3	
34	*	*	(10.1)	5.2	3.1	
35	*	*	(6.1)	3.9	2.8	
36	*	*	(11.9)	5.2	3.3	
37	*	*	8.9	4.6	2.4	
38	*	*	(10.3)	5.4	3.4	
39	*	*	(10.2)	4.5	2.2	
40	A-4	10.2	5.1	2.6		

番号	原土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	備考
41	*	A-2	(9.9)	5.3	2.1	
42	*	*	(9.2)	4.7	2.3	
43	*	*	(8.2)	4.5	2.5	
44	*	*	(7.0)	5.0	2.7	
45	*	*	(7.3)	(3.9)	2.3	
46	*	*	(6.0)	3.0	1.5	
47	*	*	(8.0)	4.6	3.8	
48	*	*	(5.8)	5.0	2.6	
49	A-1	(5.5)	6.0	1.7		
50	A-2	(7.5)	4.5	2.4		
51	*	*	(9.5)	4.6	1.3	
52	*	*	(3.8)	5.7	0.9	
53	*	*	(5.7)	4.9	2.3	
54	*	*	(5.9)	4.8	2.9	
55	*	*	(4.3)	5.4	2.4	
56	*	*	(5.7)	4.0	1.0	
57	*	*	(4.8)	4.3	1.4	
58	A-1	(8.4)	4.8	1.2		
59	A-2	(5.2)	4.6	1.2		
60	*	*	7.3	4.3	1.6	
61	B	14.4	7.3	2.9		
62	*	*	12.8	6.8	1.7	
63	—	—	(6.6)	4.2	1.6	
64	—	—	12.2	5.9	2.0	鋸歯具
65	B	(15.2)	7.5	10.3		
66	*	*	(10.7)	6.5	1.9	
67	*	*	(10.7)	8.0	2.0	
68	*	*	13.3	7.1	1.4	
69	*	*	10.0	6.7	1.5	
70	*	*	(8.1)	6.8	1.3	
71	*	*	(6.0)	6.5	1.2	
72	*	*	12.2	8.1	1.5	
73	*	*	9.5	6.0	1.7	
74	*	*	(8.8)	6.3	1.3	
75	*	*	9.8	6.7	1.1	
76	—	—	11.4	6.4	1.4	鋸歯具か
77	B	(9.6)	6.3	1.9		
78	*	*	(7.3)	5.7	1.2	

備考 A-1: 鋸歯具の類 A-2: 鋸刃をもつもの内部部分の類 A-3: 磨平や砥石のもの  
 A-4: 鋸刃をもつが鋸歯具の尖り部分の類 C: 砥石の類 D: 特殊な鋸歯具のある刃  
 打眼 B: 鋸歯部にだけ鋭くなるものをもつ類

表26 石鐘計測一覧表

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	重さ	備考
1	SA1	A	(2.19)	3.39	1.94	(10)	
2	*	B	5.56	5.69	1.75	76	
3	*	*	(5.19)	8.22	2.73	168	
4	SA2	A	6.36	3.46	0.90	34	
5	*	B	10.23	7.54	2.74	399	
6	SA3	*	11.02	9.82	4.56	630	
7	SA4	*	5.24	4.93	1.76	62	
8	*	*	8.73	7.43	2.17	197	
9	SA11	A	4.26	3.95	0.82	18	
10	SA15	C	7.24	7.92	0.70	69	
11	SA17	*	5.58	4.68	1.49	52	
12	SA25	B	7.09	6.53	1.48	102	
13	SA31	*	5.80	5.04	1.81	58	
14	*	*	13.10	13.31	1.58	372	
15	SA34	*	(3.81)	6.20	2.26	68	
16	*	*	11.10	8.01	2.90	310	
17	SA35	*	10.21	9.10	2.84	430	
18	SA40	*	7.74	7.61	3.24	248	
19	SA46	A	7.06	5.08	2.87	149	
20	*	B	8.71	8.88	4.19	400	
21	*	*	6.95	5.04	1.36	58	
22	*	*	5.83	7.08	2.10	130	
23	*	*	9.40	9.23	2.90	416	
24	SA47	A	5.20	4.40	1.61	50	
25	*	B	6.77	4.96	2.34	91	
26	*	*	7.61	6.33	2.24	148	
27	*	*	(3.42)	6.94	1.50	(50)	
28	SA49	*	7.32	6.34	2.25	60	
29	*	*	8.46	8.15	2.77	256	
30	*	*	10.43	8.52	1.59	238	
31	SA50	*	4.90	7.26	3.21	134	
32	*	*	7.43	6.49	2.42	167	

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	重さ	備考
33	SA50	A	5.94	4.34	1.79	62	
34	*	B	11.26	8.34	2.29	306	
35	SA51	*	6.15	4.89	1.57	73	
36	SA53	*	6.07	5.53	2.93	100	
37	SA54	*	5.79	4.72	1.41	55	
38	*	*	5.47	5.12	1.05	50	
39	XXV	A	5.27	3.59	1.60	45	
40	*	*	7.81	3.19	(1.44)	60	
41	I	*	5.44	5.12	1.27	48	
42	*	*	6.27	3.77	2.30	78	
43	*	B	14.12	12.07	4.24	1000	
44	II	A	(5.23)	4.63	(0.83)	(24)	
45	*	B	8.00	6.28	2.26	180	
46	*	*	12.38	6.25	2.83	336	
47	IV	A	4.46	2.82	1.41	24	
48	*	*	5.12	3.93	1.23	36	
49	*	*	5.91	4.46	0.94	31	
50	*	H	10.07	9.39	2.72	337	
51	V	*	4.43	3.10	1.31	24	
52	*	*	4.54	4.04	1.09	30	
53	VI	A	5.74	4.32	1.22	48	
54	XXV	B	5.69	3.73	0.71	24	
55	N	*	5.19	4.79	1.31	49	
56	*	*	9.83	7.13	1.85	211	
57	XXV	C	7.96	10.61	3.79	465	
58	IV	A	6.06	4.06	2.23	76	
59	*	*	6.85	4.27	2.10	93	
60	*	*	5.72	3.28	1.46	39	
61	*	*	5.01	3.39	1.94	20	
62	*	*	7.14	2.83	1.03	46	
63	*	*	(3.71)	(3.25)	(1.56)	(29)	
64	*	B	4.59	4.37	1.53	48	

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	重さ	備考
65	XXV	A	5.23	(3.88)	2.44	(58)	
66	XXV	*	3.92	3.30	1.03	19	
67	*	*	6.92	5.04	1.61	94	
68	XXV	B	4.90	4.33	0.84	30	
69	*	*	5.01	4.05	1.43	45	
70	XXV	A	5.14	4.13	1.17	33	
71	*	*	(4.22)	(4.45)	(0.85)	(17)	
72	*	*	5.81	3.52	1.70	30	
73	XXV	*	4.39	3.74	1.61	34	
74	*	*	5.86	4.97	2.23	70	
75	*	*	6.16	4.79	2.32	90	
76	*	*	4.47	3.35	1.36	30	
77	*	*	5.14	3.79	1.94	56	
78	N	*	5.56	4.14	1.43	46	
79	*	*	5.95	4.28	1.70	64	
80	*	*	5.05	3.94	1.46	40	
81	XXV	*	5.04	4.68	1.53	53	
82	XXV	*	4.28	3.21	1.74	32	
83	*	*	6.48	4.94	2.43	97	
84	*	*	7.02	5.63	2.75	145	
85	*	*	5.96	4.19	2.04	72	
86	*	*	5.10	4.60	1.72	60	
87	*	*	4.83	3.13	2.39	29	
88	*	*	6.12	4.32	1.50	58	
89	*	*	5.40	3.67	1.65	46	
90	*	*	6.38	3.66	1.02	48	
91	*	*	3.32	2.75	1.57	20	
92	*	*	5.36	4.31	2.16	74	
93	*	*	6.96	4.02	1.82	77	
94	*	*	5.86	4.15	1.26	48	
95	*	*	5.39	3.97	0.19	20	
96	*	*	3.89	3.11	1.82	30	

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	重さ	備考
97	XXV	A	6.79	4.95	1.39	53	
98	*	*	6.39	4.47	1.85	81	
99	*	*	3.80	3.35	1.75	26	
100	*	*	4.52	4.34	2.67	68	
101	*	*	6.42	4.30	2.24	92	
102	*	*	7.20	4.31	1.97	105	
103	*	*	6.36	3.77	2.04	73	
104	*	*	5.31	4.62	2.52	86	
105	*	*	6.25	3.95	(0.97)	20	
106	*	*	4.55	3.33	1.19	24	
107	*	*	6.61	4.12	1.67	67	
108	*	*	2.15	1.83	0.85	5	
109	*	*	3.98	2.31	1.05	16	
110	*	*	3.52	2.57	0.74	9	
111	*	*	3.51	3.31	1.30	20	
112	*	*	5.50	2.96	1.08	30	
113	*	*	4.56	4.08	1.17	32	
114	*	*	5.07	2.92	2.24	52	
115	*	*	(4.85)	(5.43)	1.95	(53)	
116	*	*	(4.58)	3.41	1.86	(44)	
117	*	B	5.04	5.00	1.35	49	
118	*	*	4.34	3.69	2.18	48	
119	*	*	4.76	2.16	1.23	26	
120	*	*	(4.68)	3.68	1.85	(44)	
121	*	A	4.82	3.96	1.51	42	
122	*	*	5.28	3.90	1.30	44	
123	*	*	5.30	4.90	2.41	64	
124	*	*	5.78	4.88	1.50	65	
125	*	B	4.89	3.63	1.19	27	
126	*	*	4.25	3.45	0.97	22	
127	*	*	6.03	4.71	2.00	100	
128	*	*	6.08	3.84	1.12	40	

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	重さ	備考
129	II	B	5.69	4.20	1.56	56	
130	XXV	*	5.58	5.67	1.96	86	
131	*	*	3.71	3.60	1.58	29	
132	*	*	3.53	3.21	1.46	23	
133	*	A	4.95	3.63	1.47	38	
134	*	B	4.83	4.48	0.90	30	
135	*	*	5.30	4.98	1.66	64	
136	*	*	6.44	6.01	2.11	116	
137	*	*	6.21	3.77	1.66	56	
138	*	*	7.00	4.04	1.60	76	
139	*	*	7.21	5.76	2.50	172	
140	*	*	9.97	5.21	2.33	190	
141	*	*	6.36	6.61	2.87	169	
142	*	*	8.33	6.92	3.19	243	
143	*	*	7.61	7.38	3.65	258	
144	*	*	8.56	7.63	3.25	195	
145	*	*	9.76	8.45	4.62	500	
146	*	*	9.17	8.43	3.70	388	
147	*	*	10.32	7.82	2.78	338	
148	*	*	10.36	7.28	1.96	228	
149	IV	*	11.06	10.05	3.56	540	
150	XXV	*	10.01	7.41	2.82	326	
151	*	*	9.56	6.10	1.67	169	
152	*	*	10.99	10.53	2.83	464	
153	*	*	11.32	9.82	2.52	438	
154	*	*	9.81	9.96	4.05	580	
155	*	*	11.25	8.02	1.99	240	
156	*	D	10.38	9.70	2.39	386	
157	*	C	4.68	3.67	1.75	40	
158	*	*	5.44	4.35	2.24	74	
159	*	*	6.94	5.21	2.12	107	
160	*	*	6.65	6.09	3.04	172	

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	重さ	備考
161	XXV	C	8.58	6.12	2.06	166	
162	*	C	6.82	5.79	1.64	89	
163	*	*	7.47	6.65	3.37	228	
164	*	*	10.57	9.56	2.31	267	
165	*	D	9.44	7.54	2.28	248	
166	*	*	7.51	6.35	1.87	117	
167	*	D	10.45	10.27	3.17	444	
168	*	*	8.08	7.14	2.74	186	
169	*	(546)	10.64	10.12	3.32	520	
170	*	*	7.84	6.56	3.43	248	
171	*	A	5.63	4.20	1.96	63	
172	XXV	*	5.42	4.53	2.26	77	
173	XXV	*	5.09	3.94	2.34	74	
174	*	*	(4.99)	4.13	1.21	(31)	
175	I	*	4.44	3.47	1.30	39	
176	XXV	*	5.05	3.44	1.75	40	
177	I	B	5.37	4.73	1.99	75	
178	*	*	10.67	7.81	2.73	264	
179	--	A	6.32	4.10	1.81	90	
180	--	*	6.47	4.13	2.12	84	
181	--	*	5.86	3.17	1.20	34	
182	--	C	4.33	5.40	2.35	69	
183	--	B	5.78	6.08	1.81	82	
184	--	*	7.88	7.22	2.22	304	
185	--	*	8.89	8.84	2.70	310	
186	XXV	*	7.92	7.68	2.67	226	
187	*	*	7.78	6.43	1.88	130	
188	*	*	7.63	7.58	2.58	205	
189	*	*	7.94	5.97	2.85	171	
190	V	*	7.71	6.70	2.55	174	
191	*	*	7.49	7.15	3.51	243	
192	IV	*	7.76	6.43	2.14	156	

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	重さ	備考
193	XXV	B	7.80	7.21	2.82	193	
194	*	*	7.67	7.66	3.24	232	
195	XXV	*	7.74	6.69	2.90	202	
196	XXV	*	7.77	6.50	3.10	222	
197	*	*	7.85	7.88	4.31	364	
198	*	*	8.46	6.15	2.20	176	
199	*	*	8.60	5.83	1.31	108	
200	*	*	8.23	7.39	2.75	232	
201	*	*	8.68	7.86	2.64	200	
202	*	*	8.12	7.53	3.12	255	
203	*	*	8.00	8.04	1.96	132	
204	--	*	2.15	1.83	0.85	5	
205	XXV	*	3.81	3.68	2.02	34	
206	*	*	4.14	3.98	0.89	19	
207	*	*	4.18	4.02	1.23	30	
208	*	*	4.16	4.30	1.63	40	
209	*	*	4.31	3.86	1.01	28	
210	*	*	4.46	4.34	1.96	50	
211	XXV	*	4.79	3.79	3.61	40	
212	XXV	*	4.97	4.13	1.97	54	
213	*	*	4.95	4.77	2.02	66	
214	*	*	5.07	4.06	1.63	52	
215	*	*	5.30	4.56	1.77	60	
216	*	*	5.37	4.81	1.33	60	
217	*	*	9.57	8.74	3.38	312	
218	XXV	*	10.63	7.82	2.75	284	
219	XXV	*	10.32	6.70	2.09	224	
220	*	*	10.21	9.57	3.67	466	
221	XV	*	10.32	9.40	3.62	520	
222	XXV	*	10.13	9.38	2.74	329	
223	*	*	10.36	8.23	3.40	332	
224	*	*	10.79	8.05	2.92	312	

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	重さ	備考
225	XV	B	7.36	4.60	1.70	183	
226	XXV	*	10.90	7.72	4.40	510	
227	*	*	10.29	9.55	3.05	362	
228	VI	*	10.25	7.25	2.43	261	
229	XXV	*	10.76	8.61	2.73	346	
230	V	*	11.40	6.90	1.74	171	
231	XXV	*	11.27	9.46	2.74	424	
232	XXV	*	11.17	9.25	3.38	430	
233	V	*	11.37	8.55	2.26	282	
234	XXV	*	11.60	11.03	3.91	720	
235	*	*	11.20	10.98	4.99	820	
236	*	*	12.27	6.50	2.98	228	
237	*	*	14.13	9.52	4.87	750	
238	I	*	14.13	12.05	4.23	1000	
239	*	*	8.47	9.05	3.95	344	
240	IV	*	7.51	6.56	2.72	234	
241	XXV	*	7.96	5.74	1.24	90	
242	IV	*	7.23	6.29	2.80	168	
243	XXV	*	7.50	5.38	2.33	160	
244	*	*	7.63	5.86	3.21	190	
245	*	*	7.72	6.30	2.11	152	
246	*	*	7.82	5.82	2.27	140	
247	*	*	7.21	6.76	2.05	174	
248	*	*	7.77	6.88	3.60	244	
249	*	*	7.03	7.17	2.50	172	
250	*	*	7.60	6.53	2.65	181	
251	*	*	7.11	6.35	2.55	142	
252	*	*	7.52	6.52	1.51	100	
253	XV	*	7.85	6.24	2.66	234	
254	*	*	7.84	7.62	4.03	304	
255	XXV	*	7.95	7.75	3.69	230	
256	*	*	7.69	6.19	2.22	130	

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	重さ	備考
257	V	B	7.85	7.40	2.20	172	*
258	XXV	*	7.49	6.95	3.10	206	
259	XIV	*	7.78	6.66	2.42	176	
260	*	*	7.48	6.60	2.05	131	
261	*	*	7.76	7.23	2.45	177	
262	*	*	7.76	7.61	3.06	211	
263	*	*	7.78	6.48	2.91	182	
264	*	*	7.80	6.93	3.10	236	
265	*	*	7.51	6.70	3.05	218	
266	*	*	7.57	6.57	2.19	169	
267	*	*	7.54	6.27	2.50	194	
268	*	*	7.40	7.00	2.78	192	
269	*	*	7.40	6.68	2.21	140	
270	*	*	7.59	6.98	3.27	240	
271	*	*	7.64	6.33	1.54	129	
272	*	*	7.64	7.33	2.31	180	
273	*	*	7.84	7.22	2.38	178	
274	*	*	7.41	6.55	3.67	227	
275	IV	*	6.30	5.03	1.95	105	
276	*	*	6.75	5.85	1.72	90	
277	*	*	5.73	4.61	1.80	76	
278	XIV	*	7.31	6.82	2.02	140	
279	XXV	*	7.76	7.50	3.32	182	
280	IV	*	7.99	6.73	1.52	126	
281	XIV	*	7.35	5.99	1.80	110	
282	*	*	7.37	6.03	2.25	136	
283	*	*	7.67	5.70	1.93	128	
284	XXV	*	7.70	5.96	2.53	162	
285	XXV	*	7.62	5.33	2.26	120	
286	*	*	7.31	5.60	3.03	153	
287	*	*	7.06	6.15	1.33	84	
288	*	*	7.70	5.33	2.46	135	

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	重さ	備考
321	V	B	6.13	5.03	1.61	75	
322	XIV	*	6.50	6.06	2.23	132	
323	V	*	6.09	6.05	1.65	90	
324	XIV	*	6.16	6.00	1.83	99	
325	XXV	*	6.85	5.43	1.98	108	
326	V	*	6.48	5.70	1.65	96	
327	XIV	*	6.24	6.11	3.15	167	
328	*	*	6.84	6.31	2.59	162	
329	*	*	6.30	6.53	2.89	170	
330	*	*	6.99	6.30	2.27	148	
331	*	*	6.20	6.14	2.38	132	
332	*	*	6.69	5.63	1.70	102	
333	V	*	6.14	5.18	1.74	88	
334	XIV	*	6.80	6.55	2.43	126	
335	*	*	6.11	5.67	2.91	134	
336	IV	*	6.61	5.13	1.59	78	
337	BKS	*	6.73	5.50	2.77	142	
338	XIV	*	6.98	4.24	2.02	84	
339	*	*	6.13	5.42	1.93	92	
340	*	*	6.46	4.92	2.38	90	
341	IV	*	6.77	3.84	1.49	60	
342	XIV	*	6.36	5.25	1.85	90	
343	*	*	6.68	3.36	1.64	64	
344	*	*	6.65	6.13	1.54	88	
345	V	*	6.21	5.90	2.34	108	
346	XIV	*	6.98	5.21	1.97	106	
347	*	*	6.29	5.87	2.53	128	
348	I	*	6.32	5.25	2.36	106	
349	XIV	*	6.07	5.58	2.15	109	
350	I	*	6.93	4.67	1.40	72	
351	XIV	*	6.19	5.92	2.24	97	
352	*	*	6.30	5.89	1.43	82	

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	重さ	備考
289	I	B	7.27	6.20	2.12	142	*
290	XXV	*	7.01	5.84	2.52	180	
291	*	*	7.35	6.57	3.22	192	
292	V	*	7.31	6.30	2.17	146	
293	XV	*	7.51	6.79	2.08	134	
294	XV	*	7.06	6.59	1.97	110	
295	XXV	*	7.70	6.25	1.61	127	
296	XXV	*	7.81	6.11	2.48	151	
297	B	*	7.17	7.13	2.16	146	
298	XXV	*	7.81	6.12	1.96	127	
299	V	*	7.76	6.33	1.76	118	
300	XXV	*	6.56	5.71	1.97	104	
301	*	*	6.55	5.34	2.04	86	
302	*	*	6.49	5.98	2.12	129	
303	*	*	6.61	5.94	2.15	123	
304	IV	*	6.58	5.96	1.66	112	
305	V	*	6.92	6.63	2.22	142	
306	XXV	*	6.84	6.79	2.54	159	
307	*	*	6.84	6.40	2.37	162	
308	*	*	7.92	5.43	3.38	194	
309	V	*	7.17	5.84	1.34	96	
310	B	*	7.39	5.05	2.15	122	
311	XXV	*	7.31	5.70	1.90	116	
312	*	*	7.79	5.67	1.69	105	
313	*	*	7.44	6.12	2.06	144	
314	*	*	7.11	6.34	3.02	180	
315	*	*	7.38	5.33	1.72	110	
316	*	*	7.82	6.08	2.24	149	
317	*	*	7.40	5.81	1.46	93	
318	*	*	7.41	5.20	2.05	98	
319	*	*	6.17	5.70	1.97	96	
320	*	*	6.42	6.16	2.14	117	

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	重さ	備考
353	XXV	B	6.69	5.95	2.02	110	
354	B	*	6.20	6.12	2.08	104	
355	V	*	6.89	4.50	1.17	53	
356	XXV	*	6.75	6.23	2.76	128	
357	*	*	5.34	5.02	1.96	48	
358	V	*	6.15	5.23	1.90	67	
359	XXV	*	5.13	4.25	1.44	46	
360	*	*	5.60	3.47	2.02	49	
361	V	*	5.10	4.23	1.54	52	
362	*	*	5.50	4.38	1.44	48	
363	XXV	*	5.45	5.01	1.44	56	
364	*	*	5.83	4.66	1.86	72	
365	*	*	5.11	4.88	2.12	70	
366	IV	*	5.75	4.82	2.06	80	
367	IV	*	5.39	5.02	1.21	46	
368	XXV	*	5.52	4.73	2.05	76	
369	IX	*	5.65	5.43	1.80	74	
370	XXV	*	5.87	4.53	2.36	92	
371	*	*	5.66	5.30	2.30	82	
372	*	*	6.07	5.25	2.47	104	
373	*	*	6.13	4.61	2.23	74	
374	*	*	6.01	5.57	2.74	131	
375	*	*	6.14	5.46	0.96	48	
376	IV	*	4.40	4.09	1.19	32	
377	*	*	4.28	3.63	1.07	30	
378	*	*	4.50	4.37	1.53	48	
379	XXV	*	9.04	6.70	3.82	306	
380	IV	*	9.35	6.28	2.66	212	
381	XXV	*	9.06	7.02	2.04	183	
382	*	*	9.20	6.20	2.32	190	
383	*	*	9.26	7.25	3.17	269	
384	*	*	9.50	8.24	2.58	264	

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	重さ	備考
385	XXV	B	9.06	6.47	3.04	242	
386	*	*	9.62	7.96	2.93	326	
387	*	*	9.16	8.42	2.86	286	
388	XV	*	9.31	7.11	2.89	284	
389	XV	*	9.99	6.62	2.70	257	
390	XXV	*	9.62	7.20	2.50	224	
391	*	*	9.47	7.87	3.23	312	
392	*	*	9.54	7.80	3.75	387	
393	*	*	9.36	8.19	3.42	336	
394	*	*	9.55	7.83	4.11	396	
395	*	*	9.22	9.07	3.32	368	
396	*	*	10.74	8.88	3.29	438	
397	*	*	8.89	7.82	2.03	182	
398	*	*	8.38	6.50	2.95	232	
399	XXV	*	8.32	7.97	3.61	285	
400	XXV	*	8.31	8.00	1.82	152	
401	*	*	8.59	7.38	3.00	311	
402	*	*	8.00	8.33	3.33	305	
403	*	*	8.35	7.91	4.04	361	
404	*	*	9.71	8.22	2.55	284	
405	V	*	9.00	6.23	3.37	287	
406	XXV	*	9.08	6.88	2.69	256	
407	*	*	9.83	7.70	2.36	224	
408	*	*	9.05	6.96	2.25	220	
409	*	*	9.31	7.67	2.31	238	
410	*	*	8.41	7.90	3.61	331	
411	*	*	9.30	7.95	3.30	274	
412	*	*	9.86	5.73	2.38	234	
413	*	*	9.37	6.42	3.12	249	
414	*	*	9.00	8.08	2.17	225	
415	*	*	8.84	7.55	1.57	188	
416	V	*	7.50	8.21	1.90	130	

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	重さ	備考
449	XXV	B	8.08	7.72	2.74	247	
450	*	*	7.80	6.67	3.38	242	
451	VI	*	8.10	6.05	2.94	190	
452	XXV	*	8.49	7.03	3.20	216	
453	*	*	7.69	4.50	0.88	54	
454	*	*	7.26	4.50	0.69	28	
455	V	C	3.84	3.86	1.21	24	
456	I	*	4.93	3.95	2.10	56	
457	IV	*	5.08	4.30	0.82	21	
458	—	—	5.36	4.34	2.26	70	
459	XXV	*	5.74	5.10	1.50	66	
460	XXV	*	6.95	5.94	2.83	130	
461	*	*	7.06	5.95	1.70	90	
462	V	*	7.17	6.08	2.80	173	
463	XV	*	7.27	6.21	2.44	150	
464	XXV	*	8.11	6.21	2.00	144	
465	*	*	9.58	8.65	2.71	286	
466	*	*	10.22	7.82	4.57	590	
467	V	*	10.63	6.30	1.55	173	
468	XXV	D	6.02	5.93	1.57	84	
469	*	*	6.53	5.21	2.09	104	
470	V	*	7.01	6.55	2.61	147	
471	XXV	*	8.28	6.45	4.09	290	
472	*	*	9.33	7.15	1.45	(210)	
473	*	*	5.71	4.59	2.40	84	
474	*	*	5.47	4.98	1.50	59	
475	*	*	5.45	4.85	0.94	42	
476	*	*	5.86	5.59	1.58	74	
477	*	*	5.87	4.77	1.70	68	
478	XV	*	5.58	5.28	1.72	74	
479	XXV	*	5.85	5.60	2.35	90	
480	*	*	5.67	5.56	1.98	88	

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	重さ	備考
417	XV	B	8.35	6.87	1.91	158	
418	XXV	*	8.37	6.73	4.19	336	
419	*	*	8.92	7.20	3.70	272	
420	*	*	8.73	7.15	2.74	210	
421	II	*	8.77	6.49	3.83	280	
422	I	*	8.48	6.81	3.12	268	
423	XXV	*	8.89	8.46	2.13	218	
424	*	*	8.32	8.26	3.20	310	
425	*	*	8.79	6.19	3.51	198	
426	V	*	8.13	8.05	2.95	267	
427	XXV	*	8.52	8.07	2.82	272	
428	*	*	8.13	7.42	3.35	294	
429	*	*	8.38	6.43	2.85	204	
430	XV	*	8.39	8.51	3.45	368	
431	*	*	8.80	7.09	3.04	284	
432	XXV	*	8.80	6.97	3.36	243	
433	*	*	8.60	7.04	3.73	319	
434	*	*	8.89	5.65	1.95	143	
435	V	*	8.30	6.97	1.65	137	
436	XXV	*	8.13	6.38	2.08	164	
437	*	*	8.07	8.89	3.24	233	
438	XV	*	8.50	6.06	2.76	206	
439	XXV	*	8.50	7.02	2.78	217	
440	*	*	8.53	5.80	1.58	123	
441	*	*	8.41	6.72	1.88	146	
442	*	*	8.13	6.06	2.01	160	
443	*	*	8.83	5.83	2.23	116	
444	*	*	8.19	5.65	1.50	108	
445	*	*	8.47	5.89	1.94	138	
446	*	*	8.67	6.67	2.60	222	
447	XV	*	7.16	6.11	3.14	300	
448	XXV	*	8.50	7.93	2.07	199	

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	重さ	備考
481	II	D	5.78	4.20	1.59	58	
482	IV	*	6.22	5.25	1.94	90	
483	I	*	6.15	5.01	2.77	123	
484	*	*	6.52	4.88	1.84	67	
485	IV	*	6.05	5.86	1.96	84	
486	II	*	6.00	5.40	1.84	93	
487	XXV	*	6.57	6.79	1.84	69	
488	*	*	6.33	4.89	1.92	89	
489	XV	*	6.53	5.09	1.47	69	
490	XXV	*	6.34	5.53	2.05	82	
491	XV	*	7.11	5.02	1.87	90	
492	*	*	7.38	5.92	1.69	91	
493	*	*	7.28	6.21	2.57	150	
494	*	*	6.92	5.31	2.85	132	
495	XXV	(JFAE)	6.90	6.83	2.84	186	
496	*	*	7.65	5.26	2.83	156	
497	*	*	7.95	7.16	2.84	208	
498	*	*	8.64	5.83	1.57	112	
499	*	*	9.81	6.74	2.61	258	
500	*	*	9.93	7.30	3.21	318	
501	*	*	8.42 (6.99)	6.99	3.82	582	
502	*	石磨	(7.60)	4.80	3.89	(178)	
503	—	—	5.43	4.19	1.46	44	

表27 遺物観察表

番号	出土位置	器種	器形	法量			色調		胎土	焼成	調整			備考
				口径	底径	高	内面	外面			内面	外面	底部	
1	SA101	須恵器	環	—	8.0	—	洗黄褐色	洗黄褐色	粗灰	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ取りの痕跡ありナデ	
2	+	土師器	甕	21.0	—	—	黄褐色	黄褐色	粗灰	良好	横ナデ	横ナデ	口縁一横ナデ 胴部一横ナデ	
3	+	土師器	甕	22.0	—	—	にじみ褐色	洗黄褐色	粗灰	良好	横ナデ	横ナデ	胴部一横ナデ 胴部一横ナデ	焼成あり
4	SA102	土師器	甕	18.6	8.8	23.8	洗黄褐色	洗黄褐色	粗灰	良好	口縁一横ナデ 胴部一横ナデ	口縁一横ナデ 胴部一横ナデ	ナデ	
5	+	土師器	甕	14.4	—	—	黄褐色 (7.5YR 5/3)	赤褐色	粗灰	中々良好	口縁一横ナデ 胴部一横ナデ	口縁一横ナデ 胴部一横ナデ		
6	+	土師器	甕	30.1	—	—	黄褐色	赤褐色	粗灰	不良	口縁一横ナデ 胴部一横ナデ	口縁一横ナデ 胴部一横ナデ		
7	+	土師器	甕	19.2	—	—	洗黄褐色	洗黄褐色	粗灰	不良	横ナデ	横ナデ		
8	+	土師器	甕	—	—	—	褐色	褐色	粗灰	不良	横ナデ	ナデ		
9	+	土師器	甕	—	—	—	洗黄褐色 (7.5YR 5/3)	にじみ黄褐色	粗灰	不良	横ナデ	口縁一横ナデ 胴部一横ナデ		
10	+	土師器	甕	—	7.6	—	黄褐色	黒褐色	粗灰	中々良好	ナデ	胴部一横ナデ 胴部一横ナデ	ナデ	
11	+	須恵器	甕	—	—	—	8-7YR 7/3 (8.0Y 7/3)	にじみ黄褐色	粗灰	不良	平行線文ナデ	平行線文ナデ		
12	+	須恵器	甕	—	—	—	黄褐色 (7.5YR 5/3)	洗黄褐色 (10GY 5/3)	粗灰	良好	平行線文ナデ	平行線文ナデ		
13	+	須恵器	甕	—	—	—	灰白色 (10Y 7/3)	灰白色 (10Y 7/3)	粗灰	不良	平行線文ナデ	平行線文ナデ		
14	+	土師器	環	13.55	7.6	4.45	黄褐色	洗黄褐色	粗灰	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ取りの痕跡ありナデ	外底付近ヘラナデ
15	+	土師器	環	12.8	7.35	3.5	黄褐色	黄褐色	粗灰	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ取りの痕跡ありナデ	
16	+	土師器	環	11.5	—	—	洗黄褐色	洗黄褐色	粗灰	良好	横ナデ	横ナデ		
17	+	土師器	環	—	8.30	—	灰白色 (10Y 7/3)	洗黄褐色	粗灰	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ取りの痕跡ありナデ	
18	+	土師器	環	—	—	—	洗黄褐色	洗黄褐色	粗灰	中々良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ取りの痕跡ありナデ	
19	+	布目	—	12.0	—	(N0.0)	洗黄褐色 (10YR 5/3)	洗黄褐色 (10YR 5/3)	粗灰	中々良好	布目	作偽品ナデ		真化している
20	+	布目	—	13.6	—	(N0.5)	洗黄褐色 (5.5YR 5/3)	洗黄褐色 (5.5YR 5/3)	粗灰	良好	布目	作偽品ナデ		
21	+	布目	—	12.4	—	(N0.5)	にじみ褐色 (7.5YR 5/3)	にじみ褐色 (7.5YR 5/3)	粗灰	良好	布目	作偽品ナデ		

番号	出土位置	器種	器形	法量			色調		胎土	焼成	調整			備考
				口径	底径	高	内面	外面			内面	外面	底部	
22	SA102	布目	—	—	—	—	褐色 (5.5YR 5/3)	褐色 (5.5YR 5/3)	2mm次の小石を含む	中々良好	布目	作偽品ナデ		
23	+	布目	—	—	—	—	褐色 (5.5YR 5/3)	褐色 (5.5YR 5/3)	2-4mm次の小石を含む	良好	布目	作偽品ナデ		
24	+	布目	—	—	—	—	洗黄褐色 (10YR 5/3)	にじみ褐色 (7.5YR 5/3)	3mm次の小石を含む	不良	布目	作偽品ナデ		
25	+	布目	—	—	—	—	にじみ褐色 (7.5YR 5/3)	にじみ褐色 (7.5YR 5/3)	2-3mm次の小石を含む	中々良好	布目	作偽品ナデ		
26	+	布目	—	—	—	—	にじみ褐色 (7.5YR 5/3)	にじみ褐色 (7.5YR 5/3)	3-9mm次の小石を含む	良好	布目	作偽品ナデ		
27	+	布目	—	—	—	—	にじみ褐色 (7.5YR 5/3)	にじみ褐色 (7.5YR 5/3)	4-7mm次の小石を含む	良好	布目	作偽品ナデ		
28	+	布目	—	—	—	—	にじみ黄褐色 (10YR 5/3)	にじみ黄褐色 (10YR 5/3)	3-7mm次の小石を含む	中々良好	布目	作偽品ナデ		
29	+	須恵器	家内埴壇	6.9	—	—	黄褐色 (5.5YR 5/3)	黄褐色 (5.5YR 5/3)	粗灰	良好	横ナデ	ナデ	ナデ	付付器 外底を等として 縦に片磨き
30	+	須恵器	甕	—	—	—	赤褐色 (7.5Y 5/3)	黒褐色 (2.5Y 5/3)	粗灰	良好	横ナデ	横ナデ		
31	SB4SH10	土師器	甕	—	—	—	にじみ黄褐色 (10YR 5/3)	にじみ黄褐色 (10YR 5/3)	1-2mm次の褐色・灰色の砂粒を多く含む	良好	横ナデ	横ナデ		
32	SB7SH7	土師器	甕	25.5	—	—	にじみ褐色 (7.5YR 5/3)	洗黄褐色 (5.5YR 5/3)	1-7mm次の褐色・灰色の砂粒を多く含む	中々良好	ナデ	ナデ		
33	VIZ-SH126	土師器	甕	13.8	6.5	12.7	にじみ黄褐色 (10YR 5/3)	にじみ黄褐色 (10YR 5/3)	1-3mm次の褐色・灰色の砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	ナデ	外・作偽品 外底を等として 縦に片磨き
34	I区	土師器	環	13.0	7.5	4.1	黄褐色	黄褐色	粗灰	良好	ナデ	横ナデ	ヘラ取りの痕跡ありナデ	
35	I区	土師器	環	13.4	7.6	4.0	黄褐色	黄褐色	粗灰	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ取りの痕跡ありナデ	外底付近ヘラナデ
36	I区	土師器	環	12.4	6.6	4.0	黄褐色	黄褐色	粗灰	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ取りの痕跡ありナデ	外底付近ヘラナデ
37	II区	土師器	環	13.0	7.3	4.2	黄褐色	洗黄褐色	粗灰	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ取りの痕跡ありナデ	
38	I区	土師器	環	15.8	8.0	3.3	黄褐色	黄褐色	粗灰	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ取りの痕跡ありナデ	外底付近ヘラナデ
39	II区	土師器	環	—	8.6	—	赤褐色	黄褐色	粗灰	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ取りの痕跡ありナデ	外底付近ヘラナデ
40	I区	土師器	環	—	8.0	—	赤褐色	黄褐色	粗灰	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ取りの痕跡ありナデ	
41	I区	土師器	環	—	9.4	—	黄褐色	黄褐色	粗灰	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ取りの痕跡ありナデ	
42	I区	土師器	環	—	7.6	—	赤褐色	赤褐色	粗灰	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ取りの痕跡ありナデ	

番号	出土位置	器種	器形	法量		色		胎土	構成	調査			備考	
				口径	底径	高	内面			外面	内面	外面		底部
43	Ⅱ区	土師器	杯	—	8.0	—	黄褐色	棕色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
44	Ⅱ区	土師器	杯	—	8.4	—	淡黄褐色	淡黄褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
45	Ⅱ区	土師器	杯	—	7.8	—	淡赤褐色	淡赤褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
46	Ⅱ区	土師器	杯	—	7.0	—	黄褐色	黄褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
47	Ⅱ区	土師器	杯	—	8.0	—	黄褐色	黄褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
48	Ⅱ区	土師器	杯	—	7.2	—	黄褐色	黄褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
49	Ⅱ区	土師器	杯	—	7.4	—	淡黄褐色	淡黄褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
50	Ⅱ区	土師器	杯	—	7.8	—	褐色	褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
51	Ⅱ区	土師器	杯	—	6.5	—	にぶい褐色	にぶい褐色	粗良	粗	ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
52	Ⅱ区	土師器	杯	—	7.3	—	赤褐色	赤褐色	不良	不良	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
53	Ⅱ区	土師器	杯	—	7.2	—	淡黄褐色	淡黄褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
54	Ⅱ区	土師器	杯	14.2	8.2	4.0	黄褐色	黄褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	底化している
55	Ⅱ区	土師器	杯	14.7	9.2	4.7	淡赤褐色	淡赤褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	外縁付盛ヘラナデ
56	Ⅱ区	土師器	杯	10.0	6.8	3.8	黄褐色	黄褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	外縁付盛ヘラナデ
57	Ⅱ区	土師器	杯	14.0	7.6	3.0	淡黄褐色	淡黄褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	外縁付盛ヘラナデ
58	Ⅱ区	土師器	杯	12.7	7.5	4.3	淡黄褐色	淡黄褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
59	Ⅱ区	土師器	杯	11.6	6.2	3.7	黄褐色	黄褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	外縁付盛ヘラナデ
60	Ⅱ区	土師器	杯	14.0	7.8	3.3	黄褐色	黄褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	—
61	Ⅱ区	土師器	杯	15.0	6.4	3.05	淡赤褐色	淡赤褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
62	Ⅱ区	土師器	杯	14.0	—	—	黄褐色	淡赤褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	—
63	Ⅱ区	土師器	杯	—	8.6	—	褐色	淡赤褐色	粗良	良好	ナデ	ナデ	ヘラ切りの横ナデ	底化はげしい

番号	出土位置	器種	器形	法量		色		胎土	構成	調査			備考	
				口径	底径	高	内面			外面	内面	外面		底部
64	Ⅱ区	土師器	杯	—	7.0	—	淡赤褐色	淡赤褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
65	Ⅱ区	土師器	杯	—	9.0	—	黄褐色	黄褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
66	Ⅱ区	土師器	杯	—	9.8	—	淡黄褐色	淡黄褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	底化はげしい
67	Ⅱ区	土師器	杯	—	8.0	—	褐色	褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
68	Ⅱ区	土師器	杯	—	7.8	—	褐色	褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	底化している
69	Ⅱ区	土師器	杯	—	7.8	—	黄褐色	黄褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
70	Ⅱ区	土師器	杯	—	7.0	—	褐色	褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
71	Ⅱ区	土師器	杯	—	6.2	—	にぶい褐色	にぶい褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	外縁付盛ヘラナデ
72	Ⅱ区	土師器	杯	—	8.6	—	褐色	褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	底化している
73	Ⅱ区	土師器	杯	—	7.2	—	にぶい褐色	にぶい褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
74	Ⅱ区	土師器	杯	—	8.0	—	黄褐色	黄褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	外縁付盛ヘラナデ
75	Ⅱ区	土師器	杯	—	8.0	—	赤褐色	赤褐色	不良	不良	ナデ	ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
76	Ⅱ区	土師器	杯	—	6.4	—	淡黄褐色	淡黄褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	外縁付盛ヘラナデ
77	Ⅱ区	土師器	杯	—	5.5	—	褐色	褐色	粗良	良好	ナデ	ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
78	Ⅱ区	土師器	杯	—	6.8	—	褐色	褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
79	V区	土師器	杯	15.8	—	—	赤褐色	黄褐色	不良	不良	ナデ	ナデ	ヘラ切りの横ナデ	—
80	V区	土師器	杯	—	5.6	—	褐色	褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
81	V区	土師器	杯	—	6.8	—	黄褐色	黄褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	外縁付盛ヘラナデ
82	Ⅱ区	土師器	杯	—	6.8	—	赤褐色	赤褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
83	V区	土師器	杯	—	6.5	—	淡赤褐色	淡赤褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	
84	Ⅱ区	土師器	杯	—	6.65	—	淡黄褐色	淡黄褐色	粗良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	

番号	出土位置	器種	器形	法量			色調		胎土	焼成	調査			備考
				口径	口径	高	内面	外面			内面	外面	底部	
85	Ⅷ区	土師器	環	—	8.4	—	淡黄色	淡黄色	2mm程度の砂粒を含む	良	好	様ナア	様ナア	ナア
86	Ⅷ区	土師器	環	—	7.0	—	淡黄色	淡黄色	細粒の2mm程度の砂粒を含む	良	好	様ナア	様ナア	ナア
87	Ⅷ区	土師器	環	—	7.2	—	淡黄色	淡黄色	粗粒	良	好	様ナア	様ナア	ナア
88	Ⅷ区	土師器	環	—	6.0	—	灰色	黄褐色	粗粒	良	好	様ナア	様ナア	ナア
89	Ⅷ区	土師器	環	—	6.8	—	黄褐色	黄褐色	粗粒	良	好	様ナア	様ナア	ナア
90	Ⅷ区	土師器	環	—	6.2	—	淡黄褐色	淡黄褐色	粗粒	良	好	様ナア	様ナア	ナア
91	Ⅷ区	土師器	環	—	5.8	—	にぶい黄褐色(10YR 5/6)	褐色	粗粒	良	好	ナア	ナア	ナア
92	Ⅷ区	土師器	環	—	6.8	—	赤褐色	赤褐色	粗粒 細砂粒を含む	良	好	ナア	ナア	ナア
93	Ⅷ区	土師器	環	—	6.3	—	淡黄褐色	淡黄褐色	粗粒	良	好	様ナア	様ナア	ナア
94	Ⅷ区	土師器	環	—	5.9	—	淡黄褐色	淡黄褐色	0.2—3mm程度の赤・黄色透明な砂粒を含む	不良	好	様ナア	ナア	ナア
95	Ⅷ区	土師器	環	—	5.6	—	褐色	褐色	粗粒	不良	好	様ナア	様ナア	ナア
96	Ⅷ区	土師器	環	—	7.4	—	淡黄褐色	淡黄褐色	粗粒	良	好	様ナア	様ナア	ナア
97	Ⅷ区	土師器	環	—	4.4	—	にぶい褐色	にぶい褐色	粗粒	良	好	ナア	様ナア	ナア
98	Ⅷ区	土師器	環	—	6.2	—	淡赤褐色	淡黄色	0.2—1mm程度の白色の砂粒を含む	良	好	様ナア	様ナア	ナア
99	Ⅷ区	土師器	環	—	7.25	—	淡黄褐色	淡黄褐色	粗粒	良	好	様ナア	ナア	ナア
100	Ⅷ区	土師器	環	—	6.2	—	淡黄褐色	淡黄褐色	粗粒	良	好	様ナア	様ナア	ナア
101	V区	土師器	環	—	7.2	—	淡黄褐色	淡黄色	粗粒	良	好	様ナア	様ナア	ナア
102	XV区	土師器	環	15.6	8.1	4.5	淡黄色(7.5YR 5/6)	淡黄褐色(7.5YR 5/6)	粗粒	良	好	様ナア	様ナア	ナア
103	XV区	土師器	環	—	7.2	—	にぶい黄褐色(10YR 5/6)	にぶい黄褐色(10YR 5/6)	細砂粒を多く含む	良	好	様ナア	様ナア	ナア
104	XV区	土師器	小皿	8.05	5.7	1.6	淡黄褐色(7.5YR 5/6)	淡黄褐色(7.5YR 5/6)	細砂粒を多く含む	良	好	様ナア	様ナア	ナア
105	XXIX区	土師器	環	13.15	7.6	3.45	黄褐色	黄褐色	0.2—1mm程度の砂粒を含む	良	好	様ナア	様ナア	ナア

番号	出土位置	器種	器形	法量			色調		胎土	焼成	調査			備考
				口径	口径	高	内面	外面			内面	外面	底部	
106	XXIX区SC1	土師器	環	13.4	7.85	4.2	淡黄褐色	淡黄褐色	粗粒	良	好	様ナア	様ナア	ナア
107	XXIX区SC1	土師器	環	13.75	8.5	3.95	黄褐色	黄褐色	粗粒	良	好	様ナア	様ナア	ナア
108	XXIX区SC1	土師器	小皿	6.9	6.3	0.9	淡黄褐色	淡黄褐色	粗粒	良	好	様ナア	様ナア	ナア
109	XXIX区	土師器	環	15.2	—	—	淡黄褐色	淡黄褐色	0.1—1.5mmの砂粒を多数含む	良	好	様ナア	様ナア	ナア
110	XXIX区SC1	土師器	小皿	7.5	6.7	1.0	黄褐色	黄褐色	粗粒	良	好	様ナア	様ナア	ナア
111	XXIX区SC1	土師器	小皿	7.1	6.3	1.0	黄褐色	黄褐色	粗粒	良	好	様ナア	様ナア	ナア
112	XXIX区SC1	土師器	小皿	7.25	6.3	1.0	黄褐色	黄褐色	粗粒	良	好	様ナア	様ナア	ナア
113	XXIX区	土師器	小皿	6.75	6.15	1.0	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	褐色の砂粒を含む	やや良好	好	様ナア	様ナア	底部に黒目が残っている
114	XXIX区SH3	土師器	環	12.15	7.7	3.9	淡黄褐色(10YR 5/6)	淡黄褐色(10YR 5/6)	細砂粒を含む	良	好	様ナア	様ナア	ナア
115	XXIX区SH3	土師器	小皿	8.5	7.5	1.2	淡黄褐色(10YR 5/6)	淡黄褐色(10YR 5/6)	細砂粒を含む	良	好	様ナア	様ナア	ナア
116	XXIX区H46	土師器	環	12.7	8.7	4.0	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	粗粒	良	好	様ナア	様ナア	ナア
117	XXIX区H45	土師器	環	14.2	—	—	淡黄褐色(7.5YR 5/6)	淡黄褐色(7.5YR 5/6)	粗粒	良	好	様ナア	様ナア	ナア
118	XXIX区H49	土師器	環	13.2	9.6	4.6	淡黄褐色	淡黄褐色	0.1—1.5mmの砂粒を含む	良	好	様ナア	様ナア	ナア
119	XXIX区H43	土師器	環	13.0	8.5	3.75	淡黄褐色	淡黄褐色	0.1—1mm程度の白色の砂粒を含む	良	好	様ナア	様ナア	ナア
120	XXIX区H45	土師器	環	10.4	—	—	黄褐色	黄褐色	0.1—0.5mmの砂粒を含む	良	好	様ナア	様ナア	ナア
121	XXIX区H49	土師器	環	—	8.3	—	淡黄褐色	淡黄褐色	0.2—1.5mmの砂粒を含む	良	好	様ナア	様ナア	ナア
122	XXIX区H46	土師器	環	—	8.4	—	にぶい褐色	淡黄褐色(10YR 5/6)	粗粒	やや良好	好	様ナア	様ナア	ナア
123	XXIX区H13	土師器	環	—	8.5	—	淡黄褐色	淡黄褐色	粗粒	良	好	様ナア	様ナア	ナア
124	XXIX区	土師器	環	—	8.05	—	淡黄褐色(7.5YR 5/6)	淡黄褐色(7.5YR 5/6)	細砂粒を含む	良	好	様ナア	様ナア	ナア
125	XXIX区H31	土師器	環	—	8.3	—	黄褐色	黄褐色	0.2—1mm程度の砂粒を含む	良	好	様ナア	様ナア	ナア
126	XXIX区H12	土師器	環	—	7.1	—	淡黄褐色	淡黄褐色	0.1—1mm程度の砂粒を含む	良	好	様ナア	様ナア	ナア

番号	出土位置	器種	器形	法量			色		胎土	焼成	断面			備考
				口径	底径	高	内面	外面			内面	外面	底部	
127	XXIXC	土師器	杯	—	5.75	—	黄褐色 (7.5YR 5)	黄褐色 (7.5YR 5)	0.5~1mm程度の褐色・黒色の砂粒を多く含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
128	XXIXC	土師器	小瓶	8.6	8.0	1.25	黄褐色 (7.5YR 5)	黄褐色 (7.5YR 5)	精製	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
129	XXIXC	土師器	小瓶	—	5.65	—	黄褐色 (7.5YR 5)	黄褐色 (7.5YR 5)	細砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
130	XXIXC	土師器	小瓶	—	—	1.2	黄褐色 (7.5YR 5)	黄褐色 (7.5YR 5)	細砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
131	XXIXC	土師器	杯	12.3	8.6	3.5	黄褐色 (7.5YR 5)	黄褐色 (7.5YR 5)	細砂粒を含む	中良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
132	XXIXC	土師器	杯	—	6.9	—	黄褐色 (7.5YR 5)	黄褐色 (7.5YR 5)	細砂粒を含む	中良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	表面が削れている
133	XXIXC	土師器	杯	13.1	6.0	4.6	黄褐色 (7.5YR 5)	黄褐色 (7.5YR 5)	細砂粒を多く含む	中良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
134	XXIXCSH47	土師器	杯	—	8.3	—	黄褐色 (7.5YR 5)	黄褐色 (7.5YR 5)	精製	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
135	XXIXCSH11	土師器	小瓶	7.4	6.35	1.5	黄褐色 (7.5YR 5)	黄褐色 (7.5YR 5)	精製	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
136	Ⅱ区	土師器	高台付碗	—	7.6	—	黄褐色 (7.5YR 5)	黄褐色 (7.5YR 5)	精製 0.1~0.2mm程度の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ナデ	ヘラ切り
137	Ⅱ区	土師器	高台付碗	—	8.8	—	黄褐色 (7.5YR 5)	黄褐色 (7.5YR 5)	精製	良好	横ナデ	ナデ	ヘラ切りの横ナデ	付け合わせ
138	V区	土師器	高台付碗	—	9.0	—	黄褐色 (7.5YR 5)	黄褐色 (7.5YR 5)	精製	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	付け合わせ
139	Ⅱ区	土師器	高台付碗	—	8.9	—	黄褐色 (7.5YR 5)	黄褐色 (7.5YR 5)	0.1~0.2mm程度の砂粒を多く含む	良好	横ナデ	横ナデ	ナデ	付け合わせ
140	Ⅱ区	土師器	高台付碗	—	7.4	—	黄褐色 (7.5YR 5)	黄褐色 (7.5YR 5)	精製	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	付け合わせ
141	Ⅱ区	土師器	高台付碗	—	7.5	—	黄褐色 (7.5YR 5)	黄褐色 (7.5YR 5)	精製	中良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	付け合わせ
142	V区	土師器	高台付碗	—	8.4	—	黄褐色 (7.5YR 5)	黄褐色 (7.5YR 5)	精製	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	付け合わせ
143	Ⅱ区	土師器	高台付碗	—	—	—	黄褐色 (7.5YR 5)	黄褐色 (7.5YR 5)	精製 0.1~0.2mm程度の褐色・黒色の砂粒を多く含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切りの横ナデ	表面が削られている
144	Ⅱ区	土師器	高台付碗	—	—	—	黄褐色 (7.5YR 5)	黄褐色 (7.5YR 5)	精製 0.1~0.2mm程度の褐色・黒色の砂粒を多く含む	良好	1ギタ	横ナデ	—	褐色土着
145	I区	黒色土器	杯	10.0	—	—	黒色	黄褐色 (7.5YR 5)	茶褐色の砂粒を含む	良好	1ギタ	1ギタ	ヘラ切り	口縁部一部分の色調
146	I区	黒色土器	杯	14.7	8.0	4.7	黒色	黄褐色 (7.5YR 5)	精製	良好	1ギタ	1ギタ	—	
147	I区	黒色土器	杯	—	—	—	黄褐色 (7.5YR 5)	黄褐色 (7.5YR 5)	0.1~0.2mm程度の砂粒を含む	良好	1ギタ	1ギタ	ヘラ切り	

番号	出土位置	器種	器形	法量			色		胎土	焼成	断面			備考
				口径	底径	高	内面	外面			内面	外面	底部	
148	I区	黒色土器	杯	—	—	—	黒色	黄褐色 (7.5YR 5)	精製	良好	1ギタ	1ギタ	—	
149	I区	黒色土器	杯	—	—	—	黒色	黄褐色 (7.5YR 5)	褐色の砂粒を含む	良好	1ギタ	1ギタ	—	
150	Ⅱ区	黒色土器	杯	11.8	5.3	4.0	黒色	黄褐色 (7.5YR 5)	精製	良好	1ギタ	1ギタ	—	内面に朱泥がある
151	Ⅱ区	黒色土器	杯	12.0	6.4	3.35	黒色	黄褐色 (7.5YR 5)	精製	良好	1ギタ	1ギタ	—	2ギタヘラ切り
152	Ⅱ区	黒色土器	杯	14.8	7.4	4.0	黒色	黄褐色 (7.5YR 5)	細砂粒を含む	良好	1ギタ	1ギタ	—	2ギタヘラ切り
153	Ⅱ区	黒色土器	杯	13.8	6.8	4.3	黒色	黄褐色 (7.5YR 5)	精製	良好	1ギタ	1ギタ	—	外側の1部は褐色土着
154	Ⅱ区	黒色土器	杯	15.6	9.0	4.9	黒色	黄褐色 (7.5YR 5)	精製	良好	1ギタ	1ギタ	—	口縁部は褐色を呈す
155	Ⅱ区	黒色土器	杯	—	—	—	黒色	黄褐色 (7.5YR 5)	精製	良好	1ギタ	1ギタ	—	表面は褐色を呈す
156	Ⅱ区	黒色土器	杯	—	—	—	黒色	黄褐色 (7.5YR 5)	精製	良好	1ギタ	1ギタ	—	
157	Ⅱ区	黒色土器	杯	—	—	—	黒色	黄褐色 (7.5YR 5)	茶褐色の砂粒を含む	良好	1ギタ	1ギタ	—	
158	Ⅱ区	黒色土器	杯	—	7.8	—	黒色	黄褐色 (7.5YR 5)	精製	良好	1ギタ	1ギタ	—	黒面着
159	Ⅱ区	黒色土器	杯	—	8.0	—	黒色	黄褐色 (7.5YR 5)	0.1mm程度の砂粒を含む	良好	1ギタ	1ギタ	—	2ギタヘラ切り
160	Ⅱ区	黒色土器	杯	—	—	—	黒色	黄褐色 (7.5YR 5)	精製 0.1~0.2mm程度の砂粒を含む	良好	1ギタ	1ギタ	—	
161	Ⅱ区	黒色土器	杯	—	—	—	黒色	黄褐色 (7.5YR 5)	0.2mm程度の褐色の砂粒を含む	良好	1ギタ	—	—	あるいは1ギタ
162	Ⅱ区	黒色土器	高台付碗	17.2	9.8	6.5	黒色	褐色	細砂粒を含む	良好	2ギタ	横ナデ	ナデ	ヘラ切り?
163	Ⅱ区	黒色土器	高台付碗	—	9.6	—	黒色	黄褐色 (7.5YR 5)	細砂粒を含む	良好	2ギタ	横ナデ	ヘラ切り	
164	Ⅱ区	黒色土器	高台付碗	—	—	—	黒色	褐色	精製	良好	2ギタ	1ギタ	—	
165	Ⅱ区	黒色土器	杯	—	—	—	黒色	黄褐色 (7.5YR 5)	精製	良好	1ギタ	1ギタ	—	
166	Ⅱ区	黒色土器	杯(脚)	—	7.0	—	黒色	黄褐色 (7.5YR 5)	細砂粒を含む	良好	1ギタ	横ナデ	ヘラ切り	
167	Ⅱ区	黒色土器	杯	—	7.2	—	黒色	黄褐色 (7.5YR 5)	精製 砂質	良好	1ギタ	ナデ	ヘラ切り	
168	Ⅱ区	黒色土器	高台付碗	—	8.2	—	黒色	黄褐色 (7.5YR 5)	精製	良好	1ギタ	横ナデ	ヘラ切り	

番号	出土位置	器種	器形	法量			色調		胎土	焼成	調製			備考
				口徑	底徑	高	内面	外面			内面	外面	底面	
169	Ⅴ区	黒色土器	高台付埴	—	—	—	黒褐色	黄褐色	細砂粒を含む	真灰	ミダキ	横ナデ	—	黒書有(内面)
170	Ⅴ区	黒色土器	高台付埴	—	—	—	黒褐色	黄褐色	焼灰	真灰	ミダキ	横ナデ	—	黒書有(内面)
171	Ⅴ区	黒色土器	高台付埴	—	9.0	—	黒褐色	黄褐色	0.5—1mm大の褐色・灰褐色の砂粒を含む	真灰	ミダキ	ミダキ	—	(外側)ヘラ印付 内面は横ナデ
172	Ⅴ区	黒色土器	高台付埴	—	7.3	—	黒褐色	黄褐色	焼灰	真灰	ミダキ	横ナデ	—	ヘラ印付の横ナデ
173	Ⅴ区	黒色土器	高台付埴	—	—	—	黒褐色	黄褐色	砂粒を含む	真灰	ミダキ	横ナデ	—	付け高台
174	Ⅴ区	黒色土器	高台付埴	—	5.9	—	黄褐色	黄褐色	7.5V R 焼灰 (7.5V R)	真灰	ミダキ	ミダキ	ナデ	付け高台
175	Ⅰ区	土師器	甕	25.0	—	—	にぶい褐色	黄褐色	1—2mm大の褐色・灰褐色の砂粒を含む	中真灰	口縁-横ナデ 胴部-ハナ	口縁-横ナデ 胴部-横ナデ	—	—
176	Ⅰ区	土師器	甕	—	—	—	にぶい黄褐色	黄褐色	1—5mm大の褐色の砂粒を多く含む	中真灰	口縁-横ナデ 胴部-ナデ	口縁-横ナデ 胴部-ハナ	—	—
177	Ⅰ区	土師器	甕	—	—	—	にぶい黄褐色	黄褐色	0.5—1mm大の褐色の砂粒を含む	不真	ナデ	ナデ	—	表面は磨耗している
178	Ⅰ区	土師器	甕	—	—	—	黄褐色	黄褐色	1—4mm大の褐色の砂粒を含む	真灰	ナデ	口縁-横ナデ 胴部-ヘラナズリ	—	外表面は磨耗している
179	Ⅰ区	土師器	甕	23.6	—	—	にぶい褐色	黄褐色	1—3mm大の褐色・灰褐色の砂粒を含む	中真灰	口縁-横ナデ 胴部-ハナ	口縁-横ナデ 胴部-ハナ	—	—
180	Ⅰ区	土師器	甕	—	—	—	黄褐色	黄褐色	1—3mm大の褐色の砂粒を含む	中真灰	ナデ	ナデ	—	—
181	Ⅱ区	土師器	甕	—	—	—	にぶい褐色	黄褐色	1—5mm大の褐色の砂粒を含む	真灰	ナデ	ナデ	—	表面は磨耗している
182	Ⅰ区	土師器	甕	—	—	—	黄褐色	黄褐色	1—3mm大の褐色・灰褐色の砂粒を多く含む	中真灰	ナデ	ナデ	—	表面は磨耗している
183	Ⅱ区	土師器	甕	21.0	—	—	黄褐色	黄褐色	0.5—3mm大の褐色の砂粒を多く含む	不真	口縁-横ナデ	口縁-横ナデ 胴部-ハナ	—	—
184	Ⅱ区	土師器	甕	20.6	—	—	黄褐色	黄褐色	0.5—3mm大の褐色の砂粒を含む	不真	ナデ	ナデ	—	—
185	Ⅱ区	土師器	甕	23.7	—	—	黄褐色	黄褐色	1—3mm大の褐色・灰褐色の砂粒を多く含む	不真	横ナデ	口縁-横ナデ 胴部-ハナ	—	—
186	Ⅱ区	土師器	甕	27.0	7.0	22.0	にぶい褐色	黄褐色	1—5mm大の褐色の砂粒を含む	不真	口縁-横ナデ 胴部-ヘラナズリ	口縁-横ナデ 胴部-ヘラナズリ	ナデ	横灰ハナ
187	Ⅱ区	土師器	甕	—	—	—	黄褐色	黄褐色	0.5—3mm大の褐色の砂粒を含む	不真	ナデ	口縁-横ナデ	—	表面は磨耗している
188	Ⅱ区	土師器	甕	—	—	—	黄褐色	黄褐色	1—5mm大の褐色・灰褐色の砂粒を含む	不真	ナデ	横ナデ	—	—
189	Ⅱ区	土師器	甕	—	—	—	黄褐色	黄褐色	0.5—4mm大の褐色の砂粒を含む	真灰	横ナデ	横ナデ	—	—

番号	出土位置	器種	器形	法量			色調		胎土	焼成	調製			備考
				口徑	底徑	高	内面	外面			内面	外面	底面	
190	Ⅰ区	土師器	甕	—	—	—	黄褐色	黄褐色	2—3mm大の褐色の砂粒を多く含む	中真灰	ナデ	口縁-ハナ	—	外表面は磨耗している
191	Ⅰ区	土師器	甕	—	—	—	黄褐色	黄褐色	1—3mm大の褐色の砂粒を多く含む	不真	ナデ	ナデ	—	表面は磨耗している
192	Ⅱ区	土師器	甕	—	—	—	黄褐色	黄褐色	1—4mm大の褐色の砂粒を多く含む	不真	ナデ	ナデ	—	表面は磨耗している
193	Ⅱ区	土師器	甕	—	—	—	黄褐色	黄褐色	1—3mm大の褐色の砂粒を多く含む	不真	横ナデ	横ナデ	—	—
194	Ⅱ区	土師器	甕	—	—	—	黄褐色	黄褐色	1—4mm大の褐色・灰褐色の砂粒を含む	不真	口縁-ハナ 胴部-ヘラナズリ	口縁-横ナデ 胴部-ヘラナズリ	—	外表面は磨耗している
195	Ⅱ区	土師器	甕	—	—	—	黄褐色	黄褐色	0.5—3mm大の褐色・灰褐色の砂粒を含む	不真	横ナデ	口縁-横ナデ 胴部-ヘラナズリ	—	—
196	Ⅱ区	土師器	甕	—	—	—	黄褐色	黄褐色	0.5—2mm大の褐色・灰褐色の砂粒を含む	不真	ナデ	胴部-ヘラナズリ	—	—
197	Ⅱ区	土師器	甕	—	—	—	黄褐色	黄褐色	0.5—2mm大の褐色・灰褐色の砂粒を含む	不真	口縁-ハナ 胴部-ヘラナズリ	口縁-ヘラナズリ	—	—
198	Ⅱ区	土師器	甕	—	—	—	にぶい褐色	黄褐色	1—4mm大の褐色・灰褐色の砂粒を多く含む	不真	ナデ	胴部-ナデ	—	—
199	Ⅱ区	土師器	甕	—	—	—	にぶい褐色	黄褐色	2—4mm大の褐色・灰褐色の砂粒を含む	不真	口縁-ナデ 胴部-ヘラナズリ	ありハナ フタ印のもの	—	—
200	Ⅱ区	土師器	甕	—	—	—	にぶい褐色	黄褐色	1—3mm大の褐色・灰褐色の砂粒を多く含む	中真灰	ナデ	ミダキ	ミダキ	磨耗している
201	Ⅰ区	土師器	甕	—	10.2	—	にぶい黄褐色	黄褐色	0.5—4mm大の褐色・灰褐色の砂粒を多く含む	不真	ナデ	ナデ	ナデ	—
202	Ⅳ区	土師器	甕	35.0	—	—	口縁-横ナデ 胴部-ヘラナズリ	黄褐色	2—6mm大の褐色の砂粒を含む	不真	口縁-ナデ 胴部-ヘラナズリ	ナデ	—	—
203	Ⅳ区	土師器	甕	17.8	—	—	褐色	にぶい褐色	1—3mm大の褐色・灰褐色の砂粒を含む	真灰	口縁-ハナ 胴部-ヘラナズリ	横ナデ	—	—
204	Ⅳ区	土師器	甕	27.2	—	—	にぶい褐色	黄褐色	1—5mm大の褐色・灰褐色の砂粒を多く含む	真灰	口縁-横ナデ 胴部-ヘラナズリ	口縁-ナデ 胴部-ヘラナズリ	—	—
205	Ⅳ区	土師器	甕	20.4	—	—	黄褐色	黄褐色	1—5mm大の褐色・灰褐色の砂粒を含む	真灰	口縁-ナデ 胴部-ヘラナズリ	ナデ	—	—
206	Ⅳ区	土師器	甕	24.6	—	—	にぶい褐色	黄褐色	1—3mm大の褐色・灰褐色の砂粒を多く含む	中真灰	ナデ	ナデ	—	—
207	Ⅳ区	土師器	甕	19.0	—	—	にぶい褐色	黄褐色	3mm大の褐色の砂粒を含む	中真灰	ナデ	ナデ	—	—
208	Ⅳ区	土師器	甕	22.6	—	—	黄褐色	黄褐色	2—4mm大の褐色・灰褐色の砂粒を多く含む	中真灰	ナデ	ナデ	—	胴部に漆喰を散布
209	Ⅳ区	土師器	甕	—	—	—	褐色	黄褐色	1—3mm大の褐色の砂粒を含む	真灰	口縁-ハナ 胴部-ヘラナズリ	ナデ	—	—
210	Ⅳ区	土師器	甕	—	—	—	にぶい褐色	黄褐色	1—4mm大の褐色・灰褐色の砂粒を多く含む	真灰	口縁-ナデ 胴部-ヘラナズリ	横ナデ	—	—

番号	出土位置	器種	形状	法 量			色 調		胎 土	焼 成	調 整			備 考
				口徑	底径	高	内 面	外 面			内 面	外 面	底 部	
211	Ⅱ区	土師器	壺	—	—	—	におい黄褐色 (10Y R 7)	暗 色	2—3mm大の褐色の砂粒をまき	中々良好	口縁—横ナデ 胴部—ハラナデ	横ナデ	—	—
212	Ⅱ区	土師器	壺	—	—	—	におい黄褐色 (10Y R 7)	暗 色	0.5—1mm大の褐色・灰色の砂粒をまき	良 好	口縁—横ナデ 胴部—ハラナデ	横ナデ	—	—
213	Ⅱ区	土師器	壺	—	—	—	黄 褐色 (10B G 7)	黄 褐色	1—2mm大の褐色・灰色の砂粒をまき	中々良好	ナデ	ナデ	—	—
214	Ⅱ区	土師器	壺	—	—	—	洗 黄 褐色 (10Y R 7)	洗 黄 褐色 (10Y R 7)	1—2mm大の褐色・灰色の砂粒をまき	良 好	横ナデ	ナデ	—	—
215	Ⅱ区	土師器	壺	—	—	—	洗 黄 褐色 (10Y R 7)	洗 黄 褐色	1mm大の褐色の砂粒をまき	良 好	口縁—ナデ 胴部—ハラナデ	口縁—ナデ 胴部—ナデ	—	—
216	Ⅱ区	土師器	壺	—	—	—	黄 褐色 (10B G 7)	黄 褐色	自然の微細粒、1—2mm大の褐色砂粒をまき	中々良好	口縁—横ナデ 胴部—ハラナデ	口縁—ナデ 胴部—ハラナ	—	—
217	Ⅱ区	土師器	壺	—	—	—	洗 黄 褐色 (10Y R 7)	洗 黄 褐色 (10Y R 7)	1—5mm大の褐色・灰色の砂粒をまき	不 良	ナデ	ナデ	—	—
218	Ⅱ区	土師器	壺	—	—	—	洗 黄 褐色	洗 黄 褐色	1—2mm大の褐色の砂粒をまき	良 好	横ナデ	横ナデ	—	—
219	Ⅱ区	土師器	壺	—	—	—	暗 色	暗 色	2mm大の褐色・灰色の砂粒をまき	不 良	ナデ	ナデ	—	—
220	Ⅱ区	土師器	壺	—	—	—	洗 黄 褐色	洗 黄 褐色	1—4mm大の褐色の砂粒をまき	中々良好	横ナデ	ナデ	ナデ	—
221	Ⅱ区	土師器	壺	—	—	—	洗 黄 褐色	洗 黄 褐色	3—4mm大の褐色・灰色の砂粒をまき	良 好	ナデ	ナデ	—	—
222	Ⅱ区	土師器	鉢	12.0	6.0	6.2	灰 色 (7.5Y R 7)	黄 褐色 (7.5Y R 7)	1mm大の褐色・灰色の砂粒をまき	良 好	ナデ	ナデ	—	—
223	Ⅱ区	土師器	壺	31.6	—	—	暗 色 (7.5Y R 7)	暗 色 (5Y R 7)	1—2mm大の褐色・灰色の砂粒をまき	良 好	口縁—横ナデ 胴部—ハラナデ	口縁—横ナデ 胴部—ナデ	—	—
224	Ⅱ区	土師器	壺	38.8	—	—	暗 色 (7.5Y R 7)	暗 色 (7.5Y R 7)	0.5—2mm大の褐色の砂粒をまき	良 好	口縁—横ナデ 胴部—ハラナデ	横ナデ	—	—
225	Ⅱ区	土師器	壺	—	—	—	におい黄褐色 (10Y R 7)	暗 色 (7.5Y R 7)	0.5—2mm大の褐色・灰色の砂粒をまき	不 良	ナデ	口縁—横ナデ 胴部—ナデ	—	—
226	Ⅱ区	土師器	壺	—	—	—	におい暗色 (7.5Y R 7)	におい黄褐色 (10Y R 7)	0.5—1mm大の褐色・灰色の砂粒をまき	良 好	口縁—横ナデ 胴部—ナデ	口縁—横ナデ 胴部—ナデ	—	—
227	Ⅱ区	土師器	壺	—	—	—	におい黄褐色 (10Y R 7)	におい黄褐色 (10Y R 7)	1—2mm大の褐色・灰色の砂粒をまき	良 好	横ナデ	横ナデ	—	口縁部が壊れている
228	Ⅱ区	土師器	壺	—	—	—	洗 黄 褐色 (10Y R 7)	洗 黄 褐色 (10Y R 7)	0.5—2mm大の褐色・灰色の砂粒をまき	中々良好	ナデ	ナデ	—	—
229	Ⅱ区	土師器	壺	—	—	—	におい黄褐色 (10Y R 7)	におい黄褐色 (10Y R 7)	0.5—2mm大の褐色・灰色の砂粒をまき	中々良好	ナデ	横ナデ	—	—
230	Ⅱ区	土師器	壺	18.0	—	—	暗 色 (5Y R 7)	暗 色 (5Y R 7)	0.5—2mm大の褐色の砂粒をまき	中々良好	口縁—横ナデ 胴部—ハラナデ	ナデ	—	—
231	Ⅱ区	土師器	壺	16.75	—	—	暗 色 (7.5Y R 7)	暗 色 (7.5Y R 7)	1—4mm大の褐色・灰色の砂粒をまき	不 良	ナデ	ナデ	—	—

番号	出土位置	器種	形状	法 量			色 調		胎 土	焼 成	調 整			備 考
				口徑	底径	高	内 面	外 面			内 面	外 面	底 部	
232	Ⅱ区	土師器	壺	24.6	—	—	におい黄褐色 (10Y R 7)	におい黄褐色 (10Y R 7)	0.5—1mm大の褐色・灰色の砂粒をまき	良 好	口縁—横ナデ 胴部—ハラナデ	横ナデ	—	—
233	Ⅱ区	土師器	壺	14.1	—	—	におい黄褐色 (10Y R 7)	におい暗色 (7.5Y R 7)	0.5mm大の褐色の砂粒をまき、まれに黒點をまき	良 好	口縁—横ナデ 胴部—ハラナデ	口縁—横ナデ 胴部—ナデ	—	—
234	Ⅱ区	土師器	壺	33.2	—	—	洗 黄 褐色 (10Y R 7)	洗 黄 褐色 (10Y R 7)	0.5—2mm大の褐色・灰色の砂粒をまき	中々良好	口縁—ナデ 胴部—ハラナデ	横ナデ	—	—
235	Ⅱ区	土師器	壺	—	—	—	におい暗色 (7.5Y R 7)	下灰土質 (10Y R 7)	0.5mm大の褐色の砂粒をまき	中々良好	口縁—横ナデ 胴部—ハラナデ	口縁—横ナデ 胴部—ナデ	—	—
236	Ⅱ区	土師器	壺	—	—	—	暗 色 (5Y R 7)	暗 色 (5Y R 7)	1—4mm大の褐色・灰色の砂粒をまき	不 良	ナデ	ナデ	—	—
237	Ⅱ区	土師器	壺	17.3	—	—	におい暗褐色 (10Y R 7)	におい黄褐色 (10Y R 7)	1—2mm大の褐色・灰色の砂粒をまき	良 好	口縁—横ナデ 胴部—ハラナデ	横ナデ	—	—
238	Ⅱ区	土師器	埴輪	12.1	—	—	灰 色 (7.5Y R 7)	におい黄褐色 (10Y R 7)	粗粒	中々良好	ナデ	ナデ	—	倉庫の扉割片が付着している
239	XXIX区	土師器	壺	—	—	—	におい黄褐色 (10Y R 7)	におい黄褐色 (10Y R 7)	0.5—1mm大の褐色・灰色の砂粒をまき	良 好	横ナデ	横ナデ	—	—
240	XXIX区	土師器	壺	—	—	—	におい暗色 (7.5Y R 7)	におい黄褐色 (10Y R 7)	1mm大の砂粒をまき、灰質・黒點もまき	良 好	横ナデ	ナデ	—	—
241	XXIX区	土師器	壺	—	—	—	におい黄褐色 (10Y R 7)	洗 黄 褐色 (10Y R 7)	1—3mm大の褐色・灰色の砂粒をまき	良 好	横ナデ	ナデ	—	胴部に四方角のハシ
242	XXIX区	土師器	壺	—	—	—	におい黄褐色 (10Y R 7)	洗 黄 褐色 (10Y R 7)	1—4mm大の褐色の砂粒をまき	良 好	口縁—横ナデ 胴部—ナデ	口縁—横ナデ 胴部—ナデ	—	外縁部にうすくスズ付
243	XXIX区	土師器	壺	—	—	—	洗 黄 褐色 (10Y R 7)	におい暗色 (7.5Y R 7)	1—2mm大の褐色の砂粒をまき	良 好	横ナデ	横ナデ	—	外縁部にスズ付
244	XXIX区	土師器	壺	13.0	—	—	洗 黄 褐色 (10Y R 7)	洗 黄 褐色 (10Y R 7)	1—4mm大の褐色の砂粒をまき	良 好	口縁—横ナデ 胴部—ナデ	口縁—横ナデ 胴部—ナデ	—	外縁部にスズ付
245	Ⅱ区	赤灰土器	—	—	—	におい暗色 (7.5Y R 7)	におい暗色 (7.5Y R 7)	2mm位の粒をまき	良 好	赤目	赤目	—	—	
246	I区	赤灰土器	—	—	—	暗 色 (5Y R 7)	暗 色 (5Y R 7)	白い砂粒を部分的にまき	良 好	赤目	赤目	—	—	
247	I区	赤灰土器	—	—	—	暗 色 (5Y R 7)	暗 色 (5Y R 7)	2—4mmの小石をまき	良 好	赤目	赤目	—	—	
248	Ⅱ区	赤灰土器	—	—	—	におい暗色 (7.5Y R 7)	におい暗色 (7.5Y R 7)	砂粒をまき	良 好	赤目	赤目	—	青銅器、鉄片が自然付着のためみかけが異なる	
249	Ⅱ区	赤灰土器	—	—	—	におい黄褐色 (10Y R 7)	におい黄褐色 (10Y R 7)	3mm位の小石をまき	良 好	赤目	ナデ	—	—	
250	I区	赤灰土器	—	—	—	洗 黄 褐色 (10Y R 7)	洗 黄 褐色 (10Y R 7)	1mmの砂粒をまき	良 好	赤目	赤目	—	—	
251	I区	赤灰土器	—	—	—	洗 黄 褐色 (7.5Y R 7)	洗 黄 褐色 (7.5Y R 7)	きめが細かい	良 好	赤目	赤目	—	—	
252	I区	赤灰土器	—	—	—	暗 色 (5Y R 7)	暗 色 (5Y R 7)	1—6mm位の粒または小石をまき	良 好	赤目	赤目	—	—	

番号	出土位置	形種	形跡	法量			色調		胎土	焼成	調整			備考
				口径	底径	高	内面	外面			内面	外面	底部	
253	I区	布土器	—	—	—	—	褐色	褐色	1~2mmの粒を含む	良好	布目	ナデ	—	—
254	I区	布土器	—	—	—	—	褐色	褐色	濁った粒を含む	良好	布目	粗織 ナデ	—	—
255	I区	布土器	—	—	—	—	赤褐色	赤褐色	1~2mmの粒を含む	良好	布目	粗織 ナデ	—	外縁部・口縁部が赤褐色の土の堆積に包み込まれている
256	I区	布土器	—	—	—	—	褐色	褐色	1~2mmの粒の粒を含む	良好	布目	粗織 ナデ	—	—
257	I区	布土器	—	—	—	—	褐色	褐色	黒褐色の粒を含む	良好	布目	ナデ	—	—
258	IV区	布土器	—	14.2	—	—	赤褐色	赤褐色	1~6mmの小石を含む	良好	布目	粗織 ナデ	—	—
259	IV区	布土器	—	15.0	—	—	赤褐色	赤褐色	赤みが強い	良好	布目	粗織 ナデ	—	—
260	IV区	布土器	—	12.8	—	—	赤褐色	赤褐色	赤みが強い	良好	布目	粗織 ナデ	—	—
261	IV区	布土器	—	14.8	—	—	褐色	褐色	赤みが強い	良好	布目	粗織 ナデ	—	—
262	IV区	布土器	—	17.6	—	—	赤褐色	赤褐色	褐色の粒を含む	良好	布目	粗織 ナデ	—	外縁部・口縁部が赤褐色の土の堆積に包み込まれている
263	IV区	布土器	—	13.8	—	—	赤褐色	赤褐色	赤みが強いが一部に小石が含まれる	良好	布目	粗織 ナデ	—	外縁部・口縁部が赤褐色の土の堆積に包み込まれている
264	IV区	布土器	—	15.8	—	—	赤褐色	赤褐色	一部に6mmの小石を含む	良好	布目	粗織 ナデ	—	—
265	IV区	布土器	—	15.2	—	—	赤褐色	赤褐色	粒土の量が部分的にみられる	中々不良	布目	粗織 ナデ	—	—
266	IV区	布土器	—	15.0	—	—	赤褐色	赤褐色	粒土を少量含む	良好	布目	粗織 ナデ	—	外縁部・口縁部が赤褐色の土の堆積に包み込まれている
267	IV区	布土器	—	11.4	—	—	赤褐色	赤褐色	赤みが強い	良好	布目	粗織 ナデ	—	外縁部・口縁部が赤褐色の土の堆積に包み込まれている
268	IV区	布土器	—	15.4	—	—	赤褐色	赤褐色	灰褐色の粒を部分的に含む	良好	布目	粗織 ナデ	—	—
269	IV区	布土器	—	12.4	—	—	赤褐色	赤褐色	赤みが強い	良好	布目	粗織 ナデ	—	外縁部・口縁部が赤褐色の土の堆積に包み込まれている
270	IV区	布土器	—	15.0	—	11.7	赤褐色	赤褐色	1~5mmの小石を含む	良好	布目	粗織 ナデ	—	—
271	IV区	布土器	—	17.0	—	—	赤褐色	赤褐色	1~3mmの小石を含む	良好	布目	粗織 ナデ	—	—
272	IV区	布土器	—	14.4	—	—	赤褐色	赤褐色	1mm位の粒を含む	良好	布目	ナデ	—	—
273	IV区	布土器	—	13.4	—	—	赤褐色	赤褐色	1~4mmの小石を含む	良好	布目	粗織 ナデ	—	—

番号	出土位置	形種	形跡	法量			色調		胎土	焼成	調整			備考
				口径	底径	高	内面	外面			内面	外面	底部	
274	IV区	布土器	—	—	—	—	赤褐色	赤褐色	褐色の粒をわずかに含む	良好	布目	粗織 ナデ	—	—
275	IV区	布土器	—	—	—	—	赤褐色	赤褐色	1~6mmの小石を含む	良好	布目	粗織 ナデ	—	—
276	IV区	布土器	—	—	—	—	赤褐色	赤褐色	赤みが強い	良好	布目	粗織 ナデ	—	—
277	IV区	布土器	—	—	—	—	赤褐色	赤褐色	黒褐色・黄白色の粒を含む	良好	布目	粗織 ナデ	—	—
278	IV区	布土器	—	—	—	—	赤褐色	赤褐色	2~6mm位の石を含む	良好	布目	粗織 ナデ	—	外縁部・部分に有灰層
279	IV区	布土器	—	—	—	—	赤褐色	赤褐色	1~3mmの小石を含む	良好	布目	粗織 ナデ	—	—
280	IV区	布土器	—	—	—	—	赤褐色	赤褐色	赤みが強い	良好	布目	ナデ	—	—
281	IV区	布土器	—	—	—	—	赤褐色	赤褐色	1~2mmの粒を含む	良好	布目	粗織 ナデ	—	—
282	IV区	布土器	—	—	—	—	赤褐色	赤褐色	黒色の粒を含む	良好	布目	ナデ	—	—
283	IV区	布土器	—	—	—	—	赤褐色	赤褐色	赤みが強い	良好	布目	ナデ	—	—
284	IV区	布土器	—	—	—	—	赤褐色	赤褐色	粒土を含む	良好	布目	ナデ	—	—
285	IV区	布土器	—	—	—	—	赤褐色	赤褐色	粒土を含む	良好	布目	ナデ	—	—
286	IV区	布土器	—	—	—	—	赤褐色	赤褐色	粒土を少量含む	良好	布目	ナデ	—	—
287	IV区	布土器	—	—	—	—	赤褐色	赤褐色	赤みが強い	良好	布目	ナデ	—	—
288	IV区	布土器	—	—	—	—	赤褐色	赤褐色	赤みが強い	良好	布目	ナデ	—	—
289	IV区	布土器	—	—	—	—	赤褐色	赤褐色	赤みが強い	良好	布目	ナデ	—	—
290	IV区	布土器	—	12.6	—	—	赤褐色	赤褐色	黒褐色の粒を含む	良好	布目	粗織 ナデ	—	—
291	IV区	布土器	—	9.4	—	—	赤褐色	赤褐色	黒褐色の粒を含む	良好	布目	粗織 ナデ	—	—
292	IV区	布土器	—	12.8	—	—	赤褐色	赤褐色	1mm位の粒を含む	良好	布目	粗織 ナデ	—	—
293	IV区	布土器	—	—	—	—	赤褐色	赤褐色	1~7mm位の小石を含む	良好	布目	粗織 ナデ	—	—
294	IV区	布土器	—	—	—	—	赤褐色	赤褐色	赤みが強い	良好	布目	粗織 ナデ	—	—

番号	出土位置	器種	器形	法 量				色 調		胎 土	焼 成	調 整			備 考
				口徑	底径	高	口 内 外 面	内 面	外 面			内 面	外 面	底 部	
295	Ⅵ区	布織土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
296	Ⅵ区	布織土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
297	Ⅵ区	布織土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
298	Ⅵ区	布織土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
299	Ⅵ区	布織土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
300	Ⅵ区	布織土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
301	Ⅵ区	布織土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
302	Ⅵ区	布織土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
303	Ⅵ区	布織土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
304	Ⅵ区	布織土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
305	Ⅵ区	布織土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
306	Ⅵ区	布織土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
307	Ⅵ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
308	Ⅰ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
309	Ⅲ区	須恵器	瓶	—	9.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
310	Ⅰ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
311	Ⅰ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
312	Ⅲ区	須恵器	壺	—	6.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
313	Ⅲ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
314	Ⅲ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
315	Ⅲ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

番号	出土位置	器種	器形	法 量				色 調		胎 土	焼 成	調 整			備 考
				口徑	底径	高	口 内 外 面	内 面	外 面			内 面	外 面	底 部	
316	Ⅲ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
317	Ⅲ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
318	Ⅲ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
319	Ⅲ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
320	Ⅲ区	須恵器	瓶	11.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
321	Ⅴ区	須恵器	壺	12.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
322	Ⅴ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
323	Ⅴ区	須恵器	壺	—	6.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
324	Ⅴ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
325	Ⅴ区	須恵器	壺	—	12.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
326	Ⅲ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
327	Ⅲ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
328	Ⅲ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
329	Ⅲ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
330	Ⅲ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
331	Ⅲ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
332	Ⅲ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
333	Ⅲ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
334	Ⅲ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
335	Ⅲ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
336	Ⅲ区	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—